



1. B地区北半 古墳時代後期～古代の竪穴住居と掘立柱建物（南西より）



2. B地区北半 古墳時代後期～古代の竪穴住居と掘立柱建物（南より）



3. B地区北半 古墳時代後期竪穴住居



4. B地区南半 円筒埴輪転用井戸（飛鳥時代）



5. B地区南半 奈良時代木組み井戸（井戸462）



6. C地区 奈良時代鍛冶炉下部遺構検出状況



7. 漆入りの須恵器壺（奈良時代）



8. 蹄脚円面硯（奈良時代）

序 文

河原城遺跡は羽曳野市河原城と美原町多治井にまたがり、多治井の地名が示すとおり律令制下の河内国丹比郡丹比郷の一面にあたる。この地は飛鳥、奈良時代にかけて勢力をもった古代氏族丹比連氏の本貫地であり、遺跡の北側には丹比道と大津道、南側には茅渟道と大和と大阪湾・難波京を結ぶ古道が集中している。いわば、古代からの交通の要衝である。このことから、郡郷の成立自体がこの地域のもつ地理的および政治的条件と深く関わっていると考えられている。それらを証する遺跡として周辺には、奈良前期の塔跡の遺る丹比廃寺や規格性をもつ大規模建物群からなる平尾遺跡など7、8世紀の丹比氏の勢力を示唆する遺跡が存在している。

今回の調査は、ここ大阪南部と奈良県を結ぶ新たな幹線として計画された南阪奈道路の建設に先だっ
て行われている調査のひとつである。すでに当センターが予定路線内で行った調査においても、太子町
二上山麓の凝灰岩の採掘場楠木石切場跡、羽曳野市域では土嚢を使用した墳丘の築造の実態が判明した
蔵塚古墳、古墳時代前期の方形区画内の建物群を中心とする大型の集落跡の見つかった尺度遺跡等々で
重要な成果が相次ぎ、近つ飛鳥周辺の豊かな歴史を明らかにしている。これらの成果については順次調
査報告書を刊行しているところである。

ここに報告する河原城遺跡の調査では、狭山池から北流する東除川左岸の段丘上から川に近い低地部
での調査を行い、古墳時代後期から奈良時代にかけての変遷のよくわかる集落遺構群を検出されるなど、
上にあげた地域の歴史と切り離せない遺跡であることがわかってきた。

具体的には、飛鳥時代のはじまりと共に竪穴住居から掘立柱建物へと建築様式を変え、奈良時代には、
鍛冶工房群へと変化する集落状況が明らかとなっている。近接する丹比廃寺との関連やこの遺跡の変遷
と周辺の遺跡の動向を重ね合わせて考えると、河内南部の可耕地開発の進展のみならず古代政治史の動
きとも深く関連する、極めて興味深い結果が得られたといえよう。

調査の実施に際して地元関係各位をはじめ大阪府土木部、同富田林土木事務所、羽曳野市教育委員会、
美原町教育委員会、大阪府教育委員会ほか多くのご支援・ご協力を賜ったことに対し、深甚の謝意を表
するものである。

平成12年 4 月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

理事長 水 野 正 好

例 言

1. 本書は、大阪府羽曳野市河原城・南河内郡美原町に所在する河原城遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、南阪奈道路建設工事に先立つもので、(財)大阪府文化財調査研究センターが大阪府富田林土木事務所の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと実施した。
3. 現地調査は、当調査研究センター調査部長 井藤徹、参事兼調整課長 中西靖人、南部調査事務所長 瀬川健、調査第3係長 寺川史郎の指示のもと、同技師 三浦基・若林邦彦が担当した。現地調査状況と出土遺物の写真撮影については、南部調査事務所調査第1係主任技師 立花正治が担当した。
4. 現地調査を実施したのは、平成10年6月25日から平成11年5月21日にかけての期間である。その後、平成11年8月26日から整理作業・本報告書作成作業を行い、平成12年2月29日に完了した。
5. 出土須恵器甕内堆積土の脂肪酸分析については(株)ズコーシャに、鉄滓の理化学分析については(株)TACに委託し、その結果を本書に掲載した。さらに、奈良時代の井戸に使用された板材の樹種鑑定を環境考古研究所に委託した。
6. 調査の実施にあたって、羽曳野市教育委員会・美原町教育委員会・大阪府富田林土木事務所など関係諸機関の協力を得た。また、下記の方々に御指導、御教示を賜った。

伊藤聖浩、井原稔、笠井敏光、笠置陽子、河内一浩、武村英治、辻葩学、吉沢則男、(羽曳野市教育委員会)、泉谷博幸、坂口浩司、庖丁道明(美原町教育委員会)、池田裕英(奈良市教育委員会)、大澤正巳(たたら研究会会員)、大道和人(財)滋賀県文化財保護協会)、北野重(柏原市教育委員会)、高橋浩二(富山大学)、辰巳和弘(同志社大学歴史資料館)、都出比呂志(大阪大学)、広瀬和雄(奈良女子大学)、藤沢真依(大阪府教育委員会)、前川浩一(貝塚市教育委員会)、真鍋成史(交野市教育委員会)

7. 本書の編集は三浦・若林が担当し、各執筆の分担については、目次に示している。
8. 現地調査・報告書作成作業にあたっては、下記の非常勤職員の協力を得た。

行川勝、伊藤貴力、泉奈穂子、宇川里香、岡本悦子、川田嘉代子、坂口恵美、高橋知佐子、田中映子、中筋英子、中村慎子、長屋あゆみ、山口純枝

凡 例

1. 遺構実測図の基準高については、すべて東京湾平均海水位（T.P.）を用いた。
2. 平面図は、国土座標にのりつった平面直角座標系、第VI座標系に準拠し、座標数値の記載はメートル単位で表す。また、方位矢印の示す方向は座標北を示す。
3. 土色の表現に関しては、小山正忠・竹原秀夫編1998『新版標準土色帖』第8版農林水産省農林技術会議事務局監修・（財）日本色研究事業株式会社色票監修に準拠した。
4. 遺物写真の縮尺率は、不同である。

目 次

巻頭カラー図版

- | | |
|---------------------------------------|---------------------|
| 1, 2. B 地区北半 古墳時代後期～古代の竪穴住居
と掘立柱建物 | 5. B 地区南半 奈良時代木組み井戸 |
| 3. B 地区北半 古墳時代後期竪穴住居 | 6. C 地区 鍛冶炉下部遺構検出状況 |
| 4. B 地区南半 円筒埴輪転用井戸 | 7. 漆入りの須恵器壺 |
| | 8. 蹄脚円面硯 |

序文

例言・凡例

- | | |
|-----------------------------------|---------------------------|
| 第 1 章 調査に至る経緯と経過 | 1 (若林) |
| 第 2 章 位置と環境 | 3 (三浦) |
| 第 3 章 発掘調査の方法 | 7 (三浦) |
| 第 4 章 基本層序 | 9 (若林) |
| 第 5 章 A 地区の調査成果 | 11 (三浦) |
| 第 6 章 B 地区の調査成果 | |
| 第 1 節 B 地区南半の遺構・遺物 | 15 (三浦) |
| 第 2 節 B 地区北半の遺構・遺物 | 43 (若林) |
| 第 7 章 C 地区の調査成果 | 79 (三浦) |
| 第 8 章 基礎分析・考察 | |
| 第 1 節 河原城遺跡の集落変遷と古代地域社会 | 107 (若林) |
| 第 2 節 河原城遺跡出土蹄脚円面硯をめぐって | 119 (三浦) |
| 第 3 節 河原城遺跡出土須恵器甕内に堆積した土壌の残存脂肪酸分析 | 129 (中野益男・中野寛子・門 利恵・星山賢一) |
| 第 4 節 河原城遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査 | 139 (大澤正巳・鈴木瑞穂) |
| 第 9 章 調査成果のまとめ | 164 (三浦・若林) |

挿図目次

図1.1 調査地と南阪奈道路	2	図6.2.3 土坑325出土土器	44
図2.1 遺跡位置図	3	図6.2.4 B地区北半遺構配置図	51~52
図2.2 遺跡分布図・表	6	図6.2.5 竪穴住居跡204平・断面図	53
図3.1 国土座標とそれに伴う地区割	7	図6.2.6 竪穴住居跡204床面直上焼土検出状況	53
図3.2 調査地地区割図	8	図6.2.7 竪穴住居跡204出土土器	53
図3.3 調査区・トレンチ配置図	8	図6.2.8 竪穴住居跡205平・断面図	54
図4.1 土層柱状図	9	図6.2.9 竪穴住居跡206平・断面図	54
図5.1 第2面遺構配置図	11	図6.2.10 竪穴住居跡219平・断面図	55
図5.2 土坑994平・断面図	12	図6.2.11 竪穴住居跡260平・断面図	56
図5.3 第1面遺構配置図	13	図6.2.12 竪穴住居跡264平・断面図	57
図5.4 A地区包含層出土遺物	15	図6.2.13 竪穴住居跡264竈部平・断面図	57
図6.1.1 溝510、溝511、溝517、井戸515断面図	15	図6.2.14 竪穴住居跡264出土土器	57
図6.1.2 溝510出土土器	15	図6.2.15 竪穴住居跡346、349、403平・断面図	58
図6.1.3 井戸515平・断面図	16	図6.2.16 掘立柱建物跡 a 平・断面図	60
図6.1.4 B地区南半遺構配置図	21~22	図6.2.17 掘立柱建物跡 b 平・断面図	60
図6.1.5 井戸515出土遺物	23	図6.2.18 掘立柱建物跡 c 平・断面図	61
図6.1.6 B地区南半段丘下部出土遺物	24	図6.2.19 掘立柱建物跡 d 平・断面図	62
図6.1.7 谷352平・断面図、掘立柱建物跡 i 平面図	25	図6.2.20 掘立柱建物跡 e 平・断面図	63
図6.1.8 谷352出土土器	25	図6.2.21 掘立柱建物跡 f 平・断面図	64
図6.1.9 谷352出土遺物	26	図6.2.22 柱穴40出土土器	64
図6.1.10 谷352出土瓦	27	図6.2.23 掘立柱建物跡 g 平・断面図	65
図6.1.11 井戸462平・断面図	29	図6.2.24 掘立柱建物跡 h 平・断面図	66
図6.1.12 井戸462出土遺物	29	図6.2.25 掘立柱建物跡 j 平・断面図	67
図6.1.13 井戸462井戸粹部材 (1)	31	図6.2.26 掘立柱建物跡 k 平・断面図	68
図6.1.14 井戸462井戸粹部材 (2)	32	図6.2.27 掘立柱建物跡 l 平・断面図	69
図6.1.15 井戸462井戸粹部材 (3)	33	図6.2.28 掘立柱建物跡 m 平・断面図	70
図6.1.16 井戸462井戸粹部材 (4)	34	図6.2.29 掘立柱建物跡 n 平・断面図	71
図6.1.17 掘立柱建物跡 q 平・断面図	35	図6.2.30 掘立柱建物跡 o 平・断面図	72
図6.1.18 掘立柱建物跡 p 平・断面図	36	図6.2.31 掘立柱建物跡 o 柱穴988出土遺物	72
図6.1.19 掘立柱建物跡 r 平・断面図	36	図6.2.32 掘立柱建物跡 x 平・断面図	73
図6.1.20 柱穴757出土瓦	36	図6.2.33 土器棺384平・断面図	74
図6.1.21 溝832平・断面図	37	図6.2.34 土器棺384出土土器	74
図6.1.22 溝832出土遺物	38	図6.2.35 B地区北半出土土器	74
図6.1.23 B地区南半段丘上部出土土器	39	図6.2.36 B地区遺構配置図	77~78
図6.1.24 B地区南半出土土器	41	図7.1 溝1015土層断面図	79
図6.2.1 溝659・溝708土層断面図	43	図7.2 溝1015上層出土土器	79
図6.2.2 土坑325土器出土状況	44	図7.3 溝1188土層断面図	79

図7.4	溝1188最下層遺物出土状況図	80
図7.5	C地区南半部遺構配置図	83~84
図7.6	溝1188出土遺物	85
図7.7	方墳1009周溝上層出土土器	86
図7.8	方墳1009平・断面図	86
図7.9	方墳1171平・断面図	87
図7.10	方墳1171周溝上層出土遺物	87
図7.11	溝1194土層断面図	88
図7.12	溝1194出土遺物	88
図7.13	溝1190、溝1147土層断面図	88
図7.14	溝1147出土土器	88
図7.15	溝1190出土遺物	88
図7.16	掘立柱建物跡 s 平・断面図	90
図7.17	掘立柱建物跡 t 平・断面図	90
図7.18	掘立柱建物跡 u 平・断面図	91
図7.19	掘立柱建物跡 v 平・断面図	92
図7.20	土坑1193平・断面図	92
図7.21	掘立柱建物跡 w 平・断面図	93
図7.22	土坑1141平・断面図	93
図7.23	土坑1108平・断面図	94
図7.24	土坑1136平・断面図	94
図7.25	土坑1169平・断面図	94
図7.26	土坑1246平・断面図	94
図7.27	土坑1247平・断面図	94
図7.28	土坑1142平・断面図	96
図7.29	土坑1148・土坑1149平・断面図	96
図7.30	土坑1138平・断面図	96
図7.31	土坑1255、溝1139平・断面図、溝1139出土土器	97
図7.32	掘立柱建物跡 v 周辺鉄滓分布図、落込1240出土土器	98
図7.33	鍛冶関連遺物	99
図7.34	鍛冶関連遺物	100
図7.35	鉄滓出土分布図	102
図7.36	C地区包含層出土遺物	103
図7.37	C地区出土石器	103
図7.38	C地区遺構配置図	105~106

第8章 考察

第1節

図1	集落の変遷図1	111
図2	集落の変遷図2	111
図3	集落の変遷図3	112
図4	集落の変遷図4	112
図5	集落の変遷図5	113
図6	集落の変遷図6	113
図7	古代における河原城遺跡の周辺	116

第2節

図1	蹄脚硯の種類と各部の名称	119
図2	大阪府内蹄脚硯出土分布図	121
図3	大阪府内出土蹄脚硯変遷図	125

第3節

図1	土器棺384土壌サンプル採取点	131
図2	試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成	132
図3	試料中に残存する脂肪のステロール組成	132
図4	試料中に残存する脂肪酸組成樹状構造図	135
図5	試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関	136

第4節

図1	鍛造剥片3層分離型模式図	147
図2	Fe-O系平衡状態図	147
図3	鉄器(刃部破片)(KWR-10-1)鉄中非金属 介在物のコンピュータープログラムによる高速定 性分析結果(写真17に対応)	163
図4	鉄器(刃部破片)(KWR-10-2)鉄中非金属 介在物のコンピュータープログラムによる高速定 性分析結果(写真18に対応)	163
図5	炉壁片?(KWR-12)内面溶融ガラス質ス ラグ中の鉄粒のコンピュータープログラムによる 高速定性分析結果(写真19に対応)	163

表目次

表5.1 A地区検出遺構一覧表	14
表6.1.1 B地区南半検出遺構一覧表	17～20
表6.2.1 B地区北半検出遺構一覧表	45～50
表7.1 C地区検出遺構一覧表	81～82
第8章3節	
表1 土壌試料の残存脂肪抽出量	131

写真目次

写真1.1 調査地点遠景	2
写真1.2 現地説明会風景	2
写真2.1 河原城遺跡周辺航空写真	4
写真6.1.1 井戸515（上から）	16
写真6.1.2 井戸515（断面）	16
写真6.1.3 井戸462（上から）	29
写真6.1.4 井戸462（断面）	29
写真6.1.5 柱穴757	36
写真6.2.1 竪穴住居跡204床面直上	54
写真6.2.2 竪穴住居跡204、205	54
写真6.2.3 竪穴住居跡206	55
写真6.2.4 竪穴住居跡264	57
写真6.2.5 掘立柱建物跡 m	70
写真6.2.6 掘立柱建物跡 n	70
写真6.2.7 土器棺384検出状況	74
写真7.1 掘立柱建物跡 s、u、v、w	90
写真7.2 掘立柱建物跡 s	90
写真7.3 掘立柱建物跡 u	91
写真7.4 土坑1108 4層上面	94
写真7.5 土坑1108 2層上面	94
写真7.6 土坑1136（北から）	94
写真7.7 溝1139土器出土状況	96

写真図版目次

図版1 A地区・B地区南半の遺構
A地区 第2面全景（南西から）

表2 資料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合	131
-------------------------------	-----

第8章第4節

表1 供試材の履歴と調査項目	152
表2 供試材の化学組成	152
表3 出土遺物の調査結果のまとめ	152

第8章第4節

写真1 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織	153
写真2 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織	153
写真3 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織	154
写真4 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織	154
写真5 再結合滓(刃部破片)の顕微鏡写真	155
写真6 鉄片(刃部破片)の顕微鏡組織	155
写真7 鉄片(刃部破片)の顕微鏡組織	156
写真8 羽口・炉壁片?の顕微鏡組織	156
写真9 鍛造剥片の顕微鏡組織	157
写真10 鍛造剥片の顕微鏡組織	157
写真11 鍛造剥片の顕微鏡組織	158
写真12 鍛造剥片の顕微鏡組織	158
写真13 鍛造剥片の顕微鏡組織	159
写真14 鍛造剥片の顕微鏡組織	159
写真15 椀形鍛冶滓(KWR-7)のマクロ組織(×10)	160
写真16 鉄器(刃部破片)(KWR-10)のマクロ組織：左側(×5)：右側(×10)	160
写真17 鉄器(刃部破片)(KWR-10-1)鉄中非金属介在物の特性X線像と定量分析値	161
写真18 鉄器(刃部破片)(KWR-10-2)鉄中非金属介在物の特性X線像と定量分析値	161
写真19 炉壁片?(KWR-12)内面溶融ガラス質スラグ中の鉄粒の特性X線像と定量分析値	162

図版2 B地区南半の遺構
溝510、溝511、溝517、井戸515

図版3 B地区南半の遺構
谷352、井戸462

図版4 B地区南半の遺構
掘立柱建物跡 p、q、r

図版5 B地区北半の遺構
竪穴住居跡204、205

図版6 B地区北半の遺構
竪穴住居跡206、260

図版7 B地区北半の遺構
竪穴住居跡264、掘立柱建物跡 a

図版8 B地区北半の遺構
掘立柱建物跡 d、掘立柱建物跡 f、掘立柱建物跡 g

図版9 B地区北半の遺構
掘立柱建物跡 l、掘立柱建物跡 m

図版10 B地区北半の遺構
掘立柱建物跡 n、掘立柱建物跡 o、土器棺384

図版11 C地区の遺構
溝1180、方墳1171、方墳1009

図版12 C地区の遺構
掘立柱建物跡 s、掘立柱建物跡 t、掘立柱建物跡 u

図版13 C地区の遺構

掘立柱建物跡 v、土坑1108、土坑1136

図版14 B地区南半出土遺物
井戸463、土坑513、井戸515、包含層出土遺物

図版15 B地区南半出土遺物
谷352出土遺物

図版16 B地区南半出土遺物
谷352、井戸462、B地区南半出土遺物

図版17 B地区南半～北半出土遺物
溝832、土器棺384

図版18 B地区北半出土遺物
竪穴住居跡204、竪穴住居跡264、土坑325、柱穴40、
B地区北半出土遺物

図版19 C地区出土遺物
溝1139、溝1188、溝1194、包含層出土遺物

図版20 B地区南半出土遺物
井戸462 井戸枳部材

図版21 B地区南半出土遺物
井戸462 井戸枳部材

図版22 B地区南半出土遺物
井戸462 井戸枳部材

第1章 調査にいたる経緯と経過

河原城遺跡は、羽曳野市河原城から美原町多治井にかけて所在する遺跡である。今回の発掘調査は、南河内郡美原町丹上で近畿自動車道松原すさみ線との分岐点を始点とし、奈良県北葛城郡新庄町弁之庄を終点とする南阪奈道路建設に伴って行われた。

その一部が道路建設予定地となった河原城遺跡は、南北朝初期に「河原城」の表れる文献のあること、村名・字名自体に城名を示すものがあることから、14世紀の城跡とされていた。過去には、大阪府教育委員会の調査は東除川改修に伴って行われ、縄文時代後期の土器・石器や古墳時代～古代の遺構を検出している。羽曳野市教育委員会も当遺跡のうち東除川右岸域で住宅開発等に伴う発掘調査を行い、古墳時代後期の掘立柱建物跡・柵列・溝や中世の遺構などが検出されている。このように、河原城遺跡が縄文時代から古代・中世に至る複合遺跡であることは、文献史学・考古学的調査によって明らかとなっていた。

この河原城遺跡南西部とその近接地の約10000m²を越える範囲に南阪奈道路建設予定地がおよぶことから、事業主体である大阪府富田林土木事務所と大阪府教育委員会文化財保護課の間で協議が行われた。結果、道路予定地の全面について発掘調査を行うこととなり、(財)大阪府文化財調査研究センターへの発掘調査委託が決定された。なお、道路予定地のうち東除川右岸の部分については1997年に当センターが行った試掘調査の結果により遺跡外と判断され、東除川左岸から隣接する郡戸遺跡までの間の約13000m²が調査予定地とされた。

その後、大阪府富田林土木事務所と(財)大阪府文化財調査研究センターの間で調査委託に関わる契約が交わされ、1998年6月25日～1999年4月17日の予定で発掘調査を行うこととなった。ただ、調査開始時点で道路建設のために大阪府富田林土木事務所によって実際に買収された土地は、予定地のうちの約6割程度であった。このため、発掘調査は、道路用地買収と並行しながら行われた。加えて、小区画で調査工事用の進入路の確保さえ困難な地点も多いことから、全体を18区画にも分けて調査するという極めて煩雑かつ非効率な体制を強いられた。このような煩雑さによる調査自体の難行や調査予定期間の末期に新たに買収された調査地が加わったことなどにより約1カ月の調査期間延長が行われた。ただし、1999年5月25日の調査終了時においても未買収地は存在し、調査は約9900m²の範囲しか行えなかった。この時点の未調査地については、大阪府富田林土木事務所・大阪府教育委員会文化財保護課・(財)大阪府文化財調査研究センターによる協議の結果、平成11年度にあらたに調査を行うことが決定された。従って、本報告の内容は、1998年6月から1999年5月の間に行われた調査対象区域のみに限定されている。

また、調査においては、A地区は東除川近辺の谷底平野、B地区は中位段丘の上部から東側の斜面地、C地区は中位段丘の西側一体と地区を分割した。しかし、実際にはさらに細分したトレンチ単位で調査を行うことになり、各地区の発掘調査がほぼ同時進行する状態であった。このうち、B地区を中心に古墳時代後期～飛鳥・奈良時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡が多数検出された。この成果を一般公開すべく1998年11月28日には現地説明会を行い、約300名の見学者を集めた。その後は、C地区において奈良時代の建物群とともに鉄滓・鍛冶炉などが多数検出された。これらの鍛冶関連遺物に関しては、成分分析を北九州テクノリサーチに委託し、鍛冶関連作業復元のための基礎データを整えた。

参考文献

井西貴子他 『河原城遺跡発掘調査概要』1993年 大阪府教育委員会

河内一浩 「河原城遺跡」『羽曳野市史第三巻史料編1』1994年 羽曳野市

羽曳野市教育委員会 「河原城遺跡」『古市遺跡群XIII羽曳野市埋蔵文化財調査報告33』1996年

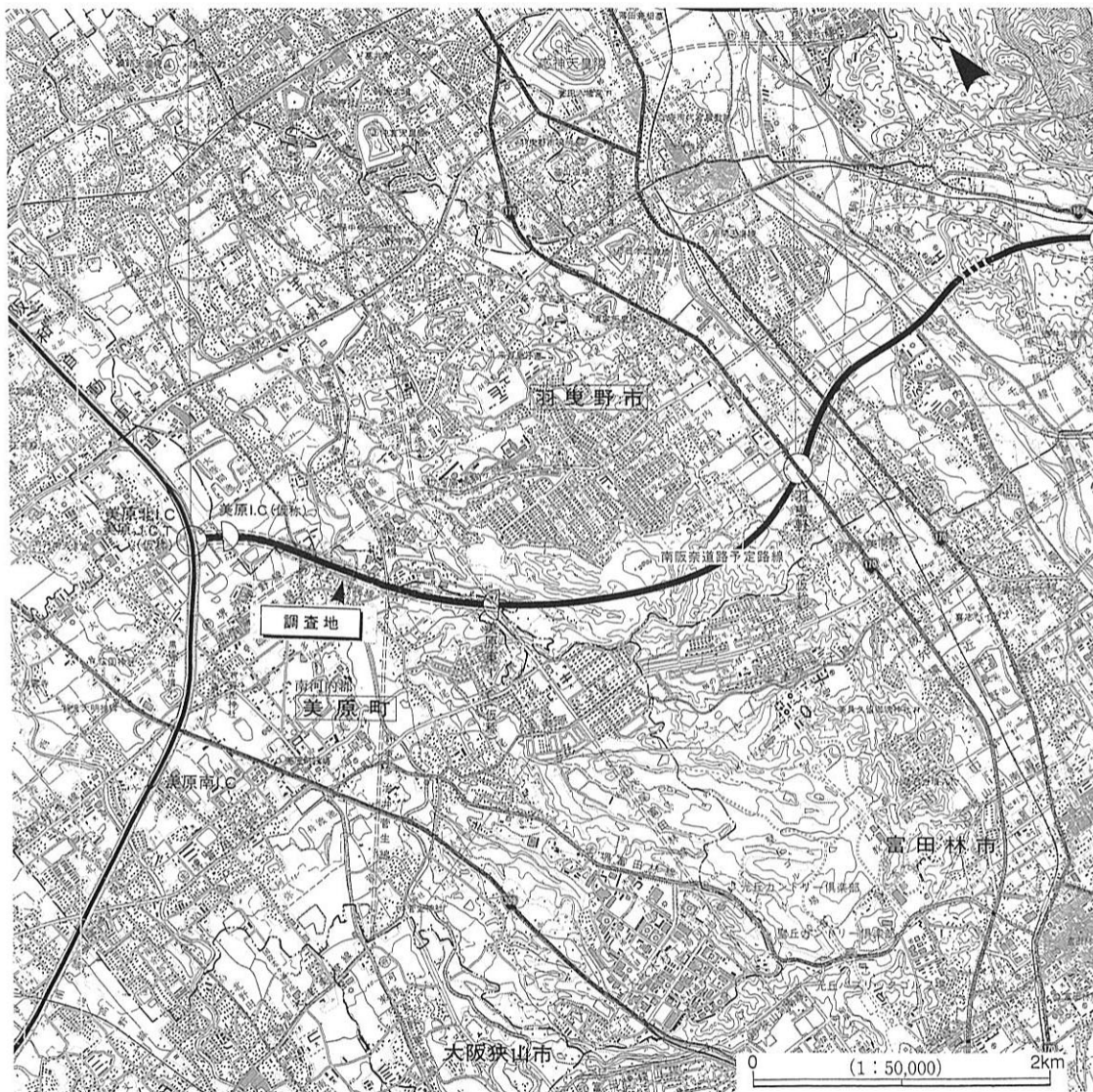


図1.1 調査地と南阪奈道路 (s=1/50,000)



写真1.1 調査地点遠景 (南東から北西方向を望む)

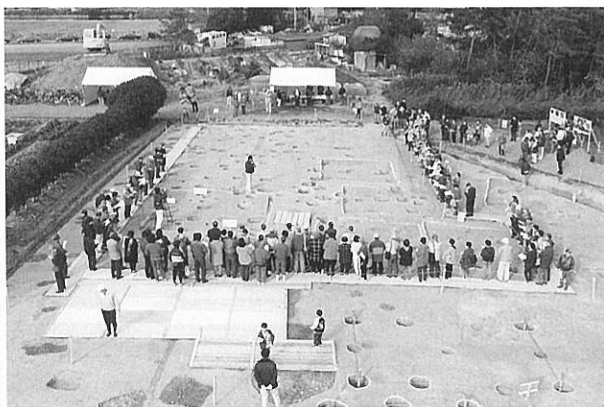


写真1.2 現地説明会風景

第2章 位置と環境

第1節 自然環境

河原城遺跡は羽曳野市河原城、美原町多治井にまたがり、東除川中流域の西岸に位置する。調査区域は蛇行する東除川の両側に形成された谷底平野から低位段丘、低位段丘から中位段丘への斜面、中位段丘上の平坦部の緩傾斜区であり、多彩な地形変化が見られる。標高37.5mから最高地点で45.7mと約7mの比高差を有している。

遺跡内を貫流する東除川は羽曳野丘陵の南端に近い甘山（つづやま）付近に源を発し、羽曳野丘陵西斜面から流れ下る小さな支流をあつめて島泉に至り、さらに北流して大阪市平野区平野付近で旧大和川の有力な分流であった。その当時は「甘山川」（つづやまがわ）と呼ばれていたが、慶長年間の狭山池改修によって、東除口が開かれ排水河川の性格を示すようになり、羽曳野丘陵西斜面の流域の洪水時に狭山池の余水が流れ込むことから「東除川」と名づけられた。

一方、段丘上の状況は、南から北に向けて緩やかに傾斜している。ほぼ中央部に河内大塚山古墳（大塚陵墓参考地）が位置し、開析谷を堰きとめた池が多く存在する。調査地においては雨ヶ池があり、北

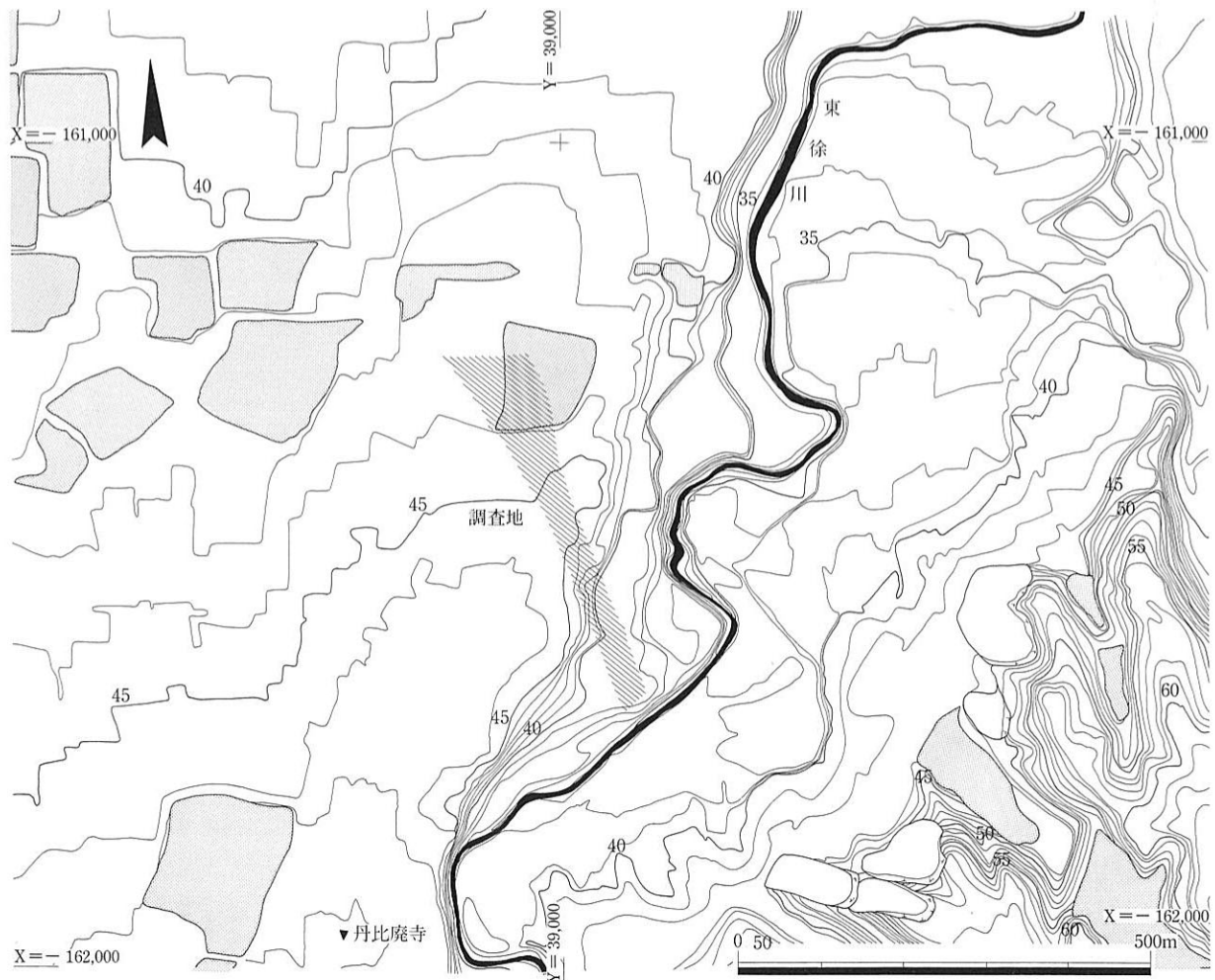


図2.1 遺跡位置図 (s=1/6,000)

西方向に点々とため池が分布し、大座間池方向東に下りた所に低位段丘が南北方向に延び、その南方の東除川両岸にも同じ地形面が見られる。

周辺の自然地形は、西南日本を分割する中央構造線に沿って存在する和泉山脈から北に広がる丘陵、台地を特徴とする。これらの地形の大部分は、いわゆる大阪層群から構成されている。本遺跡の所在する美原町及び羽曳野市西縁は西に陶器山丘陵、東に羽曳野丘陵を配し中央に段丘面を構成する複雑な様相を呈する。周辺の主要河川としては、西除川、東除川という二本の河川が台地を浸食しつつ北流している。西除川は、過去には上流に存在する天野川と同一河川であったが、狭山池築造により二分されたものである。一方、東除川の東側は、羽曳野丘陵が西に向かって緩やかな傾斜を呈しており、無数の小川が発達し、丘陵縁辺部に入り組んだ谷地形を形成する。東除川はこれらの小川が流れ込むことにより段丘崖を形成しつつ、狭く深い谷底平野を発達させた。



写真2.1 河原城遺跡周辺航空写真（1961年撮影）

第2節 歴史的環境

「河原城」の地名の由来は南北朝初期の元弘元年(1331)、元弘の変で地域豪族「河原弘成」が築いた城である「河原城」による。「河原氏」は河内国丹比郡東北部の氏族で「日本書紀」天武天皇十三年(684)十月辛巳条に「川原加尼」の名が見える。この他、「続日本紀」神亀二年(725)七月丙戌条に「河内国丹比郡人正八位下川原椋人子虫等四十六人河原史姓賜」との記述もあり、古代から「河原氏」が存在していたことが推定される。

本遺跡の周辺には東側羽曳野丘陵・丘陵北東部には古市古墳群、西には百舌鳥古墳群が、また本遺跡に近い西側には周濠をもつ二段築成の前方後円墳である黒姫山古墳および6基の陪塚が存在することが知られる。東南部には石棺の出土により六ツ塚河原城古墳が記録されている。石室は確認されず七世紀初頭に位置付けられる竜山石製の家形石棺が出土しており、現在古墳自体は消失して石棺は美原町多治井西光寺に移され保存されている。

古代の状況では、本遺跡周辺に多くの寺院跡等が存在していることが注目される。白鳳期の丹比廃寺、黒山廃寺、丹比神社は「古事記」、「日本書紀」に「丹比連」、「丹比真人」などの記述がある丹比郡に基盤をおいた「丹比氏」が関係したと考えられる。丹比廃寺は推定地の面積約530m²で塔心礎及び礎石1個が残る状況で周囲水田より約1.2m高い状況が確認されている。(昭和31年府史跡指定当時の調書による)

黒山廃寺は、昭和54年(1979)に美原町教育委員会によって一部発掘調査が行なわれ寺院に係する遺構は見つからなかったものの、石敷き遺構、焼土層などが確認されている。出土遺物は小金銅仏の右手先、瓦塔、埴、鴟尾、土器類で黒山廃寺出土と伝られる塔心礎が四天王寺国際仏教大学構内にある。また、北東部に白鳳時代の野中寺、東側丘陵部には白鳳時代の善正寺跡が存在する。

周辺の他の遺跡としては西には日置荘遺跡、太井遺跡、余部遺跡など多くの遺跡が存在し、近畿自動車道建設に伴う発掘調査によって埴輪窯や中世の鋳物師関連の遺構など多彩な成果が報告されている。本遺跡西側近くには丹上遺跡、真福寺遺跡が存在しており近畿自動車道建設時に調査が行なわれているが、現在南阪奈道路建設に伴う発掘調査が再び実施されている。

南約1.5kmの地点には平尾遺跡がある。大阪府教育委員会によって発掘調査が実施されており、昭和48年調査では廂付の大型掘立柱建物を含む建物群42棟、柵列などが整然と配置された状況が確認でき古墳時代から奈良時代の時期と考えられ、郡衙的機能も想定され丹比連氏の居宅と考える説も提示されている。また、北には地名から郡衙推定地である郡戸遺跡がある。

河原城遺跡北側には現在竹之内街道と呼ばれている古代の官道である「丹比道」が走り、「丹比氏」との関係も含めて古代より重要な位置を占めていた地域である。

参考文献

『羽曳野市史 第三巻 史料編1』1994年 羽曳野市

『羽曳野市史 第一巻 本文編1』1997年 羽曳野市

藤井寺の遺跡ガイドブック No. 3 藤井寺市及びその周辺の古代寺院(下)藤井寺市教育委員会(1987年)

古代を考える会『古代を考える2 平尾遺跡の検討』(1976年)

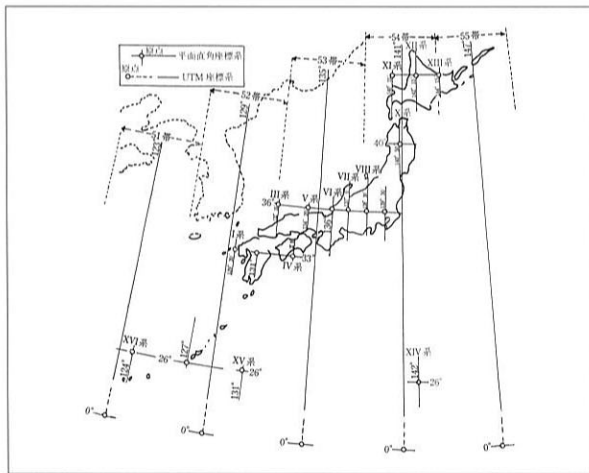
日置荘遺跡-近畿自動車道松原すさみ線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書

1995年3月 (財)大阪文化財センター

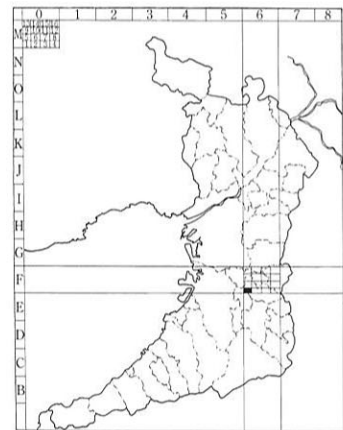
第3章 発掘調査の方法

河原城遺跡の調査は、遺跡の略称を除いて基本的には当センターの前身の一つである大阪文化財センターが制定した「遺跡調査基本マニュアル」に則って実施している¹⁾。

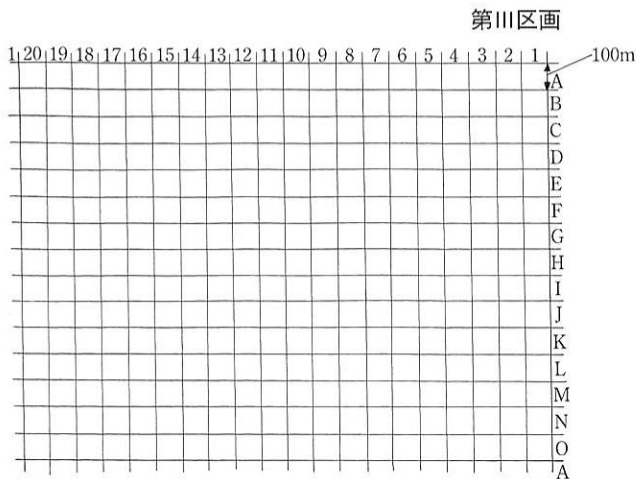
地区割 地区割については、国土座標軸（第VI座標系）を基準線とし、大阪府全域を共通の方式で区割できるように、大小6段階の区画を設定している。第I区画は、1/10,000地形図の地区割図を利用したもので、縦6 km、横8 kmが1区画となる。南西端を基点とし、縦軸A～O、横軸0～8で表示する。第II区画は、1/2,500地形図の地区割図を利用したもので、第I区画を縦1.5km、横2.0kmに16分割している。南西端を1とし、北東端を16とする東方向への平行式の地区名表示である。第III区画は、第II区画内を100m単位で区画するもので、縦15、横20に区分される。表示は北東端を基点に縦A～O、横1～20となる。第IV区画は、第III区画内を10m単位で区画するもので、縦・横各10に区分される。表示は北東端を基点に縦a～j、横1～10となる。第V区画は、第IV区画内を5 m単位で4分割するもので、遺物の取り上げ等の際に第IV区画を面として細分する場合に使用する。北東側I、北西側II、南東側III、南西側IVと呼称する。第VI区画は、第V区画を5 m単位ではなく、任意に細分する場合に使用し、北東端を



国土座標系図



第I・II区画



第III区画



第IV区画

図3.1 国土座標とそれに伴う地区割

基点に必要な桁まで表示する。ちなみに河原城遺跡の調査範囲の第Ⅰ区画はF-6、第Ⅱ区画は1である。第Ⅲ区画以下は、A1（第Ⅲ区画）a1（第Ⅳ区画）-Ⅰ（第Ⅴ区画）S2.30mW3.10m（第Ⅵ区画）というように表示される。なお、調査全般にわたってこの地区割を用いており、個々の遺構図に示した座標値も上記の国土座標に準拠している。

方位 方位は座標北を使用している。これは地区割や測量基準線も国土座標を使用している関係からである。ちなみに他の方位との関係は、真北が東へ0°12'、磁北が西へ6°40'振っている。

水準 水準は、全国で共通基準となっている東京湾平均海面（T.P.）を使用している。大阪ではT.P.の他に大阪湾平均海面（O.P.）も併用され、両者のレベル差はT.P.±0 m=O.P.+1.3mと定められている。

測量 今回の調査ではヘリコプターを用いた航空測量を行い、1/50の平面図とそれを縮小編纂した1/100の遺構全体図を作成している。その他、状況にあわせて臨機に実測図を作成している。

なお、河原城遺跡では道路を地区区分の基準として南からA地区～C地区の地区名で区分し、調査可能箇所について地区内ごとに番号・地区名で1B、2Bのようにトレンチ名を設定して調査を行った。

註 1) 大阪文化財センター 1988『遺跡調査基本マニュアル』

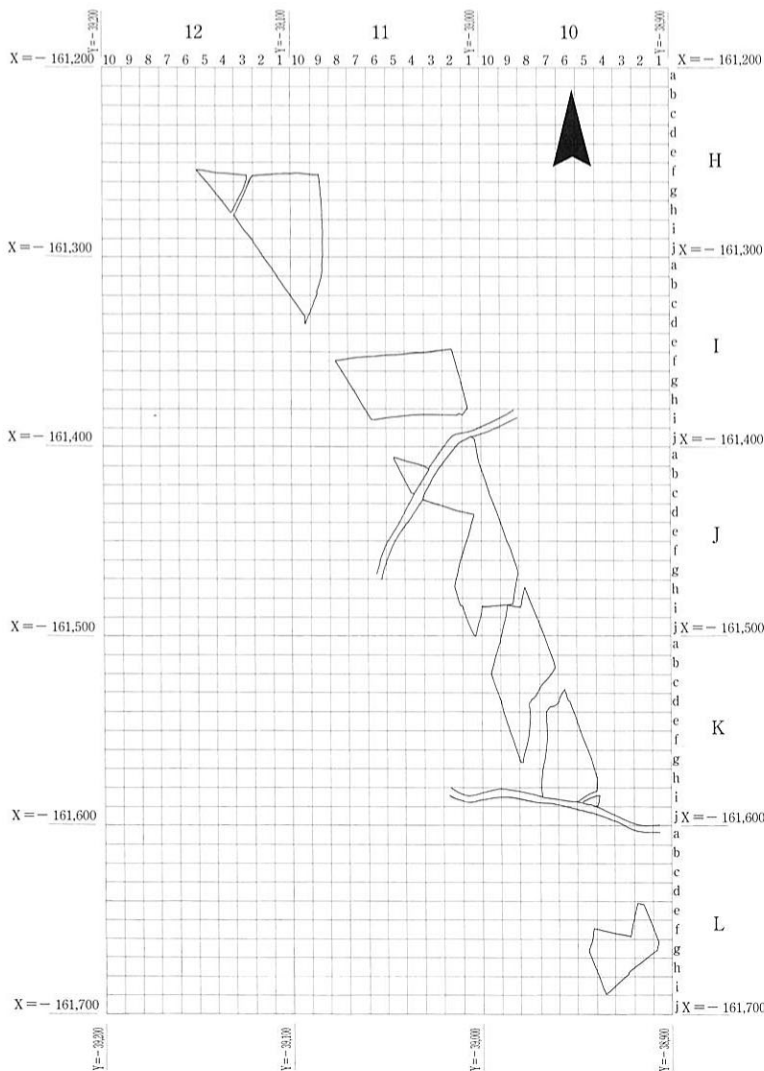


図3.2 調査地地区割図 (s=1/400)

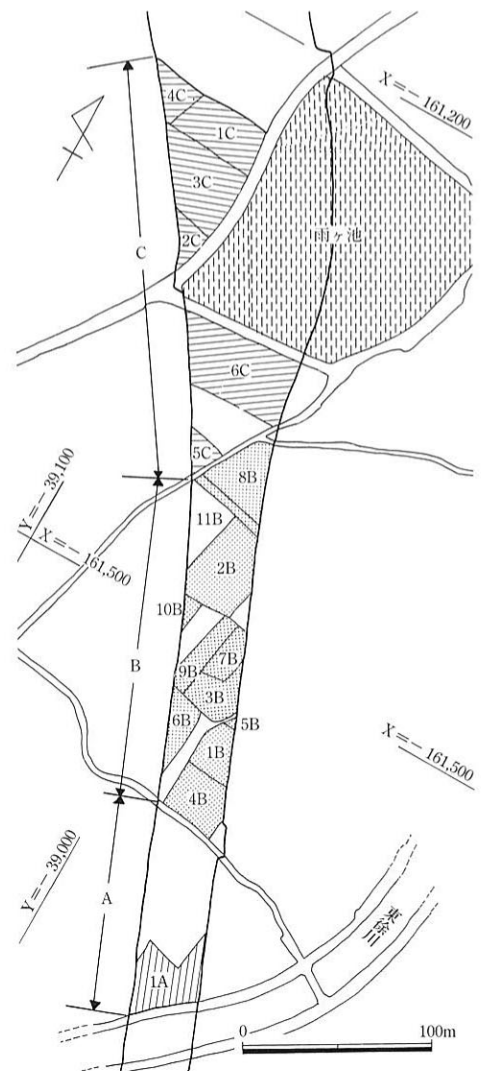


図3.3 調査区・トレンチ配置図

第4章 基本層序

先章にも述べたとおり、今回の調査区域は、谷底平野のA地区、低位段丘から段丘崖を経て中位段丘に至るB地区、中位段丘上部の緩やかな斜面のC地区と多岐にわたる地形部分を含んでいる。そのため、土層堆積状況は地点毎に大きく異なった様相をみせる。本章では、調査区域全体の土層堆積状況を知るために、各調査区域の特徴を示す10地点(a~j)の土層柱状図を提示してその概観を行いたい(図4.1)。

谷底平野領域にあるA地区(j地点)では、土器包含層の形成はT.P.38m前後の高さに比較的厚く、約50cm程度認められた。全体に極細砂~シルトの堆積物であり、その上半ではより粒度が大きく下半では粒土が細かい傾向が看取できた。このため、上下に2分して堆積単位を認識した。土色は、上半では2.5Y6/3にぶい黄色、下半は7.5Y6/2灰オリーブ色と、全体に明色で土壌化の進行は顕著ではない。包含する土器量も少なく、古代~中近世の土器片を若干含むのみであった。この土器包含層の下面には1m以上も厚い粗砂層が形成され、河川内堆積物もしくは自然堤防を形成する堆積物と考えられる。この粗砂層中からは弥生時代後期~古墳時代前期の土器片が出土している。

低位段丘~段丘崖領域にあたるB地区南半(h・i地点)では、シルト~極細砂を主体とする土器包含層はT.P.39m前後の標高に厚さ20~30cm程度堆積していた。h・i地点いずれにおいても、包含層中の上半にくらべ下半の粒度が細かいことから、土器包含層を2分することが可能であった。出土土器の時期は6世紀~中世であるが、上層では中世主体、下層では6~8世紀主体と下層ほど古い年代の土器量が多い傾向が見られる。この土器包含層の下面が遺構検出面であり、7世紀~近世の遺構が検出された。これより下位にはシルト質の土層が形成されているが、遺物の包含は認められない。

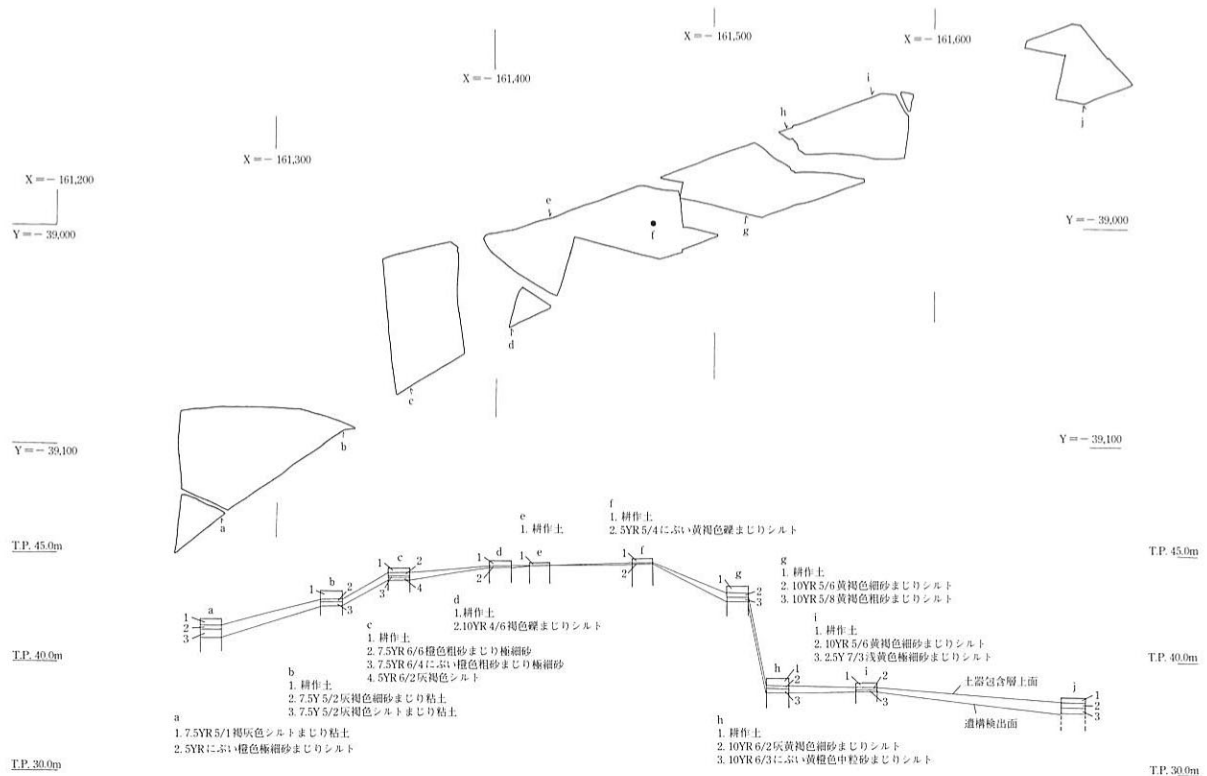


図4.1 土層柱状図

調査区域の中でも、最も高位で遺構検出されたのは B 地区北半 (d・e・f 地点) であった。いずれも、T.P.44.5~44.7m に遺構検出面があり、礫まじりのシルトを主体とする土器包含層は10cm 以下の薄い堆積である。このため、B 地区北半の土器包含層は単一層としか認識することが出来なかった。出土土器の大半は 6~7 世紀の須恵器・土師器片で、その他は近世以降の陶磁器を若干数含むのみである。この包含層の下面となる遺構検出面は、中位段丘礫層およびその上面に薄く形成された風化層の上面である。遺構検出の結果、6~7 世紀を中心とした柱穴多数と竪穴住居跡などが確認された。その他の時期の遺構としては近世の井戸なども検出されている。

C 地区は、中位段丘が北西方向に傾斜する領域に相当する。粘土~極細砂と基調とする土器包含層は、d 地点・c 地点では B 地区北半と同様に T.P.44~44.5m と高い標高に位置するが、a 地点・b 地点では T.P.41~42.6m 前後に落ち込んでいる。北西方向に向かって段階的に傾斜が強まる傾向がうかがえ、それに呼応して土器包含層も北西方向にいくほど厚くなる。土器包含層から出土した土器は 6 世紀~8 世紀の須恵器・土器片が主体で、近世陶器が若干含まれている。ただし、d・c 地点では土器片数は多いが、a・b 地点は僅少となる。包含層下面で検出された遺構も、d・c 地点では柱穴・土坑などが多いものの、a・b 地点では落ち込み状の遺構が多く人的活動の痕跡は希薄であった。当地区においても、B 地区北半同様に、包含層下面には段丘礫層が形成されている。

このように、当遺跡における遺構あるいは土器包含層の形成は、段丘最上部の C 地区南半~B 地区北半とその南側の B 地区南半に集中している。基本層序の在り方からは、当遺跡の人的活動の痕跡は、段丘の西側へは広がらず、東除川の浸食によって形成された中位~低位段丘部分に集中しているといえよう。

第5章 A地区の調査成果

A地区は東除川左岸隣接の調査地域南端の調査区であり、東除川の影響が多く予想される地区であった。現状の地形は調査区南部において1.1mの段差を有し、調査区西側では水田が存在するが本調査地区においては畑地であった。掘削は3層に分けて行ない、1層下面(第1面)、2層下面(第2面)として2面の遺構面を検出した。2層以下は、東除川の氾濫による粗～細砂堆積層であった。

第2面

本遺構面においては中央部で不整形の土坑994ほかを検出したほか、西側では比較的規模の小さい土坑を、西端部では炭・灰を含む土坑1003を検出している。また、土坑994周辺では炭・灰が集中する状況を確認している。

〔土坑994〕

本遺構はL10f2～g2にかけて検出された土坑である。土坑996、柱穴997、土坑998によって一部破壊されている。長軸411cm、短軸264cm、深さ13cmで埋土は土師器片、焼土を含む黒褐色シルトである。土師片が集中する土坑北西部には上部の平らな長さ約20cm、幅約15cmの石が置かれており、その状況から炉の可能性が高いと言える。本遺構の立地が東除川近接地で不安定な環境にあることから短期間使用

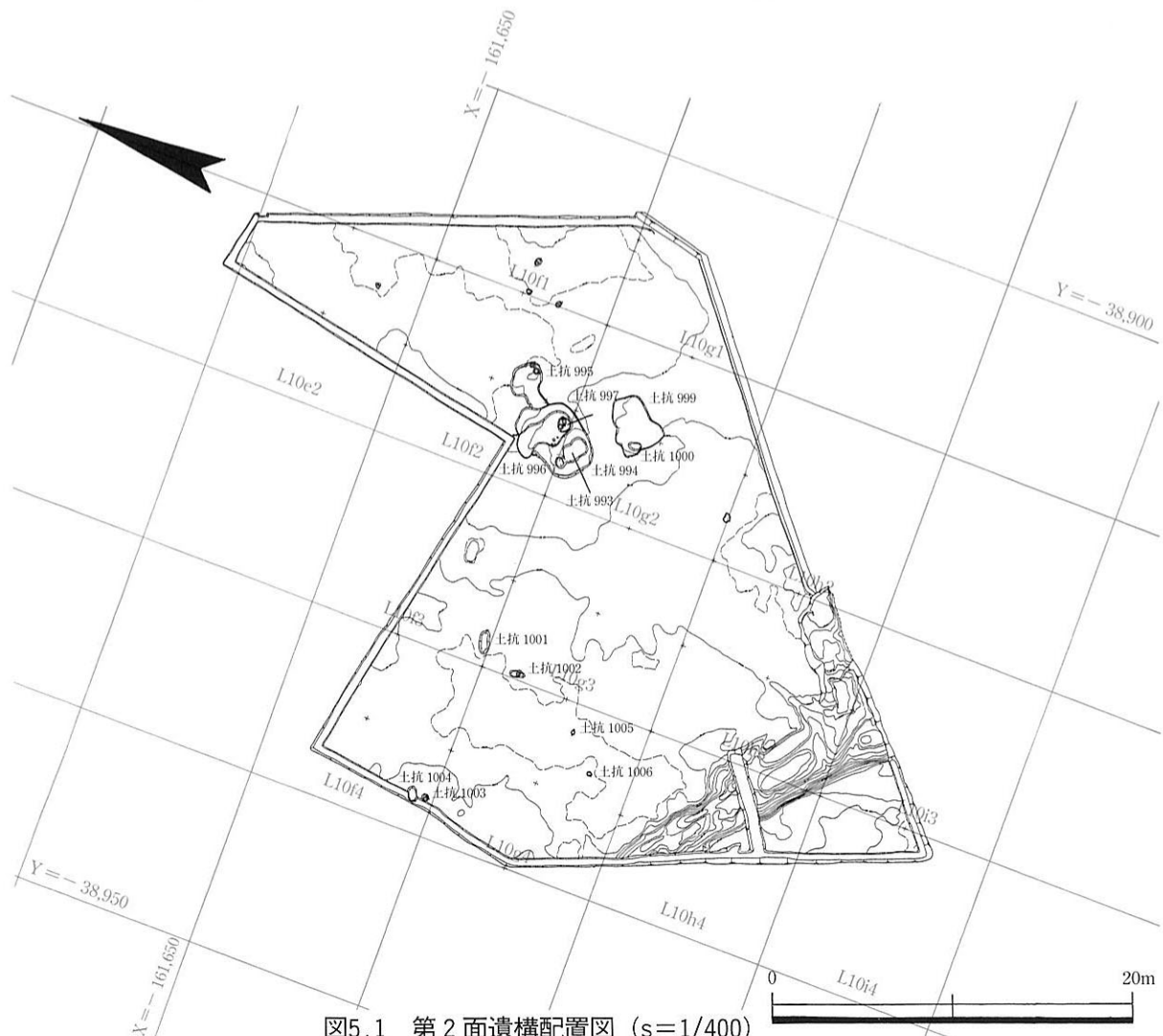


図5.1 第2面遺構配置図 (s=1/400)

された竪穴住居状の建物であった可能性が考えられると想像される。出土遺物は炉周辺部で土師器が出土している。遺構の時期は須恵器を伴わないこと、出土遺物から少なくとも布留式期まで遡る可能性がある土器が出土していること、また遺構面上の包含層からも中世の遺物は出土していないことから古墳時代前期と考えられる。遺構検出面は細砂混じりのシルトであり、さらその後も河川堆積の作用により細砂の堆積は継続する。

〔土坑1103〕

本遺構は K10b9で検出された土坑である。側溝断面にかかる地点に位置しており、炭・灰とともに焼土も検出している。埋土は黄褐色シルトから細砂で遺構としての広がり確認できないため住居址などの建物に伴う炉とは明らかに異なる。遺物も出土しておらず時期の決定も難しい。河川堆積による過程で一時的に使用されたと考えるべきであろう。

第1面

調査区北東部において掘立柱建物2棟を検出している。北側を建物1、南側を建物2とする。

建物1は L10f1～f2にかけて検出された掘立柱建物である。主軸方向がほぼ南北方向である東西2間

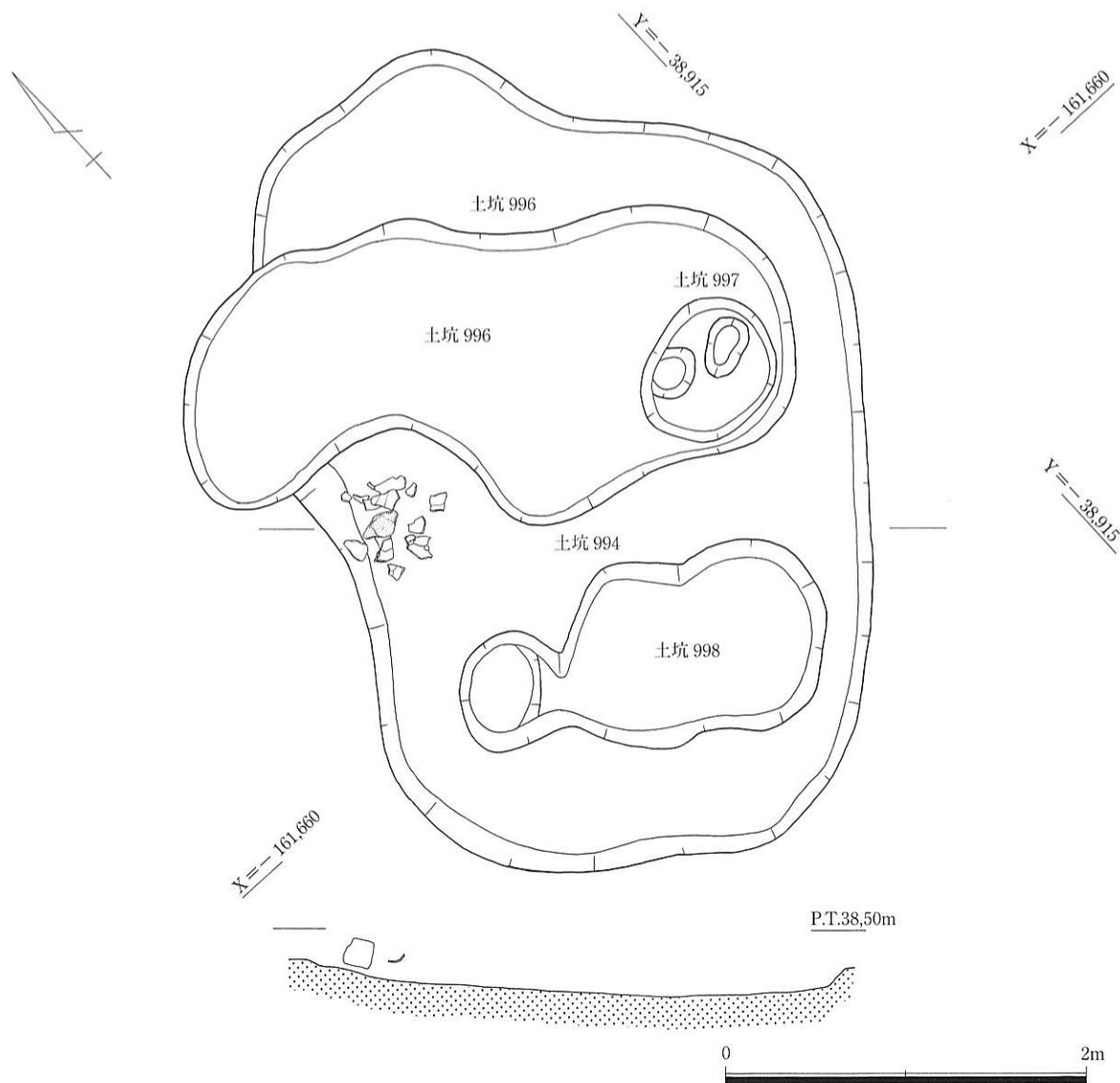


図5.2 土坑994平・断面図 (s=1/40)

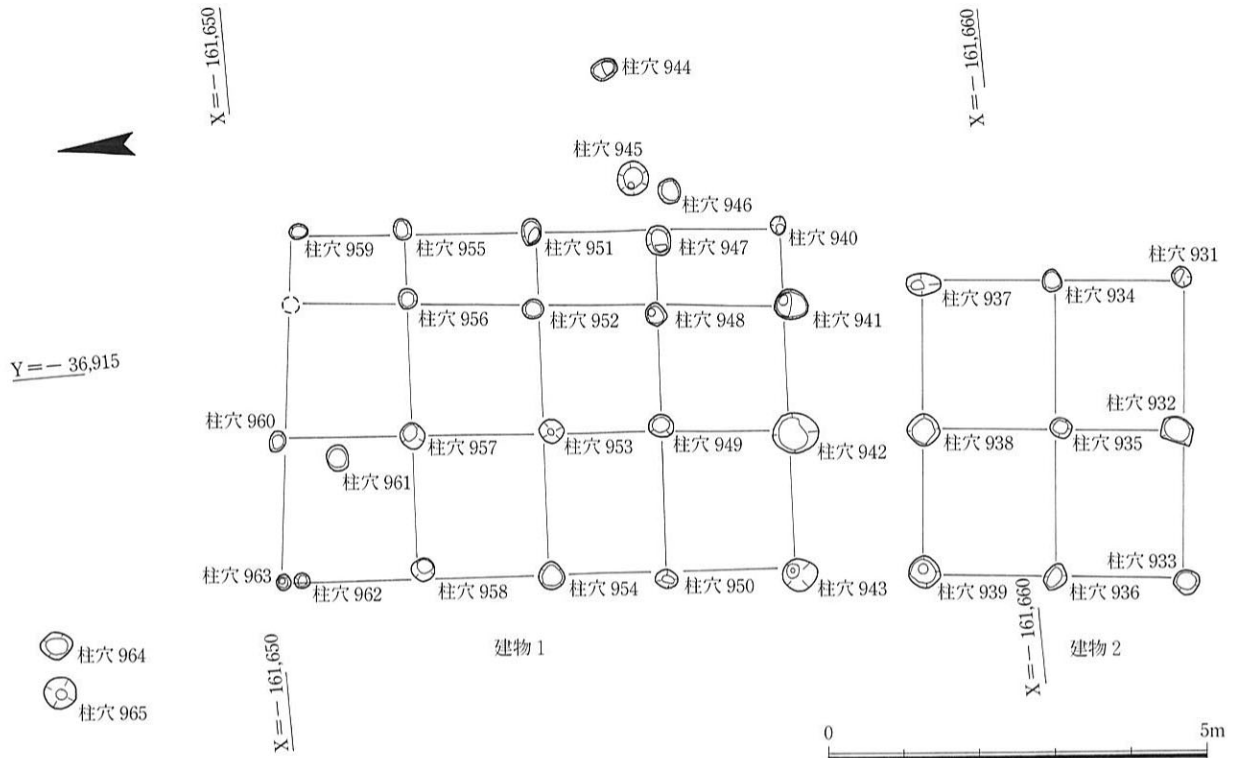


図5.3 第1面遺構配置図 (s=1/100)

(約7 m)×南北4間(約13.5m)の建物である。東側に廂を伴う総柱の建物で柱間は約180cmである。深さは約10~20cmである。近接する南側の建物は、東西2間(8 m)×南北2間(7 m)の総柱建物で柱間1.8~2.0mで東西方向にやや長い長方形である。主軸方向は建物1同様にほぼ南北方向である。柱穴の深さは0.1mから0.3mである。

建物2はL10g1~g2、L10f1~f2にかけて検出された掘立柱建物である。建物1と同一の軸線上にあり建物1が住居施設であるのに対し、建物2はその規模から倉庫的な機能が想定できる。柱穴埋土は建物1、建物2ともににぶい黄褐色細粒砂シルト(10YR6/4)で、2棟ともに同様に同様に時期差はほとんど見られないと考えられる。建物1、建物2ともに柱穴からの出土遺物少なく時期の特定は難しいといえるが、上層遺物の中に中世の遺物が含まれており近世陶磁器は含まれないことから、中世の一時に建てられたものと考えたい。

遺物包含層の出土遺物と状況

包含層出土の土器は多量に堆積する細砂中より出土している。5.4-1は第3層中から出土した手焙形土器である。弥生時代後期に位置付けられる。上部は欠失しており胎土は内面にハケメ調整が見られる。5.4-2は小型丸底壺である布留式期3~4期に位置付けられる。外面に細かいハケメ調整を施し、内面にはへら削りを施す。堆積する細砂中には縄文晩期の土器の細片や弥生土器が出土している。

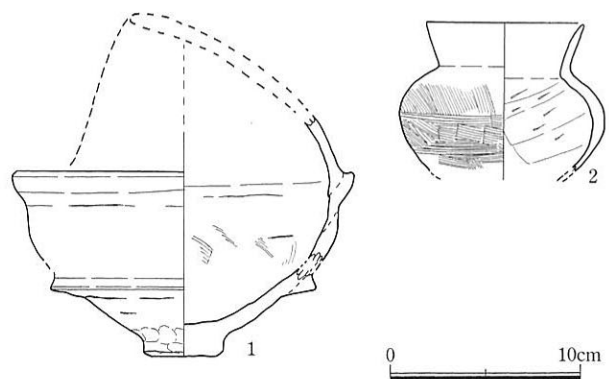


図5.4 A地区包含層出土遺物

表5.1 A地区検出遺構一覧表

遺構	トレンチ	地区	遺構面	長軸長(cm)	幅or短軸長(cm)	深さ(cm)	埋土色・質	時期	備考	
柱穴	931	1A	L10g1, L10g2	第1面	28	26	24.2	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	掘立柱建物2
柱穴	932	1A	L10g2	第1面	40	34	9.9	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	掘立柱建物2
柱穴	933	1A	L10g2	第1面	34	32	8.1	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	掘立柱建物2
柱穴	934	1A	L10g1, L10g2	第1面	30	26	11.5	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	掘立柱建物2
柱穴	935	1A	L10g2	第1面	30	27	10.8	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	掘立柱建物2
柱穴	936	1A	L10g2	第1面	33	28	26.1	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	掘立柱建物2
柱穴	937	1A	L10f1	第1面	46	30	22.7	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	掘立柱建物2
柱穴	938	1A	L10f2	第1面	42	39	25.2	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	掘立柱建物2
柱穴	939	1A	L10f2	第1面	43	40	39.8	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	掘立柱建物2
柱穴	940	1A	L10f2	第1面	24	20	9.7	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	掘立柱建物1
柱穴	941	1A	L10f1, L10f2	第1面	44	42	46.4	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	掘立柱建物1
柱穴	942	1A	L10f2	第1面	60	52	23.6	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	掘立柱建物1
柱穴	943	1A	L10f2	第1面	46	44	51.1	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	掘立柱建物1
柱穴	944	1A	L10f1	第1面	38	28	21.7	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	
柱穴	945	1A	L10f1	第1面	46	42	45.5	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	
柱穴	946	1A	L10f1	第1面	35	30	13.5	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	
柱穴	947	1A	L10f1	第1面	40	32	26.5	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	掘立柱建物1
柱穴	948	1A	L10f1, L10f2	第1面	30	26	30.2	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	掘立柱建物1
柱穴	949	1A	L10f2	第1面	34	30	15.2	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	掘立柱建物1
柱穴	950	1A	L10f2	第1面	30	25	12	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	掘立柱建物1
柱穴	951	1A	L10f1	第1面	36	26	18.2	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	掘立柱建物1
柱穴	952	1A	L10f1	第1面	28	26	11	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	掘立柱建物1
柱穴	953	1A	L10f2	第1面	32	30	10.3	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	掘立柱建物1
柱穴	954	1A	L10f2	第1面	36	34	6.1	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	掘立柱建物1
柱穴	955	1A	L10f1	第1面	28	26	15	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	掘立柱建物1
柱穴	956	1A	L10f1	第1面	30	27	15.4	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	掘立柱建物1
柱穴	957	1A	L10f2	第1面	36	32	18.4	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	掘立柱建物1
柱穴	958	1A	L10f2	第1面	30	29	24.6	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	掘立柱建物1
柱穴	959	1A	L10f1	第1面	26	20	6.9	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	掘立柱建物1
柱穴	960	1A	L10f2	第1面	30	22	6.4	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	掘立柱建物1
柱穴	961	1A	L10f2	第1面	36	30	9.3	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	
柱穴	962	1A	L10f2	第1面	22	21	3.4	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	
柱穴	963	1A	L10f2	第1面	22	20	14.2	10YR6/4 にぶい黄橙色 細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	
柱穴	964	1A	L10e2	第1面	42	38	13.5	10YR4/4 褐色細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	
柱穴	965	1A	L10e2	第1面	42	40	22.9	10YR4/4 褐色細粒砂まじりシルト	鎌倉時代	
土坑	994	1A	L10f2, L10g2	第2面	411	264	13	10YR3/2 黒褐色シルト	古墳時代前期	土坑995を切り、土坑996、998に切られる
土坑	995	1A	L10f2	第2面	(255)	159	9	2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト	古墳時代前期	土坑994に切られる
土坑	996	1A	L10f2	第2面	346	108	8	10YR3/1 黒褐色 細砂まじりシルト	古墳時代前期	土坑994を切り、土坑997に切られる
土坑	997	1A	L10f2	第2面	81	56	19	5YR2/1 黒褐色シルト (炭層)	古墳時代前期	土坑996を切る
土坑	998	1A	L10g2	第2面	206	67	19	10YR3/1 黒褐色 細砂まじりシルト	古墳時代前期	土坑994を切る
土坑	999	1A	L10g2	第2面	322	156	11	10YR4/2 灰黄褐色シルト	古墳時代前期	
土坑	1000	1A	L10g2	第2面	73	44	15	10YR3/1 黒褐色 細砂まじりシルト	古墳時代前期	
土坑	1001	1A	L10f3	第2面	123	54	6	7.5YR4/2灰褐色細砂シルト	古墳時代前期	
土坑	1002	1A	L10g3	第2面	24	14	10	7.5YR4/2灰褐色細砂シルト	古墳時代前期	
土坑	1003	1A	L10f4	第2面	60	(52)	30	5YR2/1黒褐色シルト～細砂	古墳時代前期	
土坑	1004	1A	L10f4	第2面	80	36	21	5YR4/8 赤褐色シルト	古墳時代前期	
柱穴	1005	1A	L10g4	第2面	24	20	5	5YR3/4 暗赤褐色シルト	古墳時代前期	
柱穴	1006	1A	L10g4	第2面	30	20	5	5YR3/4 暗赤褐色シルト	古墳時代前期	

第6章 B地区の調査成果

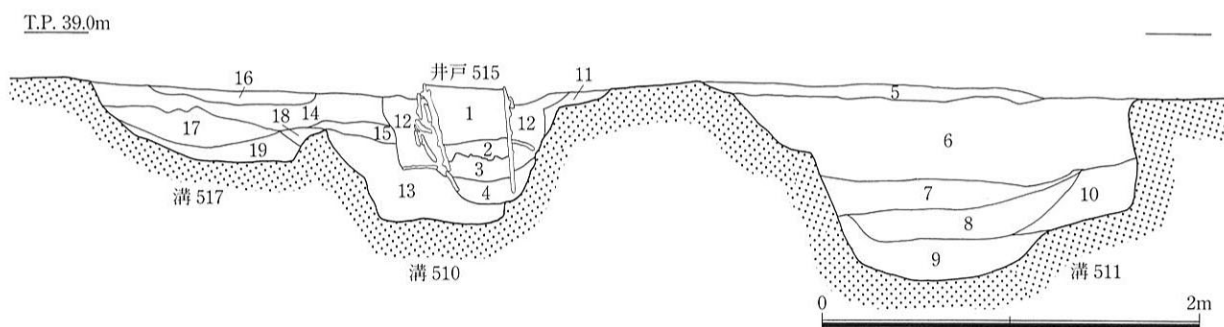
第1節 B地区南半の遺構・遺物

B地区については段丘下から斜面を中心とするB地区南半、段丘上面のB地区北半の順に遺構・遺物の説明を行なうこととする。B地区北半については、次節に詳述したい。地形変化にとむB地区南半においては、古墳時代から近世にかけての遺構が検出されている。遺構の説明については古墳時代から古代の遺構を中心とし、中世以前の主要な遺構までについて説明をすることとする。なお、建物として復原ができなかった柱穴等については検出遺構一覧表を参照していただきたい。

溝・井戸・谷

〔溝510〕(図6.1.1、図6.1.2)

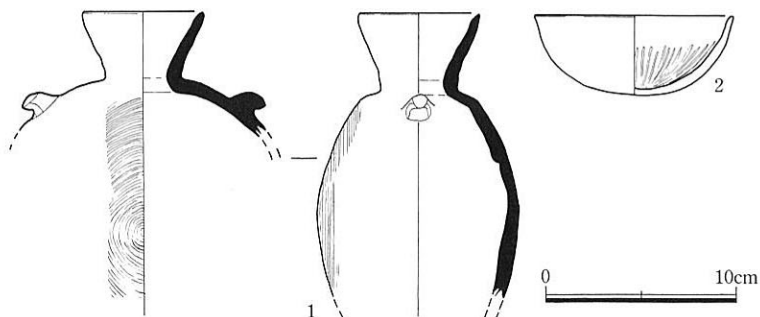
本遺構はK10h5～j5地区にかけて検出された溝である。溝の方向は南側でやや東側に振るが北-南方向で、南側で溝511と合流する。幅162cm、深さ82cmで埋土は上層、下層の2層に分けられる。溝は常に流れていたことが堆積状況から分かり、滞水していた時期はないようである。溝の断面形態は半円形で、北側で検出した河川4から水を引水するために掘削された可能性が考えられる。また、本溝がある程度埋没した時期に埴輪転用井戸である井戸515がつくられる。遺物6.1.2-1は下層から出土した提瓶(TK43～TK209)、6.1.2-2は土師器坏Cで飛鳥時代前半(飛鳥II～III)に位置付けられるものが出土している。また、本溝上層から井戸転用の埴輪と接合する破片が出土しており、上部包含層に含まれる中世の遺物は出土していないことから、本遺構の時期は飛鳥時代～奈良時代初めに位置付けられる。



- | | | | |
|---------------------------|-----------------------|---------------------------|---------------------|
| 1 2.5Y7/3浅黄色シルトまじり極細砂 | 4 2.5Y5/3黄褐色粗粒砂まじり細砂 | 7 2.5YR5/6にぶい黄色極細粒砂まじりシルト | 10 10YR6/4にぶい黄橙色粗粒砂 |
| 2 10YR5/2黄褐色細砂まじりシルト | 5 10YR5/6黄褐色中粒砂 | 8 10YR6/2灰褐色シルト | 11 10YR6/6明黄褐色中粒砂 |
| 3 2.5Y5/3黄褐色粗粒砂まじり細砂 | 6 10YR5/6黄褐色極細砂まじりシルト | 9 10YR6/4にぶい黄橙色粗粒砂まじり中粒砂 | 12 10YR5/2灰黄褐色中粒砂 |
| 13 10YR6/3にぶい黄橙色粗粒砂 | | | |
| 14 10YR6/4にぶい黄橙色細粒砂まじり粗粒砂 | | | |
| 15 10YR6/4にぶい黄橙色細粒砂 | | | |
| 16 10YR5/6黄褐色中粒砂 | | | |
| 17 10YR6/4にぶい黄褐色細粒砂 | | | |
| 18 10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂まじり粘土 | | | |

図6.1.1 溝510、溝511、溝517、井戸515断面図 (s=1/40)

図6.1.2 溝510出土土器



〔溝511〕 (図6.1.1)

本遺構は K10i4で検出した溝である。溝の方向は北北東-南南西方向である。幅210cm で深さ34cm で溝510に合流する。遺物はほとんど出土していない。本遺構の時期は、溝510が本遺構を掘り込む状況が断面から観察されることから、溝510以前から存在し、飛鳥時代～奈良時代初めころと考えられる。

〔溝517〕 (図6.1.1)

本遺構は K10i5～j5地区にかけて検出された溝である。溝510から分流する形をとるが、幅30cm、深さ30cm と溝510に比べて規模は縮小している。本遺構の深さまで溝510が埋没した時点で流れの方向が変化した結果分流し、機能するようになったと考えられる。遺物は須恵器、土師器を中心としており、飛鳥時代の遺物を中心としている。本遺構の時期は、中世の遺物は出土しておらずに、溝510が埋没する時期である飛鳥時代～奈良時代初めに位置付けられる。



写真6.1.1 井戸515 (上から)



写真6.1.2 井戸515 (断面)

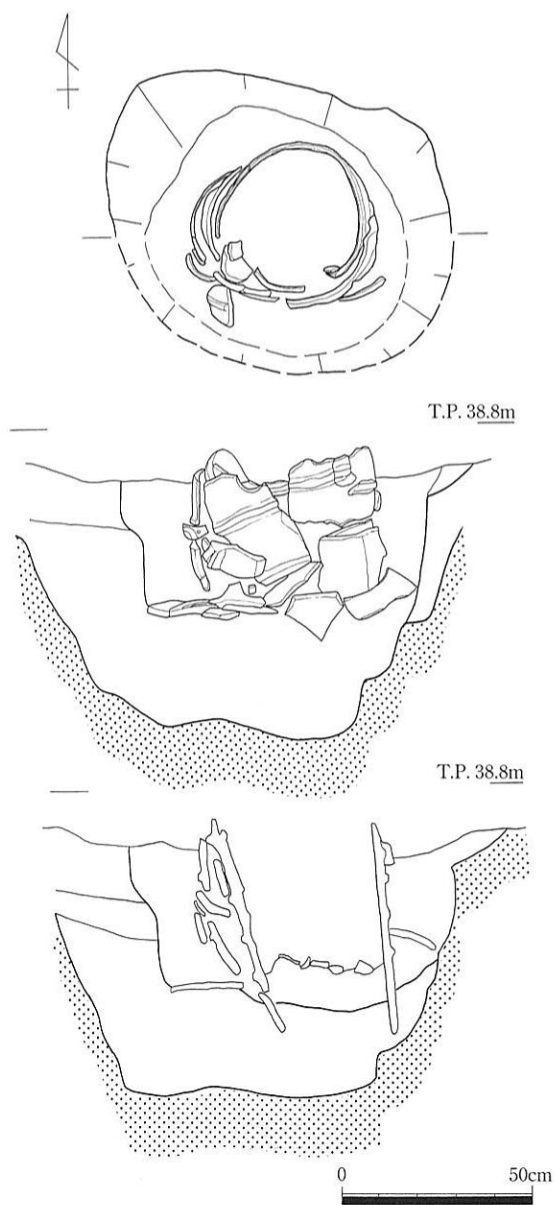


図6.1.3 井戸515平・断面図 (s=1/20)

表6.1.1 B地区南半検出遺構一覧表(1)

遺構	トレンチ	地区	長軸長(cm)	幅or短軸長(cm)	深さ(cm)	埋土色・質	時期	備考	
溝	1	1B	K10d5,k10e6,K10f6,K10g6	68	20		江戸時代	井戸12,263に切られる	
溝	2	1B	K10d6	20	3.9		江戸時代		
溝	3	1B	K10e6	70	7.5		江戸時代		
溝	4	1B	K10e3,K10e9,K10e7,K10d7	600	24	2.5Y5/2暗灰黄色土中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代		
溝	5	1B	K10g6,K10f6,k10f5	76	7	2.5Y5/3黄褐色土細粒砂まじりシルト	古墳時代後期		
溝	6	1B	K10f5,K10f6	70	19	2.5Y5/3黄褐色土細粒砂まじりシルト	古墳時代後期	溝8に切られる	
溝	7	1B	K10f5,K10f6	36	30	2.5Y6/3灰黄色土細粒砂まじりシルト	古墳時代後期	溝8に切られる	
溝	8	1B	K10e6,K10f6,K10g6	134	14		室町時代	溝6,7を切る	
溝	9	1B	K10d6,K10e6	168	10		鎌倉時代	溝10を切り、溝11に切られる 溝65につながる	
溝	10	1B	K10e6	86	7		鎌倉時代	溝9に切られる	
溝	11	1B	K10g6,K10f6	58	21		室町時代	溝9を切り、井戸263に切られる	
井戸	12	1B	K10e6	122	104	42	2.5Y5/4黄褐色中粒砂まじりシルト	江戸時代	溝1を切り、井戸263に切られる
井戸	263	1B	K10e6	212	180	61	2.5Y5/4黄褐色中粒砂まじりシルト	江戸時代後期	溝1,11、井戸12を切る
溝	526	1B	K10d6	60	11		古墳時代後期~室町時代		
谷	352	3B	J10b7,J10b8,J10c7,J10c8	1040	210	10YR4/4褐色粗粒砂まじりシルト	古墳時代後期~室町時代	落ち込み	
土坑	431	3B	K10b8	130	56	22	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期~室町時代	
井戸	432	3B	K10b9	82	76	79		江戸時代	
土坑	433	3B	K10b9	87	46	20	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期~室町時代	
柱穴	445	3B	K10b8	33	24	13.5	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物I
柱穴	446	3B	K10b8	32	25	30.2	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物I
柱穴	447	3B	K10b8	40	26	9	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	柱穴448を切る掘立柱建物I
柱穴	448	3B	K10b8	32	22	19	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	柱穴447に切られる
溝	449	3B	K10b8	30	27.5	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代		
柱穴	450	3B	K10b8	38	22	25	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	柱穴451を切る
柱穴	451	3B	K10e8	46	42	10.5	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	柱穴450に切られる
柱穴	452	3B	K10e8	44	22	13.5	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	
柱穴	453	3B	K10e8	50	24	17.6	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物I
柱穴	454	3B	K10e8	40	34	29.7	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	
柱穴	455	3B	K10e8	70	35	53.7	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物I
柱穴	456	3B	K10e8	39	20	30.8	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	
柱穴	457	3B	K10e8	55	34	29.7	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	柱穴458を切る掘立柱建物I
柱穴	458	3B	K10e8	30	24	20.5	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	柱穴457に切られる
柱穴	459	3B	K10e8	48	40	39.5	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	
柱穴	460	3B	K10e8	25	22	43.3	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	
井戸	462	3B	k10e8	116	108	140	2.5Y6/4にぶい黄色細砂まじり粘土	奈良時代	
土坑	497	4B	K10f6	45	32	6	10YR5/4にぶい黄褐色シルトまじり細粒砂	古墳時代後期~室町時代	
土坑	498	4B	K10f6	32	22	5.5	10YR5/4にぶい黄褐色シルトまじり細粒砂	古墳時代後期~室町時代	
土坑	499	4B	K10f6	36	32	15.9	10YR5/6黄褐色中粒砂	古墳時代後期~室町時代	
井戸	500	4B	K10f6	306	280	129	2.5Y6/1黄灰色粗砂	江戸時代後期	
井戸	501	4B	K10f6	316	286	116	2.5Y6/4にぶい黄色細粒砂	江戸時代後期	
溝	503	4B	k10f6	98	25	10YR6/3にぶい黄褐色シルトまじり細粒砂	室町時代		
溝	505	4B	K10f6	70	20		江戸時代		
溝	506	4B	K10f6	120	29	10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂	室町時代	室町時代	
溝	507	4B	K10f5	58	21	10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂	室町時代	室町時代	
溝	508	4B	K10f5	40	8	2.5Y6/4にぶい黄色細粒砂まじりシルト	古墳時代後期~室町時代		
溝	509	4B	K10f5	62	13	2.5Y6/4にぶい黄色細粒砂まじりシルト	古墳時代後期~室町時代		
溝	510	4B	K10h5,K10f5,K10f5	162	68	10YR5/6黄褐色シルトまじり中粒砂	飛鳥時代~奈良時代		
溝	511	4B	K10f4,K10f4	210	34	10YR7/3にぶい黄褐色シルトまじり細粒砂	古墳時代後期~室町時代		
溝	512	4B	K10f6		38	13		古墳時代後期~室町時代	
土坑	513	4B	K10f6	194	180	82		室町時代	
落ち込み	514	4B	K10h5,K10f5,K10h6,K10f6		1170	15	10YR6/4にぶい黄褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期~室町時代	
井戸	515	4B	K10f5	68	54	37	2.5Y7/3浅黄色シルトまじり極細砂	飛鳥時代~奈良時代	円筒埴輪転用
溝	517	4B	K10f5,K10f5		120	50	10YR6/3にぶい黄褐色シルトまじり細粒砂	古墳時代後期~室町時代	
土坑	518	4B	K10f6	210	94	18	2.5Y6/4にぶい黄色細粒砂まじりシルト	飛鳥時代~奈良時代	
溝	519	4B	K10f6		88	9	2.5Y6/4にぶい黄色細粒砂まじりシルト	古墳時代後期~室町時代	
溝	520	4B	K10f6		22	7	2.5Y6/4にぶい黄色細粒砂まじりシルト	古墳時代後期~室町時代	
溝	521	4B	K10f5		58	8	2.5Y6/4にぶい黄色細粒砂まじりシルト	古墳時代後期~室町時代	
井戸	522	4B	K10f4	200	176	44	10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	江戸時代後期	
溝	523	4B	K10f5		94	10	2.5Y5/3黄褐色シルトまじり極細粒砂	古墳時代後期~室町時代	
溝	524	4B	K10f5		196	82	5Y6/1灰色シルトまじり極細粒砂	飛鳥時代~奈良時代	
井戸	463	5B	K10d6		69.7		2.5Y6/3にぶい黄色細粒砂まじりシルト	鎌倉時代~室町時代	
溝	464	5B	K10d6		110	16.5	2.5Y7/3にぶい黄褐色細粒砂まじりシルト	古墳時代後期~室町時代	東西
溝	465	5B	K10d6		156	10.2		古墳時代後期~室町時代	南北 溝9につながる
土坑	626	6B	K10g8	173	113	29	10YR3/4暗褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	
柱穴	627	6B	K10g8	96	76	12	10YR3/4暗褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	
柱穴	628	6B	K10g8	76	70	22		古墳時代後期~奈良時代	
柱穴	629	6B	K10f9	96	62	10		古墳時代後期~奈良時代	
柱穴	630	6B	K10f8	54	44	8	柱底:10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	
柱穴	631	6B	K10f8	50	46	20	柱底:10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	
柱穴	632	6B	K10f9	166	126	32	10YR3/4暗褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	
柱穴	633	6B	K10f9	50	44	17	柱底:10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	
柱穴	634	6B	K10f9	32	29	15	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	
柱穴	635	6B	K10e9	66	(46)	16	柱底:10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	
柱穴	636	6B	K10f9	24	20	12	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	
柱穴	637	6B	K10e9	53	51	14	柱底:10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	柱穴638を切る
柱穴	638	6B	K10e9	(62)	(38)	7	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	柱穴637に切られる
柱穴	639	6B	K10e9	38	29	11	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	
柱穴	640	6B	K10e9,K10f9	60	49	16	柱底:10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	
柱穴	641	6B	K10f9	62	52	20	柱底:10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	
柱穴	642	6B	K10f8	80	44	31	柱底:10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	
柱穴	643	6B	K10e8,K10f8	78	58	31	柱底:10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	
柱穴	644	6B	K10e9,K10f8	52	46	23	柱底:10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	
柱穴	645	6B	K10e9	60	52	22	柱底:10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	
柱穴	646	6B	K10e9	60	42	15	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	
柱穴	647	6B	K10e9	78	28	8	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	
柱穴	648	6B	K10b8	60	46	11	柱底:10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR6/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	
柱穴	695	6B	K10e8	78	58	8	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	
柱穴	696	6B	K10e8	106	46	15	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	
井戸	867	6B	K10e9	214	176	93	2.5Y5/6礫まじりシルト	江戸時代後期	
柱穴	869	6B	K10g8	32	30	9	柱底:10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR6/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	

表6.1.1 B地区南半検出遺構一覧表(2)

遺構	トレンチ	地区	長軸長(cm)	幅or短軸長(cm)	深さ(cm)	埋土色・質	時期	備考	
柱穴	732	7B	K10a7	33	29	23	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
土坑	733	7B	K10a7,K10a8	186	110	54	7.5YR3/4暗褐色粗砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	734	7B	K10a8	42	(24)	12	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴792に切られる
柱穴	735	7B	K10a8	34	24	23	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 q
柱穴	736	7B	K10a8	42	34	15	柱底-10YR2/2黒褐色中粒砂まじりシルト(土器片含む) 掘方-10YR2/2黒褐色中粒砂まじりシルト(褐色粘土ブロック含む)	奈良時代	掘立柱建物 q
柱穴	737	7B	K10a8	42	36	29	柱底-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 q
柱穴	738	7B	K10a8	26	20	14	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	739	7B	K10a8	36	32	23	10YR2/2黒褐色中粒砂まじりシルト(土器片含む)	奈良時代	掘立柱建物 q
柱穴	740	7B	K10a8	40	30	25	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	741	7B	K10a8	53	44	31	柱底-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6黄褐色中粒砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 q
柱穴	742	7B	K10a8	30	28	49	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	743	7B	K10a8	48	32	16	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	744	7B	K10a8	18	16	17	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	745	7B	K10a8	56	46	34	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	746	7B	K10a8	54	44	24	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	747	7B	K10a8	23	20	19	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	748	7B	K10a8	28	24	23	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	749	7B	K10a8	40	38	21	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	750	7B	K10a8	44	40	18	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 p
柱穴	751	7B	K10a8	58	50	30	柱底-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 p
柱穴	752	7B	K10a8	26	22	23	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	753	7B	K10a8	42	38	15	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 p
柱穴	754	7B	K10a8	44	30	12	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	755	7B	K10a8	53	34	25	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	756	7B	K10a8	42	28	10	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	757	7B	J10j8	40	34	10	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 p
柱穴	758	7B	J10j8	56	54	15	柱底-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	掘立柱建物 r
柱穴	759	7B	J10j8	32	30	22	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 p
柱穴	760	7B	J10j8	36	(26)	20	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 p
柱穴	761	7B	J10j8	50	38	23	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	762	7B	J10j8	42	40	12	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 p
柱穴	763	7B	J10j8	52	42	13	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 p
柱穴	764	7B	J10j8	74	64	24	柱底-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	掘立柱建物 r
柱穴	765	7B	J10j8	60	46	23	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 p
柱穴	766	7B	J10j8	25	(15)	x	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
溝	767	7B	J10j8	440	100	41	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴820を切る
柱穴	768	7B	J10j8	34	32	15	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 p
柱穴	769	7B	J10j8	38	28	14	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	奈良時代	柱穴770に切られる 掘立柱建物 p
柱穴	770	7B	J10j8	37	36	14	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴769を切る
柱穴	771	7B	J10j8	46	38	14	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	772	7B	J10j8	65	57	18	柱底-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	773	7B	J10j8	25	20	x	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	774	7B	J10j8	72	46	15	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	775	7B	K10b9	50	35	22	柱底-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴928を切る
柱穴	776	7B	K10b9	50	38	32	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	777	7B	K10b9	44	40	16	柱底-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
土坑	778	7B	K10a8,K10a9	102	88	23	柱底-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴929を切り、柱穴779に切られる
柱穴	779	7B	K10a8	36	31	13	柱底-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴778を切る
柱穴	780	7B	K10a8	50	30	11	柱底-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	781	7B	K10a8	40	34	18	柱底-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	782	7B	K10a8	36	30	15	柱底-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	783	7B	K10a8	40	22	23	柱底-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	784	7B	K10a8	74	40	26	柱底-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	785	7B	K10a8	88	70	34	柱底-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	786	7B	K10a8	36	32	17	柱底-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	787	7B	K10a8	22	20	20	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	788	7B	K10a8	32	26	13	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	789	7B	K10a8	42	38	23	柱底-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 q
柱穴	790	7B	K10a8	31	28	15	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	791	7B	K10a8,K10b8	56	46	25	柱底-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 q
柱穴	792	7B	K10a8	52	44	35	柱底-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	奈良時代	柱穴773を切る 掘立柱建物 q
柱穴	793	7B	K10a7	30	26	37	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	794	7B	K10a7	32	28	26	柱底-10YR2/2黒褐色中粒砂まじりシルト(土器片含む) 掘方-10YR2/2黒褐色中粒砂まじりシルト(褐色ブロック含む)	奈良時代	掘立柱建物 q
柱穴	795	7B	K10a7	33	30	15	柱底-10YR2/2黒褐色中粒砂まじりシルト(土器片含む) 掘方-10YR2/2黒褐色中粒砂まじりシルト(褐色ブロック含む)	奈良時代	掘立柱建物 q
柱穴	796	7B	K10a7	32	30	29	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 q
柱穴	797	7B	K10a7	40	30	24	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	799	7B	K10a8	26	24	25	10YR2/2黒褐色中粒砂まじりシルト(土器片含む)	奈良時代	掘立柱建物 q
柱穴	800	7B	K10a8	46	44	8	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 q
土坑	801	7B	K10a7	30	20	18	10YR2/2黒褐色中粒砂まじりシルト(土器片含む)	奈良時代	掘立柱建物 q
土坑	802	7B	K10a7	146	90	51	10YR4/6褐色粗砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	803	7B	K10a8,J10j8	46	41	26	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	804	7B	K10a8	36	31	14	柱底-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	805	7B	K10a8	58	35	21	10YR2/2黒褐色中粒砂まじりシルト(土器片含む)	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	806	7B	K10a8	28	26	38	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
土坑	807	7B	J10j8,J10j9	152	142	128	2.5Y5/6黄褐色礫まじりシルト(近世)	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	808	7B	J10j9	50	30	x	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	809	7B	J10j8	60	25	x	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	811	7B	J10j8	30	25	x	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	812	7B	J10j8	26	24	16	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	813	7B	J10j8	40	26	8	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	814	7B	J10j8	44	30	15	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	815	7B	J10j8	72	40	17	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 p
柱穴	816	7B	J10j8	52	40	14	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
土坑	817	7B	K10a8,J10j8	314	171	16	10YR5/3にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	818	7B	J10j8	41	37	13	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 p
柱穴	819	7B	J10j8	34	30	7	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 p
柱穴	820	7B	J10j8	50	34	8	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	溝767に切られる

表6.1.1 B地区南半検出遺構一覧表(3)

遺構	トレンチ	地区	長軸長(cm)	幅or短軸長(cm)	深さ(cm)	埋土色・質	時期	備考	
柱穴	821	7B	J10i8	44	30	9	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	822	7B	J10i8	38	34	11	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
溝	823	7B	J10i8, J10i8	540	85	34	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴907を切る
柱穴	824	7B	J10i8	64	42	23	柱穴10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	825	7B	J10i8	26	24	12	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	826	7B	J10i9	29	22	10	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	827	7B	J10i8	36	32	26	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	828	7B	J10i8	(46)	(40)	8	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴829に切られる
柱穴	829	7B	J10i8	68	60	47	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴828を切る
井戸	830	7B	J10i8	256	204	182	10YR5/6黄褐色粗砂まじりシルト (近世?)	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	831	7B	J10i8	68	62	22	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
溝	832	7B	J10i8	450	270	62	7.5YR3/3暗褐色粗砂まじりシルト (土器片含む)	古墳時代後期～奈良時代	溝868を切る
溝	833	7B	J10i8, J10i8	450	(146)	20	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	835	7B	K10b7	24	22	11	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 q
柱穴	836	7B	K10a8, K10b8	26	20	8	10YR2/2黒褐色中粒砂まじりシルト (土器片含む)	奈良時代	掘立柱建物 q
柱穴	837	7B	K10b8	28	22	16	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
溝	838	7B	K10b8	260	50	11	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	839	7B	K10b8	34	30	41	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	溝861を切る
柱穴	840	7B	K10b8	25	22	x	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	841	7B	K10b8	25	20	x	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	842	7B	K10a8	50	45	20	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	843	7B	K10a8, K10a9	30	27	14	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	844	7B	K10a9	38	32	19	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
土坑	845	7B	K10a9	162	77	68	10YR4/6褐色粗砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴846に切られる
柱穴	846	7B	K10a9	37	31	11	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	井戸845を切る
柱穴	848	7B	J10i8	68	58	25	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 r
柱穴	849	7B	J10i8	70	54	33	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 r
土坑	850	7B	J10i8, J10i7	280	275	23	7.5YR4/3褐色礫まじり極細砂	古墳時代後期	
柱穴	851	7B	J10i8	72	54	37	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴1256を切る 掘立柱建物 r
土坑	852	7B	J10i8	185	76	40	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
土坑	853	7B	J10i8	176	35	9	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	854	7B	J10i8	50	25	9	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
土坑	857	7B	J10i7	188	100	45	7.5YR3/4暗褐色粗砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
土坑	858	7B	J10i7	90	(58)	21	7.5YR4/4褐色中粒砂～シルト	古墳時代後期～奈良時代	
溝	859	7B	K10b7, K10b8	270	54	18	暗赤褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
溝	860	7B	K10b8	400	133	60	暗赤褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
溝	861	7B	K10b8	500	130	50	暗赤褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴925を切り、柱穴839に切られる
柱穴	862	7B	K10b9	36	26	13	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	863	7B	K10a9	41	29	8	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	864	7B	K10a7	32	27	11	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 q
柱穴	865	7B	J10i8	46	30	16	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
溝	866	7B	J10i8	345	160	33	10YR3/4暗褐色粗砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
溝	868	7B	J10i8	250	(214)	13	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	溝832に切られる
柱穴	879	7B	K10a8	48	44	20		古墳時代後期～奈良時代	
溝	889	7B	J10i8		34	5	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴890に切られる
柱穴	890	7B	J10i8	62	52	16	10YR2/2黒褐色中粒砂まじりシルト (土器片含む)	古墳時代後期～奈良時代	溝889を切る
柱穴	891	7B	J10i8	62	50	x	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
溝	892	7B	J10i8				10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	893	7B	J10i8	94	80	50.3	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
土坑	894	7B	J10i8	148	83	44.7	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	895	7B	J10i8	32	29	37	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	896	7B	J10i8	40	28	25.8	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	897	7B	J10i8	26	23	16.2	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	898	7B	J10i8	39	27	19.2	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	900	7B	J10i8	31	25	16.8	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	901	7B	J10i8	90	48	30.2	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴902に切られる
柱穴	902	7B	J10i8	39	35	x	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴901を切る
柱穴	903	7B	J10i8	62	58	37.3	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	904	7B	J10i8	39	30	22	柱穴10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト 掘方10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	905	7B	J10i8	40	37	48.1	柱穴10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト 掘方10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	906	7B	J10i8	40	30	23.1	柱穴10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト 掘方10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 r
柱穴	907	7B	J10i8	(68)	(20)	15.1	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	奈良時代	溝823に切られる 掘立柱建物 p
柱穴	908	7B	J10i8	96	60	26.8	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	909	7B	J10i8	52	28	36	柱穴10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト 掘方10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 r
柱穴	910	7B	J10i8	50	42	31	柱穴10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト 掘方10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 r
柱穴	911	7B	J10i8	30	16	12	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	912	7B	K10a8	32	21	17.9	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	913	7B	K10a9	58	38	35.4	柱穴10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト 掘方10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	914	7B	K10a8	44	36	19.2	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
土坑	915	7B	K10a8	195	116	67.5	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	920	7B	K10a8	67	46	6.8	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	921	7B	K10a7	35	25	x		古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	922	7B	K10a8	32	28	x	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
溝	923	7B	K10b8	90	30	12.2	10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	溝838に切られる
柱穴	924	7B	K10b8	52	42	18.8	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	925	7B	K10b8	46	22	25.5	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	溝861に切られる
土坑	926	7B	K10a9	(90)	(64)	22.6	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
溝	927	7B	K10b8, K10b9, K10a8	370	120	70	暗赤褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	928	7B	K10b8	30	22	x		古墳時代後期～奈良時代	柱穴775切られる
柱穴	929	7B	K10a8, K10a9	74	32	22.8		古墳時代後期～奈良時代	柱穴778に切られる
柱穴	1089	7B	K10a8	29	24	16		古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	1256	7B	J10i8	(50)	50	15.5		古墳時代後期～奈良時代	柱穴851に切られる
柱穴	1016	9B	J10i9	42	38	15	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	1017	9B	J10i9	87	44	37	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	1018	9B	J10i9	50	48	19	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	1019	9B	J10i9	48	40	19	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
土坑	1020	9B	J10i8	193	26	21	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	溝1052に切られる
柱穴	1021	9B	J10i8, J10i9	50	34	13	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	溝1052に切られる
柱穴	1022	9B	J10i8	(34)	24	14	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	1023	9B	J10i8	(70)	40	26	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	

表6.1.1 B地区南半検出遺構一覧表(4)

遺構	トレンチ	地区	長軸長(cm)	幅or短軸長(cm)	深さ(cm)	埋土色・質	時期	備考
土坑	1024	9B	J1018	65	40	18	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1025	9B	J1019	22	(10)	15	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
土坑	1026	9B	J1019	186	(44)	14	暗赤褐色粗粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1027	9B	J1019	72	48	33	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1028	9B	J1019, J1019	130	(20)	15	暗赤褐色粗粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1029	9B	J1019	74	40	42	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
土坑	1030	9B	J1019	198	102	48	暗赤褐色粗粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1031	9B	J1019	118	38	19	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1032	9B	J1019	40	38	22	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1033	9B	J1019	34	22	9	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1034	9B	J1019	56	34	19	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1035	9B	J1019	32	27	20	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1036	9B	J1019	25	22	17	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1037	9B	J1019	52	44	12	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1038	9B	K10a9	46	(32)	x	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1039	9B	K10a9	26	24	21	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1040	9B	K10a9	50	44	19	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1041	9B	K10a9	56	50	20	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1042	9B	K10a9	30	25	12	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1043	9B	K10a9	36	30	15	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1044	9B	K10a9	42	40	22	黒褐色粗粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1045	9B	K10a9	28	26	14	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1046	9B	K10a9	38	34	21	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1047	9B	K10a9	50	44	17	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1048	9B	K10a9	42	40	35	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1049	9B	K10a9	40	36	17	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1050	9B	K10a9	40	26	12	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1051	9B	K10a9	72	33	20	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
溝	1052	9B	J1018, J1019, K10a9, K10b9		68	39		古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1053	9B	K10b9	82	60	19	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1054	9B	K10b9, K10b10	136	82	34	柱穴 10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 堀方 10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
土坑	1055	9B	J10b9	206	86	11	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1056	9B	J10b9	45	40	x	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
土坑	1059	9B	J10b9	185	70	5		古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1060	9B	J10b9	72	64	17	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
土坑	1061	9B	K10b10	164	(52)	26	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1062	9B	K10b10	34	24	15	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
溝	1063	9B	K10b9, K10b10		48	34	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
溝	1064	9B	K10b10	x	92	10	10YR4/4褐色中粒～細粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
溝	1065	9B	K10c9, K10c10	x	100	34	10YR5/6黄褐色中粒～細粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1066	9B	K10c9	55	30	43	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
溝	1067	9B	K10c9		52	36	10YR5/6黄褐色中粒～細粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1068	9B	K10c9	40	36	x	10YR5/6黄褐色中粒～細粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1069	9B	K10c9	38	34	30	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1070	9B	K10c9	42	39	18	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1071	9B	K10c9	36	30	26	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1072	9B	K10c9	40	34	23	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
溝	1073	9B	K10c9, K10c10		88	32	10YR4/4褐色中粒～細粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1074	9B	K10c9	34	30	23	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
土坑	1075	9B	K10b9	140	43	x	炭化物層	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1076	9B	K10a9	(20)	20	x		古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1077	9B	J1019	88	(40)	20		古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1078	9B	K10a9	25	24	29		古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1079	9B	J1019	30	20	x		古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1080	9B	J1019	40	30	38	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1081	9B	J1019	40	28	42	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1082	9B	J1019	30	28	39	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1083	9B	J1019	28	22	36	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1084	9B	J1019	58	48	16	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1085	9B	J1019	34	30	11	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1086	9B	K10b10	43	32	24	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1091	9B	J1018	72	36	19	10YR5/6黄褐色中粒～細粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1092	9B	J1019	60	48	12	10YR5/6黄褐色中粒～細粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1093	9B	K10a9	92	(30)	19		古墳時代後期～奈良時代
溝	1094	9B	K10a9, J1019		280	31.8	10YR4/6褐色中粒～細粒砂まじり粘土	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1096	9B	K10a9	26	22	13.8		土坑1093を切る
溝	1097	9B	K10a9		52	18.7		古墳時代後期～奈良時代
土坑	1099	9B	K10a9, K10b9	152	104	25.3		古墳時代後期～奈良時代
溝	1100	9B	K10b9		58	19	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
土坑	1101	9B	K10b9	206	40	31.1		古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1102	9B	K10b9	18	14	x		古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1103	9B	K10b9	28	26	7.9		古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1104	9B	K10b9	24	22	11.5	10YR5/8黄褐色粗粒～細粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	1105	9B	K10b9, K10b10	80	60	13.7	10YR5/8黄褐色粗粒～細粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代

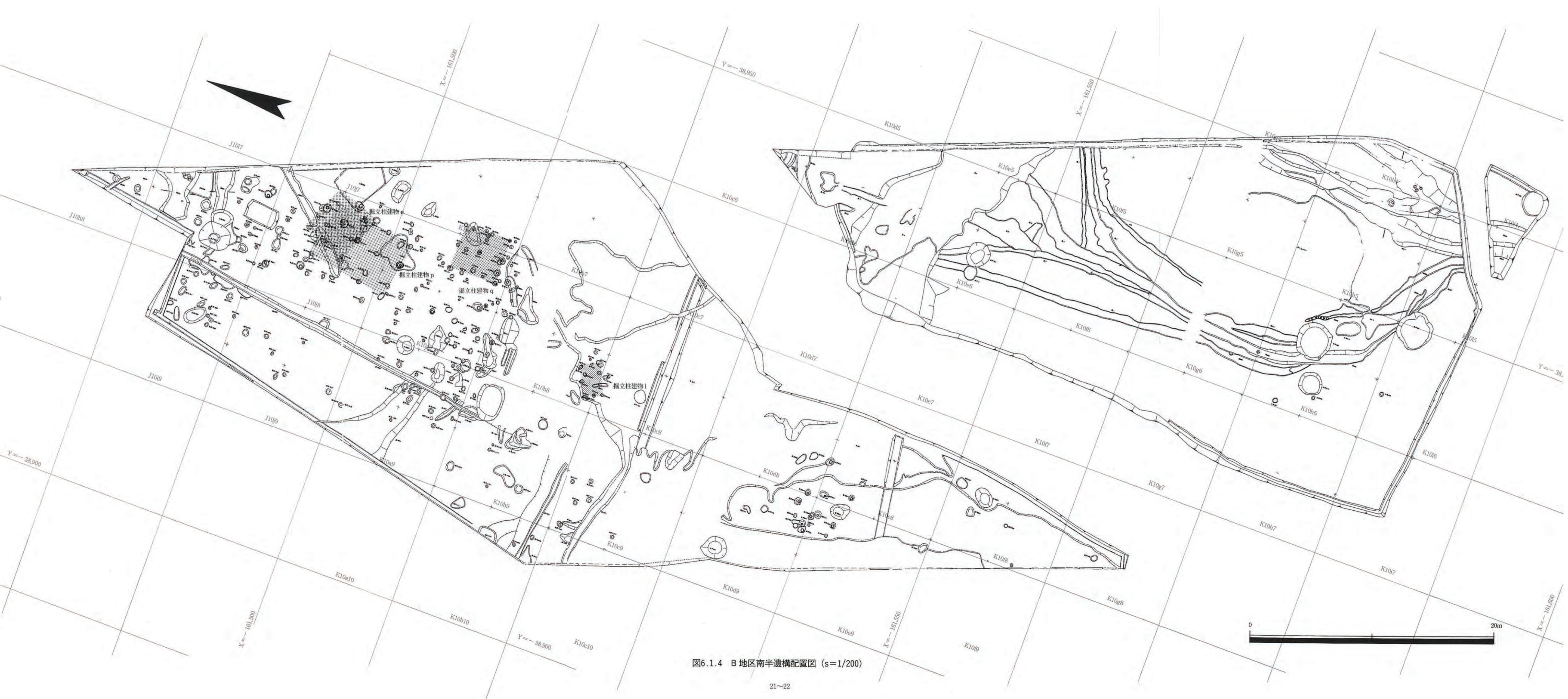


图6.1.4 B地区南半遺構配置図 (s=1/200)

〔井戸515〕（図6.1.3、写真6.1.1、写真6.1.2）

本遺構は K10i5地区で検出された円筒埴輪転用井戸である。湧水部分である溝510が埋まった部分を選定して穴を掘削し、井戸枠として埴輪を使用している。移動式土師器甕(6.1.5-5)、円筒埴輪(6.1.5-3、6.1.5-4)で湧水による砂の巻き上げを押さえ、また円筒埴輪2個を使用して互いの透かし部分を塞ぐ形で2重に埴輪をめぐるせている。井戸内部底部分には小石、粗砂によって湧水をろ過する工夫もなされていたと考えられる。

この円筒埴輪(6.1.5-3、6.1.5-4)はともに川西編年(川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌第64巻2号』)によるV期に属する埴輪であり、外面に縦方向のハケメ、内面に斜め方向のハケメを施す。また、本遺跡周辺の遺跡においても埴輪転用の井戸が調査により明らかになっている。6.1.5-1は井戸

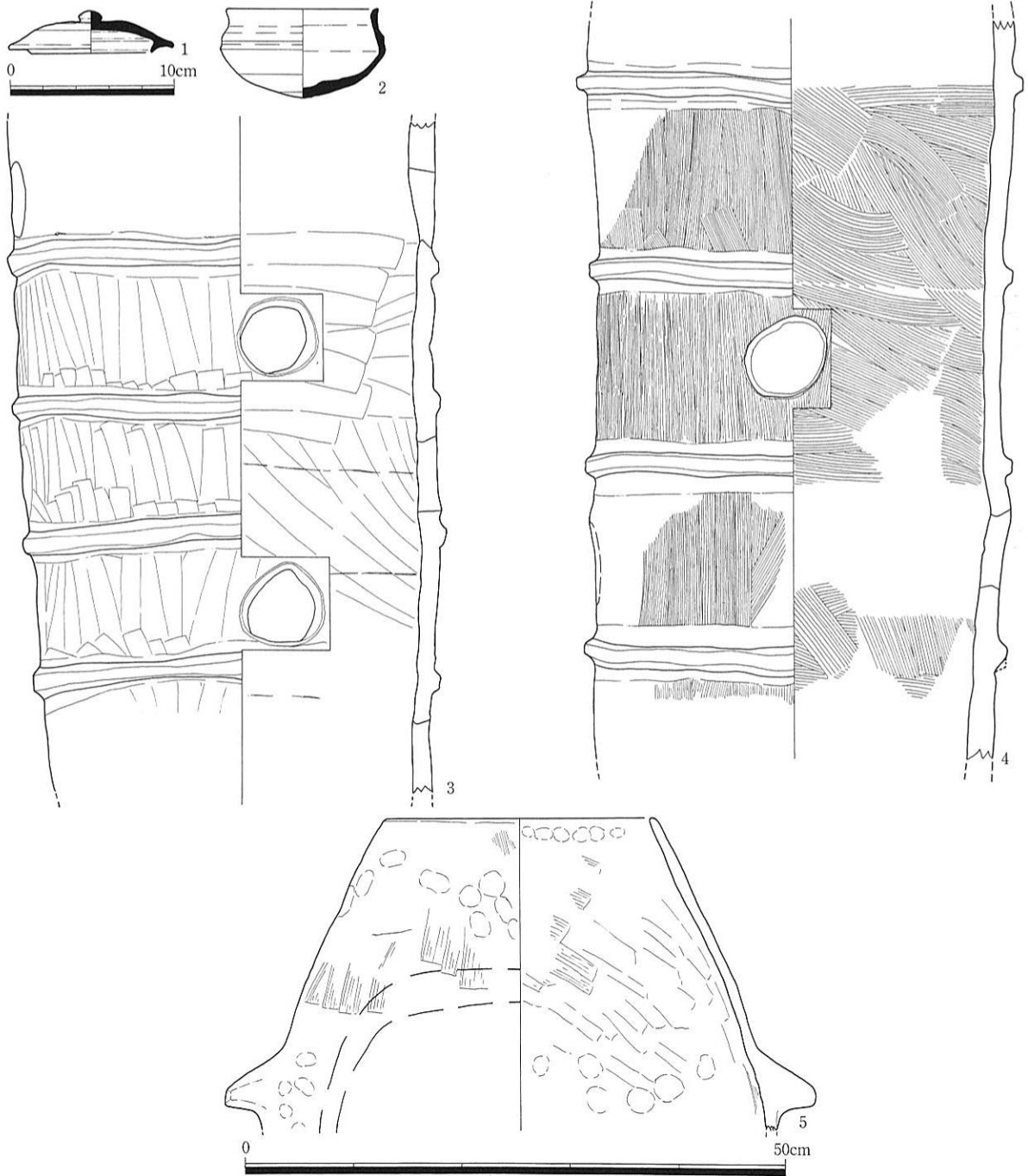


図6.1.5 井戸515出土遺物（1，2：1/4・3～5：1/6）

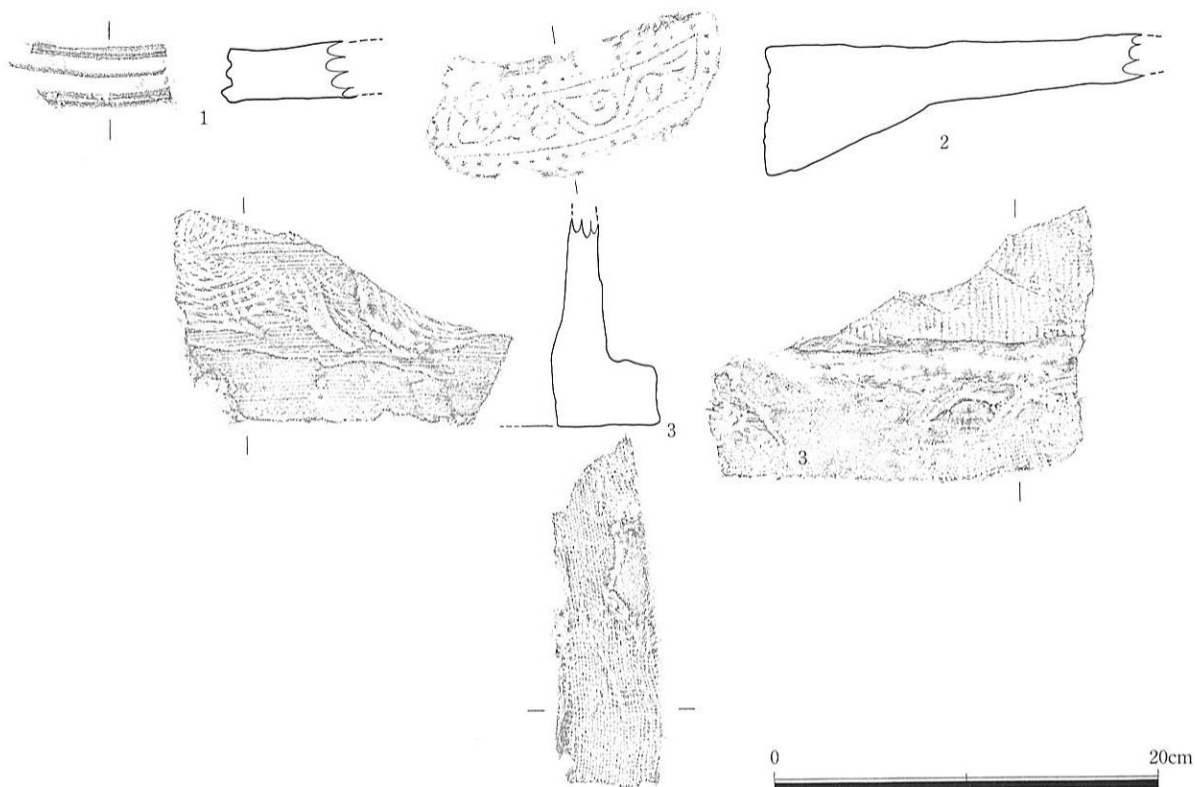


図6.1.6 B地区南半段丘下部出土遺物

枠内からの出土した遺須恵器坏G蓋(飛鳥II~III)、6.5.1-2は須恵器鉢とともに飛鳥時代の中~後葉に位置付けられ、本遺構が飛鳥時代中頃には使用されていたと考えられる。また、溝517出土の埴輪に井戸515出土のものと接合する埴輪が含まれることから、溝517が埋没する時期と近い時期に廃絶されたといえる。使用期間については井戸内の埋土中から中世の土器が出土しておらず、飛鳥時代中~後葉からの土器の出土にとどまることから比較的短期間の使用と考えられる。

B地区南半段丘下部出土遺物(図6.1.6)

6.1.6-1はK10d6地区で検出された井戸463から出土した三重弧文軒平瓦である。三重弧文軒平瓦は7世紀後半に位置付けられ、本遺跡周辺に存在する古代寺院では黒山廃寺からの出土例があげられる。

6.1.6-3はK10i6地区で検出された土坑513から出土した須恵器である。本遺物は井戸枠の下部分であり縁帯部には布目、胴部は外面にタタキ目、内面にあて具痕が残る。内面はタタキ後さらに、あて具痕を板状工具で軽く削っている。また縁帯部と胴部を接合するL字状に屈曲する部分はナデによって仕上げられる。本遺物と同様の技法で作られたものは奈良市平城京内左京三条五坊三坪の調査で、井戸枠として完形のもので出土している(『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成10年度』1999年奈良市教育委員会)。その例は、平城京内でも初出であり、井戸の時期は奈良時代中ごろから後半とされている。本遺物の時期も、奈良時代に位置付けたい。

6.1.6-2はK10h6地区にて出土した均整唐草文軒平瓦である。磨滅が激しい状態であるが、丹比廃寺出土の瓦と同範であることが判明した。丹比廃寺創建時の平瓦でなく8世紀代のもので、「丹比廃寺式」と呼ばれるものである。

〔溝4〕(図6.1.4)

本遺構はK10d6、K10e6、K10f6、K10g6地区にかけて検出された溝である。溝の方向は、ほぼ東西方

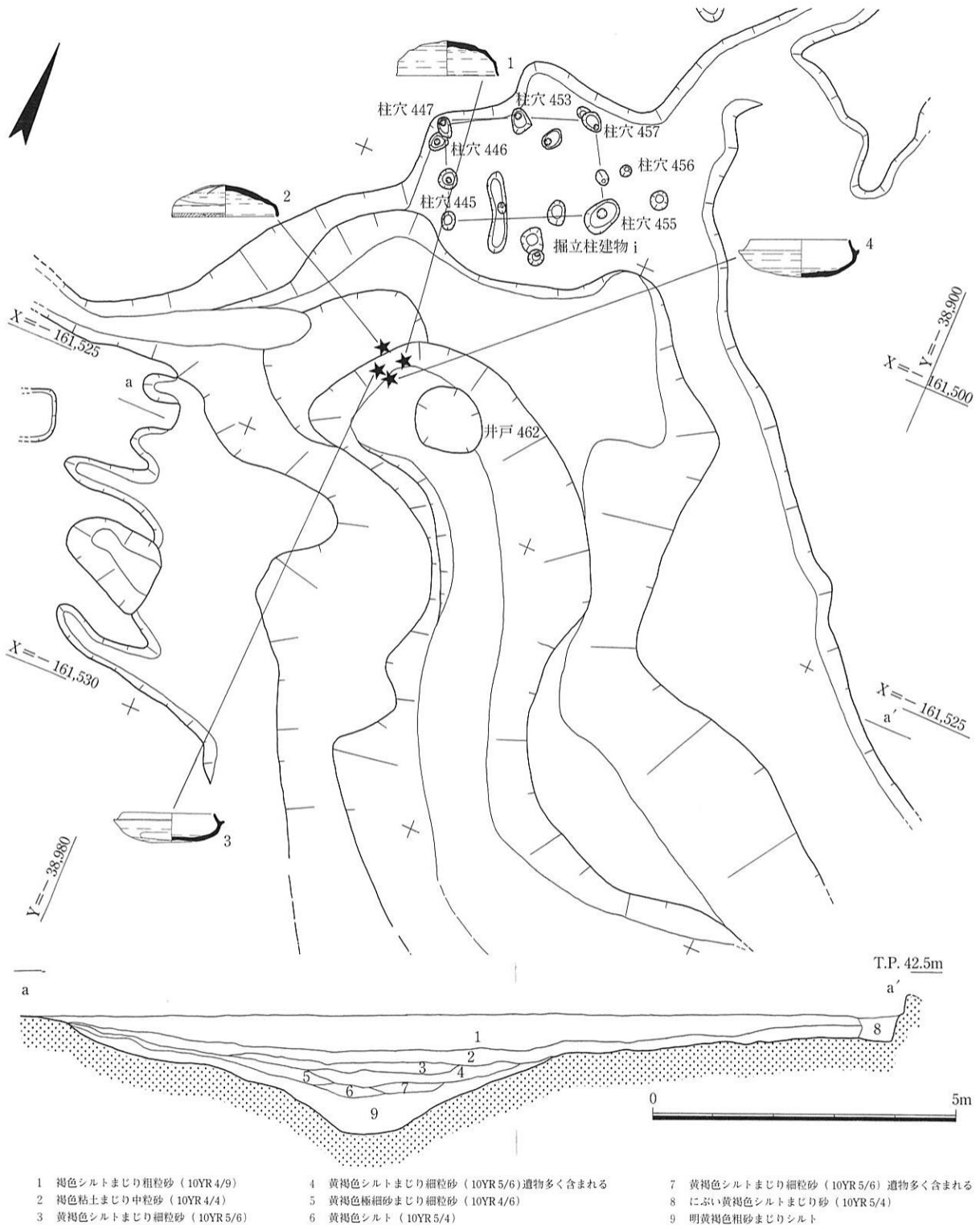


図6.1.7 谷352平・断面図、掘立柱建物跡i平面図 (s=1/100、土器 s=1/8)

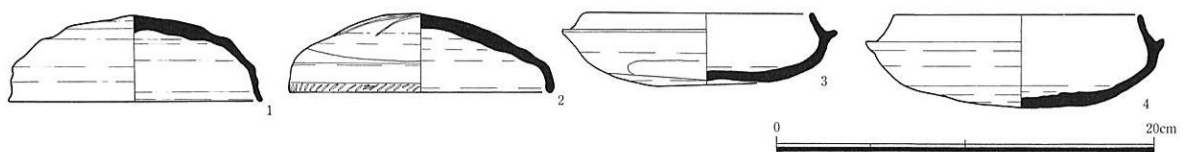


図6.1.8 谷352出土土器

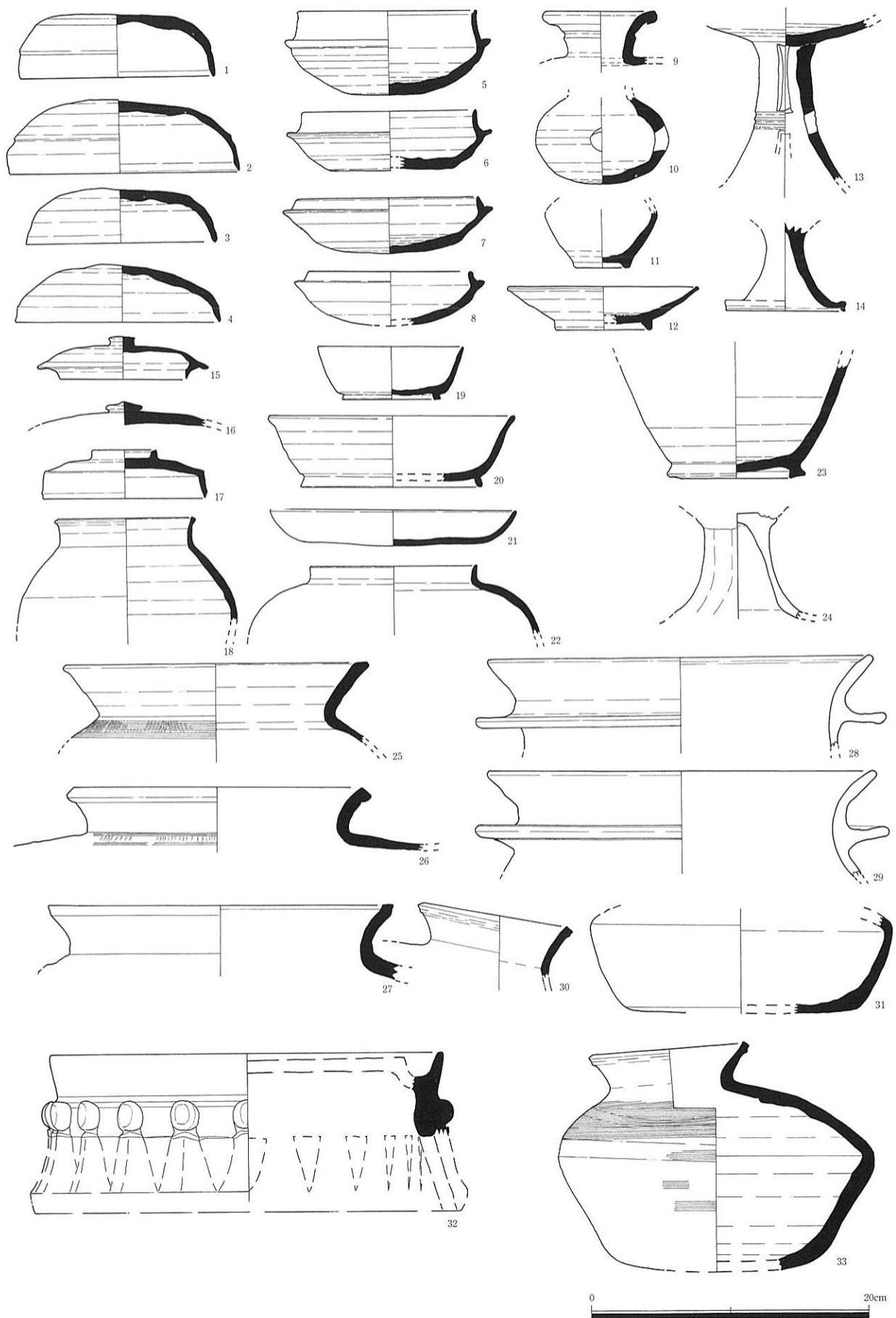


图6.1.9 谷352出土遗物

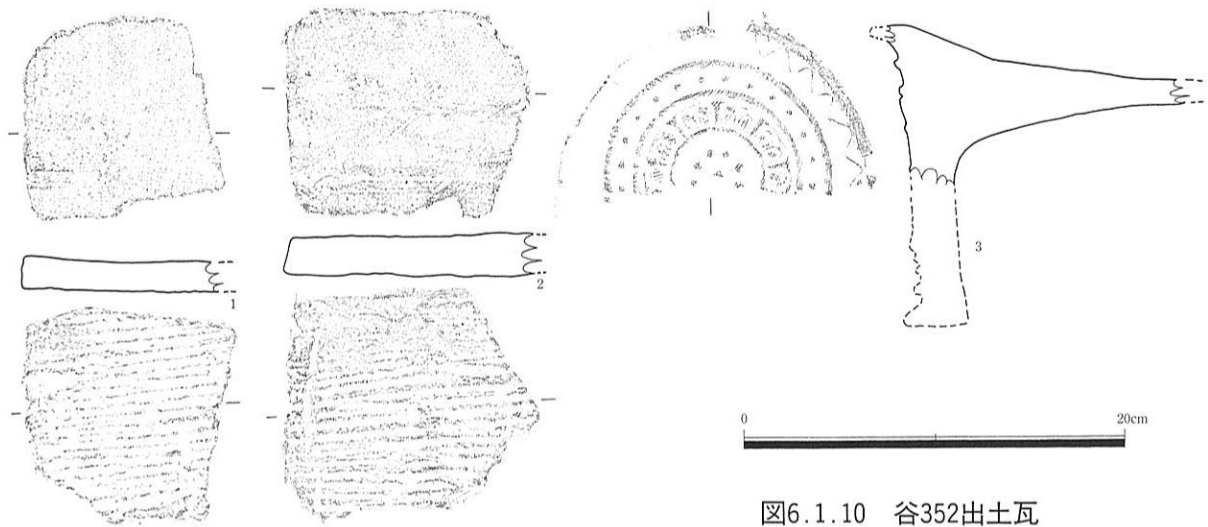


図6.1.10 谷352出土瓦

向で東除川方向に流れる。未調査部分に分断されているが、本溝の西側で検出された谷352から水が流れ込んでいると考えられる。遺物は須恵器、土師器細片が出土しており、古墳時代後期から奈良時代の遺物が含まれる。溝内から中世の遺物は含まれないため、中世には埋没していたと考えられる。本溝の時期は古墳時代後期～奈良時代に位置付けられる。

〔谷352〕（図6.1.7～10）

J10b7～b8、J10c7～c8地区にかけて検出された谷である。規模は、幅1340cm、深さ210cmである。本谷の形状は湧水を集水する挿鉢状で、周辺部の水が集中する状況である。本谷は前述のとおり東側の未調査地区により分断されているが、溝4に流れ込んでいると考えられる。本谷内では須恵器、土師器が置かれた状態で検出されたり、底部分では、奈良時代の井戸である井戸462が検出されている。

出土遺物は、古墳時代後期の遺物と共に飛鳥、奈良時代の須恵器、土師器、平安時代の須恵器、灰釉陶器、瓦器椀、瓦質羽釜など、古墳時代後期から中世までの遺物が含まれ、広い時代幅の遺物が出土している。本谷の変遷を出土遺物から考えると、古墳時代後期から水場として使用され、奈良時代には井戸462が掘削され、廃絶後徐々に堆積、廃棄が繰り返されたと考えられる。埋没は中世と考えられるが、出土している中世の遺物には中世後期以降の陶器、近世の陶磁器は全く含まれないため、本谷の下限は中世前半と考えられる。

谷の西部 K10c8地区では、西側から水が流れ込む状況で礫層が露呈しており礫の上に須恵器坏蓋、坏身が置かれた状態で出土している。6.1.8-1、6.1.8-2は坏蓋である。6.1.8-3、6.1.8-4は坏身である。近接する井戸462が掘削されて使用される以前には集水施設が存在したと考えられる。その時に使用されていた土器と考えられ、完形で出土している。時期は、TK10～TK43型式期に属し、古墳時代後期に位置付けられる。

谷の埋土から出土した遺物は古墳時代後期～平安時代と幅広く出土している。以下、谷の埋土から出土遺物の概要を示す。

6.1.9-1～6.1.9-10、6.1.9-13、6.1.9-25は、古墳時代の遺物である。図示できたのはすべて須恵器である。坏蓋としては、6.1.9-1、6.1.9-2、6.1.9-3、6.1.9-4はTK10～TK209型式に属すると考えられ、古墳時代後期に位置付けられる。

6.1.9-5～6.1.9-8は坏身である。6.1.9-5はTK47型式に属し、古墳時代中期末まで遡るものであ

り、本遺構内では一番古いものである。6.1.9-6はMT15～TK10型式、6.1.9-7、6.1.9-8はTK43～TK209型式に属し、古墳時代後期に位置付けられる。6.1.9-10(TK43型式)は甕である。口縁部から頸部が欠失する。6.1.9-13(TK43～TK209型式)は長脚2段透かしの高坏脚部である。6.1.9-25～27(TK43～TK209型式)は甕口縁部である。

6.1.9-9は提瓶の口縁部と考えられる。6.1.9-15は、長頸壺蓋で返りが高く、扁平なつまみの付くものである。6.1.9-18は須恵器壺で、飛鳥Ⅲ式に属する。6.1.9-23は須恵器壺Lである。6.1.9-23は壺で、形状から飛鳥時代に位置付けられる。6.1.9-30は須恵器平瓶で、口縁部のみの破片である。6.1.9-31は平瓶底部であり飛鳥時代後半の所産と考えられる。底部から体部の破片であり、頸部から口縁部は欠失している。6.1.9-33は、K10b8地区で出土した平瓶で飛鳥時代のものと考えられる。本谷縁辺部の溝内から出土している。口縁部の一部と底部が欠損している。

6.1.9-11(奈良時代)は壺である。6.1.9-15～6.1.9-17は須恵器蓋である。6.1.9-16は奈良時代の坏蓋(平城宮Ⅲ型式)で扁平な宝珠つまみが付く破片である。6.1.9-17は壺A蓋(平城宮Ⅱ～Ⅴ型式)である。6.1.9-19、6.1.9-20は坏B身で平城宮Ⅰ～Ⅱ型式、つまり奈良時代前半の所産と考えられる。6.1.9-21(平城宮Ⅱ)は皿Aである。内外面に火だすき痕がのこる。6.1.9-14は須恵器高坏脚部である。形状から奈良時代に位置付けられる。6.1.9-22は須恵器壺Aで奈良時代前半のものと考えられる。6.1.9-27(平城宮Ⅴ～Ⅵ型式)は須恵器壺で、奈良時代末から平安時代初めに位置付けられる。

6.1.9-24は土師器高坏脚部で奈良時代前半のものと考えられる。6.1.9-28、6.1.9-29は土師器の長胴羽釜である。土器の胎土から生駒西麓産のもので、奈良時代前半に位置付けられる。

6.1.9-32は須恵器蹄脚式円面硯である。奈良時代後半に位置付けられる。

6.1.10-1、2は平瓦である。ともに凸面に粗い縄目タタキ、凹面には布目痕が残る。時期は奈良時代と考えられる。6.1.10-3は複弁形式軒丸瓦で、平城宮6282A型式系に属すと考えられる。時期は奈良時代に位置付けられる。

最下層である明黄褐色粗砂まじりシルト層からはMT15～TK209型式までの古墳時代後期の須恵器とともに飛鳥時代から奈良時代を中心とした遺物が出土しており古墳時代後期には水場として使用されはじめたことがわかる。

〔井戸462〕(図6.1.11～16、写真6.1.3～4)

本遺構は、K10c8地区にて検出された井戸である。長軸116cm、短軸108cm、深さ140cmである。横板を4段重ねて井戸枠としており。側面部分の板は両端に抉り状の加工をして前後の横板を差し込む形で枠を組んでいる。井戸枠は上部の枠が抜き取られた可能性も考えられる。本井戸は谷352の谷部の水脈を利用した井戸であると考えられる。しかし、この状態では降雨時に井戸に泥水が入り込む状況は否めなないことから、井戸上部に何らかの上部構造が存在していたことが考えられる。

遺物は底部分から須恵器壺Q(6.1.12-1)が出土しており平城宮Ⅲ型式に属する。口縁部端を欠くが、釣瓶として使用されていた可能性が考えられる。また、他に斎串2点(6.1.12-3、6.1.12-4)が出土している。6.1.12-3は圭頭部に切り込みが見られ、先端部分を破損している。6.1.12-4は井戸内からの出土である。井戸の埋土から多く出土した木の葉や枝などと伴に出土したもので、下部及び圭頭部が破損している。斎串は井戸の祭祀がおこなわれていたことを物語る遺物である。また、埋土上層から平城宮Ⅳ型式に属する須恵器壺A(6.1.12-2)の口縁部が出土している。本井戸の時期であるが、出土遺物から考えると、奈良時代の遺物のみが出土している。井戸底部分から出土した6.1.12-1は井戸使用



写真6.1.3 井戸462 (最下層の状況)



写真6.1.4 井戸462 (断面)

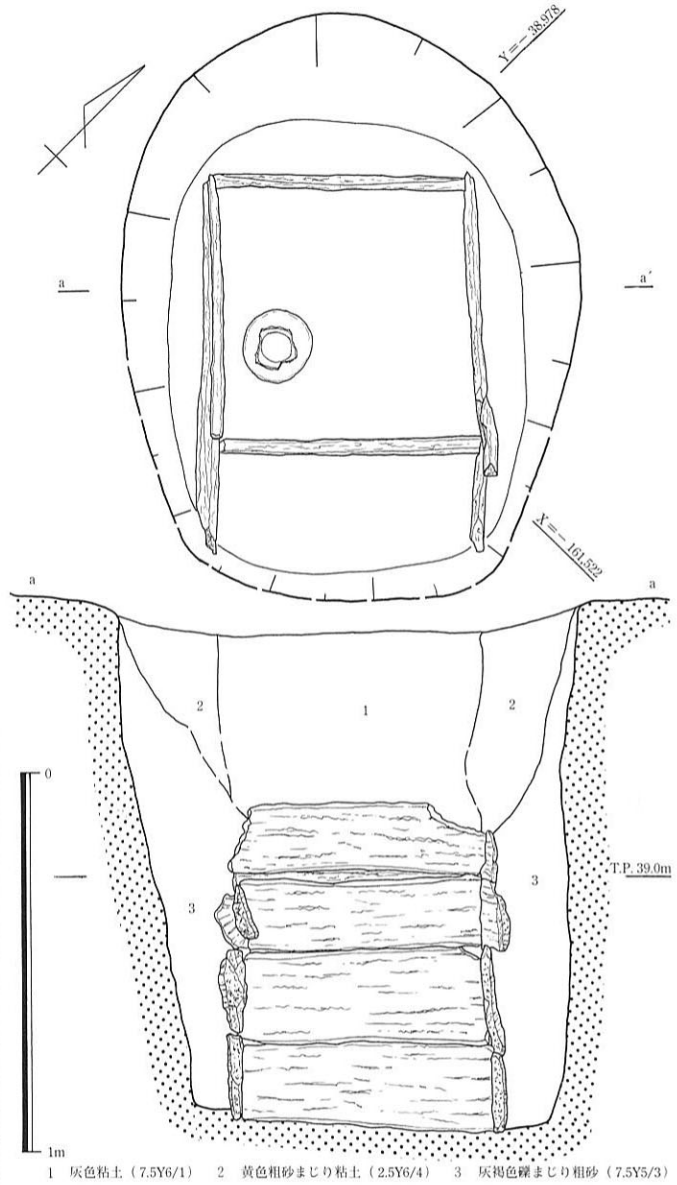


図6.1.11 井戸462平・断面図 (s=1/20)

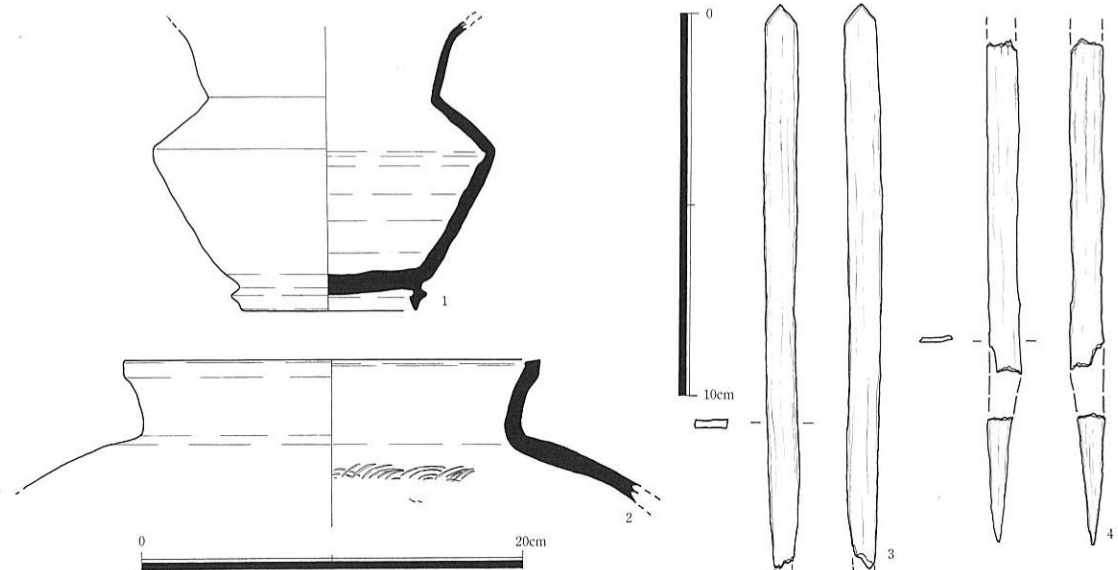


図6.1.12 井戸462出土遺物

時期を表し、奈良時代中期に位置付けることができる。上層埋土出土の6.1.12-2からは井戸の埋没時期である奈良時代後期から平安時代初期の時期に井戸が埋没したことがわかる。

井戸枳材 (図6.1.13~16)

井戸枳材は2種類に分けられる。断面図に対して両側面の部材は長さ80cm~100cm、幅15cm~25cmで、部材両端部には抉り込む加工が施されている。また、前後面の井戸枳は長さ約70cm、幅約20cmで長方形の板材である。井戸枳は4段が残存している。井戸枳の構造は、側面部分の部材が、この抉り込みに前後の部材を上方からさし込む形で造られている。側面部材と前後の部材を組み、掘り方部分に裏込を行って枳を安定したものとし、またその上部に同様の順序で枳材の設置が行われている。以下、井戸枳の各部材について説明する。なお部材の使用箇所は井戸枳の断面図に対して前面、後面、左側面、右側面とし、下段から何段目ということの説明する。

6.1.13-1は前面2段目に使用された長方形の板材で、樹種はコナラ属コナラ節ブナ科の落葉紅葉樹でミズナラまたはコナラである。板材は平坦面を井戸枳内側に使用されたと考えられる。木の中心側を板材の平坦面としており、板材に加工する際、縦割り時にこの平坦面がつくられている。6.1.13-2は前面1段目に使用された長方形の板材で、樹種はミズナラまたはコナラである。板材平坦面には、工具痕が見られる。6.1.13-3は前面3段目に使用された長方形の板材で、樹種はミズナラまたはコナラである。平坦面に工具痕が見られるが、腐朽により板材に割れと欠損部分がある。6.1.13-4は後面4段目に使用された長方形の板材で、樹種はミズナラまたはコナラである。腐朽による欠損部分があり、そのため、長さも70cm未満となっている。6.1.14-1は右側面2段目に使用された両端部に抉りの入った板材である。板材の厚さは3cmで使用された板材の中では一番薄いもので、抉りを入れた部分では1cm程度の厚さとなる。抉り部分には、加工痕が残る。6.1.14-2は後面3段目に使用された長方形の板材で、樹種はミズナラまたはコナラである。板材側面部分に樹皮が残る。6.1.14-3は後面2段目に使用された長方形の板材で、樹種はミズナラまたはコナラである。井戸枳外面側は樹皮がついた状態である。井戸枳に使用するために、丸太を分割した後にすぐに井戸枳として使用されたと考えられ建築部材の転用品ではない。6.1.14-4は後面1段目に使用された長方形の板材で、樹種はミズナラまたはコナラである。6.1.15-1は、左側面1段目に使用された両端部に抉り入りの板材で、樹種はミズナラまたはコナラである。6.1.15-2は右側面2段目に使用された両端部に抉り入りの板材で、樹種はミズナラまたはコナラである。6.1.16-1は左側面2段目に使用された抉り入りの板材である。抉り部分に加工痕が見られるほか、外側部分は樹皮がついたままで一部に加工痕が見られるが、木材切りだし時の斧の痕跡である可能性もある。6.1.16-2は右側面1段目に使用された両端部に抉り入りの板材で、樹種はミズナラまたはコナラである。抉り部分に加工痕が見られるほか、外側部分は樹皮が残存している。

井戸枳材に使用された木の種類は、すべてコナラ属コナラ節ブナ科のミズナラもしくはコナラと考えられる。落葉紅葉樹で高さ15m 直径60cm に達し得る高木であり、井戸枳は1本の木から作られた可能性が高いといえる。もしくは、建築用の板の残り部分を使用したと考えられ、そのため、樹皮の残る外皮に近い部分も加工して、使用されているのではないだろうか。

掘立柱建物

〔掘立柱建物 i〕 (図6.1.7)

本遺構は K10b8~c8地区にかけて検出された掘立柱建物である。東西2間(250cm)×南北2間(150

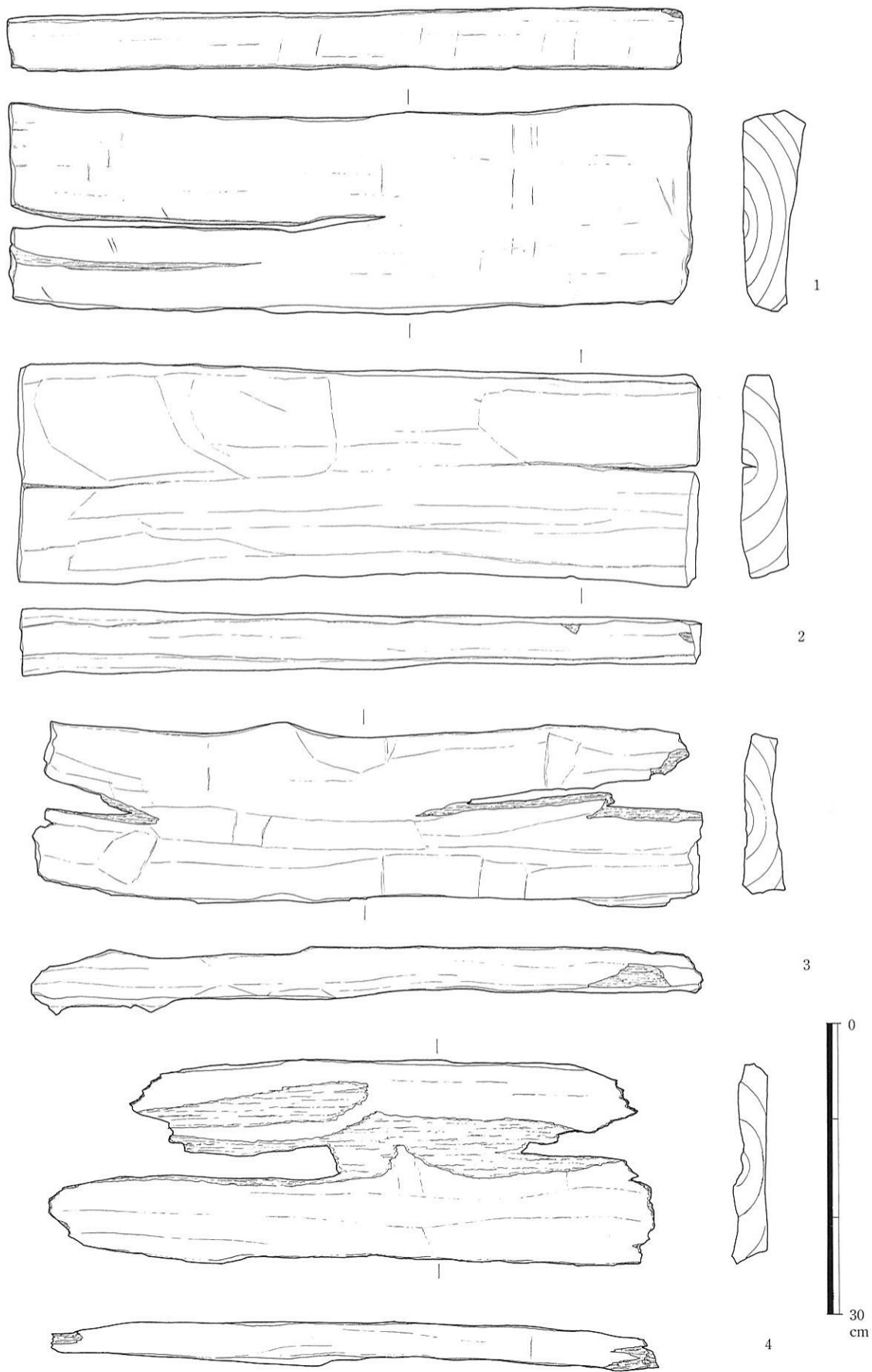


图6.1.13 井戸462井戸枠部材 (1) (s=1/6)

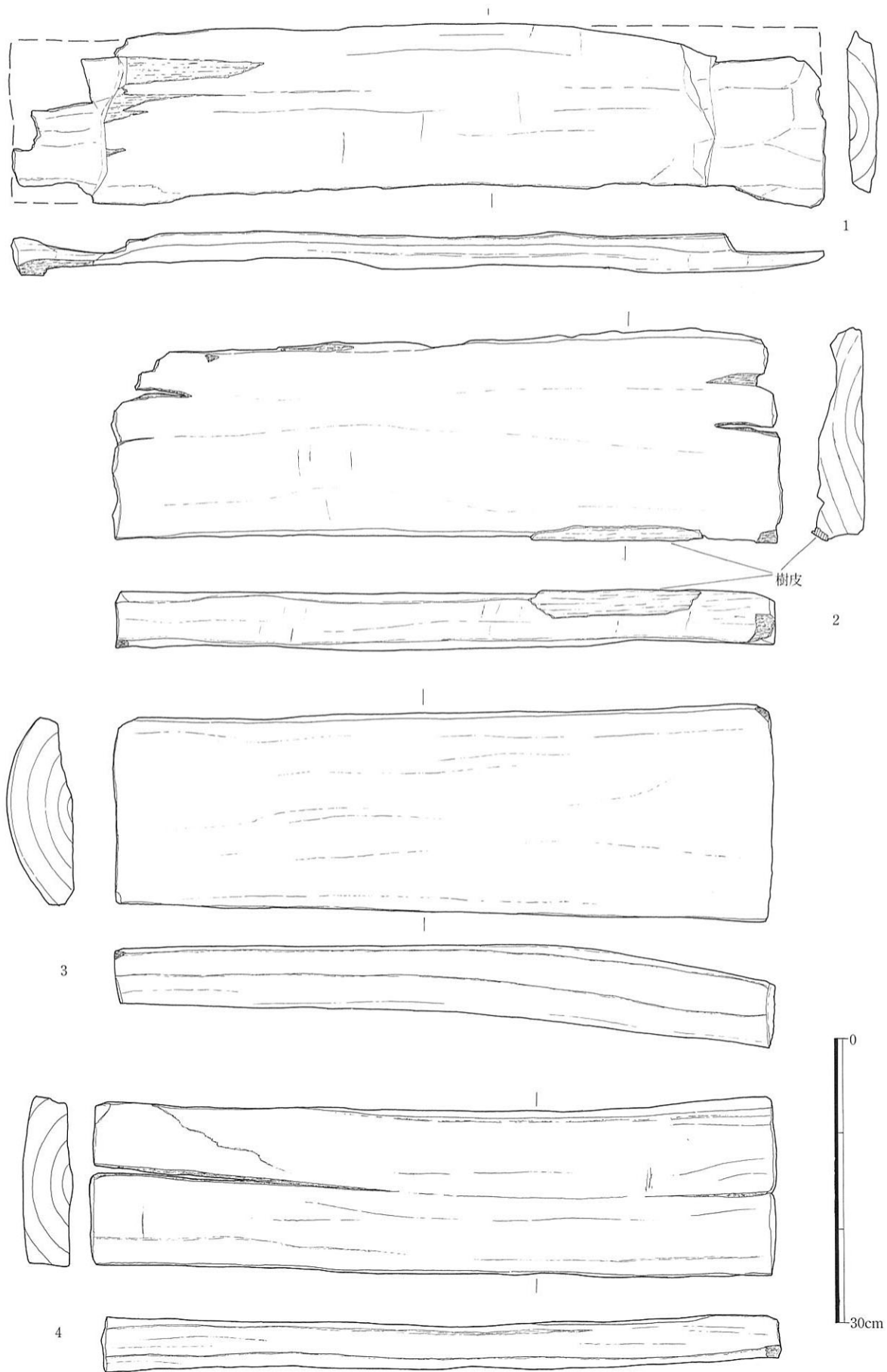


图6.1.14 井戸462井戸粹部材 (2) (s=1/6)

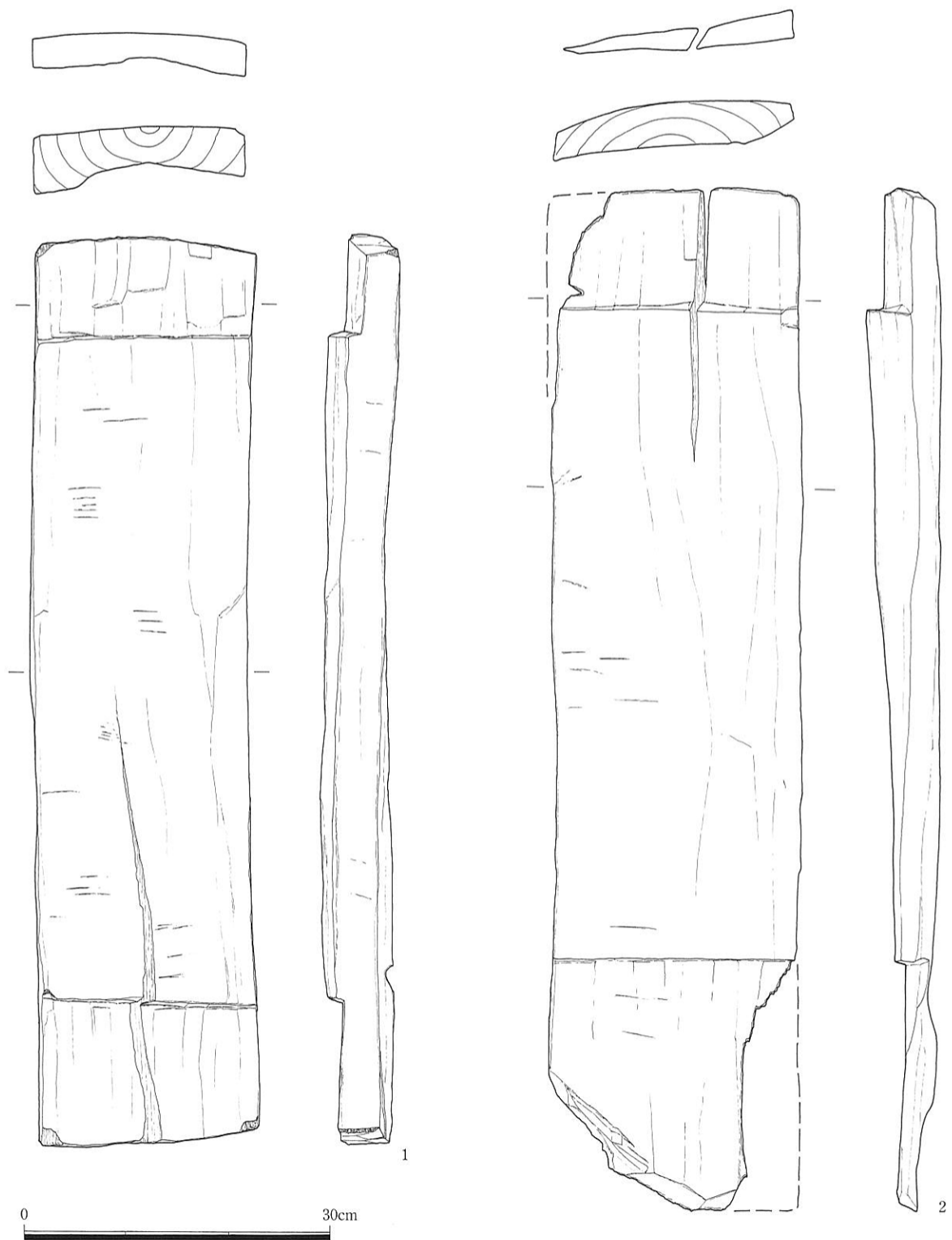


图6.1.15 井戸462井戸枠部材 (3) (s=1/6)

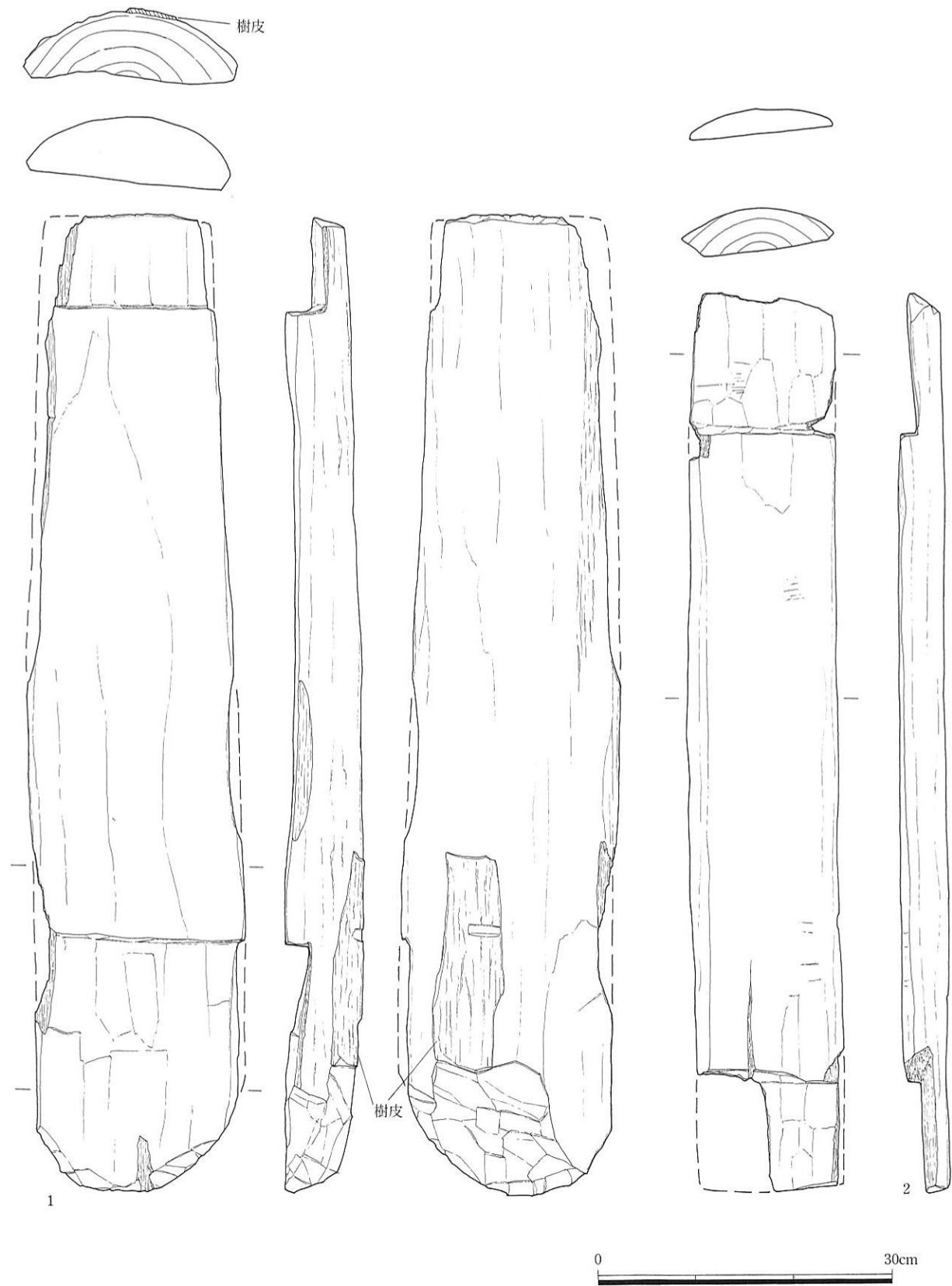


图6.1.16 井戸462井戸梓部材 (4) (s=1/6)

cm)の小規模の掘立柱建物である。柱間は東西方向が120cm～130cm、南北方向が70cm～80cmで、埋土はいずれの柱穴も10YR4/4褐色シルトまじり細砂である。水汲み場に伴う小規模建物として位置付けることができる。出土遺物は少量であり時期の特定は困難であるが、中世以後の遺物は出土していない。谷に流れ込むとみられる近接した溝状の凹み部分からは奈良時代の平瓶が出土しており、本遺構も奈良時代の建物と考えたい。

〔掘立柱建物 q〕 (図6.1.17)

本遺構は K10a7～a8地区にかけて検出された掘立柱建物である。東西2間(340cm)×南北2間(360cm)の建物で、主軸方向はほぼ北北西-南南東方向である。柱間約180cmで、柱穴の深さは8cm～35cmで、埋土は黒褐色中粒砂まじりシルト(10YR2/2)である。遺物は建物構成する柱穴から少量出土している。土師器を中心とし、須恵器、瓦片が出土している。本建物の時期は出土遺物から奈良時代に位置付けられる。本建物から約80cm北にずれて東西2間(380cm)×南北2間(380cm)の総柱建物に建替えが行なわれている。主軸方向はほぼ南北方向で、やや東に建物の方向が変わる。柱間約190cm、柱穴の深さ20cm～30cmで、埋土は褐色中粒砂まじりシルトである。遺物は土師器、須恵器が出土しており、出土遺物から建替えられた建物の時期も奈良時代と考えられる。

〔掘立柱建物 p〕 (図6.1.18、図6.1.20、写真6.1.5)

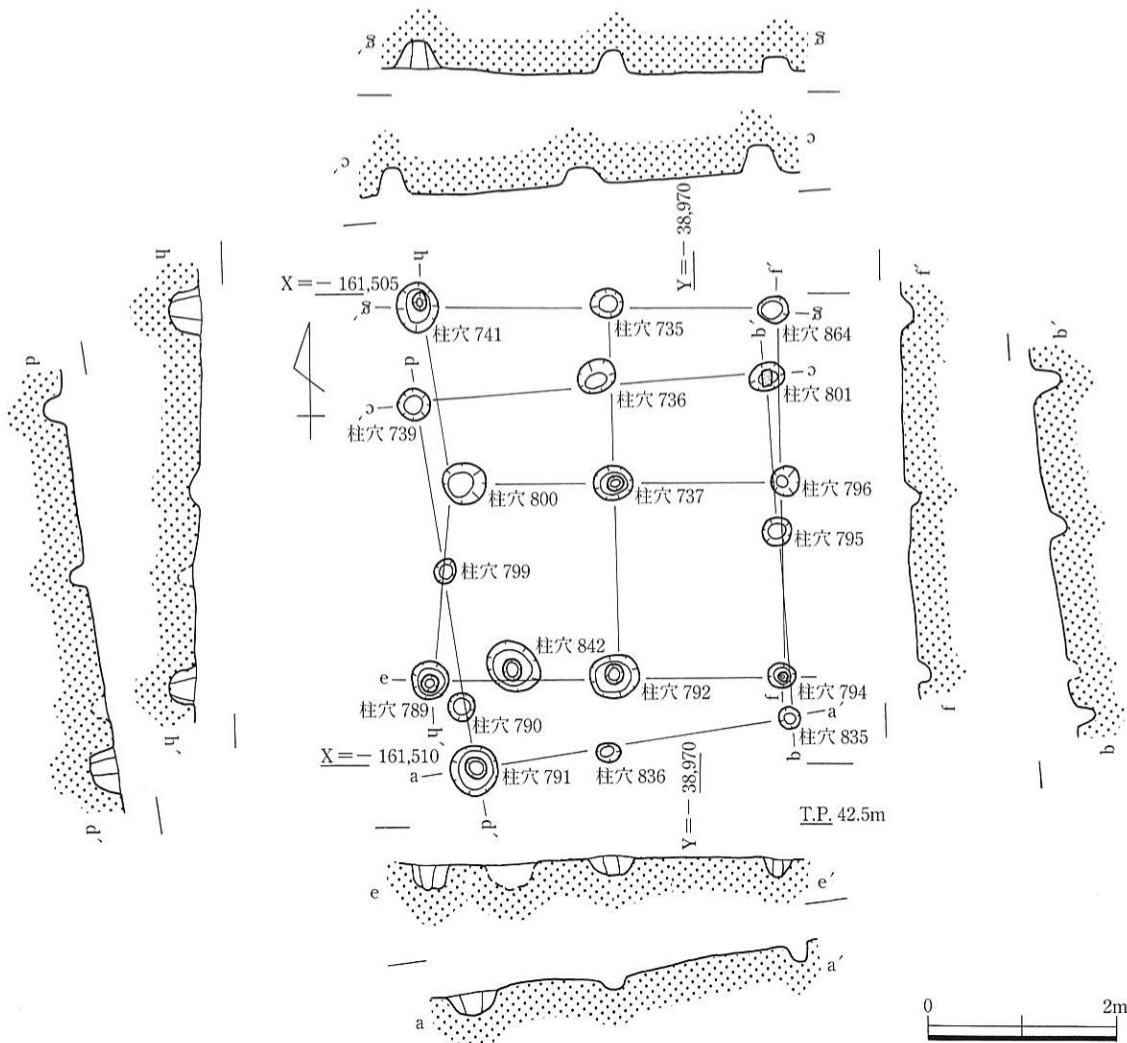


図6.1.17 掘立柱建物跡 q 平・断面図 (s=1/80)

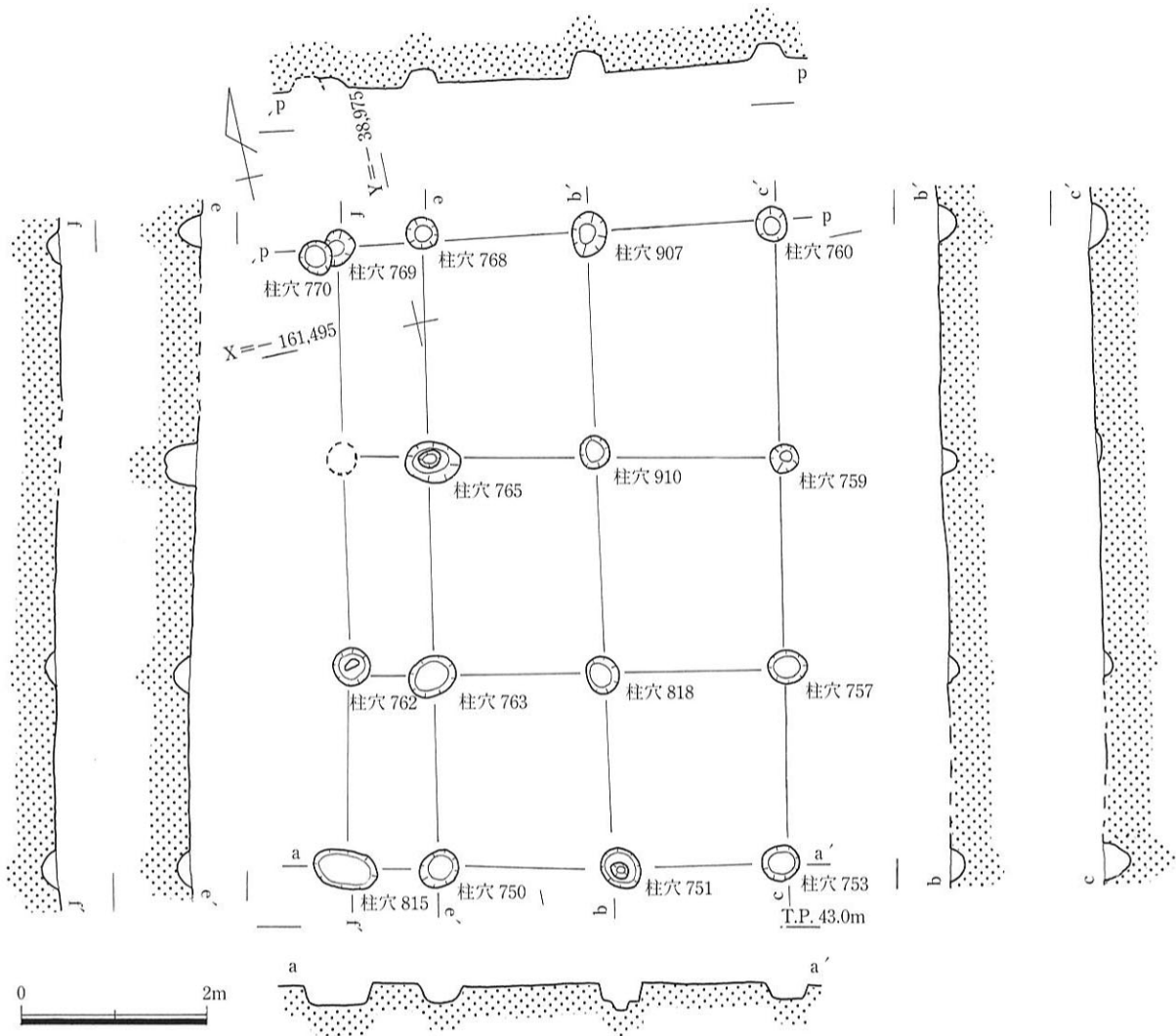


图6.1.18 掘立柱建物跡 p 平・断面図 (s=1/80)

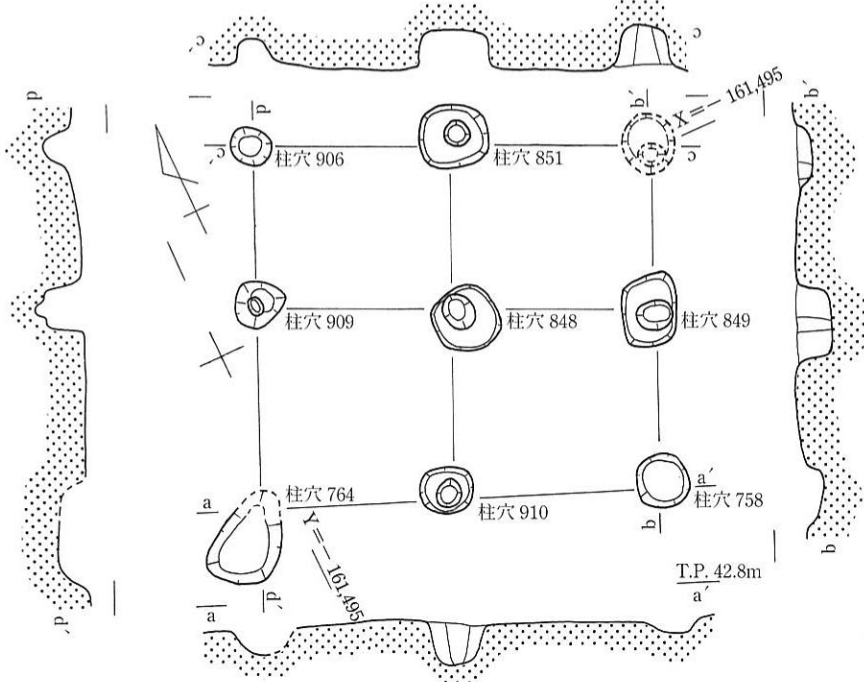


图6.1.19 掘立柱建物跡 r 平・断面図 (s=1/80)



写真6.1.5 柱穴757

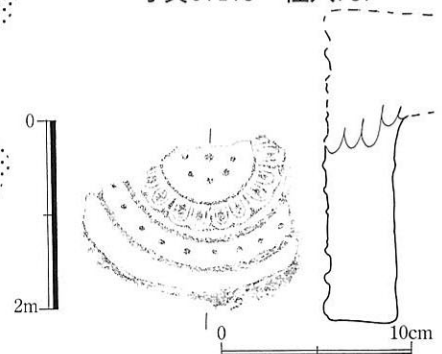


图6.1.20 柱穴757出土瓦

本遺構は K10a8地区にて検出された掘立柱建物である。東西 2 間 (380cm) × 南北 3 間 (700cm) の建物で、主軸方向は北北西—南南東方向である。総柱構造となり、床をもつ可能性が高く、西側に廂付きの建物である。柱間は180cm~210cm で、柱穴の深さは 8 cm~20cm で、埋土は褐色中粒砂まじりシルト (10YR4/4) である。建物を構成する柱穴757からは根石として使用された軒丸瓦 (図6.1.20-1) が出土している。瓦当面の約半分が破損により失われている。平城宮6282a 型式系丹比廃寺出土の軒丸瓦と同範である。柱穴からの出土遺物は少量であるが、出土瓦の年代から考えれば奈良時代の建物と考えられる。
〔掘立柱建物 r〕 (図6.1.19)

本遺構は J10j8地区で検出された掘立柱建物である。東西 2 間 (440cm) × 南北 2 間 (380cm) の総柱建物で、主軸方向は北西—南東方向である。柱間約220cm、柱穴の深さ10cm~40cm で、埋土は褐色中粒砂まじりシルト (10YR4/6) である。遺物は土師器、須恵器の細片で時期決定は難しい状況である。本建物の時期を柱穴の規模から考えれば、建物 p、q の柱穴の規模が直径が20cm~60cm と規模にバラツキがあるものの平均的には40cm 程度であるのに対し、本建物の柱穴は、直径が40cm~80cm で、明らかに規模の違いが見られる。建物として確認できなかった柱穴の中にも同規模の柱穴があり、それらの柱穴からは、TK43~MT85型式に位置付けられる遺物が出土しており古墳時代後期の建物が存在していたことを示している。この点から考えれば、本建物は古墳時代後期に位置付けることができる。

〔溝832〕 (図6.1.21~22)

本遺構は J10i8地区にて検出された溝である。幅270cm、深さ62cm で埋土は大きく上層、下層の 2 層に分けられる。

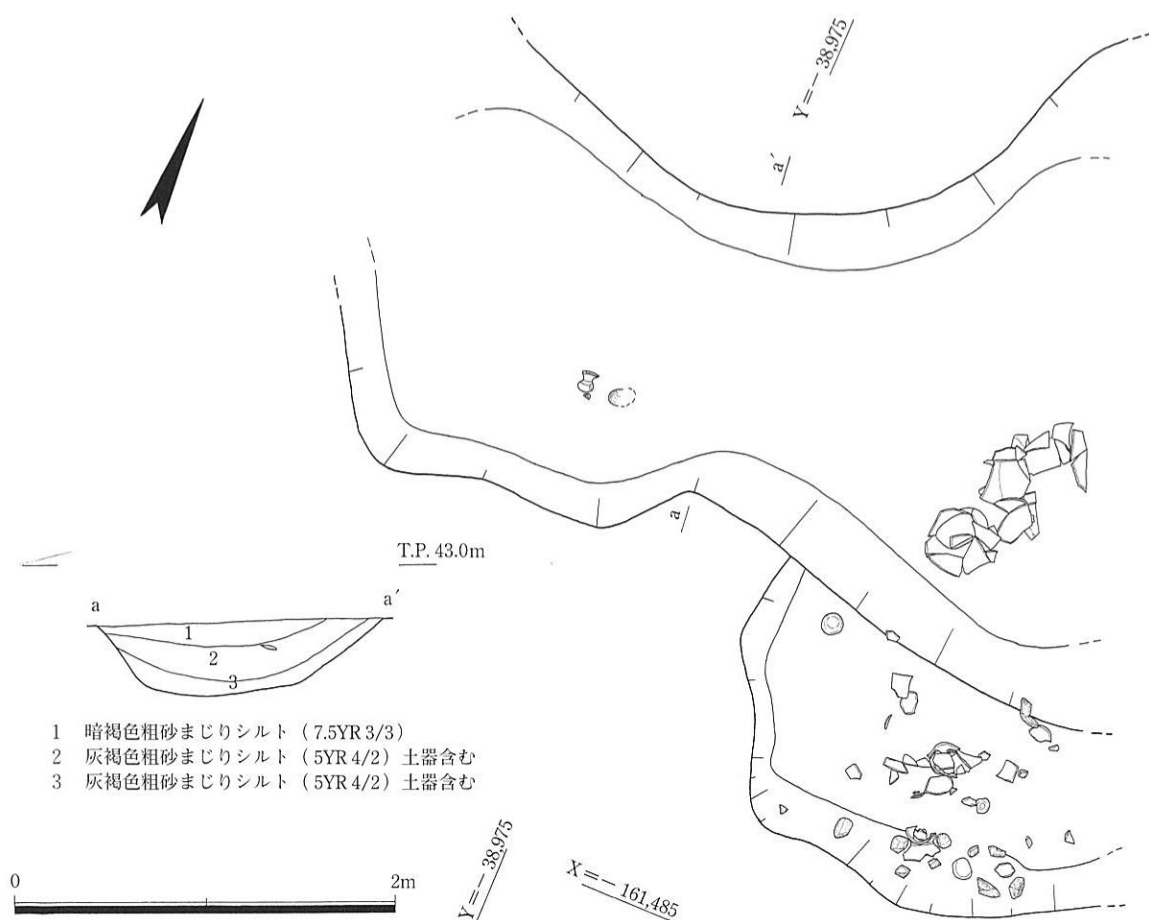


図6.1.21 溝832平・断面図 (s=1/40)



图6.1.22 溝832出土遺物

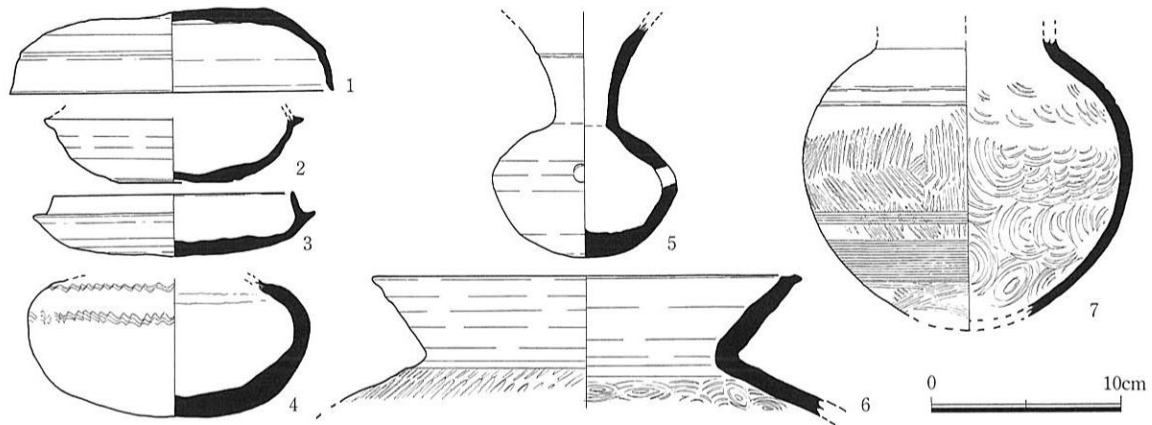


図6.1.23 B地区南半段丘上部出土土器

遺物は、下層から土師器、須恵器、子持ち勾玉 (6.1.22-1) が出土している。6.1.22-3～5は土師器高坏である。6.1.22-3は坏部と脚部の接合部、6.1.22-4、6.1.22-5は脚部である。時期はともに古墳時代後期から飛鳥時代初めである。6.1.22-8はTK43～TK209型式に属する須恵器坏身である。6.1.22-6は須恵器器台で、古墳時代後期に位置付けられる。6.1.22-7は横瓶で、古墳時代後期のものである。口縁部から頸部が欠失している。6.1.22-9は罎で、TK10～TK209型式に属する。口縁部が欠損しており、外面にタタキが施される。6.1.22-10、6.1.22-12は壺である。6.1.22-10は外面肩部分にヘラ記号が施される。6.1.22-12は外面タタキ後にカキ目が施され、さらに底部付近に刷毛目調整が施される。6.1.22-1は滑石製の子持ち勾玉である。本体の腹部に1個、両脇腹・背部には3個、計10個の子勾玉が作り出される。時期は古墳時代後期と考えられる。

上層からは、土師器、須恵器が出土している。6.1.22-11は須恵器壺K底部である。TK217～飛鳥I型式に属する。6.1.22-2は土師器碗Cである。外面にミガキ調整が施される。時期は奈良時代に位置付けられる。

本溝の時期は、下層に古墳時代後期、上層に飛鳥～奈良時代の遺物が含まれることから、古墳時代後期から奈良時代に位置付けることができる。掘削時期は古墳時代後期と考えられ、飛鳥時代から奈良時代にかけて埋没したと考えられる。

その他遺構、包含層からの出土遺物 (図6.2.23・24)

図6.1.23・24に示したものはB地区南半段丘上部出土のその他の遺物である。出土土器を概観すれば、古墳時代後期から奈良時代までの須恵器を中心としており、古墳時代後期のものと奈良時代のものが多く出土しており遺構形式もこの2時期を中心とすると考えて良い。6.1.23-6、6.1.23-7はJ10i8地区の溝866出土である。6.1.23-6は飛鳥時代～奈良時代に位置付けられる須恵器大甕、6.1.23-7は古墳時代後期に位置付けられる須恵器壺である。6.1.23-2はJ10j8地区にて検出された柱穴764出土の須恵器坏身である。口縁端部が欠失しているが、TK10～TK43型式に属すると考えられる。6.1.23-3はJ10j8地区にて検出された柱穴824柱根部上面から出土した須恵器坏身である。MT85型式に属しており、古墳時代後期に位置付けられる。6.1.23-1はJ10j8～j7地区にて検出された土坑850出土の須恵器坏蓋である。TK10～MT85型式に属すると考えられる。6.1.23-4、6.1.23-5は包含層出土の須恵器である。6.1.23-4は須恵器壺である。3条の条線を単位とする波状文が肩部と胴部に施文されている。焼成が悪く軟質である。本遺物の時期は奈良時代と考えたい。6.1.23-5は須恵器罎で、口縁部が破損している。本遺

物は飛鳥Ⅰ～Ⅱ型式に属し、飛鳥時代に位置付けられる。(以上、三浦)

図6.1.24に掲載した遺物は、すべてサヌカイト製の石器・剥片である。6.1.24-1は、柱穴1237から出土した小型の凹基式石鏃である。基部の端部が一部欠損しているが長さ2.5cm、推定幅約1.7cm、最大厚0.3cmの大きさである。細かな調整剥離によって、両側縁が鋸歯状に仕上げられている。形態・大きさから縄文時代の所産と想定され、飛鳥～奈良時代の柱穴埋土に混入したものと考えられる。

6.1.24-2・3はいずれもナイフ形石器である。横長剥片の一侧縁に細かな調整剥離を施すことによって背部を作り出している。6.1.24-2は溝861から出土しており、長さ5.8cm、最大幅1.7cm、最大厚0.7cmの大きさで、平面形態が基部の尖った柳葉形を呈している。6.1.24-3は、谷352から出土しており、長さ6.6cm、最大幅1.7cm、最大厚0.7cmの大きさである。基部には長軸に直交する角度に自然面が残存している。

6.1.24-4は溝861から出土しており、背面に残る剥離面からは、横長剥片を採取した痕跡がうかがわれる。おそらくナイフ形石器などのための横長剥片を連続的に獲得した後の石核で、最終段階の残核と思われる。長さ7.4cm、最大幅2.1cm、最大厚1.2cmの大きさで、腹面の一部には自然面が残存している。

6.1.24-5は溝861から出土しており、長さ5.8cm、最大幅1.7cm、最大厚0.7cmの大きさの横長剥片である。背面には大きく自然面を残し、打点が自然面に形成されていることから、剥片を獲得する過程で原礫から最初に剥離された剥片と考えられる。背面に残る剥離面は、最初の剥離で大きな剥片をとることに失敗した痕跡か、あるいは原礫の質を確認するための試し割りの痕跡かもしれない。

6.1.24-6は溝861から出土しており、長さ9.2cm、最大幅5.6cm、最大厚2.5cmの大きさの縦長剥片である。打面には自然面が残存している。ただし、背面に残る剥離面はすべて横長剥片を採取した痕跡である。おそらく、横長剥片を連続的に採取していた石核に対し、再度縦方向に打撃を加えて剥片を採取したと思われる。ただし、剥片採取後に調製剥離などを行って製品に仕上げた痕跡はみられない。

6.1.24-2～6のうち、2・3はその型式から間違いなく旧石器時代の所産と考えられる。それ以外の剥片・石核についても、ナイフ形石器の素材となる横長剥片を連続的に採取しようとした痕跡が伺われ、すべて旧石器時代の所産と考えたい。ただ、明確な瀬戸内技法を示す剥片がみられないため、瀬戸内技法が退化・省略傾向にある段階での石器製作に伴うものと想定できる。年代としては、ナイフ形石器の存在している時期の後半段階の製作年代が推定できる。

ただし、これらの石器・剥片・石核類は中位段丘を構成する基盤層ではなく、溝861・谷352といった、段丘斜面に形成された自然流路から出土している。このことから、これらの遺物は段丘を形成する基盤層からの崩落物が二次堆積したものと考えられる。このような遺物の存在から、当遺跡の段丘上部の土層に旧石器時代の石器製作跡が存在する可能性も想定できる。ただ、今回の調査区域内でも一部段丘層を掘り込んで調査を行った部分もあったが、それによって旧石器時代の遺物が検出されることはなかった。今後、周囲の調査の際には留意する必要があるだろう。(以上、若林)

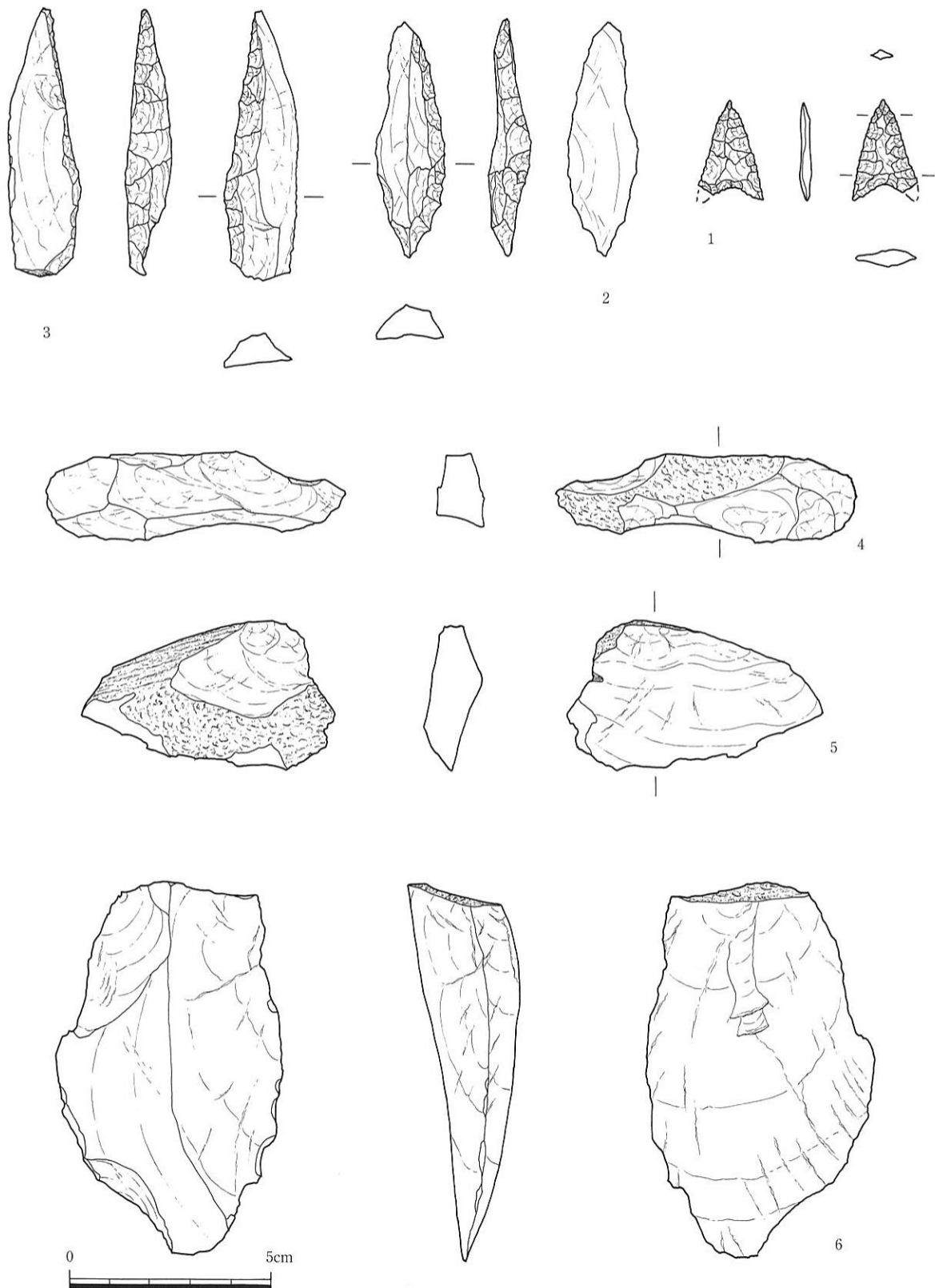


图6.1.24 B地区南半出土石器 (s=2/3)

第2節 B地区北半の遺構・遺物

B地区の北半は、中位段丘の上部の平坦面に相当する。そのため、竪穴住居跡や掘立柱建物跡など多数の生活遺構が検出されている。多数検出された柱穴からは土器が細片でしか出土せず、大半の遺構の時期確定は困難である。ただ、B地区北半部の包含層からは、古墳時代後期～飛鳥時代の土器片しか出土していない。このため、おそらく大半の遺構は、古墳時代後期～飛鳥時代に形成されたものと考えられる。ただ、一部には、近世の井戸なども検出している。ここでは、近世以後の遺構については記述を割愛し、中世以前の遺構のみを説明したい。ただし、建物を構成するものとして認識できなかった柱穴や全く所属時期の明確でない遺構については、遺構一覧表に記載するにとどめた。

溝・土坑

〔溝659〕(図6.2.1)

J11c3～b3地区にかけて検出された南北方向の溝である。検出面での最大幅は224cm・深さは32cmであるが、南端部では幅80cm程度と細くなっている。検出幅が100cmを越える部分では、溝上半部が平坦面をもって拡張する断面形態となり、下半部の溝幅が約70cm程度である。おそらく、全体にわたって同様な形状であったが、削平などにより南半部については溝上半部が破壊されたものと考えられる。出土土器としては須恵器片・土師器細片が検出され、中世以降の遺物は含まれていない。遺構内下半部と溝肩部にはにぶい黄褐色細粒砂まじりシルト、上半部中央には明黄褐色粗粒砂まじりシルトが堆積していた。埋土の特徴が周囲の古墳時代後期～古代の遺構のものと同質であることや、中世以降の土器片を含まないことから、古墳時代後期～古代の遺構と考えたい。

〔溝708〕(図6.2.1)

J11a1～a2地区にかけて検出された東西方向の溝である。検出面での最大幅は162cm・深さは28cmである。西端については下半部が小さく段をもって落ち込む断面形状となる。出土土器には須恵器・土師器小片があり、中世以降の遺物は含まれていない。遺構内には、溝肩部ににぶい黄褐色極細粒砂まじりシルト、溝中央から上部ににぶい黄褐色細粒砂まじりシルトが堆積していた。規模・形状・埋土ともに溝659に類似しており、出土土器から古墳時代後期～古代に掘削されたと考えられる。両溝は、その方向がほぼ直行していることや、その南東部にのみ古墳時代後期～飛鳥時代の建物・住居群がみられることから、この時期の集落の北部を限る方形の区画を形成していた可能性がある。

〔土坑325〕(図6.2.2～3)

J10h9～g9地区にかけて検出された平面不整楕円形の土坑である。調査区端部で検出されたため全掘できなかったが、長軸410cm・短軸推定約300cm・深さ16cmの規模である。埋土中層から底面にかけて

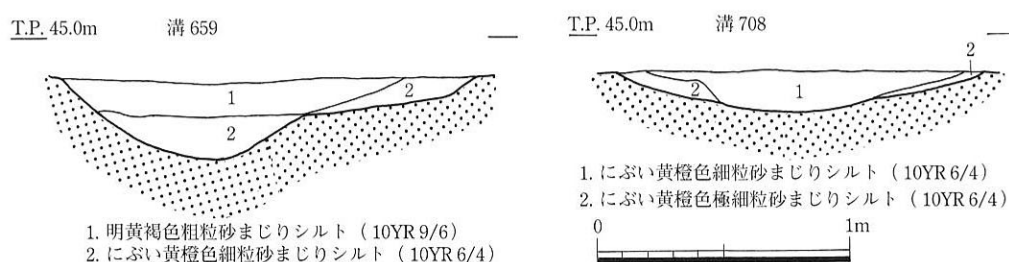


図6.2.1 溝659・溝708土層断面図 (s=1/30)

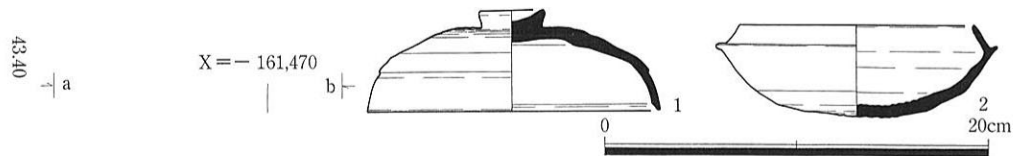


図6.2.3 土坑325出土土器

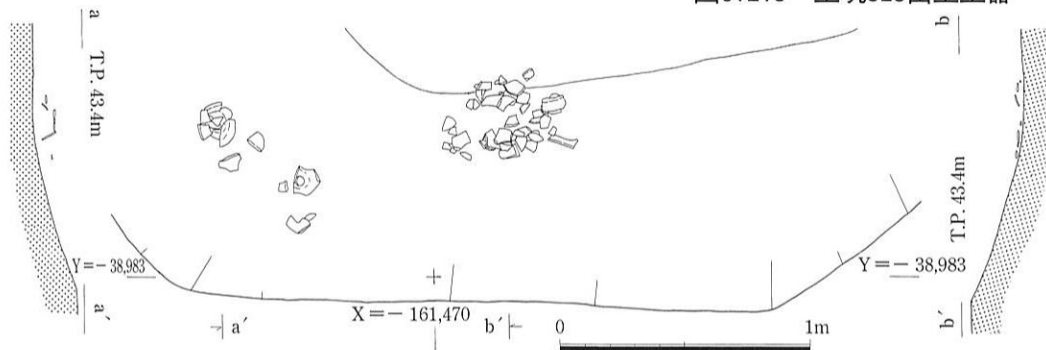


図6.2.2 土坑325土器出土状況 (s=1/30)

須恵器片が出土した。いずれも破片の状態で検出されたが、土坑底面の中央部分と土坑側面の北半部と2ヶ所に分かれる出土状態であった。この須恵器片のうち接合後図化可能だったのは2点(6.2.3-1, 2)である。6.2.3-1は有蓋高坏の蓋、6.2.3-2は杯身でいずれも色調は明灰色で焼成は良好である。2点ともに、TK10型式に相当すると考えられる。古墳時代後期の集落内廃棄場であったと類推できよう。

竪穴住居跡

竪穴住居跡204 (図6.2.5～7・写真6.2.1, 2)

J10f10～g10地区で検出された長方形の竪穴住居跡である。壁溝の長辺が約530cm、短辺が約480cmの規模で、長軸が北北東-南南西方向である。壁溝の外側に、検出面から深さ5cm程度、幅15～60cm程度の平坦面が形成されている。この平坦面については住居の拡張に伴ったものではなく、長方形の浅い落ち込みを作った内部に壁溝を掘り込んで住居を建築したと考えたい。この竪穴住居跡に伴う柱穴は柱穴396, 388, 389, 398の4基と考えられる。

壁溝の内側の領域には、基盤層の黄色粘土ブロックを多量に含む土壌が厚さ3～10cm程度堆積している。おそらく、この土層は壁溝およびその内側を掘りあげた土を固めて形成されたと考えられ、床面を整形する目的で人為的に堆積したと類推できる。実際に、柱穴396, 388, 389, 398はすべてこの土層を掘り込んでいる。この床面整地土層は、竪穴住居跡の西端に近づくほど堆積が厚い。これは、地盤自身が西側へ傾斜しているために、地表面にほぼ平行に掘削を行った後に、整地土を用いて床面を水平に仕上げたことから生じていると考えられよう。また、この土層の直上面には、壁溝北辺～中央部にかけて焼土が広い範囲で検出された。焼土は住居廃絶時に竈部を破壊したことによって床面に散らばったと考えられる。焼土分布の中心は北壁中央付近であるから、竈もその部分に形成されていた可能性が高い。

また、床面直上層から出土した土器のうちの1点(6.2.7-3)は、柱穴398の埋土直上から出土している。これも、焼土同様に竪穴住居廃絶直後に廃棄されたものであろう。その他に、床面直上層では、壁溝南西部で出土した須恵器杯蓋(6.2.7-1, 2)はTK43～TK209型式に属する。このことから、当遺構は6世紀末～7世紀初頭に廃棄されたと考えられる。加えて、壁溝外側の長方形落ち込みが竪穴住居跡284によって破壊されていることから、竪穴住居跡284に先行して使用・廃絶したものと思われる。おそらく、竪穴住居跡204から竪穴住居跡284へと位置をずらしながら建替えが行われたと考えられる。

表6.2.1 B地区北半検出遺構一覧表(1)

遺構	トレンチ	地区	長軸長(cm)	幅or短軸長(cm)	深さ(cm)	埋土色・質	時期	備考	
井戸	14	2B	J10f10	174	166	142	2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂	近世	
柱穴	15	2B	J11h1	86	78	24	柱底:10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR5/4黄褐色中粒砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期～飛鳥時代	掘立柱建物 a
柱穴	16	2B	J11h1	74	60	26	柱底:10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR5/4黄褐色中粒砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期～飛鳥時代	掘立柱建物 a
柱穴	17	2B	J11h1	88	68	19	柱底:10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR5/4黄褐色中粒砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期～飛鳥時代	掘立柱建物 a
柱穴	18	2B	J11h1	74	66	23	柱底:10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR5/4黄褐色中粒砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期～飛鳥時代	掘立柱建物 a
柱穴	19	2B	J11h1	65	60	28	柱底:10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR5/4黄褐色中粒砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期～飛鳥時代	掘立柱建物 a
柱穴	20	2B	J11h1	60	50	23	柱底:10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR5/4黄褐色中粒砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期～飛鳥時代	掘立柱建物 a
柱穴	21	2B	J11h1	68	60	30	柱底:10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR5/4黄褐色中粒砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期～飛鳥時代	掘立柱建物 a
柱穴	22	2B	J11h1	64	48	18	柱底:10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR5/4黄褐色中粒砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期～飛鳥時代	掘立柱建物 a
柱穴	23	2B	J11h1	54	48	31	柱底:10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR5/4黄褐色中粒砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期～飛鳥時代	掘立柱建物 a
柱穴	24	2B	J11h1	58	50	22	柱底:10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR5/4黄褐色中粒砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期～飛鳥時代	掘立柱建物 a
柱穴	25	2B	J11h1	74	52	22	柱底:10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR5/4黄褐色中粒砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期～飛鳥時代	掘立柱建物 a
柱穴	26	2B	J11h1	94	58	39	柱底:10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR5/4黄褐色中粒砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期～飛鳥時代	掘立柱建物 a
柱穴	27	2B	J11h1	50	46	22	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	28	2B	J11h1	80	(60)	15	5YR3/6暗赤褐色粗砂まじり粘土(焼土)	古墳時代後期～奈良時代	柱穴246に切られる
柱穴	30	2B	J11h1	90	68	28	柱底:10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR5/4黄褐色中粒砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期～飛鳥時代	掘立柱建物 a
柱穴	31	2B	J11h1	54	46	13	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	32	2B	J11h1	40	38	19	5YR3/4暗赤褐色 細砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	33	2B	J11h1	36	20	13	5YR3/4暗赤褐色 細砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	34	2B	J11g1	72	66	30	柱底:7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期～飛鳥時代	掘立柱建物 f
柱穴	35	2B	J11g1	68	50	26	柱底:7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期～飛鳥時代	掘立柱建物 f
柱穴	36	2B	J11g1	59	48	26	柱底:7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期～飛鳥時代	掘立柱建物 f
柱穴	37	2B	J11g1	60	50	36	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	38	2B	J11g1	70	50	31	柱底:7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期～飛鳥時代	掘立柱建物 f
柱穴	39	2B	J10g10	52	40	23	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	40	2B	J11f1	50	34	14	柱底:7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期～飛鳥時代	掘立柱建物 f
柱穴	41	2B	J11f1	98	60	24	柱底:7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期～飛鳥時代	掘立柱建物 f
柱穴	42	2B	J11f1	52	46	7	柱底:7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期～飛鳥時代	掘立柱建物 f
柱穴	43	2B	J11f1	80	70	49	柱底:7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期～飛鳥時代	掘立柱建物 f
柱穴	44	2B	J11f1	82	72	38	柱底:7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期～飛鳥時代	掘立柱建物 f
柱穴	45	2B	J11f1	68	46	23	柱底:7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期～飛鳥時代	掘立柱建物 f
柱穴	46	2B	J11f1	44	38	11	柱底:7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期～飛鳥時代	掘立柱建物 f
柱穴	47	2B	J11g1	54	52	24	柱底:7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期～飛鳥時代	掘立柱建物 f
柱穴	48	2B	J11f1	62	24	17	柱底:7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	51	2B	J11d1	40	34	30	柱底:7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	52	2B	J10d10	58	50	26	柱底:10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期～飛鳥時代	掘立柱建物 j
柱穴	56	2B	J10d10	61	50	11	10YR5/6黄褐色シルトまじり中粒砂	古墳時代後期～奈良時代	柱穴215を切る
柱穴	58	2B	J10d10	60	58	10	10YR5/6黄褐色シルトまじり中粒砂	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	59	2B	J10d10	64	48	11	10YR5/6黄褐色シルトまじり中粒砂	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	61	2B	J10e10	40	30	22	10YR5/6黄褐色シルトまじり中粒砂	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	67	2B	J11e1	55	50	23	柱底:10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～飛鳥時代	掘立柱建物 j
柱穴	69	2B	J11e1	62	52	29	10Y4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	71	2B	J11e1	50	30	40	7.5YR3/4暗褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	72	2B	J11e1	47	36	28	7.5YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	73	2B	J11e1	50	46	21	10Y4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	75	2B	J11e1	71	50	10	10Y4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	76	2B	J11e1	56	46	16	柱底:7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	77	2B	J11e1	54	38	19	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	78	2B	J11e1	(58)	40	19	7.5YR4/4褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	79	2B	J11e1	70	50	38	柱底:7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	80	2B	J10e10	96	62	19	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	82	2B	J10e10	32	29	7	7.5YR5/4にぶい褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	83	2B	J11e1	72	50	35	7.5YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	84	2B	J11e1	(68)	35	(68)	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	85	2B	J11e1	86	58	37	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	86	2B	J11e1	(50)	(25)	16.5	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	87	2B	J11e1	56	54	21	柱底:7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR5/8黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	88	2B	J10e10	66	51	28	7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	89	2B	J10e10	54	39	25	掘方:7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	90	2B	J10e10	59	54	23	7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	92	2B	J10e10	74	54	19	7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	93	2B	J10e10	75	32	23	7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	94	2B	J10e10	76	66	4	7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
溝	95	2B	J10e9、J10f10	47	45	5	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	96	2B	J10e10	60	40	30	柱底:7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR5/8黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	97	2B	J10e10	86	80	22	柱底:7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR5/8黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	98	2B	J10e10	58	54	11	7.5YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	99	2B	J10e10	100	70	5	7.5YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	101	2B	J11e1	54	44	46	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	102	2B	J11e1	37	32	16	5YR3/6暗赤褐色シルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	103	2B	J11e1	(54)	30	17	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	104	2B	J11e1	66	50	17	柱底:7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	106	2B	J11e1	58	50	38	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	107	2B	J11e1	48	46	29	5YR3/6暗赤褐色シルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	108	2B	J11e1	40	30	22	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	溝226に切られる
柱穴	109	2B	J11e1	66	54	23	5YR3/6暗赤褐色シルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	110	2B	J11f1	74	30	23	柱底:10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR5/8黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	111	2B	J11f1	52	44	13	柱底:10YR5/8黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR6/8黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	112	2B	J11f1	50	40	11	柱底:10YR6/8黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR7/8黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	113	2B	J11f1	64	46	29	柱底:10YR5/8黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR6/8黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	114	2B	J11f1	(70)	65	x	柱底:7.5YR5/8明褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR7/8黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	115	2B	J10f10	72	60	19	柱底:7.5YR5/8明褐色中粒砂まじりシルト 掘方:7.5YR6/8暗褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	116	2B	J10f10	106	68	25	7.5YR4/6褐色 中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～飛鳥時代	掘立柱建物 g
柱穴	117	2B	J11f1	63	30	25	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	118	2B	J11f1	38	36	17	柱底:10YR5/8黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR7/8明褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	119	2B	J11f1	58	44	39	柱底:10YR5/8黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR6/8明褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	120	2B	J11f1	(70)	52	38	柱底:10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR5/8黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	121	2B	J11f1	89	(40)	21	柱底:10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴401を切る
柱穴	122	2B	J11f1	64	58	25	10YR6/8明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴123を切る
柱穴	123	2B	J10f10	60	54	26	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴122、124に切られる
柱穴	124	2B	J10f10	114	96	42	10YR5/8黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴123を切る
土坑	125	2B	J10f10	131	58	27	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴371に切られる
柱穴	126	2B	J10f10	98	82	22	柱底:7.5YR4/6褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	127	2B	J10f10	86	72	18	柱底:7.5YR4/6褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～飛鳥時代	掘立柱建物 g
柱穴	128	2B	J10f10	88	68	32	柱底:7.5YR4/6褐色中粒砂まじりシルト 掘方:10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～飛鳥時代	掘立柱建物 g
柱穴	129	2B	J11f1	60	(40)	21	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	130	2B	J11f1	54	40	16	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
土坑	131	2B	J11f1	(94)	(54)	24	5YR5/8明赤褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	132	2B	J11f1	32	30	22	10YR5/8黄褐色中粒まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	133	2B	J11f1						

表6.2.1 B地区北半検出遺構一覧表(2)

遺構	トレンチ	地区	長軸長(cm)	幅or短軸長(cm)	深さ(cm)	埋土色・質	時期	備考
柱穴	142	2B	J11f1	74	48	16	柱穴-10YR6/8明黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方7.5YR7/8黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代 柱穴138に切られる
柱穴	143	2B	J11f1	60	48	18	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	144	2B	J11f1	38	28	x	10YR6/8明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	145	2B	J11f1	46	40	18	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	146	2B	J11f1	44	36	14	10YR7/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	147	2B	J11f1	26	24	12	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	148	2B	J11f1	67	64	20	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	149	2B	J11g1	51	40	24	柱穴7.5Y/3褐色細砂まじりシルト 掘方7.5Y/3褐色細砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	151	2B	J11g1	107	75	31	5YR4/4にぶい赤褐色 細砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	152	2B	J11g1	46	42	24	7.5YR6/6褐色シルト	古墳時代後期~奈良時代
土坑	153	2B	J11g1	396	90	15	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	160	2B	J10f10	66	50	26	柱穴-10YR5/8黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR7/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	161	2B	J10f10	76	59	57	柱穴-7.5YR4/6褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR5/8黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	162	2B	J10f10	100	60	21	柱穴-7.5YR5/8明黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR5/8黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	163	2B	J10f10	98	80	39	柱穴-7.5YR5/8明黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	164	2B	J10f10	96	60	38	柱穴-7.5YR4/6褐色中粒砂まじりシルト 掘方-7.5YR5/8明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	165	2B	J10f10	84	54	22	7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
溝	167	2B	J10g10, J10h10		30	5	7.5YR4/6褐色 細砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
溝	168	2B	J10g10, J10h10		40	5	7.5YR4/6褐色 細砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	169	2B	J10g10	61	52	35	7.5YR4/6褐色 細砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	170	2B	J10g10	54	48	12	7.5YR4/6褐色 細砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	171	2B	J10g10	60	44	11	5YR2/4暗赤褐色 シルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	172	2B	J10g10	58	40	43	5YR2/4暗赤褐色 シルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	173	2B	J10g10	54	36	28	7.5YR4/4褐色 粗砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
土坑	175	2B	J11g1, J11h1	274	226	14	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	176	2B	J10g10	33	31	10	7.5YR4/4褐色 粗砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	178	2B	J10h10	62	48	30	7.5YR4/4褐色 粗砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	182	2B	J11g1	62	50	25	7.5YR6/6褐色シルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	184	2B	J11g1	46	38	18	5YR2/4暗赤褐色 シルト	奈良時代
柱穴	185	2B	J11g2	72	56	21	5YR2/4暗赤褐色 シルト	奈良時代
柱穴	186	2B	J11g1	38	36	13	5YR2/4暗赤褐色 シルト	奈良時代
柱穴	187	2B	J11g1	58	47	13	5YR2/4暗赤褐色 シルト	奈良時代
柱穴	188	2B	J11h2	30	26	x	7.5YR5/6明褐色 中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	190	2B	J11h2	58	42	22	柱穴-10YR4/6褐色細砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色細砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	191	2B	J11h2	28	24	10	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	192	2B	J11h1	58	54	31	柱穴-10YR4/6褐色細砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色細砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	193	2B	J11h1	30	28	8	5Y3/3暗赤褐色 細砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	194	2B	J11h1	52	48	15	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	196	2B	J11h1	67	50	34	柱穴-10YR4/6褐色細砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色細砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	197	2B	J11h1	32	27	17	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	198	2B	J11h1	30	26	18	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
井戸	199	2B	J11i1	136	124	119	2.5Y4/3オーリーブ褐色中粒砂	近世
柱穴	200	2B	J11i1	49	36	5	7.5YR4/4褐色粗砂シルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	201	2B	J11h1	70	48	12	柱穴-7.5YR4/4褐色粗砂まじりシルト 掘方7.5YR5/6明褐色細砂シルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	202	2B	J11h1	64	54	15	7.5YR4/4褐色粗砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
垣根	204	2B	J10f10, J10g10	534	482	20	7.5YR4/6褐色中粒砂まじりシルト+10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
垣根	205	2B	J10f10	250~	480~	5	7.5YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
垣根	206	2B	J10f10, J10e10	413	376	5	7.5YR4/6褐色中粒砂まじりシルト+10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	207	2B	J11d	68	30	19	7.5YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	208	2B	J11d	56	28	24	7.5YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	209	2B	J11d	48	40	48	7.5YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	210	2B	J11d	64	34	19	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	211	2B	J10e10	56	34	22	柱穴-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	212	2B	J10e10	86	48	22	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	213	2B	J10e10	44	30	28	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	214	2B	J10e10	58	30	20	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	215	2B	J10d10	60	32	21	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	216	2B	J10e10	78	68	4	7.5YR5/4にぶい褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	217	2B	J11e1	28	18	17	7.5YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	218	2B	J11e1	38	35	35	7.5YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	219	2B	J11e1	40	13	7.5YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	
柱穴	220	2B	J11e1	68	64	24	7.5YR4/6褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
溝	221	2B	J11e1		24	x	7.5YR4/6褐色 中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	222	2B	J10e10	82	38	15	柱穴-7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト 掘方7.5YR3/4にぶい褐色中粒砂シルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	223	2B	J10e10	25	20	5	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	224	2B	J10e10	46	44	21	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	225	2B	J10e10	30	24	22	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
溝	226	2B	J11e1		26	7	7.5YR4/6褐色 中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	227	2B	J11e1	54	48	21	7.5YR4/6褐色 中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	228	2B	J11e1	60	46	31	7.5YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	229	2B	J10f10	56	40	11	7.5YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	230	2B	J10f10	78	58	42	10YR5/8黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	231	2B	J11f1	(66)	(20)	10	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	233	2B	J11f1	98	(44)	10YR7/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	
柱穴	234	2B	J11f1	36	27	31	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	235	2B	J11g1	54	42	19	10YR6/8明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
土坑	237	2B	J10g10	154	84	20	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	238	2B	J10g10	(92)	85	14	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	239	2B	J11g2	30	(20)	18	5YR2/4暗赤褐色 シルト	奈良時代
柱穴	240	2B	J11g1	40	36	13	5YR2/4暗赤褐色 シルト	奈良時代
柱穴	241	2B	J11g1	30	20	10	7.5Y4/3褐色細砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	242	2B	J11g1	(42)	(25)	21	5YR2/4暗赤褐色 シルト	奈良時代
柱穴	243	2B	J11h2	(34)	(18)	9	5Y3/3暗赤褐色 細砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	244	2B	J11h1	79	49	20	5Y3/3暗赤褐色 細砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	245	2B	J11h2	(38)	(22)	11	7.5Y4/4褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	246	2B	J11h1	68	54	31	柱穴-10YR4/6褐色細砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色細砂まじりシルト(黄色粘土ブロック含む)	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	247	2B	J10h10	54	46	24	7.5YR4/4褐色粗砂まじりシルト	奈良時代
柱穴	248	2B	J10h10	51	27	12	7.5YR4/4褐色粗砂まじりシルト	奈良時代
柱穴	249	2B	J11e1	56	42	22	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	250	2B	J10e10	34	26	17	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	251	2B	J10e10	49	41	21	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	252	2B	J11e1	(30)	(20)	5	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	253	2B	J11g1	56	46	21	5YR2/4暗赤褐色 シルト	奈良時代
柱穴	254	2B	J10g10	68	40	40	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
土坑	255	2B	J11g1	(156)	(144)	18	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	257	2B	J11f1	52	50	12	10YR6/8明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	258	2B	J11f1	40	34	14	10YR7/8明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
住居址	260	2B	J11f1				2.5Y5/7黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	261	2B	J11f1	26	18	8	10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	262	2B	J10d10	60	36	22	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
住居址	264	2B	J10h10				掘方参照	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	270	2B	J10h10	64	52	26	7.5YR4/4褐色 中粒まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	271	2B	J10h10	60	40	32	7.5YR4/4褐色 中粒まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	272	2B	J10h10	44	42	20	7.5YR4/4褐色 中粒まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	273	2B	J10h10	58	38	18	7.5YR4/4褐色 中粒まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代
柱穴	274	2B	J10h10	40	38	10	7.5YR4/4褐色 粗砂まじりシルト	奈良時代
柱穴	275	2B	J10h10	30	28	11	7.5YR4/4褐色 粗砂まじりシルト	奈良時代

表6.2.1 B地区北半検出遺構一覧表(3)

遺構	トレンチ	地区	長軸長(cm)	幅or短軸長(cm)	深さ(cm)	埋土色・質	時期	備考
柱穴 276	2B	J10h10	40	38	19	7.5YR4/4褐色 粗砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 277	2B	J10h10	64	58	16	7.5YR4/4褐色 粗砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 c
柱穴 278	2B	J10h10	80	50	12	10YR4/4褐色粗砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 279	2B	J10g10	70	62	47	7.5YR4/4褐色 粗砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 d
柱穴 280	2B	J10g9	98	88	35	7.5YR4/4褐色 粗砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 281	2B	J10g10	84	68	27	7.5YR4/4褐色 粗砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 282	2B	J10g10	84	64	43	7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 h
柱穴 283	2B	J10g9	74	66	23	7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
住居址 284	2B	J10g10				掘立柱建物	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 285	2B	J10f10	51	46	35	7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴365を切る
柱穴 286	2B	J10g10	76	44	22	7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 287	2B	J10g10	60	44	19	7.5YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 288	2B	J10g10	48	42	19	7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 h
柱穴 289	2B	J10g9	80	70	60	7.5YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 h
柱穴 290	2B	J10f9	42	36	19	5YR4/4にぶい赤褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 291	2B	J10h10	45	40	42	7.5YR4/4褐色 粗砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 x
柱穴 292	2B	J10h10	22	20	15	7.5YR4/4褐色 粗砂まじりシルト	奈良時代	柱穴290を切る
柱穴 293	2B	J11h1	17	15	x	10YR5/4にぶい黄褐色粗砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 294	2B	J11h1	15	13	x	10YR5/4にぶい黄褐色粗砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 295	2B	J11g1	18	15	x	10YR5/4にぶい黄褐色粗砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 296	2B	J11g1	14	13	x	10YR5/6黄褐色シルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 297	2B	J10h10	61	42	25	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	住居址264、柱穴298を切る
柱穴 298	2B	J10h10	62	(40)	24	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴297に切られる
柱穴 299	2B	J11g1	26	18	5	10YR5/6黄褐色シルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 300	2B	J11g1	28	26	5	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 301	2B	J10g9	(88)	62	25	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 302	2B	J10g9	50	36	24	5YR4/3にぶい赤褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 303	2B	J10h9	119	72	56	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 k
柱穴 304	2B	J10g9	44	30	24	5YR4/3にぶい赤褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 305	2B	J10h9	94	70	47	埋土3記:埋土中に鉄釘の付いた 掘立柱:埋土中に鉄釘の付いた(褐色土ブロック含む)	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 k
柱穴 306	2B	J10h9	88	(60)	25	5YR4/3にぶい赤褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴307に切られる
柱穴 307	2B	J10h9	85	63	39	埋土3記:埋土中に鉄釘の付いた 掘立柱:埋土中に鉄釘の付いた(褐色土ブロック含む)	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 k 柱穴306を切る
柱穴 308	2B	J10h9	100	90	35	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 309	2B	J10h9	30	28	23	5YR2/4暗赤褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴310に切られる
柱穴 310	2B	J10h9	60	54	33	5YR4/3にぶい赤褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴309を切る
柱穴 311	2B	J10h9	70	48	19	5YR2/4暗赤褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 312	2B	J10h9	78	50	43	埋土3記:埋土中に鉄釘の付いた 掘立柱:埋土中に鉄釘の付いた(褐色土ブロック含む)	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 k
柱穴 313	2B	J10h9	56	54	32	5YR2/4暗赤褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 314	2B	J10h9	150	77	62	埋土3記:埋土中に鉄釘の付いた 掘立柱:埋土中に鉄釘の付いた(褐色土ブロック含む)	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 k
柱穴 315	2B	J10h9	50	40	28	5YR4/3にぶい赤褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 316	2B	J10h9	61	32	44	5YR4/3にぶい赤褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴317を切る
柱穴 317	2B	J10h9	130	58	60	埋土3記:埋土中に鉄釘の付いた 掘立柱:埋土中に鉄釘の付いた(褐色土ブロック含む)	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 k 柱穴316に切られる
柱穴 318	2B	J10h9	(72)	(22)	46	埋土3記:埋土中に鉄釘の付いた 掘立柱:埋土中に鉄釘の付いた(褐色土ブロック含む)	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 k
柱穴 319	2B	J10h9	84	80	22	7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 321	2B	J10h9	54	48	12	5YR5/3にぶい赤褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 322	2B	J10h9	64	60	8	5YR4/3にぶい赤褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
土坑 323	2B	J10h9	194	50	13	7.5YR4/4褐色粗砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
土坑 324	2B	J10h9	80	46	24	7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	土坑325を切る
土坑 325	2B	J10h9、J10g9	410	(140)	16	5YR4/3にぶい赤褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	土坑324に切られる
土坑 326	2B	J10g9	82	46	21	5YR4/4にぶい赤褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
土坑 327	2B	J10g9	150	86	34	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	土坑328を切る
土坑 328	2B	J10g9	316	(60)	49	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	土坑329を切り、土坑327に切られる
柱穴 329	2B	J10g9	100	(66)	51	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	土坑328に切られる
柱穴 330	2B	J10g9	78	54	13	7.5YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 331	2B	J10h9	41	30	12	5YR5/3にぶい赤褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 332	2B	J10h9	60	46	28	7.5YR4/4褐色粗砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 333	2B	J10g9	49	42	10	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 334	2B	J10g9	54	24	18	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 335	2B	J10g9	90	60	25	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 336	2B	J10g9	64	54	25	7.5YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 337	2B	J10g9	82	68	22	7.5YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 338	2B	J10g9	42	36	16	7.5YR4/4褐色 粗砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 339	2B	J10g9	46	36	14	7.5YR4/4褐色 粗砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 340	2B	J10g9	70	46	36	7.5YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 341	2B	J10g9	60	54	17	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 342	2B	J10g9	92	58	37	5YR4/4にぶい赤褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 343	2B	J10g9	92	48	26	5YR4/4にぶい赤褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 345	2B	J10h9	56	50	36	10YR4/6褐色粗砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
住居址 346	2B	J10h9				掘立柱建物	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 347	2B	J10h9	84	52	26	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 348	2B	J10h9	63	52	31	7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
住居址 349	2B	J10h9				掘立柱建物	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 350	2B	J10f10	48	22	9	7.5YR4/4褐色粗砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 x
柱穴 351	2B	J11g1	70	52	46	7.5YR4/6褐色 粗砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 d
柱穴 353	2B	J10e10	75	50	20	黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 j
柱穴 354	2B	J10e10				明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	594に切られる
柱穴 355	2B	J11f1	(70)	(30)	21	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	141に切られる
柱穴 356	2B	J11f1				2.5Y6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	141に切られる
柱穴 357	2B	J11e1	22	12	x	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	傾斜にかかると
柱穴 358	2B	J11f1	44	38	13	10YR5/8黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	駆穴住居260柱穴
柱穴 359	2B	J10f10	71	40	42	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	住居址205を切る
柱穴 360	2B	J10f10	(74)	72	24	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	165に切られる
柱穴 361	2B	J10f10	64	54	34	10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 362	2B	J10f10	46	26	18	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 363	2B	J10f10	50	34	16	10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 364	2B	J10f10	100	50	28	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 365	2B	J10f10	(40)	36	28	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	285に切られる
柱穴 366	2B	J10f10	60	40	15	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 367	2B	J10f10	60	(36)	20	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 368	2B	J10h10	58	40	20	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 d
柱穴 371	2B	J10f10	50	34	38	10YR5/8黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	土坑125を切る
柱穴 372	2B	J10f10	54	24	27	10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 373	2B	J10f10	70	58	33	7.5YR4/6褐色 粗砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴491を切る
柱穴 374	2B	J10f10	94	81	29	7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 g
柱穴 375	2B	J10f10	83	74	23	7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴382に切られる
柱穴 376	2B	J10f10	64	54	21	7.5YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 g
柱穴 377	2B	J10f10	-	60	x	7.5YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 378	2B	J10f10	36	31	14	10YR4/6褐色粗砂まじりシルト	古墳時代後期	駆穴住居206柱穴
柱穴 379	2B	J10e10	12	9	x	7.5YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	駆穴住居206柱穴
柱穴 380	2B	J10e10	30	20	19	10YR4/6褐色粗砂まじりシルト	古墳時代後期	駆穴住居206柱穴
柱穴 381	2B	J10f10	30	28	9	10YR4/6褐色粗砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 382	2B	J10f10	72	58	43	柱穴3.5YR5/8明黄褐色中粒砂まじりシルト 掘立柱:埋土中に鉄釘の付いた(褐色土ブロック含む)	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 g 柱穴375を切る
柱穴 383	2B	J10f10	55	50	x	10YR4/6褐色粗砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
住居址 384	2B	J10h9	38	28	x	不明	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴 385	2B	J10g10	84	48	25	10YR4/4褐色粗砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址204柱穴、南東区画
柱穴 386	2B	J10h10	40	35	x	10YR4/4褐色粗砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址264柱穴
柱穴 387	2B	J10h10	40	35	x	10YR4/4褐色粗砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址264柱穴

表6.2.1 B地区北半検出遺構一覧表(4)

遺構	トレンチ	地区	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	埋土色・質	時期	備考	
柱穴 388	2B	J10g10	54	38	28	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址204柱穴、南西区画	
柱穴 389	2B	J10g10	72	62	45	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址204柱穴、南東区画 柱穴390を切る	
柱穴 390	2B	J10g10	54	52	7	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴389、391に切られる	
柱穴 391	2B	J10g10	36	34	14	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址204柱穴、南東区画 柱穴390を切る	
柱穴 392	2B	J10g10	44	30	x	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址204を切る	
柱穴 393	2B	J10g10	76	68	33	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址204を切る	
柱穴 394	2B	J10g10	60	40	41	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴396を切る	
柱穴 395	2B	J10g10	32	30	14	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	住居址204柱穴、北東区画 柱穴395に切られる	
柱穴 396	2B	J10g10	42	(30)	18	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址204柱穴、北西区画	
柱穴 397	2B	J10g10	26	24	20	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	住居址204を切る	
柱穴 398	2B	J10g10	40	36	8	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	住居址204柱穴、北西区画	
柱穴 399	2B	J10f10	38	34	10	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	住居址204を切る	
柱穴 400	2B	J10f10	68	38	32	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	住居址204を切る	
柱穴 401	2B	J11f1	130	70	32	10YR5/6	古墳時代後期～奈良時代	柱穴121に切られる	
柱穴 402	2B	J10e9	39	26	26	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴396を切る	
柱穴 404	2B	J10h10	54	48	19	10YR5/8黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	住居址204柱穴、北東区画 柱穴395に切られる	
柱穴 405	2B	J10f10	32	26	8	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址204柱穴、北西区画	
柱穴 406	2B	J10g10	64	48	46	7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	住居址204柱穴、北西区画	
柱穴 407	2B	J10g10	46	42	28	10YR5/8黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	住居址204を切る	
柱穴 408	2B	J10g10	50	38	10	10YR6/8明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	住居址284柱穴 柱穴144を切る	
柱穴 409	2B	J10g10	26	25	12	10YR4/6褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴 410	2B	J10g10	50	44	18	10YR6/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴 411	2B	J10g10	64	58	22	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物h	
柱穴 412	2B	J10g10	90	62	53	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物h	
柱穴 413	2B	J10g10				10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物h	
柱穴 414	2B	J10g10	70	48	41	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物h	
柱穴 415	2B	J10f9	48	40	14	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物h	
柱穴 416	2B	J10f9	43	40	21	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物h	
柱穴 417	2B	J11f1	40	38	29	7.5YR5/6明褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址260柱穴	
柱穴 418	2B	J11f1	50	46	38	柱痕 黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR5/6中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴 419	2B	J11f1	44	38	21	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址260柱穴	
柱穴 420	2B	J11f1	42	28	26	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址260柱穴	
柱穴 421	2B	J10f10	78	38	14	10YR5/8黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址205柱穴	
柱穴 422	2B	J10f10	50	30	x	10YR5/8黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址205柱穴	
柱穴 423	2B	J10f9	40	(16)	9	明黄褐色中粒砂まじりシルト(ブロックまじり)	古墳時代後期～奈良時代	住居址349に切られる	
柱穴 424	2B	J10f9	26	20	5	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址349柱穴	
柱穴 425	2B	J10f9	50	46	x	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址349柱穴	
柱穴 426	2B	J10h10	44	41	15	10YR6/8明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物d	
柱穴 427	2B	J10h10	48	40	25	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物d	
柱穴 428	2B	J10f10	44	34	14	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址205柱穴	
柱穴 429	2B	J10f10	24	20	11.7	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址205柱穴	
柱穴 430	2B	J10f10	—	65	32.8	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址205柱穴	
柱穴 434	2B	J11h1	54	30	25.6	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物c	
柱穴 435	2B	J11h1	52	42	30.6	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物c	
柱穴 436	2B	J11h1	58	44	27.1	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物c	
柱穴 437	2B	J11h1	78	60	27.8	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物c	
柱穴 438	2B	J11h1	53	50	11.3	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物c	
柱穴 439	2B	J10h10	62	50	20.8	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物c	
柱穴 440	2B	J10h10	50	34	29.1	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物c	
柱穴 441	2B	J10h10	60	40	27.9	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物c	
柱穴 442	2B	J10f10	50	46	18.2	柱痕 7.5YR5/8明褐色中粒砂まじりシルト 掘方 10YR5/8黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物g	
柱穴 443	2B	J10g10	68	44	33.2	7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物h	
柱穴 444	2B	J10g10	80	65	20.4	7.5YR4/3褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物h 柱穴1071に切られる	
柱穴 461	2B	J10g10	24	20	5	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址204を切る	
柱穴 466	2B	J11f1	32	30	24.1	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址260柱穴	
柱穴 467	2B	J11f1	54	46	18.9	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址260柱穴	
柱穴 468	2B	J11f1	32	30	18.3	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址260柱穴	
柱穴 469	2B	J11f1	22	18	17.4	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址260柱穴	
柱穴 470	2B	J10f10	23	20	x	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址205柱穴	
柱穴 471	2B	J10f10	22	20	8.8	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址205柱穴	
柱穴 472	2B	J10f10	32	30	7.6	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址260柱穴	
柱穴 473	2B	J10g10	50	44	39.8	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址204柱穴	
カマド?	474	2B	J10g10	x	50	x	赤色焼土	古墳時代後期	住居址204柱穴 焼土
柱穴 475	2B	J10g10	50	36	51.2	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址204柱穴	
柱穴 476	2B	J10g10	40	30	11.3	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址204柱穴	
柱穴 477	2B	J10g10	20	16	10.1	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址204柱穴	
柱穴 478	2B	J10f10	28	20	9.7	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址204柱穴	
柱穴 479	2B	J10g10	48	40	9.5	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址204柱穴	
柱穴 480	2B	J10g10	30	24	8.1	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址204柱穴	
柱穴 481	2B	J10g10	34	25	4.7	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址204柱穴	
柱穴 482	2B	J10g10	60	56	17.1	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址204柱穴	
柱穴 483	2B	J10g10	50	45	x	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址204柱穴	
柱穴 484	2B	J10f10	25	20	x	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址205柱穴	
柱穴 485	2B	J10h10	50	40	25	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期	住居址205柱穴	
柱穴 486	2B	J10g10	62	40	23.7	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	住居址204柱穴	
柱穴 487	2B	J10h9	178	90	43.5	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴 488	2B	J10h9	64	50	30.1	5YR4/3にぶい赤褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴 489	2B	J10h9	48	45	14.5	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴 490	2B	J11f1	40	34	17.1	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴 491	2B	J10e10	52	48	36.5	柱痕 7.5YR5/8明褐色中粒砂まじりシルト 掘方 10YR5/8黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 288住居址を切る 柱穴1071に切られる	
柱穴 492	2B	J10f9	32	28	9.9	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期		
柱穴 493	2B	J10f9	50	46	34.5	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期		
柱穴 494	2B	J10f9	(62)	(42)	43.7	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期		
柱穴 531	8B	J10d10	112	70	27	柱痕 10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方 10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物1	
柱穴 532	8B	J10d10	68	52	35	柱痕 10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方 10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物1	
柱穴 533	8B	J10d10	32	22	10	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物1	
柱穴 534	8B	J10d10	58	54	27	柱痕 10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方 10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物1	
柱穴 535	8B	J10c10	(60)	(22)	11	柱痕 10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方 10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物1	
柱穴 536	8B	J10d10	83	58	45	柱痕 10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方 10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物1	
柱穴 537	8B	J10d10	76	56	28	柱痕 10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方 10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物1	
柱穴 538	8B	J10d10	49	41	35	柱痕 10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方 10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物1	
柱穴 539	8B	J10c10	48	46	19	柱痕 10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方 10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物1	
柱穴 540	8B	J10c10	93	54	28	柱痕 10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方 10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物1	
柱穴 541	8B	J10c10	60	48	19	柱痕 10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方 10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物1	
柱穴 542	8B	J10c10	28	24	12	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期		
柱穴 543	8B	J10d10	24	22	12	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期		
柱穴 544	8B	J10d10	38	24	16	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期		
柱穴 545	8B	J10c10	62	48	25	柱痕 10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方 10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴 546	8B	J10c10	58	50	32	柱痕 10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方 10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴 547	8B	J10c10	78	52	16	柱痕 10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方 10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	溝548を切る	
溝	548	8B	J10c10	46	15	10YR6/6暗褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴547に切られる	
柱穴 549	8B	J10c10	66	58	24	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期		
柱穴 550	8B	J10c10	82	70	43	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期		
柱穴 551	8B	J10c10	82	52	14	柱痕 10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方 10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期		
柱穴 552	8B	J11c1	24	16	12	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期		
柱穴 553	8B	J11c1	60	48	29	柱痕 10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方 10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期		
土坑	554	8B	J11c1, J11b1	138	130	24	10YR5/4にぶい黄褐色細粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	

表6.2.1 B地区北半検出遺構一覧表(5)

遺構	トレンチ	地区	長軸長(cm)	幅/短軸長(cm)	深さ(cm)	埋土色・質	時期	備考
柱穴	555	8B	J11c1	62	30	33	柱痕-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	556	8B	J11c1	68	34	35	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	557	8B	J11c1	43	40	5	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	558	8B	J11c1	318	280	29	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂	近世
溝	559	8B	J11c1, J11b1	60	25	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	560	8B	J11c1	28	24	10	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	561	8B	J11c1	32	24	16	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	562	8B	J11b1	30	20	22	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	563	8B	J11b1	32	26	17	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	564	8B	J11c1	80	60	24	柱痕-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	565	8B	J11c1, J11b1	54	50	36	10YR6/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	566	8B	J11c1	63	50	28	柱痕-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	567	8B	J11c1	58	50	17	柱痕-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	568	8B	J11c1	19	18	19	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	569	8B	J11c1	80	61	31	柱痕-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	570	8B	J11b1	82	70	29	柱痕-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	571	8B	J11b1	106	93	9	にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト(炭を多く含む)	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	572	8B	J11b1	70	52	37	柱痕-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	573	8B	J11c1	26	21	9	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	574	8B	J11c1	60	50	18	柱痕-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	575	8B	J11c1	46	39	7	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	576	8B	J11c1	24	22	26	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	577	8B	J11c2	69	46	12	柱痕-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	578	8B	J11d1	72	58	25	柱痕-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
溝	579	8B	J11c1	54	12	10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	580	8B	J11c1	78	50	23	柱痕-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
溝	581	8B	J11c1	64	9	10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	582	8B	J11c1	40	34	19	10YR7/4にぶい黄褐色細粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
土坑	583	8B	J11c1	180	105	x	10YR6/4にぶい黄褐色シルトまじり細粒砂	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	584	8B	J11c1	80	66	38	柱痕-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	585	8B	J11c1	56	48	29	柱痕-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	586	8B	J11c1	(72)	60	26	柱痕-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	587	8B	J11c1	50	44	17	柱痕-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	588	8B	J11c1	23	22	13	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	589	8B	J11c1	32	26	13	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	590	8B	J11c1	50	42	33	柱痕-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
土坑	591	8B	J10b10, J10c10	(154)	(62)	10	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	592	8B	J10b10	60	56	28	柱痕-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	593	8B	J11b1	116	102	17	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	594	8B	J11b1	79	50	22	10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
土坑	595	8B	J11b1	206	154	7	10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	596	8B	J11b1	60	56	20	柱痕-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	598	8B	J11b2	70	58	21	10YR6/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	599	8B	J11b2	(62)	50	12	10YR6/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	601	8B	J11b2, J11b1	96	88	8	10YR6/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
土坑	602	8B	J11b1	164	82	23	10YR6/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	603	8B	J11b1, J11b2	35	30	5	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	604	8B	J11b1, J11b2	86	50	16	10YR6/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	605	8B	J11b2	42	26	10	10YR6/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	606	8B	J11b2	54	47	13	10YR6/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	607	8B	J11b2	38	28	11	10YR6/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	608	8B	J11b2	55	38	11	10YR6/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	610	8B	J11b2	78	50	22	10YR6/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	611	8B	J11b2	60	56	15	10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	612	8B	J11b2	54	50	14	10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	613	8B	J11b1	64	57	22	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	614	8B	J11b1	80	54	29	10YR6/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	615	8B	J11b1	76	64	28	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	616	8B	J11b1	54	34	33	10YR6/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	617	8B	J11b1	114	89	14	10YR6/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	618	8B	J11b1	32	29	8	10YR4/6にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	619	8B	J11b1	28	18	9	10YR4/6にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	620	8B	J11b1	54	(20)	7	10YR4/6にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
溝	621	8B	J11b1, J11a1	86	29	10YR5/6黄褐色粘土まじり細粒砂	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	622	8B	J11b1	30	20	5	10YR6/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	623	8B	J11b1	40	25	5	10YR6/4にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
土坑	625	8B	J11c2	75	42	37	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	649	8B	J11c2	72	(22)	16	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	650	8B	J11c2	44	30	13	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	651	8B	J11c2	40	36	20	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	652	8B	J11c2	42	30	23	柱痕-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	653	8B	J11c2	66	37	7	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	654	8B	J11c2	38	36	9	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	655	8B	J11c2	92	64	43	柱痕-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	656	8B	J11c2	80	74	48	柱痕-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	657	8B	J11c3	56	30	38	柱痕-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	658	8B	J11c3	110	(34)	27	柱痕-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
溝	659	8B	J11c3, J11b3	224	32	10YR7/6明黄褐色細粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	660	8B	J11c3	54	18	10YR4/6黄褐色中粒砂まじり粘土	古墳時代後期～奈良時代	
溝	661	8B	J11c3, J11b3	64	15	10YR5/4にぶい黄褐色シルトまじり細粒砂	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	662	8B	J11c3	39	34	12	10YR6/8明黄褐色細粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	663	8B	J11c2	52	50	19	柱痕-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	664	8B	J11c2	54	50	23	柱痕-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	665	8B	J11c3	36	32	12	10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	666	8B	J11c3	46	44	29	10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	667	8B	J11c2, J11c3	76	72	32	柱痕-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	668	8B	J11c2	74	62	32	柱痕-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	669	8B	J11c2	46	42	52	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	670	8B	J11c2	78	56	50	柱痕-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	671	8B	J11c2	93	89	35	柱痕-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	672	8B	J11c2	84	72	61	柱痕-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	674	8B	J11c2	90	64	42	柱痕-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	675	8B	J11c3	52	46	37	柱痕-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	676	8B	J11c3	72	64	30	柱痕-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
溝	677	8B	J11b2, J11c2	36	x	10YR6/4にぶい黄褐色細粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	678	8B	J11b2	84	(42)	30	柱痕-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	679	8B	J11b2	58	42	35	柱痕-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	680	8B	J11b2	78	70	19	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	681	8B	J11b2, J11c2	84	(73)	14	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	682	8B	J11b2, J11c2	80	66	39	柱痕-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	683	8B	J11c2	(60)	50	16	柱痕-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	684	8B	J11c2	46	38	29	柱痕-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	685	8B	J11c2	58	46	15	柱痕-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
溝	686	8B	J11b1, J11b2	30	x	10YR6/4にぶい黄褐色細粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	687	8B	J11b2	76	68	40	柱痕-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	688	8B	J11b2	97	88	62	柱痕-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代
柱穴	689	8B	J11b2	56	46	45	柱痕-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代

表6.2.1 B地区北半検出遺構一覧表(6)

遺構	トレンチ	地区	長軸長(cm)	幅or短軸長(cm)	深さ(cm)	埋土色・質	時期	備考		
柱穴	690	8B	J11b2, J11b3	60	50	31	柱底-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 n	
溝	691	8B	J11c10		82	16	10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴	692	8B	J11b2	62	54	15	柱底-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 m	
柱穴	693	8B	J11c2	62	50	43	柱底-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 m	
土坑	694	8B	J11a1	(400)	(214)	33	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	溝708を切る	
柱穴	697	8B	K11a1	53	40	14	10YR7/6明黄褐色細粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴	698	8B	J11a2, J11b2	50	38	14	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴	699	8B	J11a2	25	17	12	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴	700	8B	J11a2	50	33	12	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
溝	701	8B	J11a2		55	17	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴702に切られる	
柱穴	702	8B	J11a2	62	48	12	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	溝701を切る	
柱穴	703	8B	J11a2	32	24	11	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴	704	8B	J11a2	46	(30)	8	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴705に切られる	
柱穴	705	8B	J11a2	30	28	10	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴704を切る	
柱穴	706	8B	J11a2	30	25	5	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
土坑	707	8B	J11a2	382	(184)	48	上層-10YR6/4にぶい黄褐色細粒砂まじりシルト 下層-10YR5/3にぶい褐色シルトまじり粘土	古墳時代後期～奈良時代		
溝	708	8B	J11a1, J11a2		162	28	10YR6/4にぶい黄褐色細粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	土坑694に切られる	
溝	709	8B	J11j1, J11j2		74	16	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂～細粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
溝	710	8B	J11j1, J11j2	x	84	20	10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂～細粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	土坑798に切られる	
柱穴	712	8B	J11c1	36	31	11	柱底-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴	713	8B	J11c1	46	39	14	柱底-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴	714	8B	J11c1	22	16	18	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴	715	8B	J11b1	60	42	25	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴	716	8B	J11b1	42	35	30	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴	717	8B	J11b2	67	48	25	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 n	
柱穴	718	8B	J11b2	45	40	26	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 n	
柱穴	719	8B	J11c2	64	54	31	柱底-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 n	
柱穴	720	8B	J11c2	33	30	10	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴	721	8B	J11c2	(58)	50	53	柱底-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴655に切られる	
柱穴	722	8B	J11j1	72	62	16	10YR7/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴	723	8B	J11a1	53	40	13	10YR7/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴	724	8B	J11b2	72	40	21	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴	726	8B	J11b2	82	60	25	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴	727	8B	J11b2	(48)	(34)	19	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴	728	8B	J11c2	51	30	13	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴	729	8B	J11a1	106	96	11	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴	730	8B	J10d10	77	58	10	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物I	
柱穴	731	8B	J11c3	34	30	x	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
土坑	798	8B	J11j1	152	92	43	10YR6/4にぶい黄褐色細粒砂まじりシルト(礫、多く含む)	古墳時代後期～奈良時代	溝710を切る	
柱穴	834	8B	J11c1	66	58	20	柱底-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴	870	10B	J11j1	44	32	10	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴	871	10B	J11j1	139	80	14	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
溝	872	10B	J11j1		284	18	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴	873	10B	J11j1		38	8	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴	874	10B	J11j1		47	34	18	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	875	10B	J11j1		40	34	22	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	876	10B	J11j1		74	60	12	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	877	10B	J11j1		28	20	13	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	878	10B	J11j1		62	30	x	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	880	8B	J11b1		70	55	x	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	881	8B	J11b1, J10b10		70	65	x	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	882	8B	J11b1		68	62	x	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	883	8B	J11b1		22	18	x	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	884	8B	J11b1		50	45	x	10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	885	8B	J11b1		85	60	x	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	886	8B	J11b1		60	50	x	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	887	8B	J11b1		70	58	x	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	888	8B	J11b1		45	40	x	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	966	11B	J11d1, J10d10		70	40	47	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	967	11B	J11d1		54	50	15	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	968	11B	J11d1		54	50	20	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	969	11B	J11d1		60	48	21	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	970	11B	J11d1		66	50	13	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	971	11B	J11d1		75	62	20	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
土坑	972	11B	J11c1, J11d1		174	104	15	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	溝579, 柱穴580に切られる
溝	973	11B	J11d1, J11d2		50	23	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴	976	11B	J11c2		74	34	19	10YR6/6明黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
溝	977	11B	J11c2		44	28	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
土坑	978	11B	J11d2		154	92	33	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	溝979に切られる
溝	979	11B	J11c3, J11d2		40	19	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	柱穴978を切る	
柱穴	980	11B	J11d2		82	72	26	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	981	11B	J11d2		64	50	50	柱底-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 o
柱穴	982	11B	J11d2		60	35	27	10YR4/96褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 o
柱穴	983	11B	J11d2		53	30	21	柱底-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 o
柱穴	984	11B	J11d2, J11d3		63	(30)	15	柱底-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 o
柱穴	985	11B	J11d3		80	(18)	10	柱底-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 o
柱穴	986	11B	J11c2		77	60	38	10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	987	11B	J11c2		62	54	32	柱底-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 o
柱穴	988	11B	J11c3		50	44	18	柱底-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 o
柱穴	989	11B	J11c3		90	50	49	柱底-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR4/6褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 o
土坑	990	11B	J11c3		138	(68)	13	10YR4/6黄褐色細粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	溝659に切られる
溝	992	11B	J11c3		102	47	10YR7/6明黄褐色細粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	溝659, 661, 993に切られる	
溝	993	11B	J11c3		56	25	10YR4/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	992を切り、溝659, 661に切られる	
柱穴	1087	8B	J11b2		78	64	40	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	1088	8B	J10d10		44	36	9	柱底-10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト 掘方-10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	1260	2B	J11g1		40	20	19	10YR5/6黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	1261	2B	J10f10		56	26	16	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	
柱穴	1262	2B	J11f1		60	30	13	10YR4/4褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	



图6.2.4 B地区北半遺構配置图 (s=1/200)

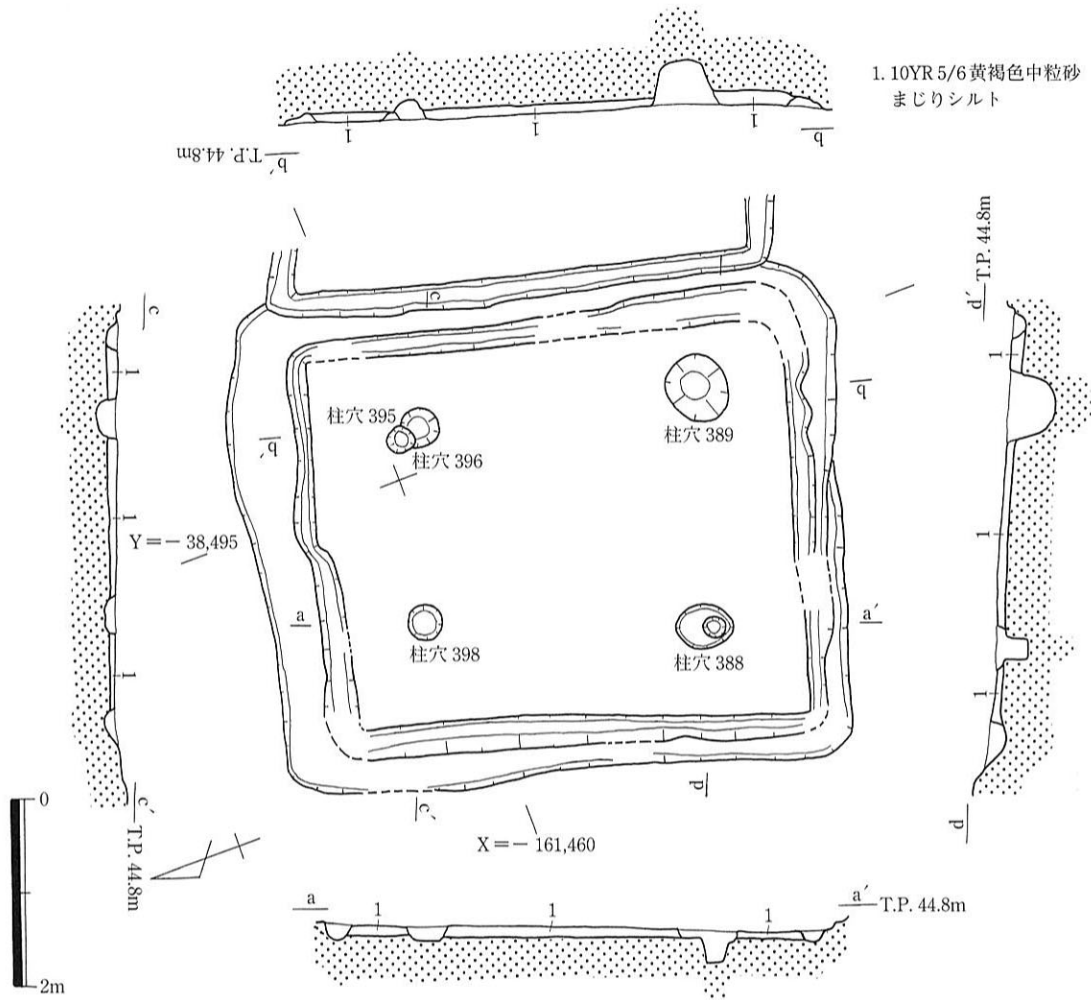


図6.2.5 竪穴住居跡204平・断面図 (s=1/80)

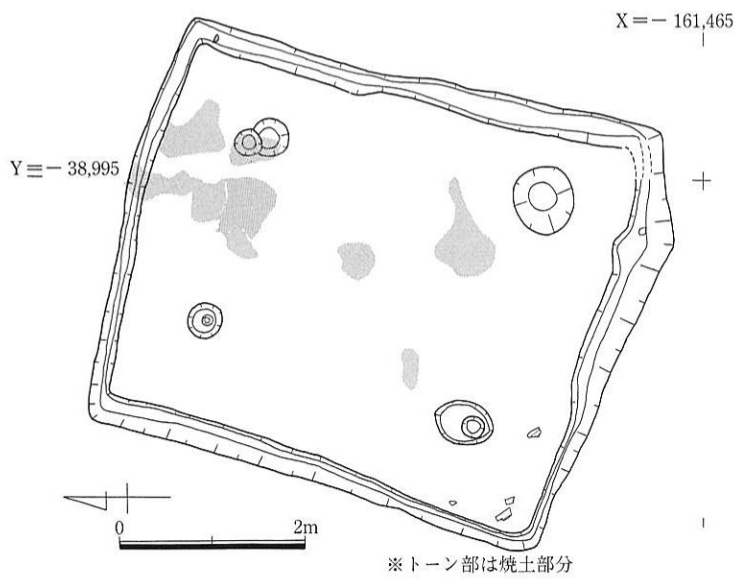


図6.2.6 竪穴住居跡204床面直上焼土検出状況 (s=1/80)

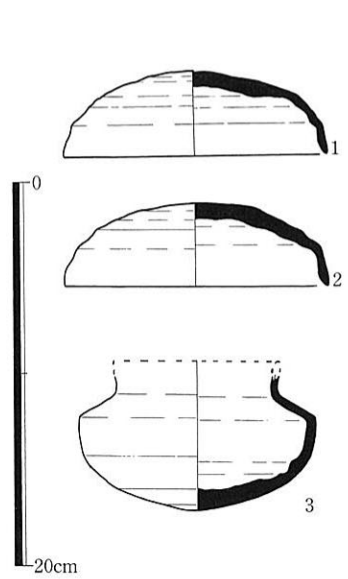


図6.2.7 竪穴住居跡204出土土器

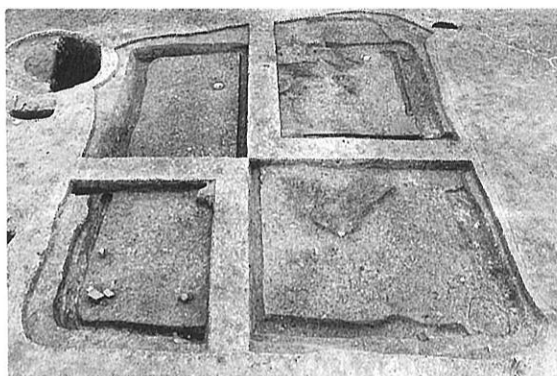


写真6.2.1 竖穴住居跡204床面直上

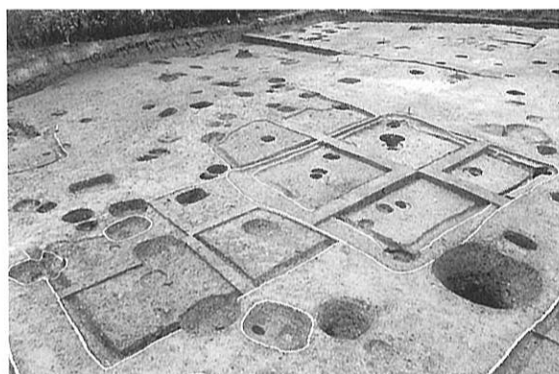


写真6.2.2 竖穴住居跡204, 205

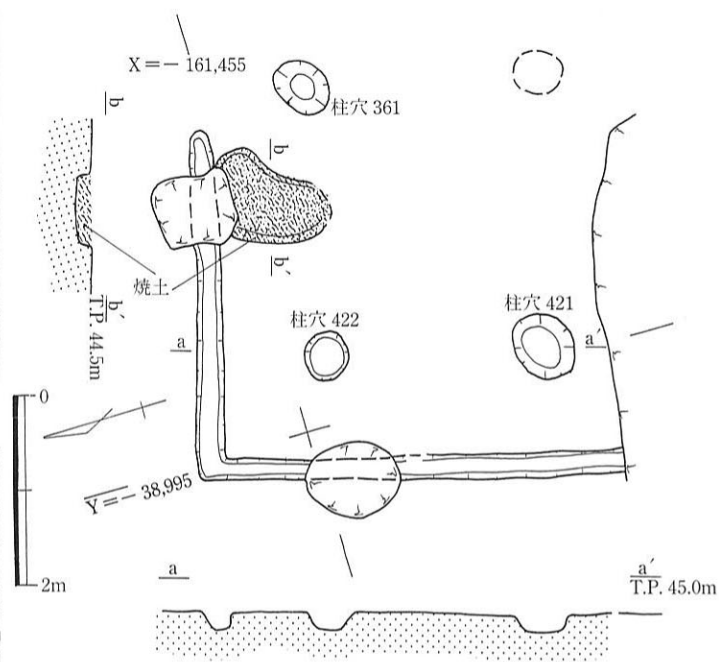


図6.2.8 竖穴住居跡205平・断面図 (s=1/80)

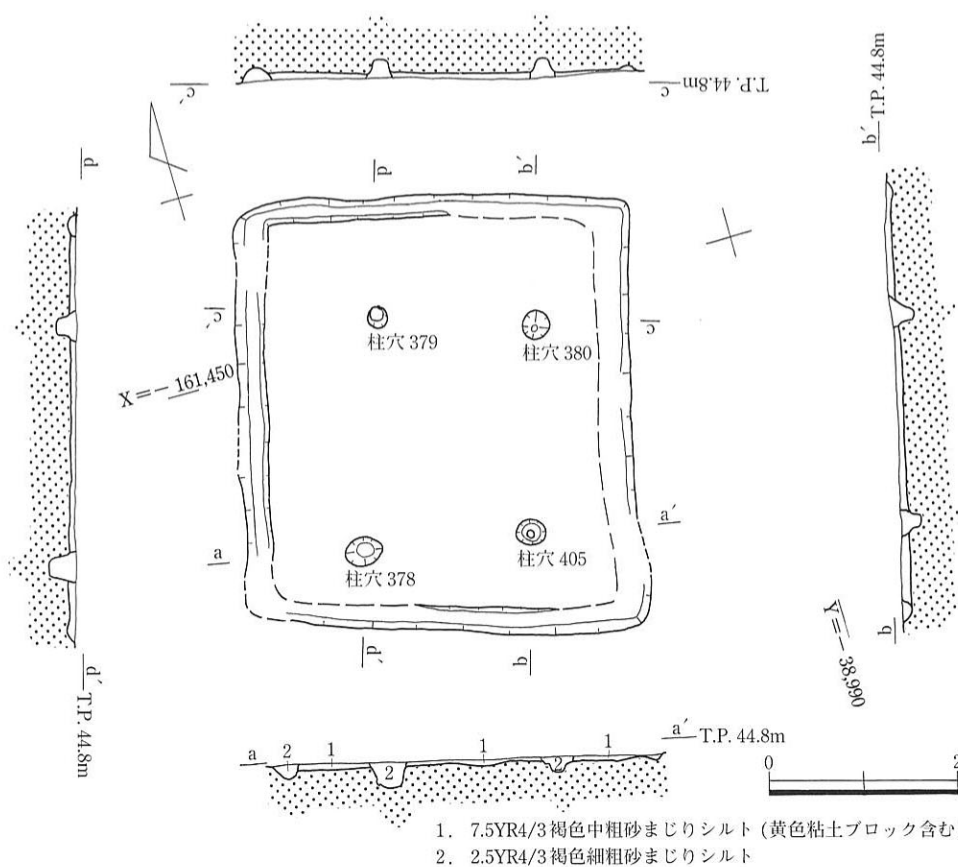


図6.2.9 竖穴住居跡206平・断面図 (s=1/80)

〔竪穴住居跡205〕（図6.2.8・写真6.2.2）

J10f10地区で検出された方形の竪穴住居跡である。壁溝は完存せず、西半部は消失、南半部は竪穴住居跡204によって破壊されていて、L字状に検出したのみであった。北北東-南南西方向に沿って建てられており、規模は、一辺480cm以上と考えられる。当遺構を形成する柱穴は柱穴361, 421, 422と思われるが、南西隅の柱穴は確認できなかった。

壁溝の内側部分については、検出時にすでに基盤層が露出していた。つまり、床面整地土層は後世の削平によって極めて薄くしか残存しておらず、住居使用時の床面は確認できなかった。壁溝北辺付近には、平面不整楕円形の浅い凹みが検出され、内部には炭片を含んだ赤色の焼土が堆積していた。おそらく、竈焼成部の基底部分と考えられる。柱穴の位置からみても、壁溝北辺の中央付近に竈が設けられていたと類推できる。当遺構南半を破壊して作られた竪穴住居跡204も北辺中央付近に竈の存在が想定できることから、竪穴住居跡205から竪穴住居跡204への立て替えが行われた可能性も考えられる。両遺構の軸方向がいずれも北北東-南南西と一致していることも、これを首肯する事実といえる。

また、後述する掘立柱建物跡gの柱穴によって、壁溝および床面整地土の一部が破壊されていることから、この掘立柱建物跡よりは先行して使用されたことがわかる。詳細な時期については、床面が確認できず、出土遺物も須恵器細片のみで決定困難である。ただ、竪穴住居跡204に先行していたことは間違いないため、6世紀後葉～末に使用されていた可能性が高い。

〔竪穴住居跡206〕（図6.2.9・写真6.2.3）

J10f10～e10地区で検出された方形の竪穴住居跡である。長辺約380cm、短辺約420cmの規模で長軸が北北東-南南西方向に沿っており、他の住居址と軸をそろえて建てられている。拡張・建て替えや他の竪穴住居跡との重複関係はなく、竪穴住居群における先後関係は明確でない。ただし、竪穴住居跡205同様に、掘立柱建物跡gの柱穴によって壁溝・床面整地土が破壊されていて、この掘立柱建物跡よりは先行して使用されたことがわかる。

壁溝は、後世の削平によって一部しか確認できていない。また、削平によって床面は消失しており、基盤層の上面にわずかに床面整地土層（黄色粘土ブロックを含む褐色中粒砂まじりシルト）が観察できた。

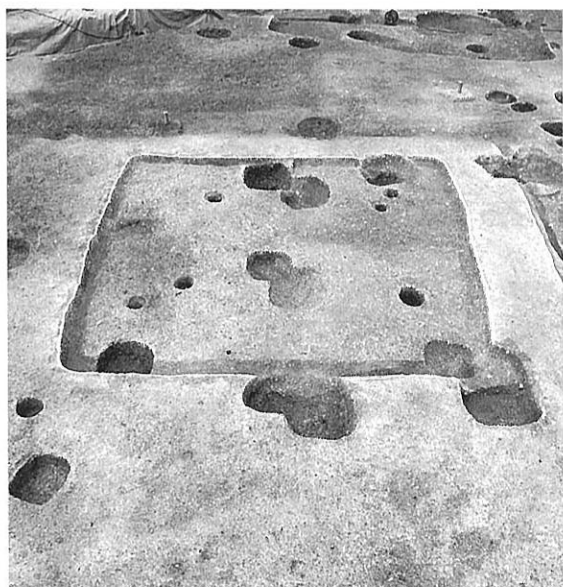


写真6.2.3 竪穴住居跡206

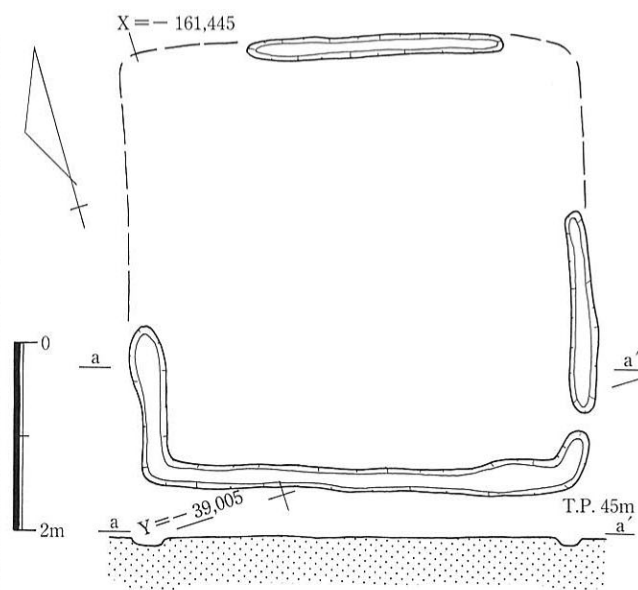


図6.2.10 竪穴住居跡219平・断面図 (s=1/80)

竪穴住居跡にともなう柱穴は柱穴378, 379, 380, 405と考えられるが、その配置は正方形を呈さない。竈の痕跡らしきものは確認できず、その位置は不明である。壁溝より、TK43~TK209型式と思われる須恵器細片が出土しており、6世紀末~7世紀初頭に廃絶された住居と考えられる。

〔竪穴住居跡219〕 (図6.2.10)

J10f10~e10地区で検出された方形の竪穴住居跡である。後世の削平により床面も確認できず、壁溝のみを検出したにとどまっている。竪穴住居跡は北北東-南南西方向に軸をもち、一辺約480cm程度の平面規模となる。壁溝は幅30cm程度、深さ5cm程度残存していて、西辺を中心に「コ」字形に、東辺に一条の直線として検出された。竪穴住居跡にともなう柱穴や竈痕跡は確認できなかった。壁溝からは、須恵器土器片が出土しているが詳細な時期決定は困難である。ただ、竪穴住居跡の軸方向が他と同一であることから、古墳時代後期後半の遺構と考えたい。

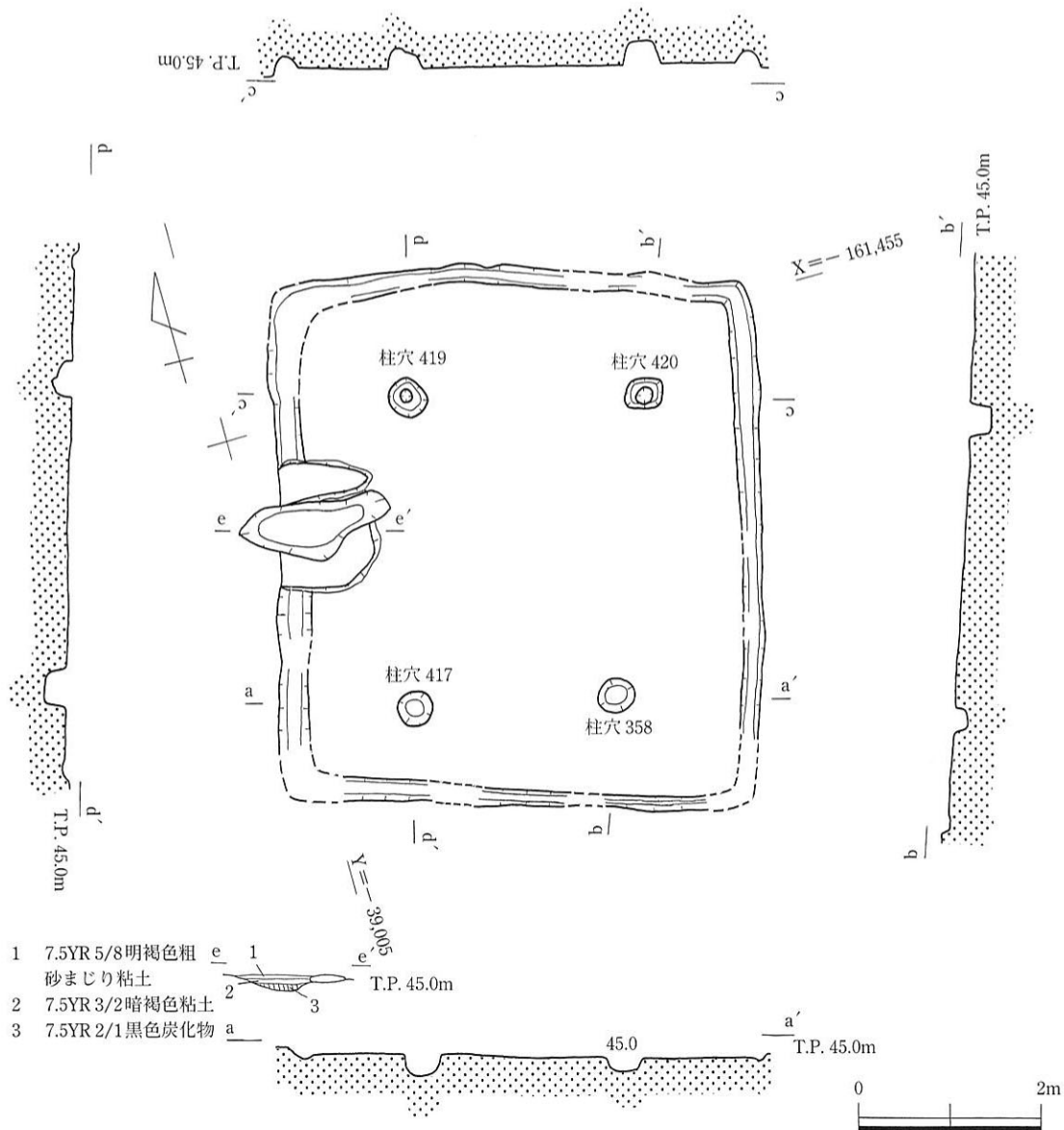


図6.2.11 竪穴住居跡260平・断面図 (s=1/80)

〔竪穴住居跡260〕 (図6.2.11)

J11f1～J10f10地区で検出された方形の竪穴住居跡である。平面規模は短辺が約495cm、長辺が約585cmで、長軸が北北東-南南西方向に沿っている。削平を受けており、壁溝により平面規模は明確なものの壁高や遺構の深さなどは不明である。また、床面整地土（黄色粘土ブロックを含む褐色中粒砂まじりシルト）が5 cm程度の厚さで確認できたが、床面そのものを検出することはできなかった。壁溝の西辺の中央部には、平面楕円形に掘り窪めた周囲を馬蹄形に粘土を貼った内部に焼土・炭片などが集積していた。竈と考えられ、内部の上層からは土師器片が出土している。柱穴417, 419, 420, 358がほぼ方形に並び、竪穴住居跡を支えるものと推定できる。

また、後述するように、本遺構の南半部には掘立柱建物跡fが重複して検出されている。この建物を構成する柱穴のうち、柱穴40, 43, 44, 45, 46, 47は本竪穴住居跡の壁溝埋土の上面から掘削されており、先後関係は明瞭であった。この掘立柱建物跡の柱穴40から、TK43型式の須恵器杯身が出土していることから、本竪穴住居跡はその直前の古墳時代後期後半に属すると推定できる。

〔竪穴住居跡264〕 (図6.2.12～14・写真6.2.4)

J10h10地区で検出された方形の竪穴住居跡である。削平のため残存状態は悪いが、西辺が4.4m、北辺

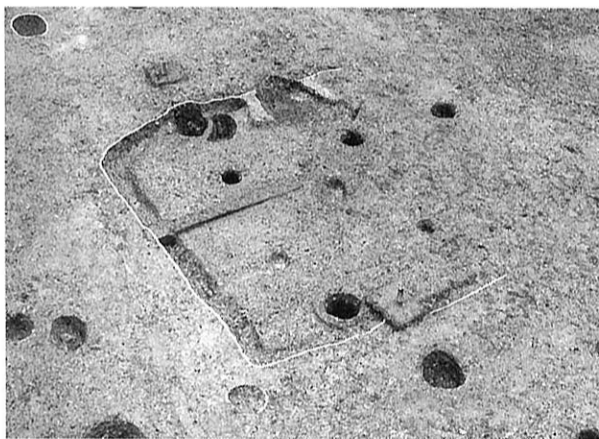


写真6.2.4 竪穴住居跡264

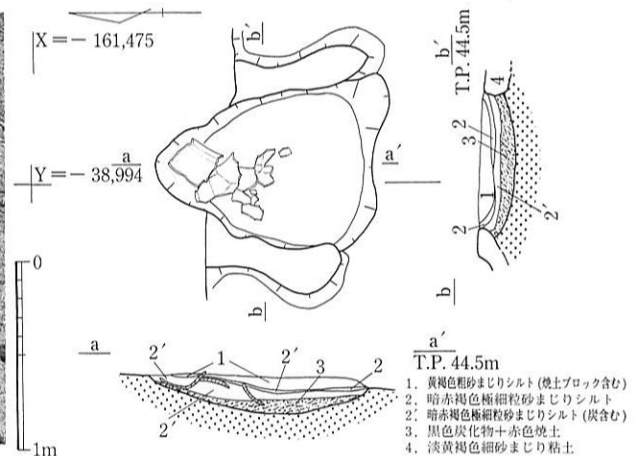


図6.2.13 竪穴住居跡264竈部平・断面図 (s=1/40)

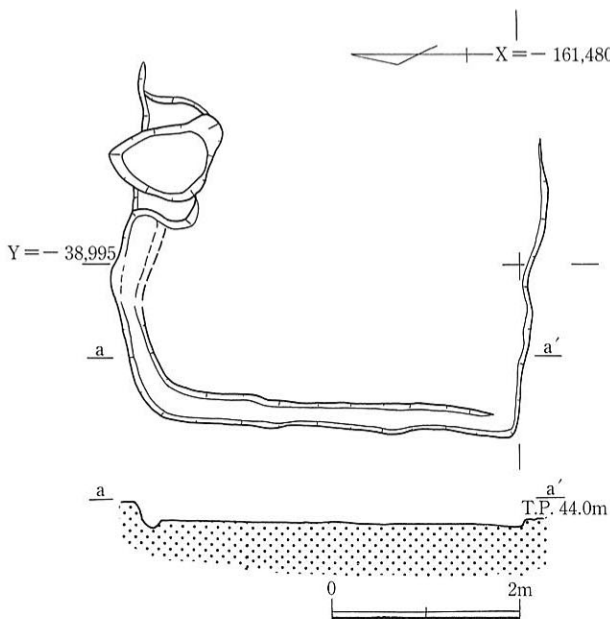


図6.2.12 竪穴住居跡264平・断面図 (s=1/80)

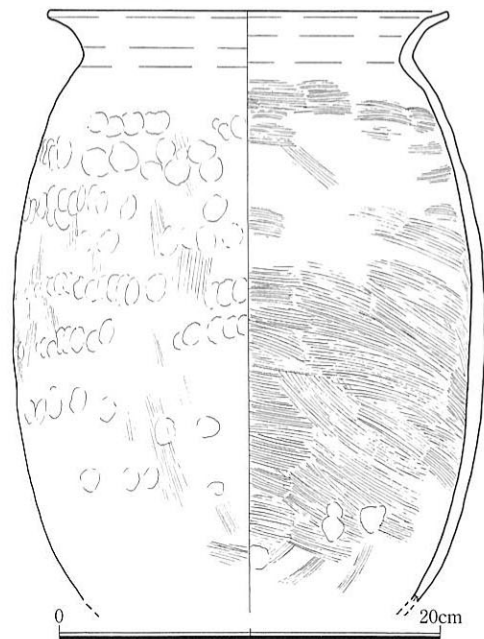


図6.2.14 竪穴住居跡264出土土器 (s=1/4)

が3.5m以上の平面規模で、西辺がほぼ南北方向に沿っている。壁溝は北辺と西辺の一部でしか検出できなかったが、深さ15cm程度と浅い。本竪穴住居跡を支える柱穴は明確ではなく、後世の削平によって破壊されたと考えられる。

北辺には、楕円形土坑の周囲に堤状に粘土を貼って竈が設けられており、最下層には焼土や炭化物が集積している。煙道に近い部分には土師器長胴甕（図6.2.14）が出土している。底部に近い破片が竈中央部に接して出土したことから、使用時の原位置に近い状態にあり、上半部が破壊されて煙道付近に散乱したものと考えられる。この土器片の周囲の堆積土には、炭・焼土だけでなく竈壁体片と思われる黄色粘土ブロックが多数含まれている。土器が固定された状態で竈が破壊され、壁体崩壊物が竈内部に崩落した可能性が高い。6.2.14-1の長胴甕は、外面に指頭圧痕を多数残すもので、古墳時代後期に属すると思われる。本竪穴住居跡は、この土器の時期から、古墳時代後期に使用された可能性が高く、周囲の竪穴住居跡の時期を考慮すると6世紀後半～7世紀初頭に使用されたと類推できる。

〔竪穴住居跡284〕（図6.2.4）

J10g10地区で検出された方形の竪穴住居跡である。竪穴住居跡204の東側を一部破壊する状態で作られたと考えられる。削平のために検出状況は悪く、西半部の壁溝のみを検出する結果となった。西辺が北北東-南南西方向に沿っており、西辺が約530cm、南辺が420cm以上の規模である。竈は検出できなかった。後述する掘立柱建物跡hが重複しているため、上屋を支える柱穴は明確ではない。また、掘立柱建物跡hの柱穴が南辺の壁溝埋土上面から掘り込まれていることから、本竪穴住居跡は掘立柱建物跡hに先行して設置・廃棄されたと考えられる。

壁溝内などからは須恵器細片が出土するものの、時期決定は困難である。遺構の重複関係や主軸方向などから、竪穴住居跡204の建て替えによって形成された竪穴住居跡と類推でき、7世紀初頭に使用されたと考えたい。

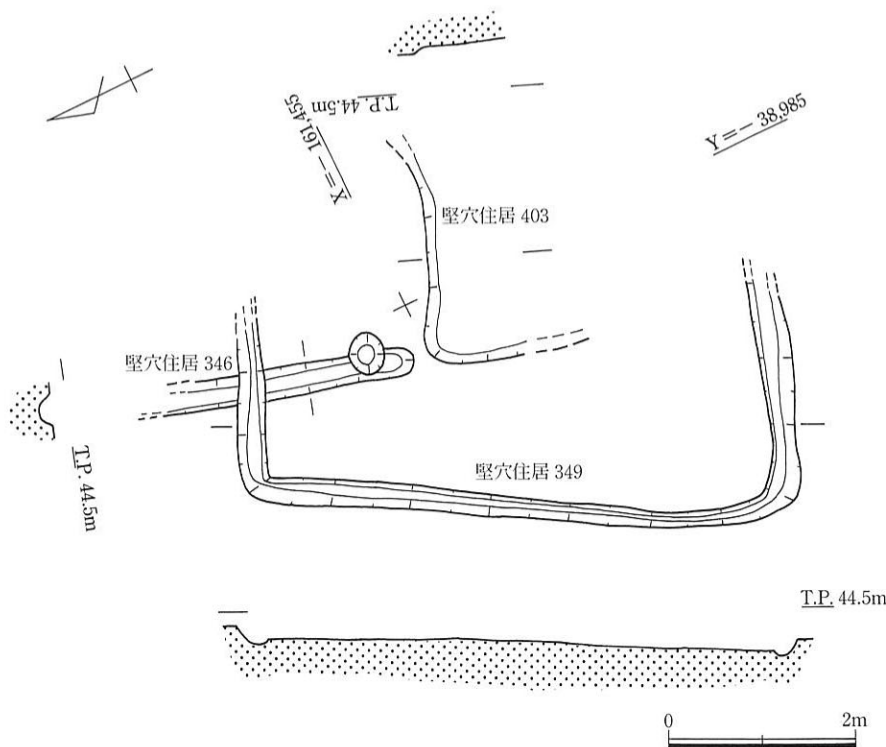


図6.2.15 竪穴住居跡346, 349, 403平・断面図 (s=1/80)

〔竪穴住居跡346, 349, 403〕 (図6.2.15)

J10f9地区で検出された竪穴住居跡群である。いずれも、平面形態としては完存していないが、壁溝が重複する状態で検出された。竪穴住居跡346は壁溝と思われる小溝が一条検出されたのみである。主軸は北北東-南南西方向に沿っている。

この壁溝埋土の上面から、竪穴住居跡349の壁溝が掘り込まれている。竪穴住居跡349は長さ約610cmの西辺と北辺・南辺の一部が検出され、平面方形と考えられるが、遺構の東半部は削平と調査区外のため検出できなかった。これに伴う柱穴も竪穴住居跡346壁溝埋土上面から掘り込まれており、先後関係は明らかである。西辺は、北北東-南南西方向に沿っていて、竪穴住居跡346とほぼ同一方向に建てられている。おそらく竪穴住居跡346から竪穴住居跡349への建て替えが行われたものと考えられる。

竪穴住居跡403は竪穴住居跡349の中央部で、平面方形の遺構の一部として検出された。北辺の軸が東南東-西北西となり、前二者の竪穴住居跡の北辺方向と同一であるため、竪穴住居跡のコーナー部と考えたい。前二者との先後関係は不明である。

いずれの住居跡からも、須恵器・土師器の細片が出土しているものの、詳細な時期決定は困難である。周囲の遺構の時期から考えて、古墳時代後期～飛鳥時代に使用された住居と考えたい。

掘立柱建物跡

〔掘立柱建物跡 a〕 (図6.2.16)

J11h1地区で検出された掘立柱建物跡で、柱穴15・26・30・246によって構成されている。東西方向2間・南北方向4間の構成をとるが、長軸方向の中心ライン上には柱穴が4基並び、梁行方向の柱数とは一致していない。長軸は、南北方向からやや東に振れた方向となる。東西方向の長さは柱痕間隔が約200cm前後で全長約410cm、南北方向は柱痕間隔が約160cm前後で全長が約603cmの規模である。

個々の柱穴は一辺60cm前後の隅丸方形・不整円形の平面形態であり、深さは約25cm前後であった。遺構検出面は、後世の削平を受けており、実際の柱穴は数十cm程度の深さがあったものと想定できる。柱痕跡はいずれも径15cm前後であった。後述する他の掘立柱建物跡に比べて南北方向の柱痕跡間隔が極めて短いことが特徴である。

長軸の中心ラインに並んだ柱穴は、床材をのせる梁材を支える柱として機能した可能性もあり、平地式住居ではなく何らかの床構造を有したことも想定できる。各柱穴からは、須恵器・土師器細片が出土しているものの、詳細な時期決定は困難であった。周囲にみられる掘立柱建物跡の所属時期から、古墳時代後期～飛鳥時代に使用されたものと思われる。

〔掘立柱建物跡 b〕 (図6.2.17)

J11h1～J11h2地区で検出された掘立柱建物跡で、柱穴190・192・196・243・244によって構成されている。長軸が南北方向からやや東に振れた方向となり、南西隅の柱穴は調査区外で検出できなかったものの東西方向1間・南北方向2間の構成と考えられる。東西方向は柱痕跡間隔が約295cm、南北方向は柱痕跡間隔が170cm前後で全長約355cmである。ただし、西方向は調査区外で柱穴検出が不可能であったため、西側にさらに建物が展開する可能性はある。

個々の柱穴は一辺60cm前後の隅丸方形・不整円形の平面形態であり、深さは約25cm前後であった。遺構検出面は、後世の削平を受けており、実際の柱穴は数十cm程度の深さがあったものと想定できる。柱痕跡はいずれも径15cm前後であった。柱穴243は平面が径15cm程度の円形として検出されたが、おそ

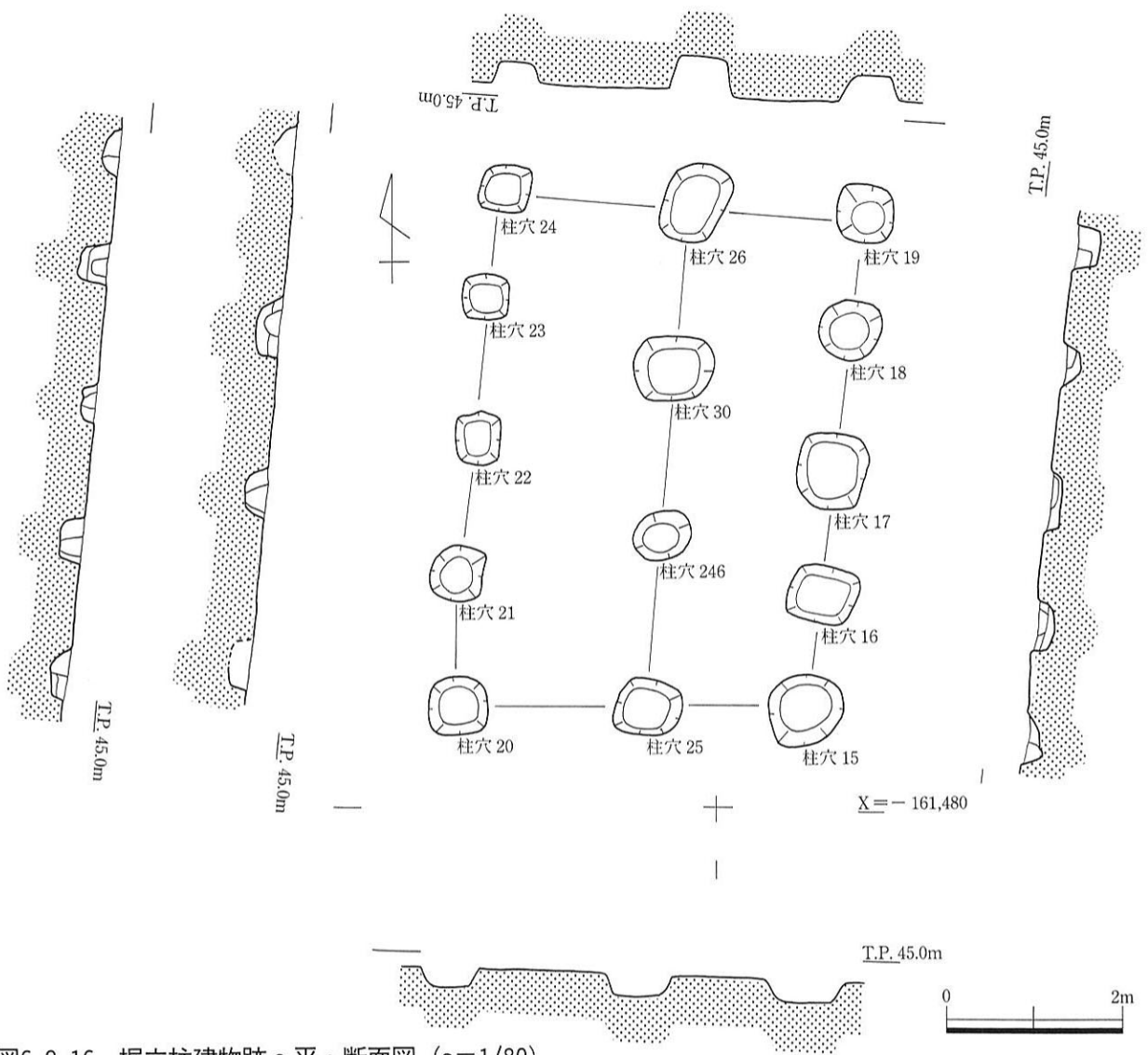


图6.2.16 掘立柱建物跡 a 平・断面図 (s=1/80)

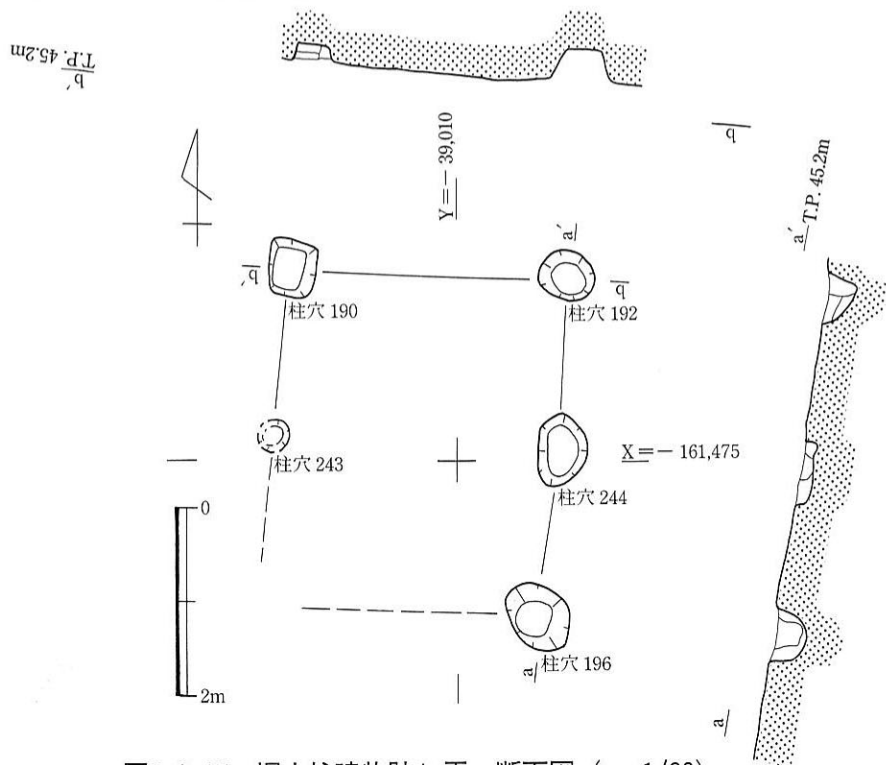


图6.2.17 掘立柱建物跡 b 平・断面図 (s=1/80)

らくこういった柱根部分の基部のみが検出されたものと考えられる。

当掘立柱建物跡が、想定したとおりの1間×2間規模であった場合には、小規模な小屋状の建物であったと想定できる。束柱に相当する柱穴がないため、平地式住居の構造をとっていた可能性が高い。各柱穴からは、須恵器・土師器細片が出土しているものの、詳細な時期決定は困難であった。周囲にみられる掘立柱建物跡の所属時期から、古墳時代後期～飛鳥時代に使用されたものと思われる。

〔掘立柱建物跡 c〕 (図6.2.18)

J10h10～J11h1地区において検出された掘立柱建物跡で、柱穴272, 277, 434, 435, 436, 437, 438, 439, 440, 441によって構成されている。長軸方向は南北ラインからやや東側に振れた方向で、東西方向が2間、南北方向が3間という構成をとる。規模は、東西方向の各柱芯間隔が175cm前後で全長約350cm、南北方向の各柱芯間隔が155cm前後で全長約495cmとなる。

各柱穴の平面形態は、直径40～70cmの不整円形で深さは約40cm程度である。柱穴深度が浅いのは、後世の削平によるものと考えられる。柱穴埋土の状況から柱痕跡は確認できず、建物廃棄後に柱の抜き取りが行われた可能性が高い。柱穴436, 441では柱穴底面に径10cm程度の凹みがあり、これが柱根部分に相当すると考えられる。また、柱列のうち西辺と東辺は平行にならんでおらず、北側にやや広がる平面形態である。また、側柱の内側に柱穴はみられず、束柱などは存在していなかったと考えられる。このため、床構造をもたない平地式住居の構造をとっていたと考えられる。

各柱穴からは、須恵器・土師器細片が出土しているものの、詳細な時期決定は困難であった。周囲にみられる掘立柱建物跡の所属時期から、古墳時代後期～飛鳥時代に使用されたものと思われる。

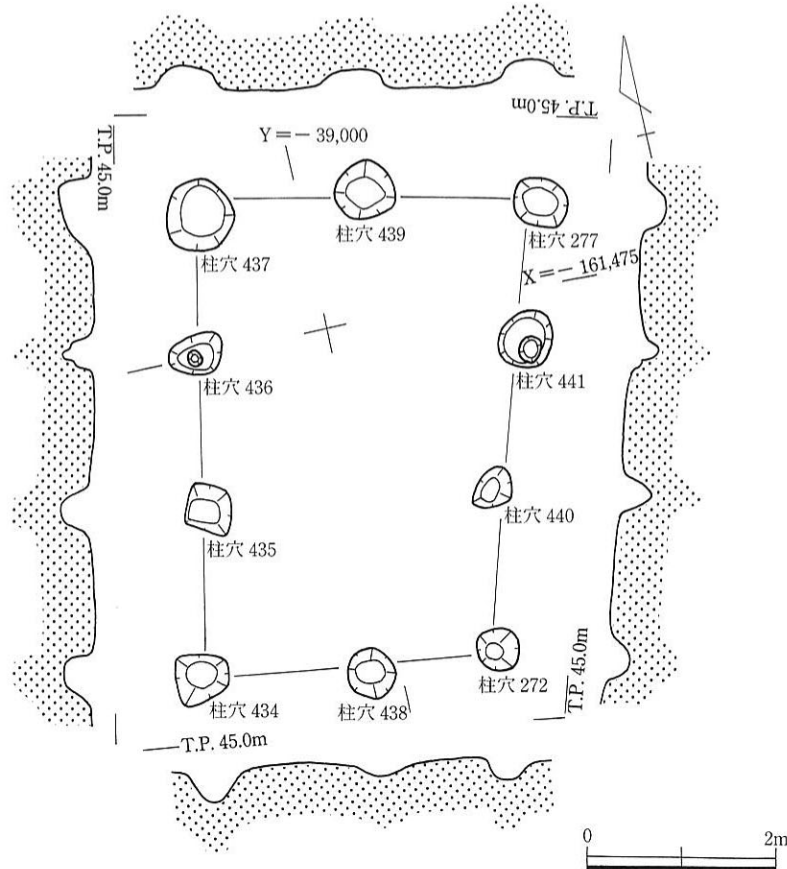


図6.2.18 掘立柱建物跡 c 平・断面図 (s=1/80)

〔掘立柱建物跡 d〕 (図6.2.19)

J10g10～J10h10地区で検出された掘立柱建物跡で、柱穴169,172,173,178,279,351,368,404,408,426,421によって構成されている。長軸方向は北北西-南南東方向に沿っており、東西方向が3間、南北方向が2間の構成で、側柱列の内側中央部に柱穴が一つ検出されている。建物規模は、東西方向の柱芯間隔が170～220cmで全長が約560cm、南北方向の柱芯間隔が約185cmで全長約360cmである。

各柱穴の平面形態は、径40～55cmの不整円形もしくは隅丸方形を呈し、深さは約16～50cmとバラエティに富んでいる。柱穴172,279,351が50cm前後の深さになるのは、コーナー部分の柱に重量のかかることが考慮されて柱穴深長が大きくなったものと思われる。いずれにせよ、他の遺構同様に、後世の削平を受けているため、検出深長は実際の柱穴深長より小さいものと考えられる。

側柱列の内側の棟持ライン上には柱穴426しか検出できなかった。また、この柱は建物長辺の柱からはずれた位置にあることから、長軸方向・短軸方向いずれにも梁材を支える柱とはなりにくい。つまり、柱穴426に据えられた柱は棟支えの機能しか持たず、当建物は床構造のない、平地式住居の構造をとっていたと類推できる。

各柱穴からは、須恵器・土師器細片が出土しているものの、詳細な時期決定は困難であった。周囲にみられる掘立柱建物跡の所属時期から、古墳時代後期～飛鳥時代に使用されたと思われる。

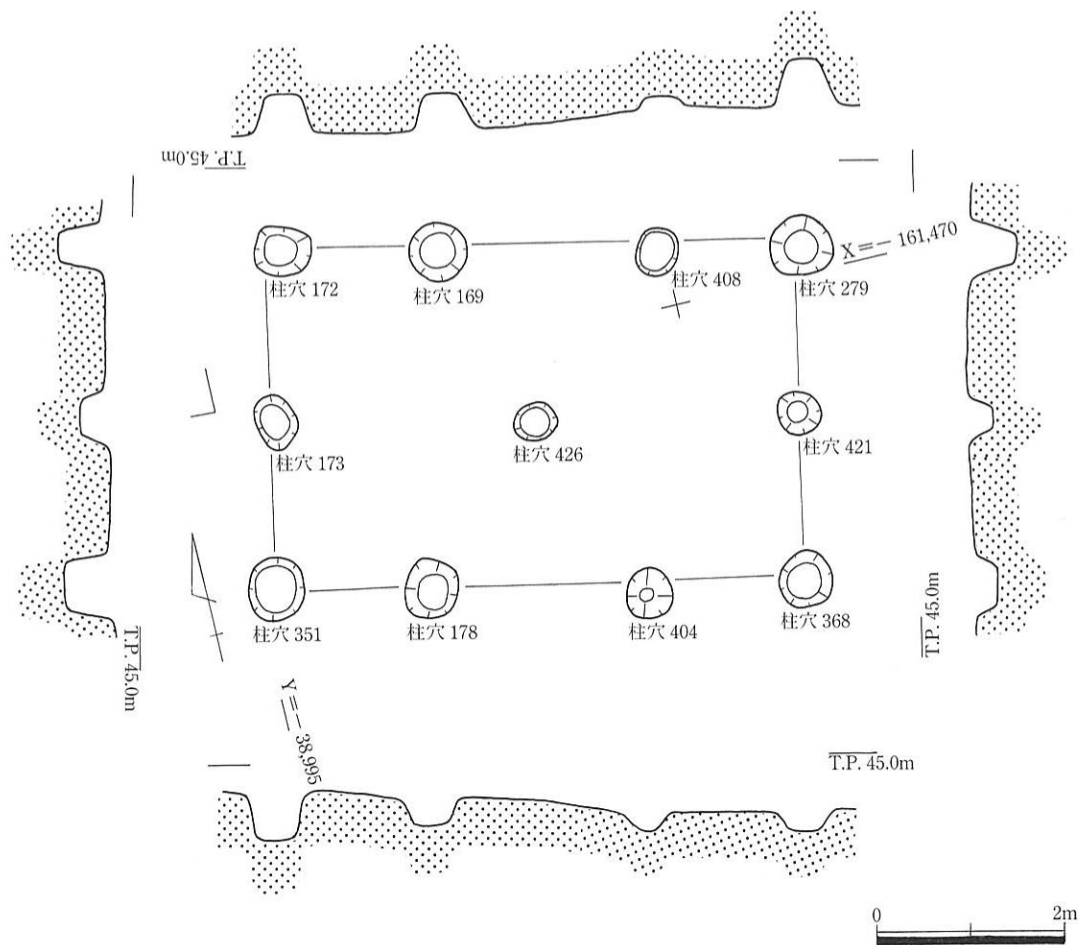


図6.2.19 掘立柱建物跡 d 平・断面図 (s=1/80)

〔掘立柱建物跡 e〕 (図6.2.20)

J11g1地区で検出された掘立柱建物で、柱穴184,185,186,187,239,240,242,253によって構成されている。西半分が調査区域外であり、東半分だけが検出可能であった。長軸方向は北北西-南南東方向に沿っており、検出された範囲から、東西方向が2間、南北方向が3間の柱構成と推定できる。規模は長軸の柱芯間隔約240cm・全長約720cm、短軸の柱芯間隔が約170cm・全長約340cmと考えられる。棟持ライン上に柱穴239,185がみられることから、これらは床を支える梁材を支える柱と考えられ、床をもった建物構造が推定できる。

個々の柱穴はいずれも、20~30cm程度の深さしかない。これは、当遺構が、段丘上面という最も後世の削平を受けやすい位置にあったためと考えられる。本来は、他の掘立柱建物同様40~50cm程度の深さはあったものと想定したい。

各柱穴からは、須恵器・土師器細片が出土しているものの、詳細な時期決定は困難であった。周囲にみられる掘立柱建物跡の所属時期から、古代以前に使用されたものと思われる。

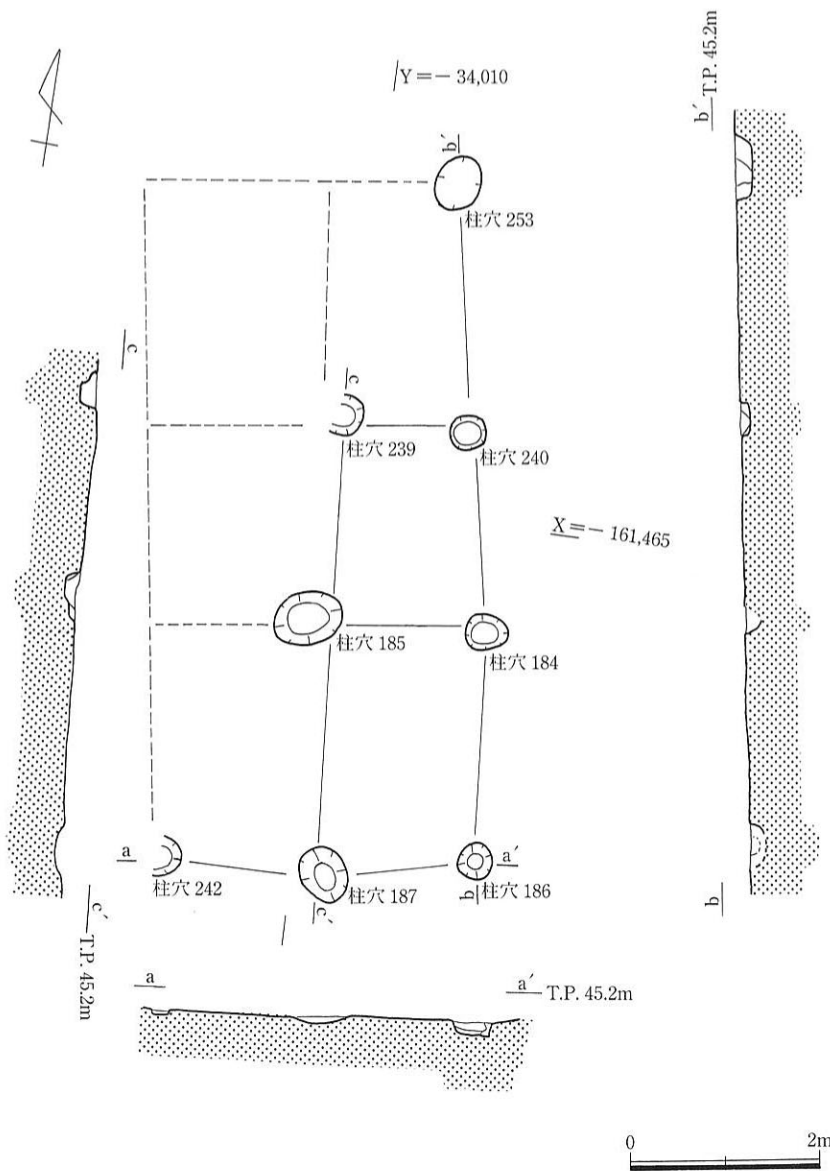


図6.2.20 掘立柱建物跡 e 平・断面図 (s=1/80)

〔掘立柱建物跡 f〕 (図6.2.21, 22)

J11f1～J11g1地区で検出された掘立柱建物で、柱穴34, 35, 36, 38, 40, 41, 42, 43, 44, 45, 46, 47によって構成されている。長軸が西北西-東南東方向の3間で柱芯間隔約160cm・全長約480cm、短軸が2間で柱芯間隔約155cm・全長約310cmの規模である。各柱穴の深さは約25～40cm程度であるが、当遺構も段丘上面に所在することから遺構面はかなりの削平を受けていると考えられる。本来の柱穴深はさらに数10cmを想定しなければならない。

側柱列の内側には柱穴44, 45があり、棟持ライン上に柱が4本並ぶ配列をとる。柱穴44, 45は両側の側柱とそれぞれ対応する位置にあり、何らかの梁材が組める柱穴配列である。このことから、床構造を持つ建物であったことが想定できる。

建物を構成する柱穴のうち、柱穴40, 43, 44, 45, 46, 47は竪穴住居跡260の床面整地土層の上から掘り込まれている。このことから、当遺構は竪穴住居跡260に後出する建物と考えられる。また、北西端にある柱穴40の埋土には図6.2.22に示す須恵器坏身が1点出土している。TK209型式に所属することから6世紀末～7世紀初頭に廃絶していると考えられる。

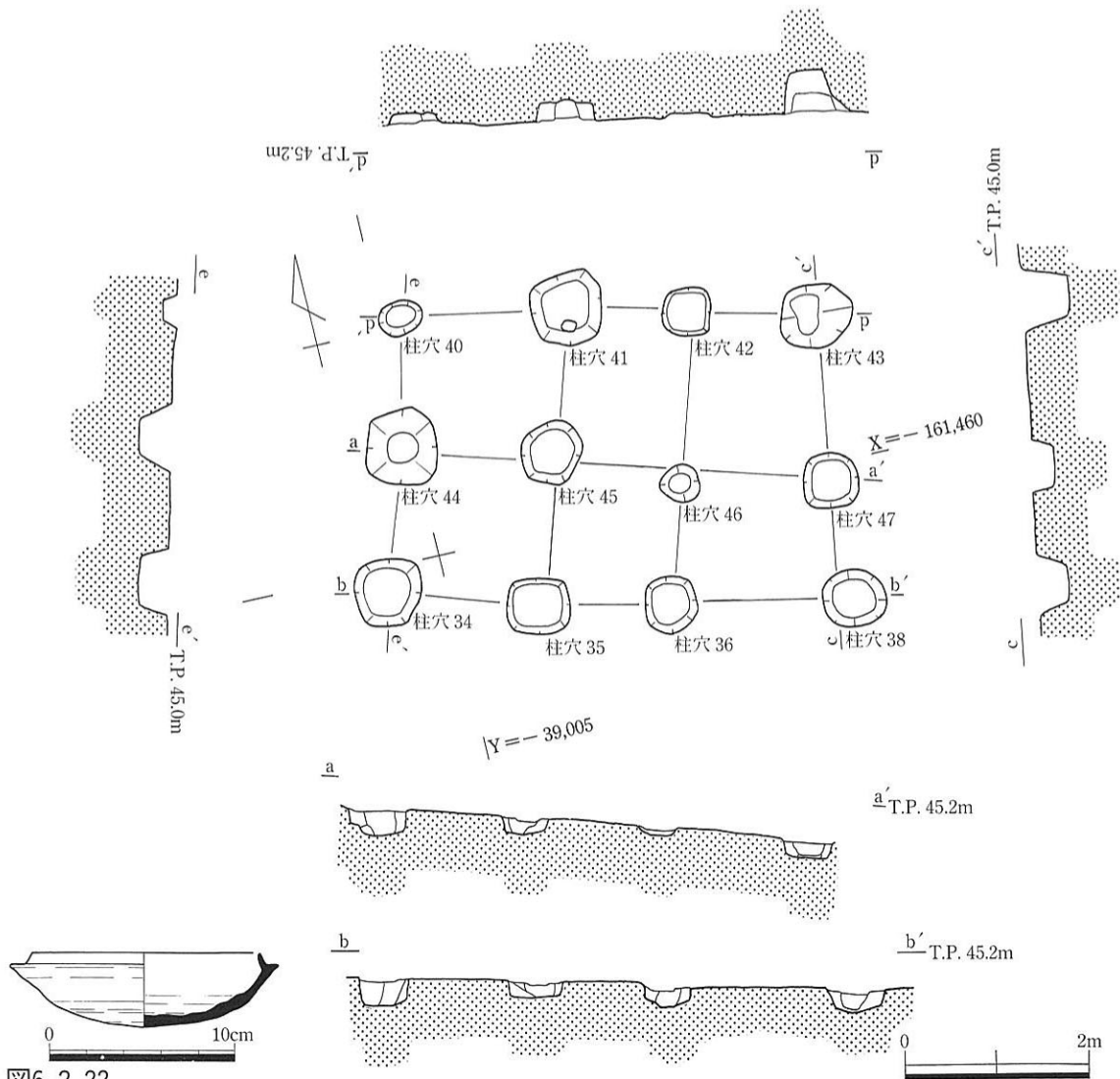


図6.2.22

柱穴40出土土器 (s=1/4)

図6.2.21 掘立柱建物跡 f 平・断面図 (s=1/80)

〔掘立柱建物跡 g〕 (図6.2.23)

J10f10地区で検出された掘立柱建物で、柱穴116,127,128,162,165,374,376,382,442,491,によって構成されている。長軸が北北西-南南東方向の3間で柱芯間隔約170cm・全長約520cm、短軸が2間で柱芯間隔約200cm・全長約400cmの規模である。各柱穴は、平面が径50~80cm程度の不整円形で深さが20~30cm程度である。検出深長は短いのは、後世の削平によるものと考えられる。

側柱列の内側には柱穴は確認できなかった。このため、床を支える梁材などを設営することは困難と考えられ、いわゆる平地式住居の形態をとる建物であったと想定できる。長辺の側柱間隔が、他の掘立柱建物に比べて短いのは、棟支えの柱がないために、壁を強化して上屋を支える必要があったためかもしれない。また、当遺構の柱穴は、他の建物に比べて掘り方の平面規模が大きいことも特徴である。

建物を構成する柱穴のうち、すべてが竪穴住居跡205もしくは竪穴住居跡206の床面整地土層の上面から掘り込まれている。このことから、当建物は竪穴住居廃絶後に形成された施設と考えられる。柱穴内から明確な時期を示す土器片は出土していないものの、竪穴住居跡206が6世紀末~7世紀初頭の廃絶が想定できることから、当遺構は7世紀に形成されたものと考えられる。

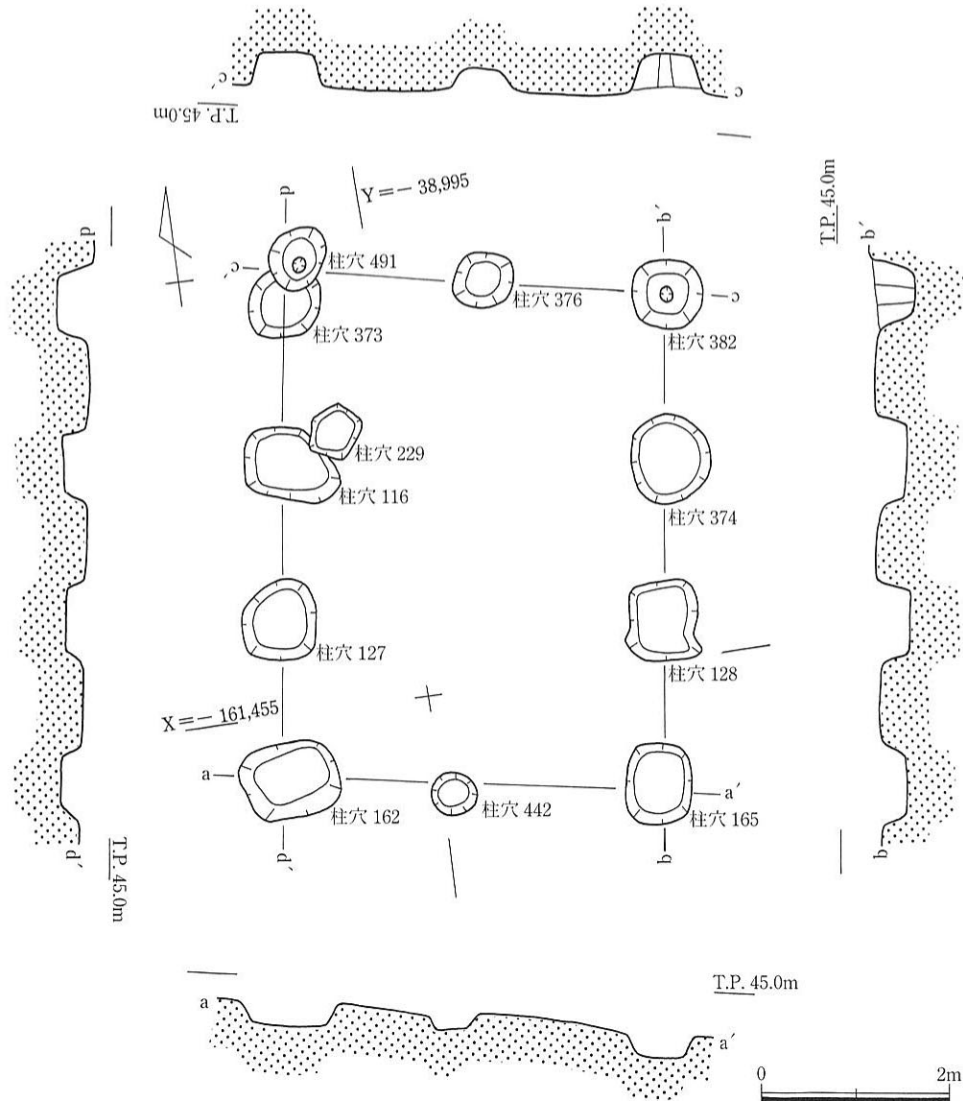


図6.2.23 掘立柱建物跡 g 平・断面図 (s=1/80)

〔掘立柱建物跡 h〕 (図6.2.24)

J10g10～J10g9地区で検出された掘立柱建物で、柱穴282, 288, 289, 406, 412, 411, 414, 444, 443によって構成されている。平面プランは、2×2間で一辺の柱芯間隔約160cm・全長約320cmの規模である。中心にも柱穴が検出されている。中心ラインは北北西-南南東方向である。各柱穴は、平面が径50～60cm程度の不整形円で深さが20～50cm程度である。遺構検出面は後世の削平を受けていると考えられ、実際の柱穴深長は検出長を上回ると考えられる。

中心に柱をもつ配置から、側柱列の中柱と中心柱をつなぐ梁材の設定が可能であり、梁材の上に床をもつ建物構造が想定できる。柱穴の検出深長が比較的長いことは、他の建物に比べて比較的上屋を安定させる必要性が高かったとも考えられる。このことから、当建物が小型の高床倉庫であったことが類推できる。

建物を構成する柱穴のうち、柱穴406は竪穴住居跡284の壁溝埋土層の上面から掘り込まれている。このことから、当掘立柱建物は竪穴住居跡284に後出することは確実である。竪穴住居跡284が7世紀初頭のもものと類推できることから、当掘立柱建物の所属時期は7世紀と考えたい。

〔掘立柱建物跡 j〕 (図6.2.25)

J10d10・J10e10・J11e1地区で検出された掘立柱建物で、柱穴52, 67, 210, 212, 249, 251, 262, 353によって構成されている。平面プランは、2×2間で長軸が北西-南東方向である。長辺の柱芯間隔約210cm・

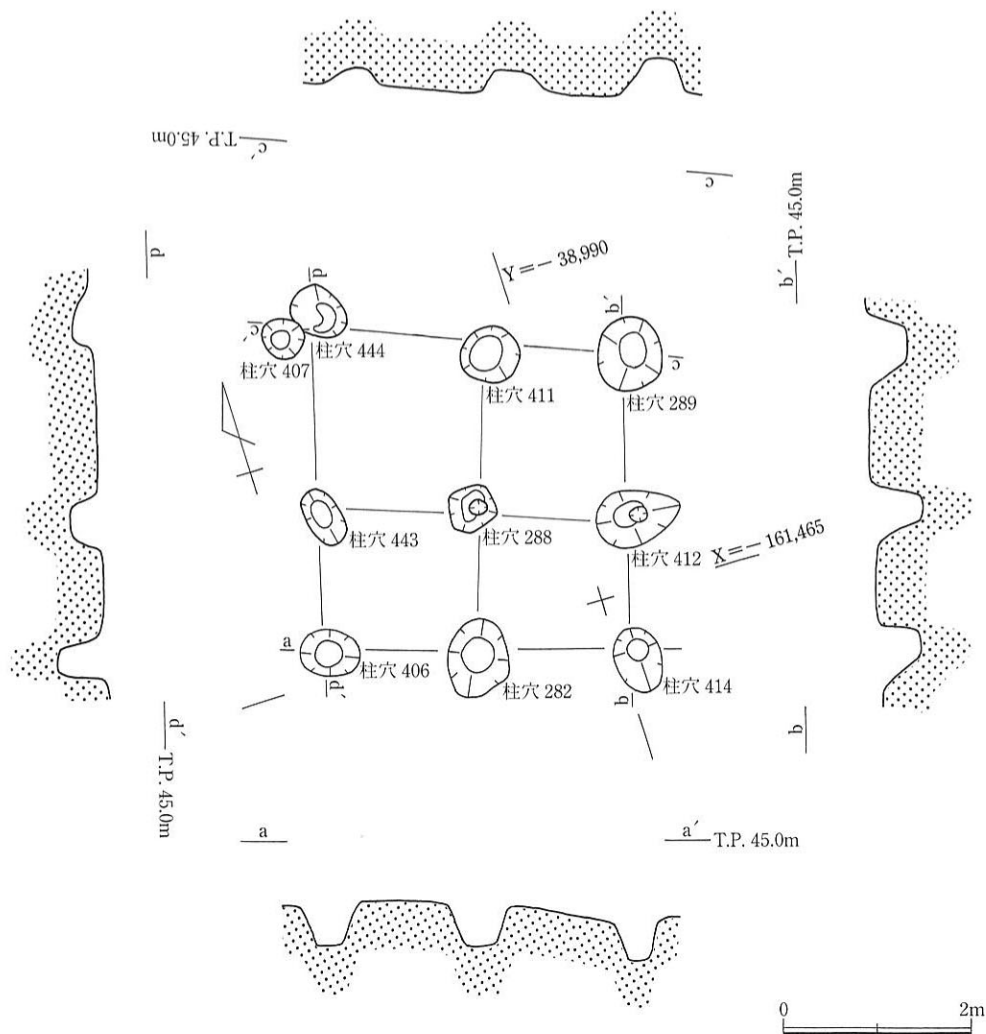


図6.2.24 掘立柱建物跡 h 平・断面図 (s=1/80)

全長約420cm、短辺の柱芯間隔約180cm・全長約360cmの規模である。各柱穴は、平面が径30～40cm程度の不整形円形で深さが20～30cm程度である。遺構所在地点は段丘上面で、最も削平を大きく受けていると考えられ、実際の柱穴深長は検出長を上回ると想定できる。

側柱列の内側には、床材を並べるための梁材を支える柱穴は確認できず、平地式住居の形態の建物と考えられる。2×2間と小型であることや、長軸方向が他の建物とは異なっていることなどから、住居ではなく簡易な小屋状の施設であった可能性が高い。柱穴内からは、須恵器・土師器の小片が出土するのみで、遺構自体の詳細な時期決定は困難である。ただし、埋土色・質は他の古墳時代後期から飛鳥時代の遺構と同じであることから、6～7世紀の遺構と考えたい。

〔掘立柱建物跡 k〕 (図6.2.26)

J10h9地区で検出された掘立柱建物で、柱穴303,305,307,312,314,317,318によって構成されている。調査区域の制限により東半部の柱穴は確認できていない。平面規模は、長軸が南北方向の3間で柱芯間隔約145cm・全長約440cm、短軸が2間で柱芯間隔約190cm・全長約380cmである。各柱穴は、平面が径60～80cm程度の不整形円形で深さが20～40cm程度である。検出深長が他の建物に比べて長いのは、傾斜地に位置し、削平を大きく受けていないためであろう。また、柱穴平面規模が大きいことも当建物の特徴である。

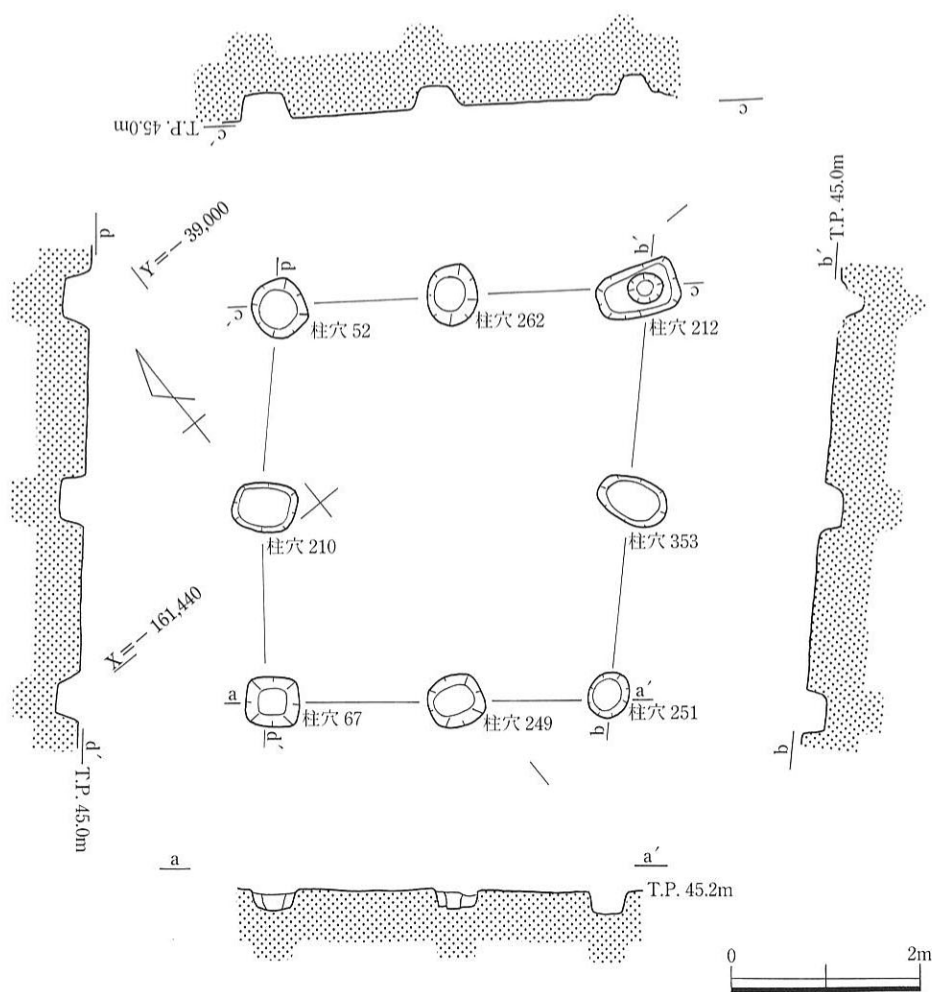


図6.2.25 掘立柱建物跡 j 平・断面図 (s=1/80)

側柱列の内側に床を支える梁材の支柱となる柱がみられないことから、平地式住居の形態であったと考えられる。長辺の柱間隔が短いのは、棟持ちの柱数が少なく、上屋構造の加重を壁で支える必要があったためと考えられる。柱穴内からは、須恵器・土師器の小片が出土するのみで、遺構自体の詳細な時期決定は困難である。ただし、埋土色・質は他の古墳時代後期から飛鳥時代の遺構と同じであることから、6～7世紀の遺構と考えたい。

〔掘立柱建物跡1〕(図6.2.27)

J10c10～J10d10地区で検出された掘立柱建物で、柱穴531,532,534,535,536,537,538,539,540,541,730によって構成されている。調査区域の制限により北西端の柱穴は確認できていない。平面規模は、長辺が南北方向の4間で柱芯間隔約195cm・全長約780cm、短辺が2間で柱芯間隔約180cm・全長約360cmである。各柱穴は平面が径40～50cm程度の不整円形が中心で、柱穴531,536,540といったコーナー部の柱穴だけが長軸約70cm程度の楕円形となる。柱穴の深さは、いずれも20～30cm程度である。特に、南辺中央の柱穴730だけが、深さ約10cm程度と極めて浅いことが注目される。段丘上面に位置するため後世の削平が著しく、実際の柱穴深長はさらに数十cmを想定しなければならない。

側柱列の内側に床を支える梁材の支柱となる柱がみられないことから、平地式住居の形態であったと

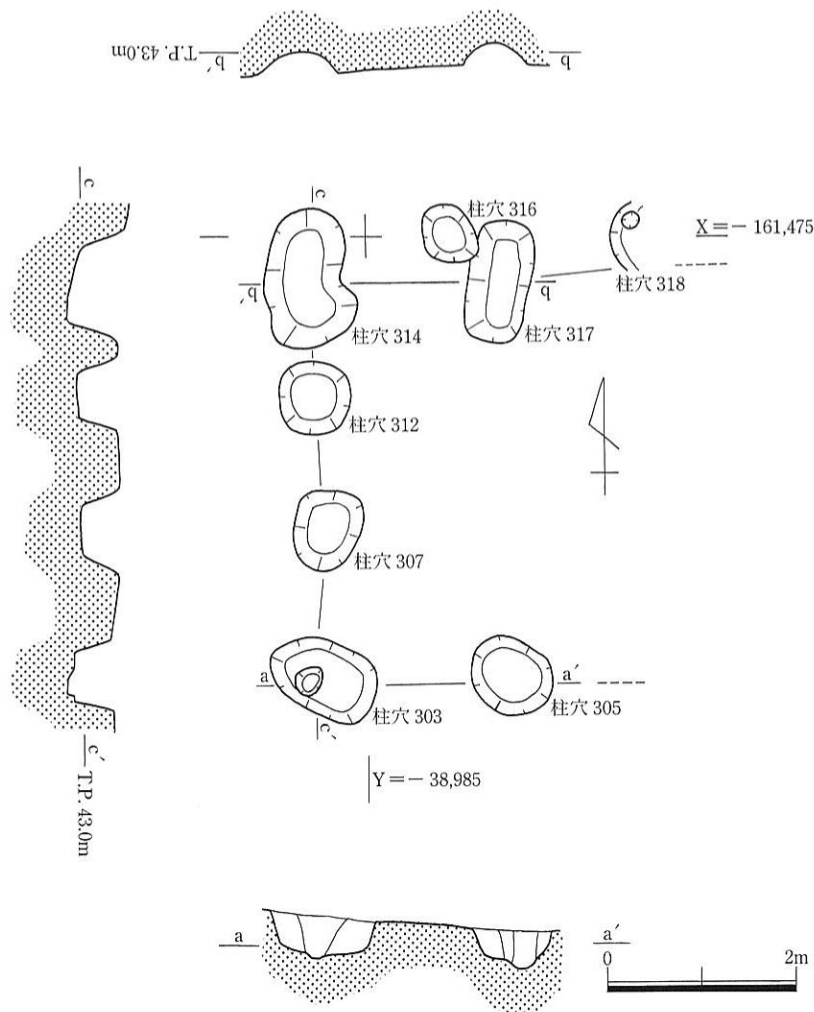


図6.2.26 掘立柱建物跡 k 平・断面図 (s=1/80)

考えられる。他の掘立柱建物に比べかなり長大な規模となる上に、棟を支える柱が2本しか想定できないことから、壁に上屋からの加重が大きくかかる構造であったと想定できる。このことに呼応するように、側柱の柱間隔は他の建物に比べ短くなっている。規模・構造が、今回検出された他の建物と異なる点は注目されよう。

柱穴内から須恵器・土師器の小片が出土するのみで、古代以前の遺構ということ以外は詳細な所属時期の決定は困難である。ただし、埋土色・質は他の古墳時代後期から飛鳥時代の遺構と同じであることから、6～7世紀の遺構と考えたい。当遺構は、今回検出した掘立柱建物の中では最大規模の建物であり、集落内における何らかの中心施設と考えることができよう。

〔掘立柱建物跡 m〕 (図6.2.28・写真6.2.5)

J10b1・J10b2・J10c1・J10c2地区で検出された掘立柱建物で、柱穴567,569,570,572,574,577,682,683,685,692,693,834によって構成されている。平面規模は、長辺が東西方向の3間で柱芯間隔約210cm・全長約630cm、短辺が2間で柱芯間隔約150cm・全長約300cmである。各柱穴は平面が径40～60cm程度の

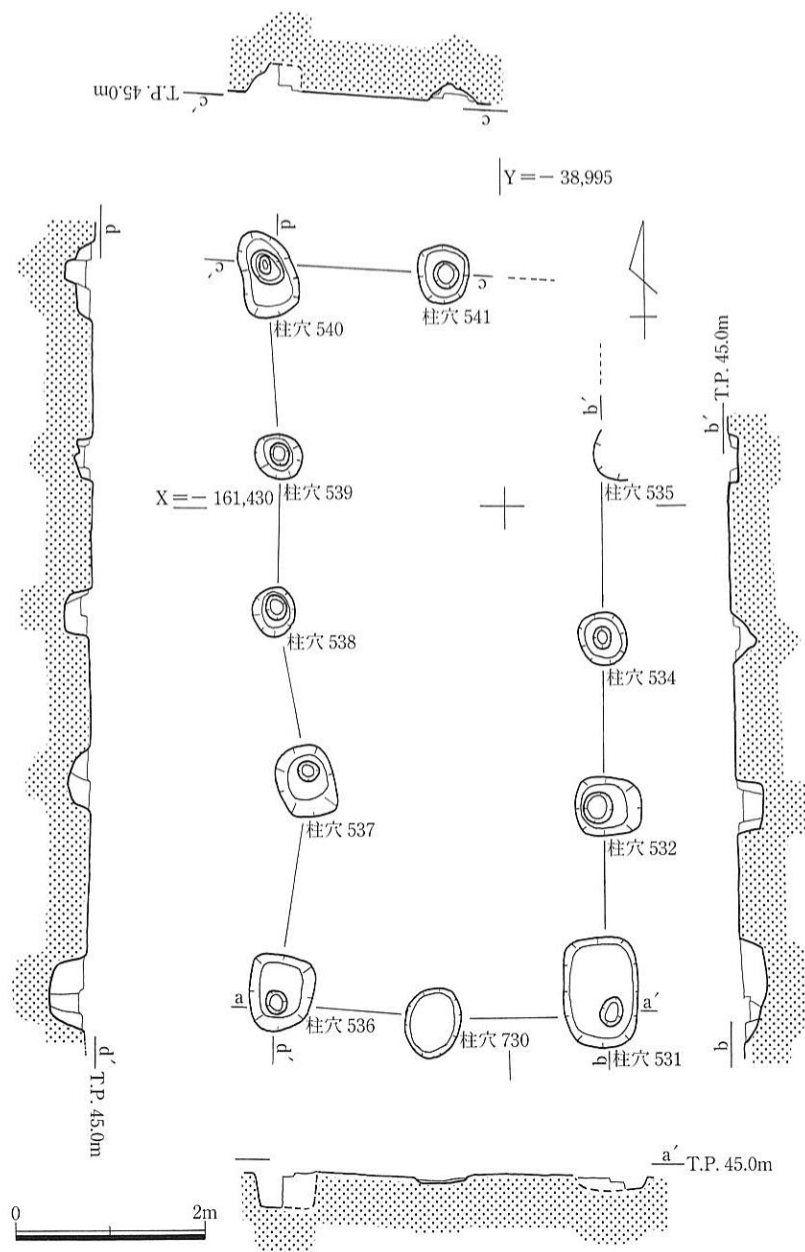


図6.2.27 掘立柱建物跡 | 平・断面図 (s=1/80)

不整形円形が中心である。柱穴の深さはいずれも20~30cm程度であるが、南辺の柱穴はいずれも20cmの深さである。当建物の検出面は傾斜していることから、南辺付近は最も検出面のレベルが高く、より大きく後世の削平を受けやすい地形であったと考えられる。このため、いくつかの柱穴深長は浅いものとなっている。

また、棟ライン上に柱穴が4基並ぶことから、床材を支える梁材の設定が可能な構造と考えられる。おそらく、床構造をもった建物であったと想定できる。また、当建物の平面形態上の特徴は、北辺の柱列が直線的には並ばずに西半部の建物幅が短い不整形な形状となっていることである。この原因を特定することは難しいが、棟支えの柱数が多くて上屋の加重が分散する形態であるため、側柱列の不整合が許容される状況だったとも考えられよう。

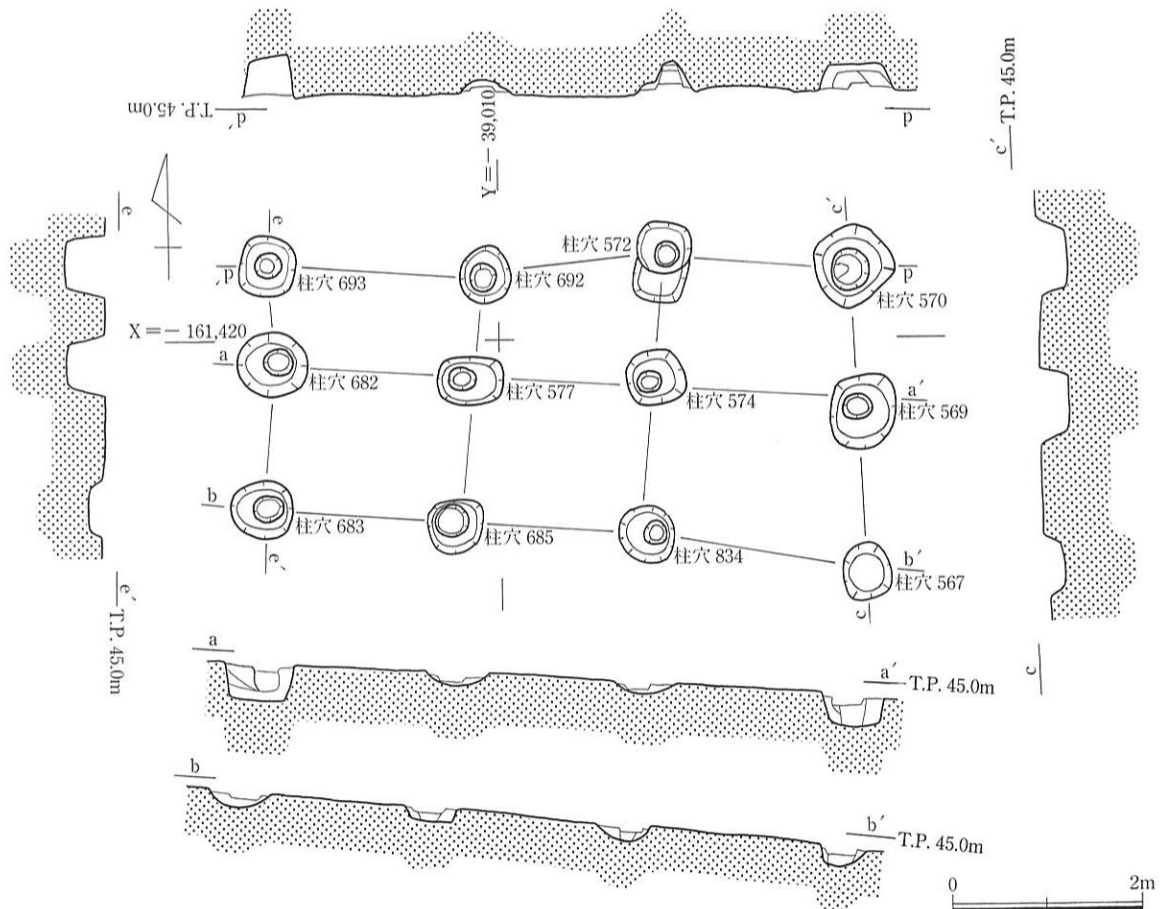


図6.2.28 掘立柱建物跡 m 平・断面図 (s=1/80)



写真6.2.5 掘立柱建物跡 m

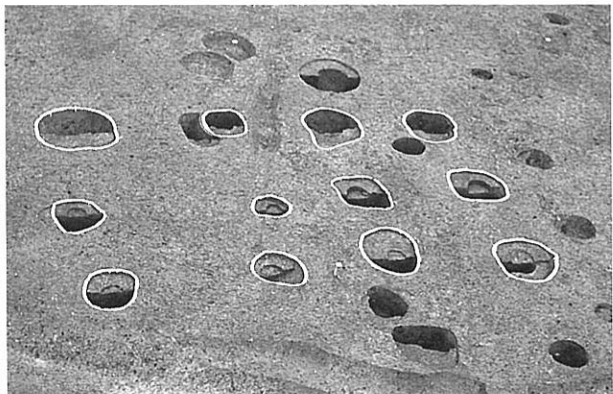


写真6.2.6 掘立柱建物跡 n

遺物に関しては柱穴内から須恵器・土師器の小片が出土するのみで、古代以前の遺構ということ以外は詳細な所属時期の決定は困難である。ただし、埋土色・質は他の古墳時代後期から飛鳥時代の遺構と同じであることから、6～7世紀の遺構と考えたい。

〔掘立柱建物跡 n〕（図6.2.29・写真6.2.6）

J11b2～J11c2地区で検出された掘立柱建物で、柱穴667,668,670,672,674,679,688,689,690,717,718,719によって構成されている。平面規模は、長辺が南北方向の3間で柱芯間隔約165cm・全長約500cm、短辺が2間で柱芯間隔約150cm・全長約300cmである。各柱穴は平面が径40～60cmの不整円形で、深さは30～60cm程度である。

また、棟ライン上に柱穴が4基並ぶことから、床材を支える梁材の設定が可能な構造と考えられる。おそらく、床構造をもった建物であったと想定できる。長軸中心ラインの柱列が直線的に並び、側柱列が多少不整列なのは、中心ラインの柱列によって棟支えを行い、側柱列への加重が大きくなかったことの現われとも考えられよう。

遺物に関しては柱穴内から須恵器・土師器の小片が出土するのみで、古代以前の遺構ということ以外は詳細な所属時期の決定は困難である。ただし、埋土色・質は他の古墳時代後期から飛鳥時代の遺構と同じであることから、6～7世紀の遺構と考えたい。

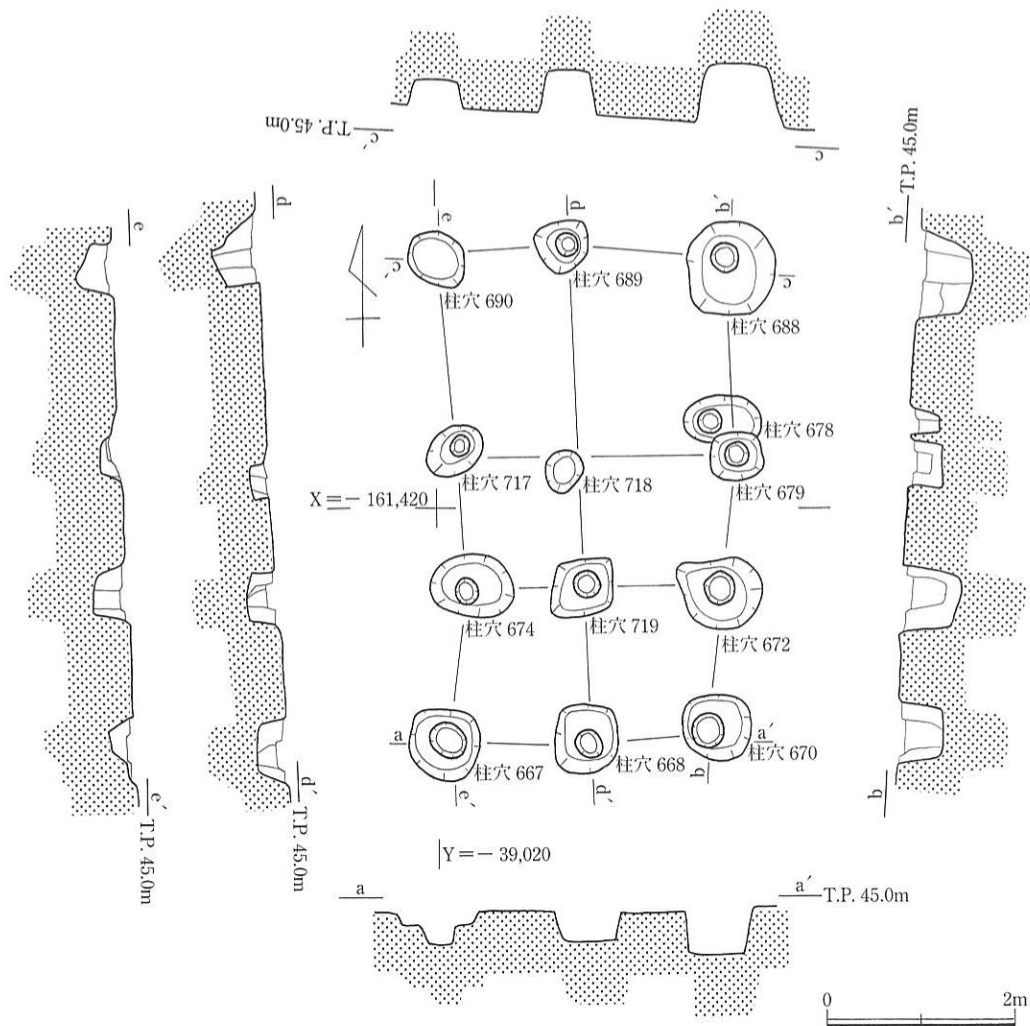


図6.2.29 掘立柱建物跡 n 平・断面図 (s=1/80)

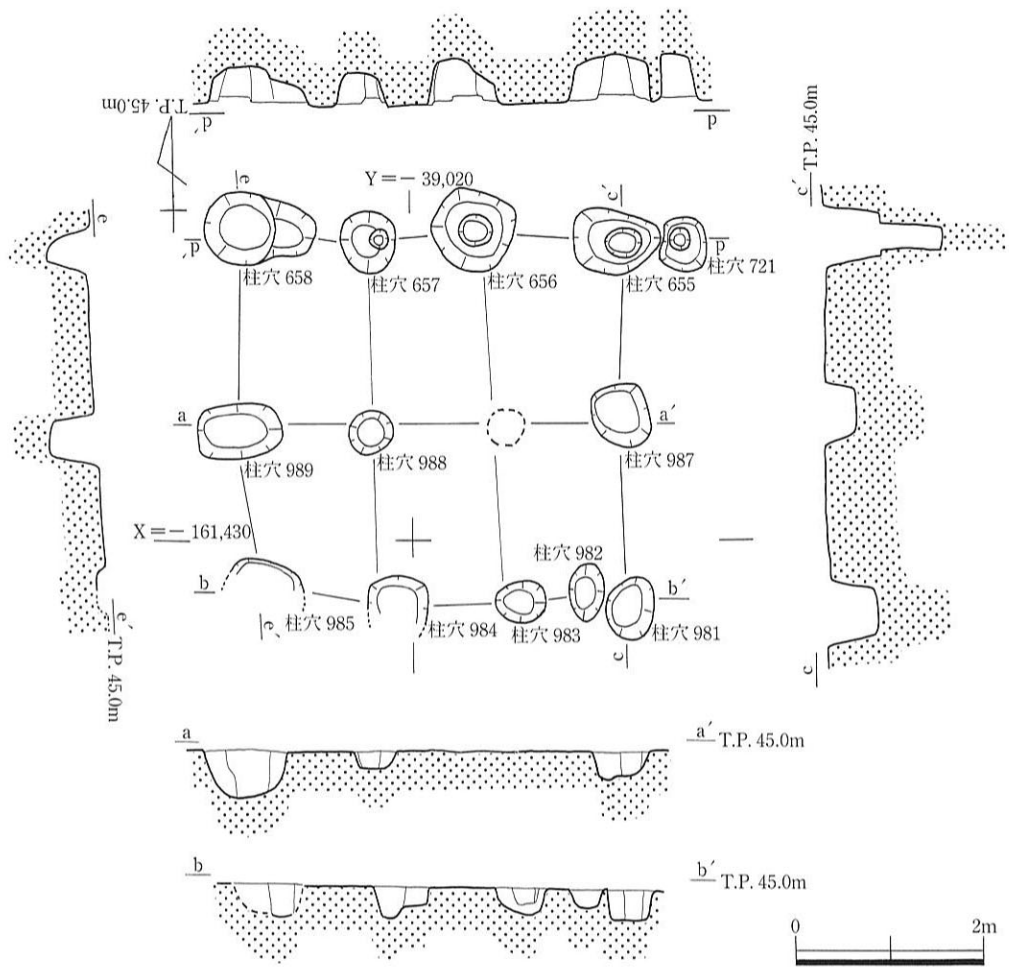


图6.2.30 掘立柱建物跡の平・断面図 (s=1/80)

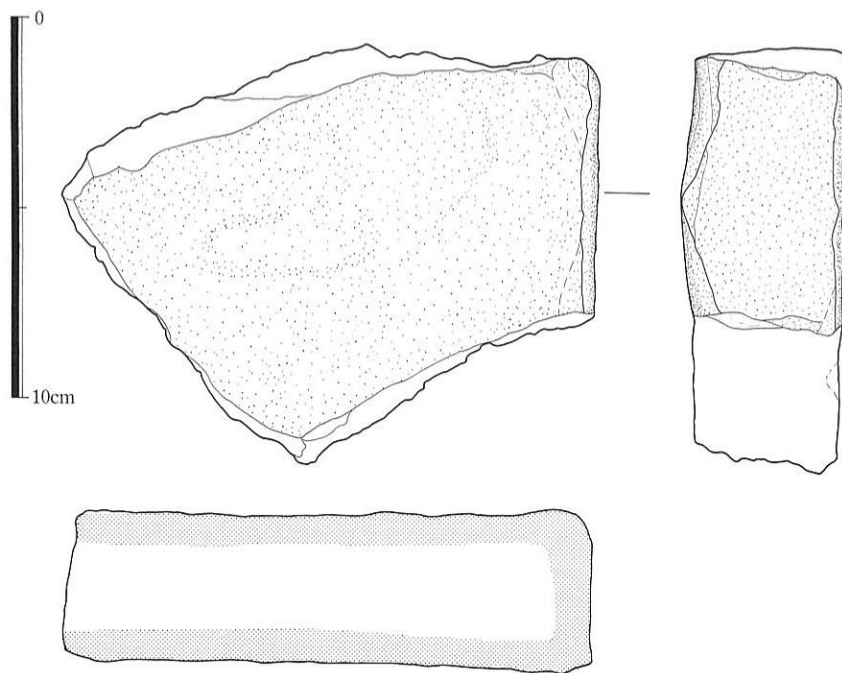


图6.2.31 掘立柱建物跡の柱穴988出土遺物 (s=1/2)

〔掘立柱建物跡 o〕 (図6.2.30・31)

J11c2・J11d2・J11c3・J11c3地区で検出された掘立柱建物で、柱穴655,656,658,981,983,984,985,987,988,989によって構成されている。平面規模は、東西方向の長辺が3間で柱芯間隔約135cm・全長約400cm、短辺が2間で柱芯間隔約140cm・全長約380cmである。各柱穴は平面が径40～60cmの不整円形で、深さは50～60cm程度である。唯一、柱穴655の柱痕部だけが、約120cmもの深さとなっている。遺構面が削平を受けているはずの段丘上面に位置する周囲の掘立柱建物と同条件の立地であるにもかかわらず、全体に深い柱穴によって構成されている点は注目される。

柱穴656と柱穴983の中間地点には柱穴が存在したと考えられるが、この部分には溝979があって、柱穴の存在は確認できず、切りあい関係の有無も明確ではなかった。この部分に柱穴があったとすると、床を支える梁材の設定が可能となり、床をもった建物構造が想定できる。また、当建物は、側柱の柱間隔が極めて短い。そのため、建物規模は2×3間の掘立柱建物としては規模が小さい。それにもかかわらず、先述のように柱穴がすべて深くなっている。これは、規模にしては上屋の荷重が大きかったことによるものであり、高床を指向する小型建物であったことを示す属性とも考えられる。

出土した遺物については、土器としては柱穴内から須恵器・土師器の小片が出土するのみで、古代以前の遺構という以外は、詳細な時期決定は困難である。ただし、柱穴988からは、凝灰岩製の磚の破片(図6.2.31)が出土している。この磚は、表面が黒く、火を受けた痕跡がみられる。建物の一部に使われていたものが火災にあって破壊されたのであろうか。柱穴中では底面近くに水平に置かれており、簡易な礎石として転用されていたと考えられる。磚自体の正確な年代は判断できないが、少なくとも7世紀以後のものと推測される、当建物についても7世紀を中心とした所属時期を想定したい。

〔掘立柱建物跡 x〕 (図6.2.32)

J10h10～J10i10地区で検出された掘立柱建物で、柱穴247,248,274,275,291,292,350によって構成されている。一部柱穴が確認できていないが、主軸方向が西南西-東北東の2×2間の建物と思われる。平面規模は、長辺の柱芯間隔約180cm・全長約360cm、短辺の全長約280cmである。各柱穴は平面が径30～50cmの不整円形で、深さは20cm程度である。柱穴が浅いのは、全体に削平が顕著なためと考えられる。

中央に柱をもつことから、床を支える梁材の設定が可能となり、床構造の存在が想定できる。小規模な小屋上の施設と考えられる。

出土した遺物については、土器としては柱穴内から須恵器・土師器の小片が出土するのみで、古代以前の遺構という以外は、詳細な時期決定は困難である。周囲の遺構との類似性、主軸方向の同一性から、7世紀を中心とした所属時期が想定できる。

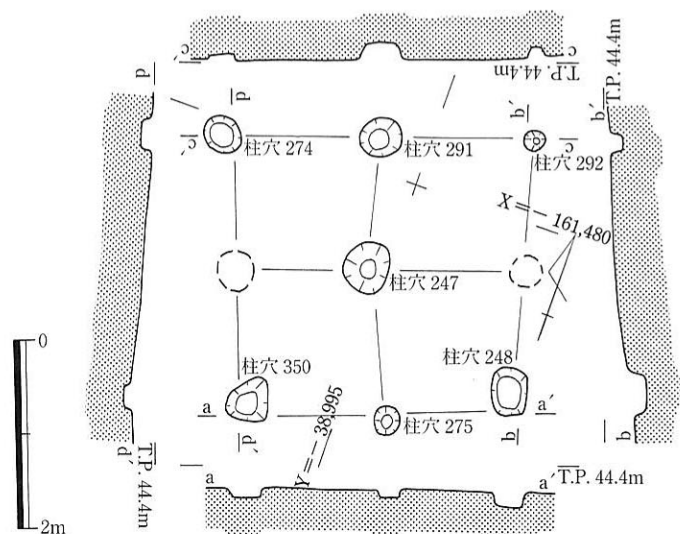


図6.2.32 掘立柱建物跡 x 平・断面図 (s=1/80)

〔土器棺384〕（図6.2.33・34、写真6.2.7）

J10h9地区の調査区域端で、完形の須恵器甕が口縁部を須恵器坏と土師器高杯によって蓋をされた状態で出土した。調査区境界に側溝を掘っていた時に検出されたもので、土器がどのような遺構の中に納められていたか確認できなかった。須恵器甕は主軸を斜め方向に置かれており、内部には褐色粗砂まじりシルトが堆積していた。須恵器坏は低部を甕内部に向けた状態で口縁部に密着するように置かれており、その上から土師器高杯の坏部を反転させて蓋をしている。

須恵器坏は、その形態から TK10型式に属すると考えられ、須恵器甕も 6 世紀後半～7 世紀前半とみられる特徴をもっている。土師器高杯の所属時期は明確ではない。このことから、これらの土器は 6 世紀

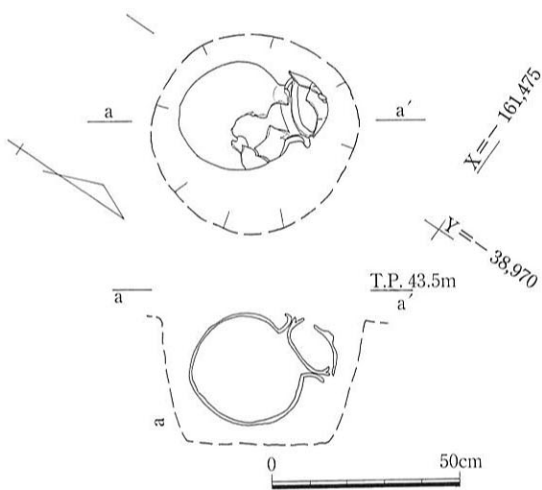


図6.2.33 土器棺384平・断面図 (s=1/20)



写真6.2.7 土器棺384検出状況

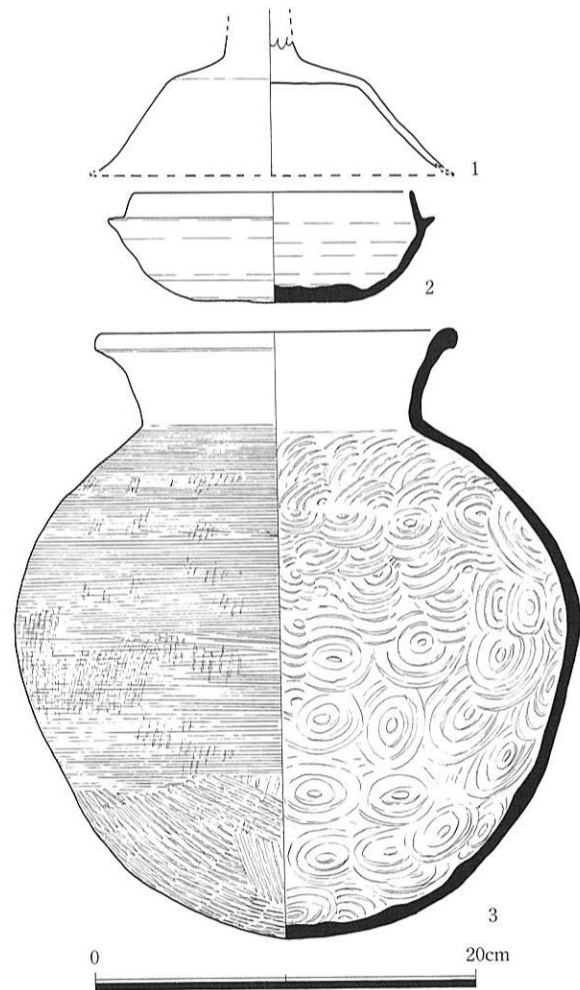


図6.2.34 土器棺384出土土器

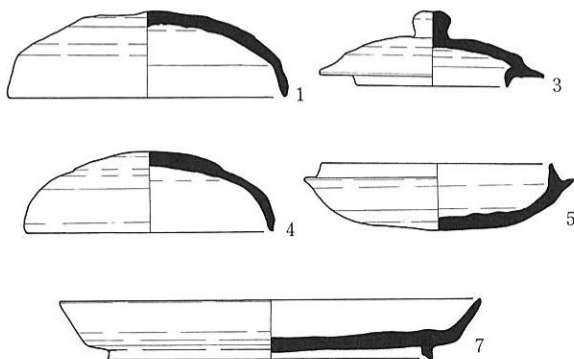
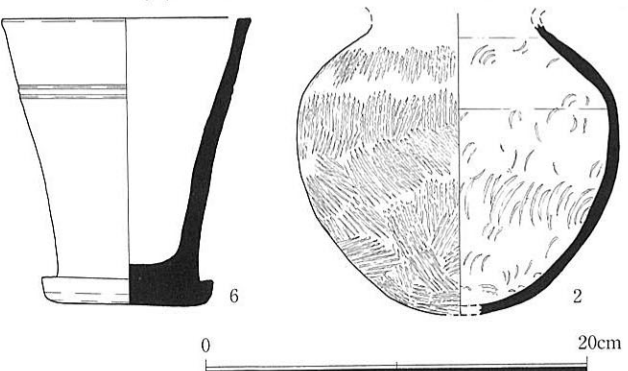


図6.2.35 B 地区北半出土土器



の後半段階で埋置された可能性が高い。

また、甕内部の土壌を採取して脂肪酸分析を行った結果、ヒトに類似した脂肪酸成分が検出された。口縁部が明確に封されていることなどから、土器棺とするのが妥当と思われる。甕のサイズが高さ約32 cm 程度であるため、遺体は小さく、乳幼児が埋葬されたと想定できる。

その他の出土遺物（図6.2.35）

図6.2.35に示した土器は、B地区北半から出土したその他の土器で、図化が可能であった個体である。6.2.35-1は溝979出土の須恵器坏蓋であるが、その他はすべて包含層出土である。概観すれば、6.2.35-7が奈良時代の皿であるが、それ以外はすべてTK43型式～TK209型式に属し6世紀後半～7世紀初頭のもと考えられる。B地区北半は遺構からの出土遺物が少なく、各遺構の時期決定が容易ではない。しかし、包含層から出土する土器のうち時期のわかるものは、大半は6世紀後半～7世紀の遺物である。このことから、遺構群形成の主體的時期は古墳時代後期後半から飛鳥時代にあると考えたい。

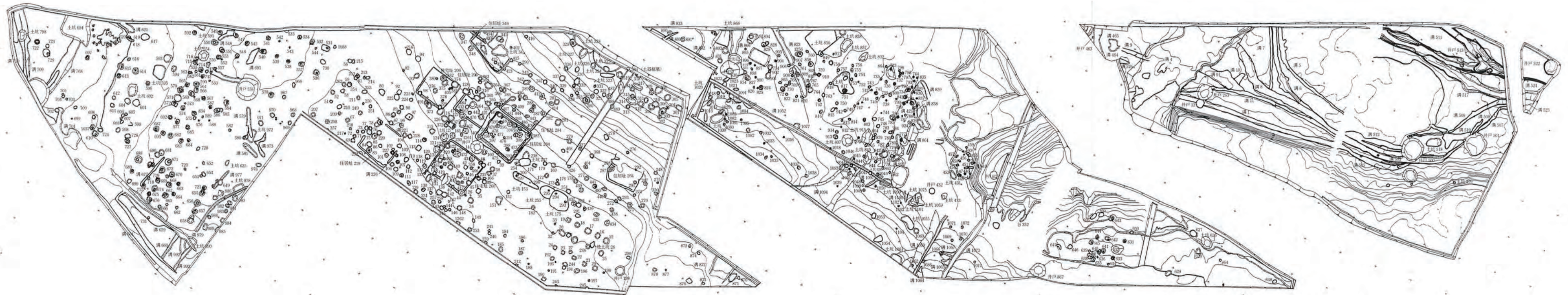


图6.2.36 B地区遗构配置图 (s=1/400)

第7章 C地区の調査成果

C地区は中位段丘平坦面から緩やかに傾斜する状況である。C地区内に通る府道を挟んだ北側は遺構が希薄で出土遺物も極端に少ない状況であったので府道南側部分を中心として説明することとする。遺構は古墳時代後期から奈良時代中心である。溝、方墳、掘立柱建物、鍛冶関連の遺構が検出されており、B地区北半部の竪穴住居や掘立柱建物が多数検出されている状況と異なる様相を呈している。

包含層には古墳時代後期～中世の遺物が含まれる。一部近世の井戸もみられるが、中世の遺構は検出されなかった。中世以降の記述は割愛し、古代までの遺構の説明のみとする。ただし、建物として構成するものとして認識されなかった柱穴や全く所属の明確でない遺構については、遺構一覧表に掲載した。

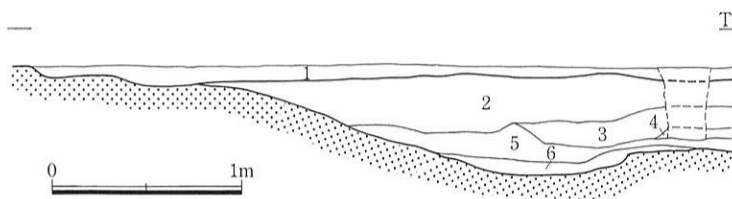
古墳時代以前の遺構

〔溝1015〕(図7.1、図7.2)

J11a4、J11b3～b4地区にかけて検出された溝である。溝上面は中世の遺構である土坑1008によって掘削されている。本溝は大きく2層に分けることができ、上層より須恵器、鉄滓が出土しており、奈良時代に位置付けることができる。7.2-1は長頸壺(壺K)、7.2-2は長頸壺の底部と考えられる。下層では遺物の出土は希薄であるが、出土遺物片から古墳時代後期まで遡る可能性がある。

〔溝1188〕(図7.3、図7.4、図7.6)

本遺構はI11f2、I11g2～g3、I11i2～i3、I11h2～h5地区にかけて検出された溝である。幅398cm 深さ56cmで南南西～北北東方向に流れており、未調査地によって分断されるが南側調査区J11a4、J11b3～b4にかけて検出された溝1015と同一の溝と考えられる。本溝は3層に分層することができる。但し、出土



- 1 褐色 粗砂まじりシルト (7.5YR4/3)
- 2 にぶい褐色 粗砂まじり粘土 (7.5YR5/3)
- 3 灰褐色 粗砂まじり極細砂 (5YR5/2)
- 4 褐灰色 細砂まじり粗砂 (5YR6/1)
- 5 褐灰色 シルトまじり粘土 (5YR5/1)
- 6 灰褐色 粗砂まじり細砂 (7.5YR5/2)

図7.1 溝1015土層断面図 (s=1/40)

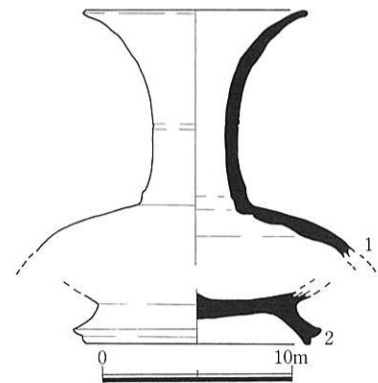
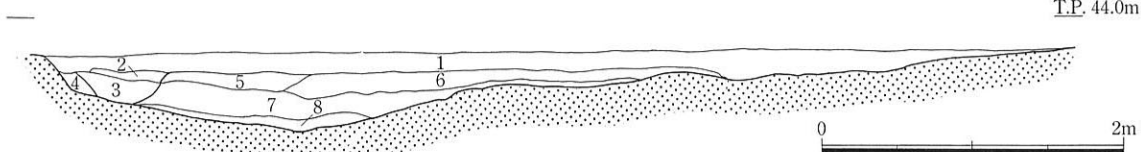


図7.2 溝1015上層出土土器
T.P. 44.0m



- 1 にぶい黄褐色 中粒砂まじりシルト (10YR4/3)
- 2 黄褐色 中粒砂まじり粘土 (10YR8/6)
- 3 褐灰色 細砂まじり粘土 (7.5YR4/1)
- 4 黄褐色 細砂まじりシルト (10YR8/6)
- 5 褐灰色 中粒砂まじり極細砂 (7.5YR4/1)
- 6 にぶい黄褐色 粗砂まじり細砂 (10YR7/4)
- 7 褐灰色 極細砂まじりシルト (7.5YR4/1)
- 8 灰褐色 シルトまじり粘土 (7.5YR5/2)

図7.3 溝1188土層断面図 (s=1/50)

遺物は上層（第1層・第2層）、下層（第3層）として分けて取り上げている。第3層（3・4・7・8）は7.5YR4/1灰褐色シルトまじり粘土を埋土とする最下層（8）から遺物が主に出土しており、溝の北東端部分で遺物が集中して出土している。遺物は、古墳時代後期の遺物のみが出土しており、川西編年（川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌 第64巻 2号』）でV期に相当する円筒埴輪（7.6-4）、TK10～TK43型式に属する須恵器7.6-1は壺、7.6-2～3は長脚2段透かしの高杯で、透かしはともに3方向である。7.6-5は大甕で、外面に2条の波状文がめぐる。出土遺物から溝の掘削時期は古墳時代後期に求められる。

第2層（2、5、6）は、ブロック状のベース土を含む状況から、埋め戻されたと考えられる。また、本溝東側（3）において溝の再掘削が行われており、埋め戻されたとほぼ同時に溝の掘削が行われと考えられる。本溝は幅を狭められ、機能の変化が認められるものの使用されていたことがわかる。第1層（1）は、溝として機能しなくなった状態での堆積であり、溝の名残により窪んだ部分に幅広く堆積する。

出土遺物は上層（第1層、第2層）は古墳時代後期から奈良時代までの遺物を含んでいる。須恵器坏蓋では、7.6-8はTK10～MT85型式、7.6-9はTK43～TK209型式、坏身7.6-10はTK209型式に位置付けられ、古墳時代後期のものである。古墳時代後期の遺物は下層上面から多く出土している傾向にあり、上層中でも第1層、第2層で時期差を持つ可能性がある。出土遺物7.6-6は須恵器坏蓋で宝珠つまみ部分が欠失しており、飛鳥Ⅲ～Ⅳで飛鳥時代に位置付けられる。他の遺物は奈良時代のもので、7.6-7は坏B、7.6-11は壺、7.6-13は把手付盤、7.6-14は甕C、7.6-12は鞆羽口である。鍛冶関連遺物としては、総重量約605gの鉄滓が出土しており、近接する遺構から廃棄されたものと考えられる。



図7.4 溝1188最下層遺物出土状況図 (s=1/20)

表7.1 C地区検出遺構一覧表(1)

遺構	トレンチ	地区	長径(cm)	幅or短径長(cm)	深さ(cm)	埋土色・質	時期	備考	
落込み	525	1C	H11g9~g10, H11g11~g12, H11h9~h10, H11h11~h12				古墳時代後期~奈良時代		
溝	527	2C		(576)	70	23	古墳時代後期~奈良時代		
柱穴	1007	5C	J11c4	79	(30)	28	10YR4/2灰黄褐色粗砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	
土坑	1008	5C	J11a4, J11b3, J11b4	x	x	14	10YR4/2灰黄褐色粗砂まじりシルト	鎌倉時代	
方墳	1009	5C	J11a5, J11a4, J11b4	x	x	45	上層-10YR5/6黄褐色極粗砂まじりシルト 下層-10YR5/6黄褐色粗砂まじりシルト	古墳時代後期	
土坑	1010	5C	J11b4	98	(38)	25	5YR3/4暗赤褐色粗砂まじりシルト	古墳時代後期	方墳1009に切られる
土坑	1011	5C	J11b4	(108)	100	36	5YR3/4暗赤褐色粗砂まじりシルト	古墳時代後期	方墳1010に切られる
柱穴	1012	5C	J11b4	29	24	14	10YR4/3にぶい黄褐色粗砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	
柱穴	1013	5C	J11b4	50	28	11	5YR3/4暗赤褐色粗砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	
柱穴	1014	5C	J11b4	43	38	29	10YR4/3にぶい黄褐色粗砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	
溝	1015	5C	J11a4, J11b4, J11b5	x	x	69	2.5Y4/4オリーブ褐色粗砂まじり極細砂	古墳時代後期	
土坑	1108	6C	I11h4	113	62	13	2.5Y7/2灰黄色中粒砂まじり極細粒砂(黄色シルトブロック、土器片、炭化物を含む)	奈良時代	
柱穴	1109	6C	I11h5	70	48	43	7.5YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 t
柱穴	1110	6C	I11h5	60	54	41	7.5YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 t
柱穴	1111	6C	I11h5	62	31	64	7.5YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 t
柱穴	1112	6C	I11h5	88	52	58	7.5YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 t
柱穴	1113	6C	I11h5	70	42	24	7.5YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 t
柱穴	1114	6C	I11h5	63	55	29	7.5YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 t
柱穴	1115	6C	I11h5	42	24	38	7.5YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 t
柱穴	1116	6C	I11h5	53	26	18	7.5YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 t
柱穴	1117	6C	I11h5	43	36	27	7.5YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 t
柱穴	1118	6C	I11h5	44	28	36	7.5YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 t
柱穴	1119	6C	I11h5	42	30	10	7.5YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 t
柱穴	1120	6C	I11h5	68	60	44	7.5YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 t
柱穴	1121	6C	I11h5	52	48	43	7.5YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 t
柱穴	1122	6C	I11h5	40	33	38	7.5YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 t
柱穴	1123	6C	I11h5	60	50	43	7.5YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 t
柱穴	1124	6C	I11h6	25	20	23	灰褐色極細砂まじりシルト	奈良時代	
土坑	1125	6C	I11h5	145	70	12	10YR5/8黄褐色極粗粒砂まじりシルト	奈良時代	
柱穴	1126	6C	I11h6	64	55	43	7.5YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 u
柱穴	1127	6C	I11h6	36	30	25	7.5YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 u
柱穴	1128	6C	I11h6	50	38	44	7.5YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 u
柱穴	1129	6C	I11h6	42	32	24	7.5YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 u
柱穴	1130	6C	I11h6	71	48	16	7.5YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 u
柱穴	1131	6C	I11h6	38	30	24	7.5YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 u
柱穴	1132	6C	I11h6	66	45	17	7.5YR4/4褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 u
土坑	1136	6C	I11i5	80	(70)	14	10YR5/4にぶい黄褐色細砂まじりシルト	奈良時代	
土坑	1138	6C	I11i4	66	48	7	10YR6/4にぶい黄褐色細砂まじりシルト	奈良時代	
溝	1139	6C	I11i4		64	6	10YR6/2灰褐色細砂まじりシルト(炭・灰を多く含む)	奈良時代	
土坑	1141	6C	I11g4, I11g5	110	66	14	10YR4/2灰褐色粗砂まじりシルト	奈良時代	
土坑	1142	6C	I11g5	92	76	22	2.5Y5/2暗灰黄色極粗砂まじりシルト(黄色ブロック含む)	奈良時代	
柱穴	1143	6C	I11g5	75	56	15	上層-7.5R4/6褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 v
柱穴	1144	6C	I11g5	83	60	20	7.5YR4/4褐色粗砂まじり極細砂	奈良時代	掘立柱建物 v
井戸	1145	6C	I11f6	112	106	65		江戸時代	
溝	1146	6C	I11f4, I11f5		65	18	2.5Y6/4にぶい黄色細砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	
溝	1147	6C	I11f4, I11f5		60	21	2.5Y6/4にぶい黄色細砂まじりシルト	奈良時代	
土坑	1148	6C	I11g4	62	36	8	上層-7.5YR6/3にぶい褐色粗砂まじりシルト	奈良時代	土坑1149に切られる
土坑	1149	6C	I11g4	85	54	9	上層-7.5YR5/4にぶい褐色粗砂まじりシルト	奈良時代	土坑1148を切る
柱穴	1150	6C	I11g4	79	41	12		奈良時代	
柱穴	1152	6C	I11g4	64	50	36	7.5YR4/6褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 s
柱穴	1153	6C	I11g4	56	42	22	7.5YR4/6褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 s
柱穴	1154	6C	I11g4	40	38	30	7.5YR4/6褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 s
柱穴	1155	6C	I11g4	46	41	28	7.5YR4/6褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 s
柱穴	1156	6C	I11g4	60	48	31	7.5YR4/6褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 s
柱穴	1157	6C	I11g4	61	44	28	7.5YR4/6褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 s
柱穴	1158	6C	I11g4	40	(30)	13		奈良時代	柱穴1160に切られる
柱穴	1159	6C	I11g4	49	20	37		奈良時代	柱穴1160を切る 掘立柱建物 s
柱穴	1160	6C	I11g4	68	49	23	7.5YR4/6褐色細砂まじりシルト	奈良時代	柱穴1158を切り、柱穴1159に切られる 掘立柱建物 s
柱穴	1161	6C	I11g4	44	36	24	7.5YR4/6褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 s
柱穴	1162	6C	I11g4	43	39	22	7.5YR5/2灰褐色極細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 s
柱穴	1163	6C	I11g4	50	40	33	7.5YR4/6褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 s
土坑	1164	6C	I11g4	110	33	12	10YR5/6黄褐色極粗粒砂まじりシルト	奈良時代	
柱穴	1165	6C	I11g4	(34)	32	8	10YR5/6黄褐色極粗粒砂まじりシルト	奈良時代	
柱穴	1166	6C	I11g4	92	58	8	10YR5/6黄褐色極粗粒砂まじりシルト	奈良時代	
土坑	1167	6C	I11g3	34	25	x		古墳時代後期~奈良時代	土坑1168に切られる
土坑	1168	6C	I11g3	76	62	13	10YR5/4にぶい黄褐色中~細粒砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	土坑1167を切る
土坑	1169	6C	I11g3	66	60	9	10YR4/2灰黄褐色細砂まじりシルト	奈良時代	
方墳	1171	6C	I11g3, I11g4, I11f5	860	743	31	10YR5/6黄褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期	
溝	1172	6C	I11i4, I11h4		110	12		古墳時代後期~奈良時代	
土坑	1180	6C	I11h2, I11h1	104	76	35	2.5Y4/3オリーブ褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期~奈良時代	
柱穴	1181	6C	I11h1	42	30	21	10YR5/8黄褐色細砂まじりシルト	奈良時代	
柱穴	1182	6C	I11h1	52	34	11	10YR5/8黄褐色細砂まじりシルト	奈良時代	

表7.1 C地区検出遺構一覧表(2)

遺構	トレンチ	地区	長軸長(cm)	幅or短軸長(cm)	深さ(cm)	埋土色・質	時期	備考		
柱穴	1183	6C	111h2	82	68	33	10YR4/2灰黄褐色中粒砂まじり極細砂	奈良時代		
溝	1184	6C	111h1, 111h2		86	18	2.5Y4/3オリーブ褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴	1185	6C	111h6	55	46	30	7.5YR4/4褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	掘立柱建物 u	
溝	1186	6C	111h1, 111h2		154	18	10YR7/6明黄褐色細砂まじり粘土	古墳時代後期～奈良時代	溝1187を切る	
溝	1187	6C	111h2, 111f2		274	16	2.5Y5/4黄褐色細砂粘土	古墳時代後期～奈良時代	溝1186, 1188に切られる	
溝	1188	6C	111f2, 111f2~g3, 111f2~h3, 111f2~h5		398	56	上層-10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代	溝1187を切る	
溝	1189	6C	111f4, 111f5, 111h4, 111h5		144	21	7.5YR5/3にぶい褐色粘土まじりシルト	奈良時代		
溝	1190	6C	111f4		78	21	10YR4/3にぶい黄褐色粗砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
溝	1191	6C	111g5, 111h5, 111h7		60	7.7	10YR6/2灰黄褐色極細砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴	1192	6C	111g5	92	72	17	上層-7.5R4/6褐色細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 v	
土坑	1193	6C	111g5	95	80	7	7.5YR4/6褐色細砂まじりシルト	奈良時代		
溝	1194	6C	111f2~f8		70	33	10YR6/4にぶい黄褐色細砂まじりシルト	奈良時代		
溝	1195	6C	111f2		50	10	10YR4/4褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
井戸	1196	6C	111f2	110	100	92		江戸時代		
溝	1201	6C	111f7, 111g7, 111h7		150	12	10YR5/6黄褐色極細～細砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
溝	1202	6C	111f8		74	18		古墳時代後期～奈良時代		
落込み	1203	6C	111f2~J11f8					古墳時代後期～奈良時代		
落込み	1204	6C	111h5, 111h6, 111g5, 111g6					古墳時代後期～奈良時代		
落込み	1205	6C	111f2~111f6, 111g3~111g5, 111h5, 111h6					古墳時代後期～奈良時代		
溝	1206	6C	111f4		19	3.7	10YR5/6黄褐色細粒砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴	1207	6C	111g5	60	28	16.9	10YR5/6黄褐色極～細砂まじりシルト <黄色ブロック含む>	奈良時代		
柱穴	1208	6C	111g5	47	42	4.4	10YR5/6黄褐色極～細砂まじりシルト <黄色ブロック含む>	奈良時代	柱穴1209を切る	
柱穴	1209	6C	111g5	30	(15)	3.9	10YR5/6黄褐色極～細砂まじりシルト <黄色ブロック含む>	奈良時代	柱穴1208に切られる	
柱穴	1210	6C	111g5, 111f5	65	40	8.3	10YR5/6黄褐色極～細砂まじりシルト <黄色ブロック含む>	奈良時代		
柱穴	1211	6C	111f5	40	33	9.5	10YR5/6黄褐色極～細砂まじりシルト (黄色ブロック含む)	奈良時代		
柱穴	1212	6C	111f5	34	26	10.6	10YR5/6黄褐色極～細砂まじりシルト (黄色ブロック含む)	奈良時代		
柱穴	1213	6C	111g5	53	50	27	7.5YR4/4褐色粗砂まじり極細砂	奈良時代		
柱穴	1214	6C	111g5	56	40	34	7.5YR4/4褐色粗砂まじり極細砂	奈良時代	掘立柱建物 w	
柱穴	1215	6C	111f5	47	35	17	7.5YR5/2灰褐色極細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 w	
柱穴	1216	6C	111f5	64	54	52	7.5YR4/4褐色粗砂まじり極細砂	奈良時代	掘立柱建物 w	
柱穴	1217	6C	111g5	78	40	x	2.5Y7/2灰黄色細砂まじりシルト	奈良時代		
柱穴	1218	6C	111g5	39	32	x		奈良時代		
柱穴	1219	6C	111g5	68	52	39	7.5YR4/4褐色粗砂まじり極細砂	奈良時代	掘立柱建物 w	
柱穴	1220	6C	111f5	61	59	41	7.5YR4/4褐色粗砂まじり極細砂	奈良時代	掘立柱建物 w	
溝	1221	6C	111g5		44	10.7	10YR5/6黄褐色極～細砂まじりシルト	奈良時代		
柱穴	1222	6C	111g5	55	30	13.2	10YR5/6黄褐色極～細砂まじりシルト <黄色ブロック含む>	奈良時代		
柱穴	1223	6C	111g5	64	56	39	7.5YR4/4褐色粗砂まじり極細砂	奈良時代	掘立柱建物 v	
柱穴	1224	6C	111g5	54	49	28	7.5YR4/4褐色粗砂まじり極細砂	奈良時代	柱穴1223, 1226を切る 掘立柱建物 v	
柱穴	1225	6C	111g5	(56)	54	5.4	上層-7.5R4/6褐色細砂まじりシルト 下層-灰黄褐色極細～細砂まじりシルト (黄色ブロック含む)	奈良時代	柱穴1224, 1226に切られる	
柱穴	1226	6C	111g5	72	(40)	9	7.5YR4/4褐色粗砂まじり極細砂	奈良時代	柱穴1225を切り、柱穴1224に切られる	
柱穴	1227	6C	111g5	64	59	10	7.5YR4/4褐色粗砂まじり極細砂	奈良時代	掘立柱建物 w	
柱穴	1228	6C	111f5	28	26	5	10YR5/6黄褐色極～細砂まじりシルト	奈良時代		
柱穴	1229	6C	111f5	40	34	14	7.5YR4/4褐色粗砂まじり極細砂	奈良時代	掘立柱建物 w	
柱穴	1230	6C	111f5	36	28	28	7.5YR4/4褐色粗砂まじり極細砂	奈良時代	掘立柱建物 w	
柱穴	1231	6C	111g5	57	35	28	7.5YR4/4褐色粗砂まじり極細砂	奈良時代	掘立柱建物 v	
柱穴	1232	6C	111g5	54	42	33	7.5YR4/4褐色粗砂まじり極細砂	奈良時代	掘立柱建物 v	
柱穴	1233	6C	111g5	55	41	34	7.5YR4/4褐色粗砂まじり極細砂	奈良時代	掘立柱建物 v	
柱穴	1234	6C	111g5	25	18	8.2	10YR5/6黄褐色極～細砂まじりシルト (黄色ブロック含む)	奈良時代	掘立柱建物 v	
柱穴	1235	6C	111g5	50	40	6	7.5YR4/4褐色粗砂まじり極細砂	奈良時代	掘立柱建物 v	
柱穴	1236	6C	111g5, 111g6	70	50	12	10YR5/6黄褐色極～細砂まじりシルト (黄色ブロック含む)	奈良時代		
柱穴	1237	6C	111g5	78	62	37	7.5YR4/4褐色粗砂まじり極細砂	奈良時代	掘立柱建物 v	
柱穴	1238	6C	111g6	37	30	20	10YR7/2にぶい黄褐色極細砂まじりシルト	奈良時代	掘立柱建物 v	
落込み	1239	6C	111g5, 111h5	543	194	14.7	2.5Y5/4黄褐色細砂まじりシルト	奈良時代		
落込み	1240	6C	111g5, 111h6, 111g5, 111h5	(518)	380	10.3	10YR5/4にぶい黄褐色細砂まじりシルト	奈良時代		
落込み	1241	6C	111h7	920	154	18.7	5YR5/2灰褐色細砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
溝	1242	6C	111g5		30	6.6	7.5YR4/6褐色細砂まじりシルト	奈良時代		
柱穴	1243	6C	111g5	77	52	28.5	7.5YR4/4褐色粗砂まじり極細砂	奈良時代	掘立柱建物 v	
柱穴	1244	6C	111g5	44	36	25.7	10YR5/6黄褐色極～細砂まじりシルト (黄色ブロック含む)	奈良時代		
柱穴	1245	6C	111g5	92	62	9.9	10YR5/6黄褐色極～細砂まじりシルト	奈良時代		
土坑	1246	6C	111h5	52	46	4	2.5Y7/2灰黄色細砂まじりシルト (焼土入る)	奈良時代		
土坑	1247	6C	111f3	66	49	5.8	2.5Y7/2灰黄色細砂まじりシルト (焼土・黄色ブロック含む)	奈良時代		
溝	1248	6C	111f5, 111f4, 111f5		77	14	2.5Y7/1灰白色極細砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴	1249	6C	111g5	34	30	14	灰黄褐色極細～細砂まじりシルト <黄色ブロック含む>	奈良時代		
柱穴	1250	6C	111g5	32	24	7.5	灰黄褐色極細～細砂まじりシルト <黄色ブロック含む>	奈良時代		
溝	1252	6C	111f6		40	13.2	10YR8/2灰白色極細砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
柱穴	1253	6C	111f4		40	x	7.5R4/6褐色細砂まじりシルト	奈良時代		
溝	1254	6C	111f4		216	x	2.5Y7/1灰白色極細砂まじりシルト	古墳時代後期～奈良時代		
土坑	1255	6C	111f4		39	30	30	10YR4/6褐色細粒砂まじりシルト	奈良時代	
方墳	1257	6C	111f3, 111h3, 111h4			14		古墳時代後期		
方墳	1258	6C	111f2, 111h2					古墳時代後期		
井戸	1259	6C	111f3	110	85	64		江戸時代		



图7.5 C地区南半部遗构配置图 (s=1/200)

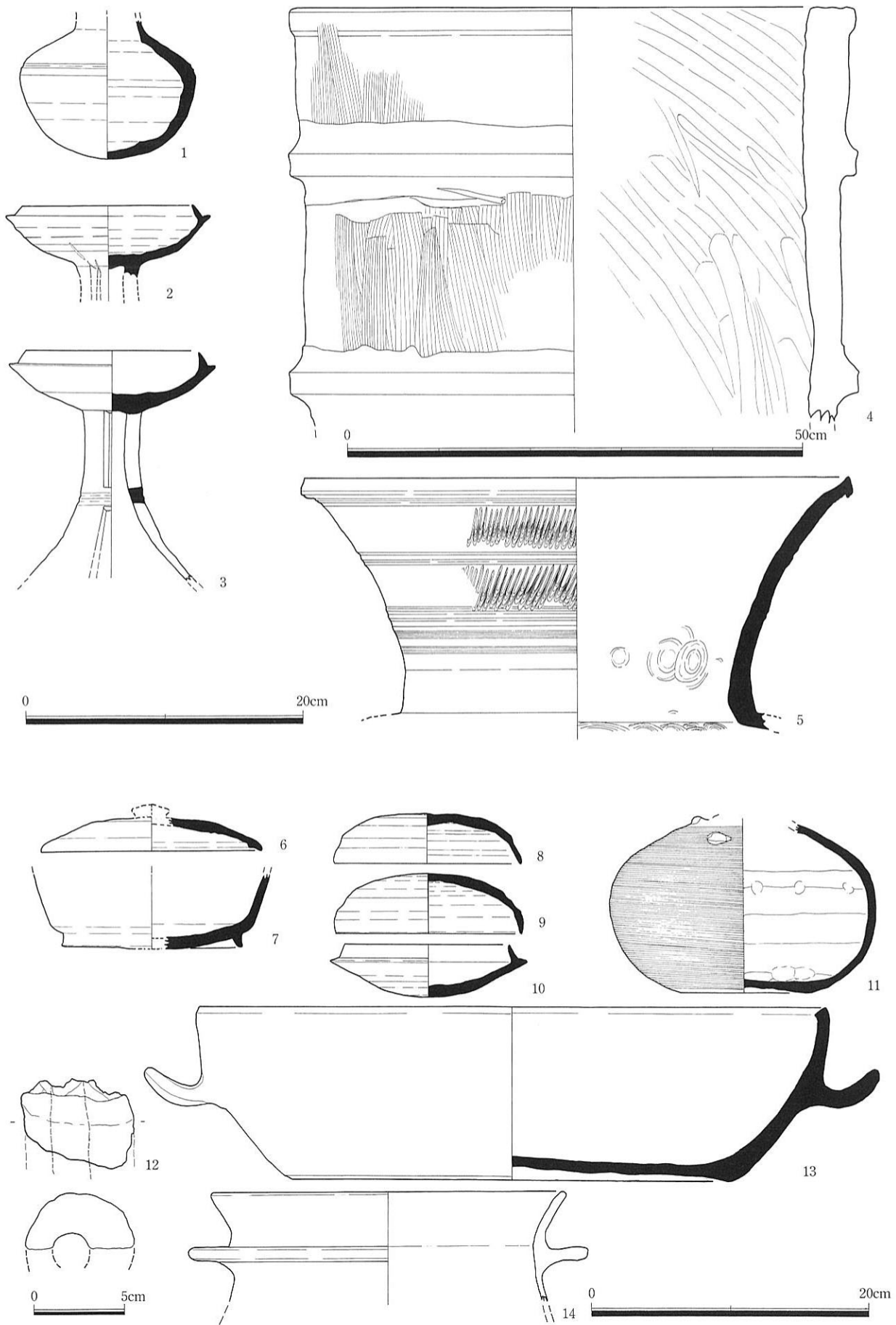


图7.6 沟118出土遗物

〔方墳1009〕（図7.7、図7.8）

本遺構は、J11a4～a5、J11b4地区にかけて検出された方墳である。調査区外に広がるため全体の規模は不明であるが、周溝の南北方向1120cm以上、東西方向820cm以上で周溝幅は50cm～110cmで周溝の南北方向で狭まる部分がある。マウンド自身は後世の削平により残っていない。周溝の埋土は2層に分けることができ、上層からは奈良時代を中心とした須恵器、土師器が出土しているが、ほとんどが図示できない小片であった。7.7-1は壺Nの把手部分である。7.7-2は坏Bで平城宮II～III型式に属する。他は若干の瓦器椀片が含まれる。周溝内では焼土、炭灰が集中する地点があるが、遺物もほとんど伴っておらず性格は不明である。下層から時期を遡ることが可能な遺物は円筒埴輪片1点のみで出土遺物の量も極めて少ない。そのため、現在の認識では方墳と考えているが直角に曲がるその形状から、他の用途で掘削された溝の可能性も考えられる。

〔方墳1171〕（図7.9、図7.10）

本遺構は、I11g3～g4、I11f3地区にかけて検出された方墳である。南北方向743cm、東西方向860cmでやや東西方向に長い特徴を持つ。そのうち周溝幅は東西方向の部分が約90cm、南北方向東側が120cm、西側が160cmとそれぞれ少しずつ幅が違う。マウンド部分が削平されて残っていないため削平の程度によって周溝幅に違いがあると言える。周溝の深さは約30cmで2層から4層に分けることができた。上層（1、2）からは奈良時代を中心とする遺物が出土している。特に周溝南西部分で土器が集積しており、土師器甕、須恵器、鉄滓（約143g）、鞆羽口が出土している。土師器甕は、甕C7.10-3（飛鳥IV～平城宮II）・7.10-5（平城宮I～II）、甕A7.10-4（平城宮I～II）・7.10-6（飛鳥時代後半）が出土し、鉄滓、鞆羽口は周辺部で検出されている鍛冶炉と考えられる遺構で使用されたものと推定され、奈良時代に位置付けられる。周溝上層は、飛鳥時代から奈良時代に

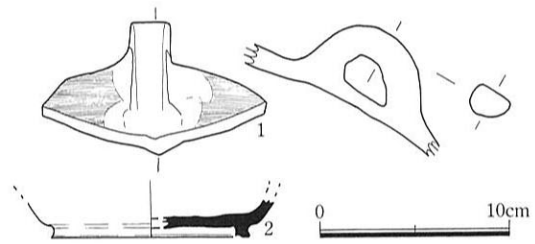


図7.7 方墳1009周溝上層出土土器

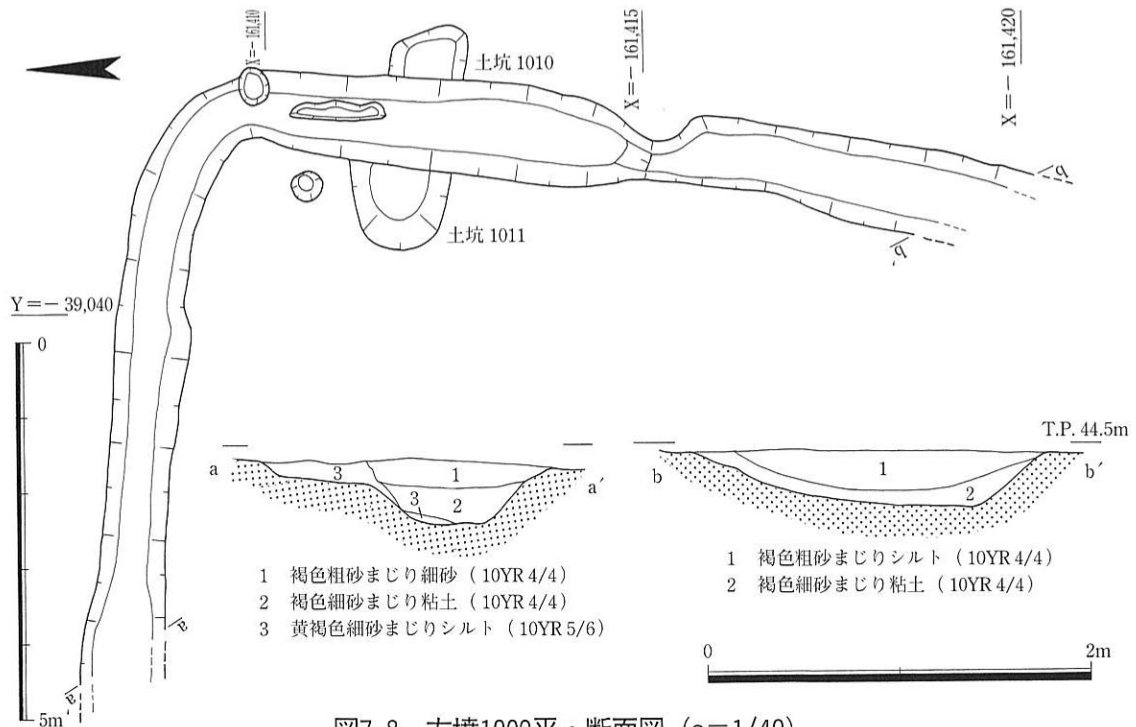


図7.8 方墳1009平・断面図 (s=1/40)

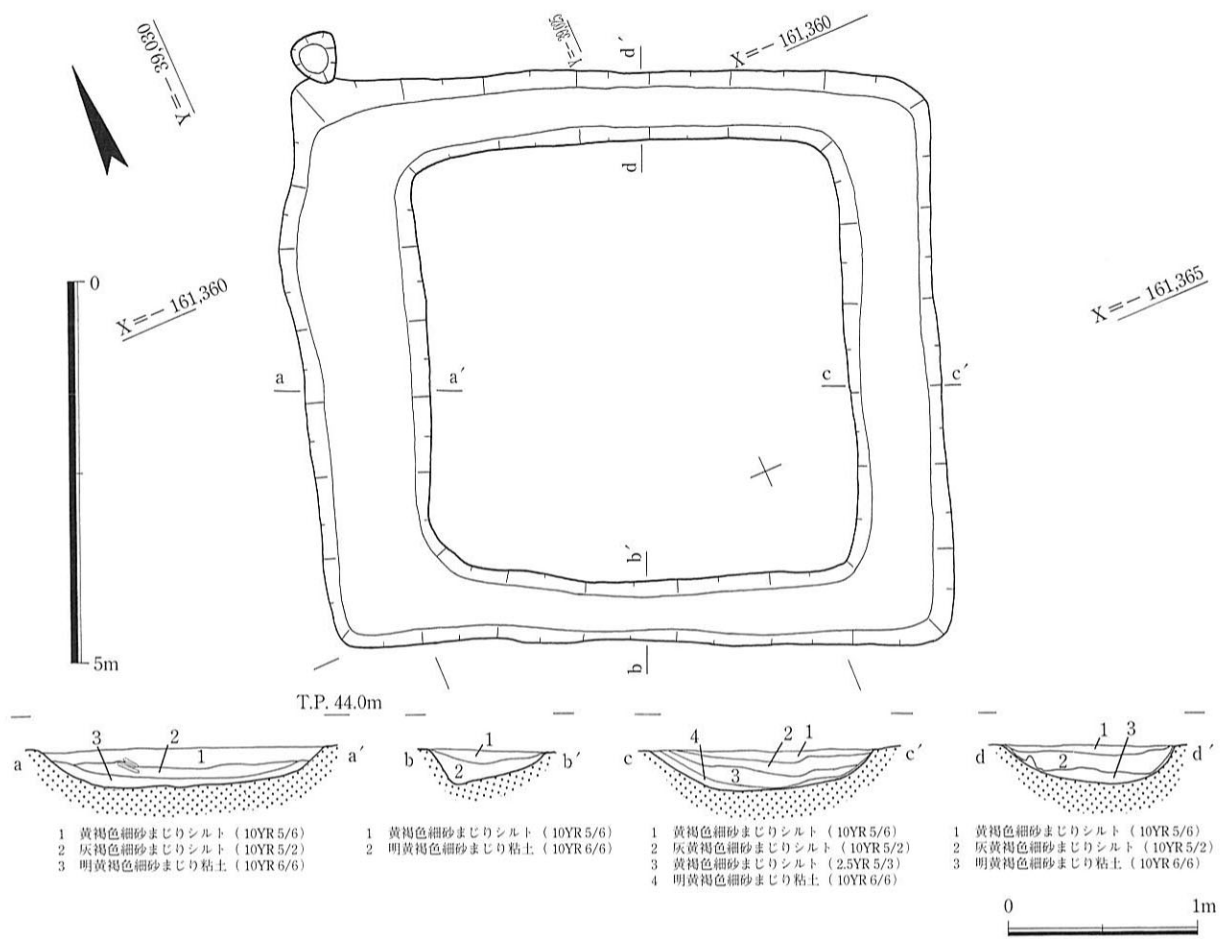


図7.9 方墳1171平・断面図 (s=1/100、s=1/40)

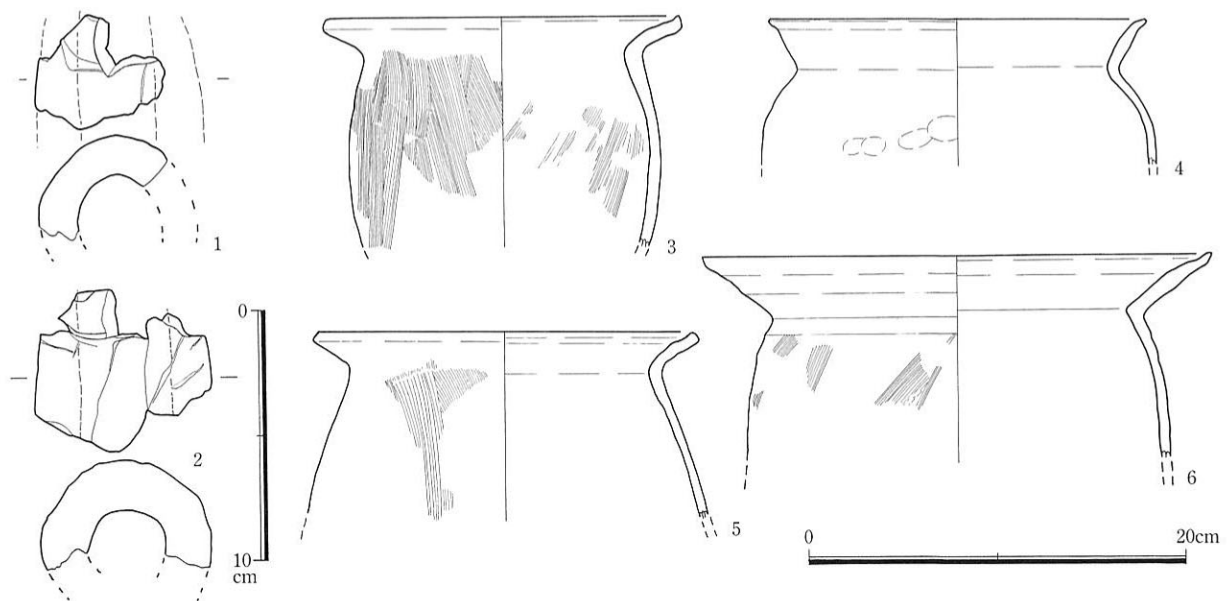


図7.10 方墳1171周溝上層出土遺物

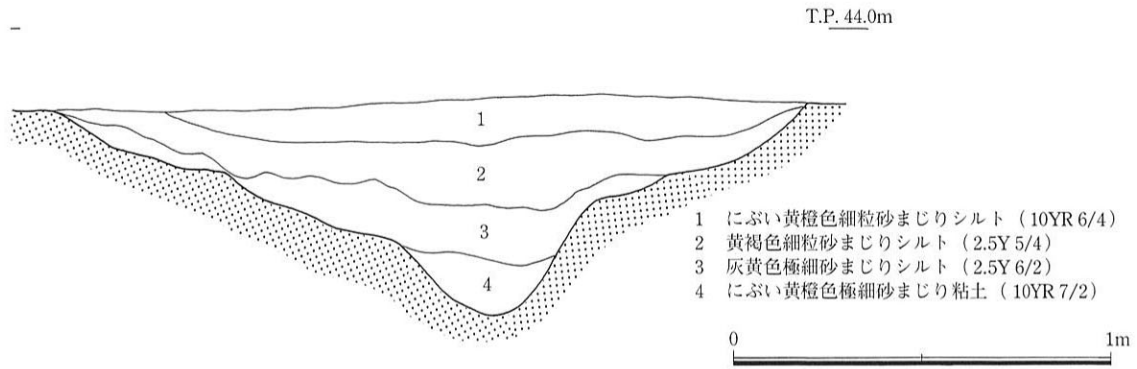


図7.11 溝1194土層断面図 (s=1/20)

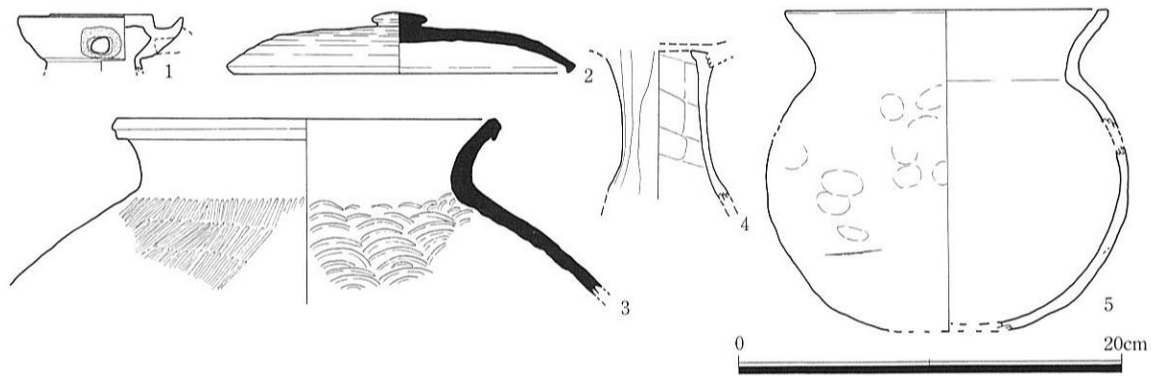


図7.12 溝1194出土遺物

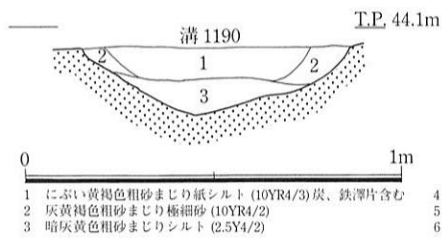


図7.13 溝1190, 溝1147土層断面図 (s=1/20)

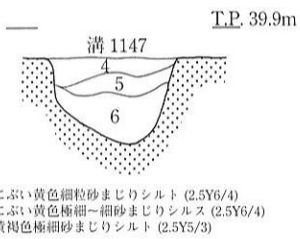


図7.14 溝1147出土土器

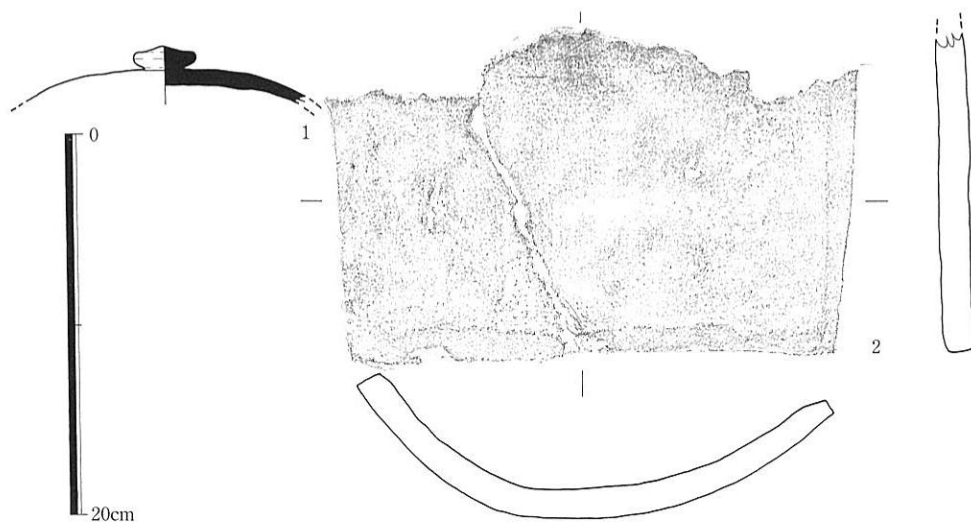


図7.15 溝1190出土遺物

かけての遺物のみが出土している。周溝下層（3、4）からはTK43～TK209型式に属する須恵器坏身が出土している。本遺構の時期は周溝内の遺物からを古墳時代後期の造営と考えられる。

方墳1257、方墳1258

方墳1257はI11i3、I11h3～h4地区、方墳1258はI11i2、I11h2地区にて検出された。遺構面が削平を受け、周溝が残存していないが、遺構の形状から方墳と推定される。ともに遺物は出土していないが、周辺で検出された方墳と同様に古墳時代後期に位置付けたい。

溝

〔溝1194〕（図7.11、図7.12）

本遺構はI11f2～f8地区にかけて検出された溝である。流れの方向は東西方向で幅70cm、深さ33cmである。断面の形状はV字型で、4層に分層できる。大きく上層（1、2）、下層（3、4）に分けることができ、2時期に分けられる。上層部分は、西側でやや南に溝の方向が変わり溝1194aとした。下層部分は曲がることなく東西方向で直進する溝で溝1194bとした。作業工程上、西半部分の掘削を2度に分けざるをえなかった。結果、本溝が分岐することが判明した時点で、出土遺物の取り上げは東半部、西半部と大きく分けて取り上げたため、1194a、b 両溝の差を遺物から明確にすることは難しい状況となってしまった。

出土遺物は破片がほとんどで、図示し得たものは少数であった。古いものとしては7.12-3の須恵器大甕がTK10～TK43型式に属し、古墳時代後期に位置付けられる。7.12-2は須恵器坏蓋B、7.12-4は土師器高坏とともに平城宮II型式に属する。7.12-5は平城宮I～II型式に属する壺である。7.12-1は須恵器中空円面硯である。把手部分と底部の一部が欠失している。把手部分の形状は、類似する中空円面硯の出土資料から推測できる。有孔式の把手でなく、下半部から棒状のものがのびて上方に曲折し、先端部に亀の頭をへうで描かれるものの可能性が考えられる。把手の取り付けは尖らせた先端部を差し込んでいる。有孔式の中空円面硯は、水滴としての機能も兼ね備えているが、本硯は水滴の機能は備えていない。時期は、7世紀後半～8世紀に位置付けられる。土器の他には、総重量約810gの鉄滓が出土している。

本遺構は、出土遺物から考えると奈良時代には機能していたと考えられる。

〔溝1147〕（図7.13、図7.14）

本遺構は、I11f4～f5地区にかけて検出された溝である。東西方向に流れ、I11f5地区で南側に曲折する。溝1194と平行しており、断面形態はU字形を呈し幅も約35cmと狭く、深さも21cmと浅い。本溝は掘立柱建物wの東側で曲折することから考えればこれらの掘立柱建物が奈良時代に位置付けられていることから、明らかに建物に伴う排水溝及び区画溝の可能性が高いと言える。

遺物は比較的少ない状況で細片が多く図示できるものは1点のみであった。7.14-1は土師器鉢で外面底部付近に刷毛目調整が見られる。内面の状況は剝落が激しく暗文は確認できなかった。飛鳥III～平城宮I型式に属している。実測不可の遺物中には奈良時代に属する遺物も出土しており、本遺構の時期は奈良時代前半に位置付けられる。

〔溝1190〕（図7.13、図7.15）

本遺構はI11i4地区にて検出された溝である。調査区南端で全体の規模はつかめていないが、方墳1257を掘り込んで溝を掘削しており、幅78cm、深さ22cmでやや北向きに彎曲するがほぼ東西方向に流れる。

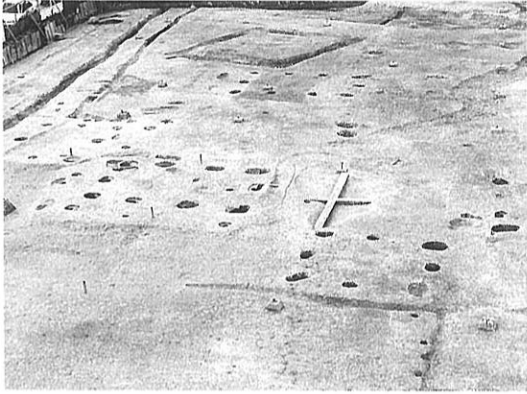


写真7.1 掘立柱建物跡 s、u、v、w



写真7.2 掘立柱建物跡 s

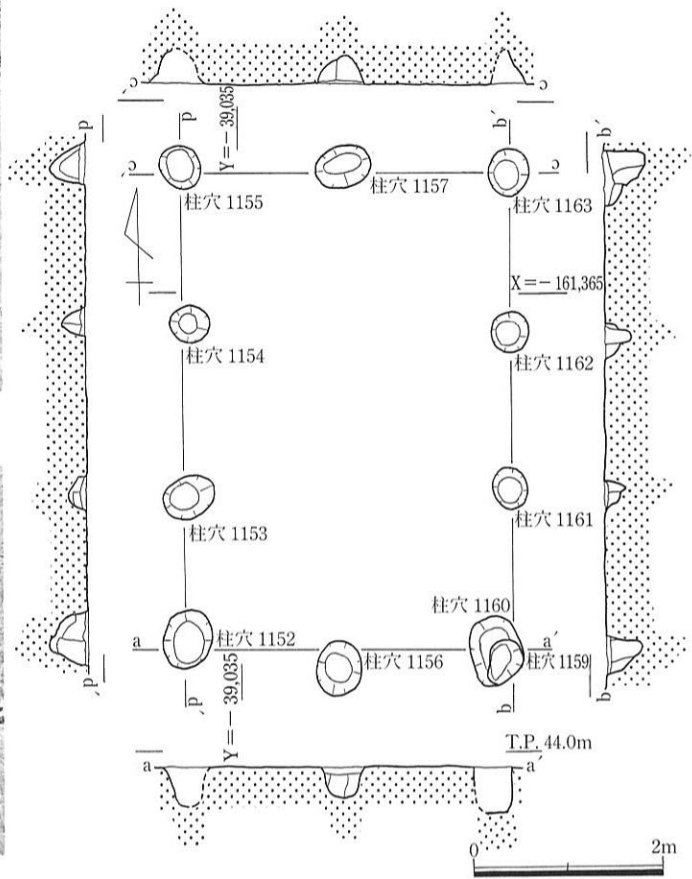


图7.16 掘立柱建物跡 s 平·断面图 (s=1/80)

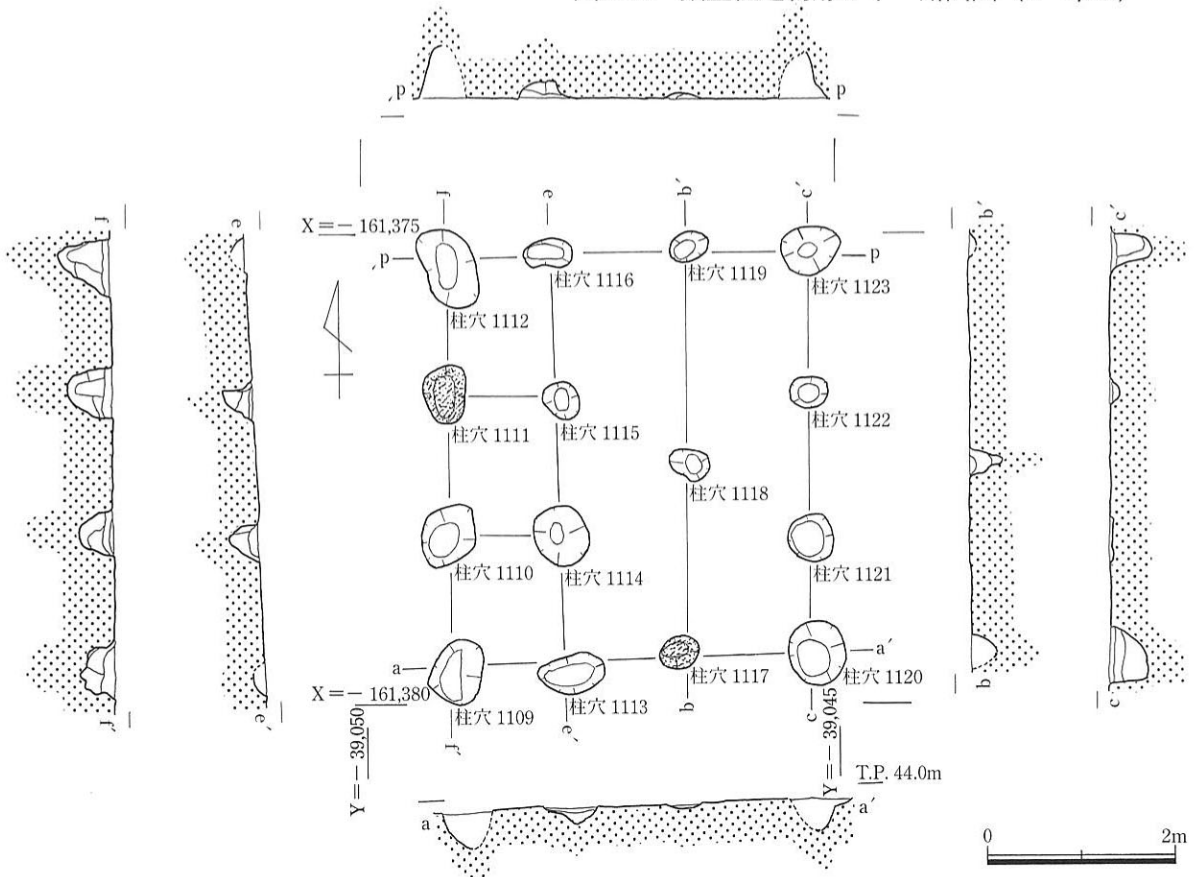


图7.17 掘立柱建物跡 t 平·断面图 (s=1/80)

溝上面では炭灰、鉄滓を含んでおり、焼土、鉄滓を含む奈良時代の溝1139を掘り込んで溝がつくられている。出土遺物は上部の削平もあり、少量で図示できるものも少なかった。7.15-1は須恵器坏B蓋で飛鳥Ⅲ～飛鳥Ⅴ型式に属する。平瓦片7.15-2は、凹面に細かい布目痕が残る。他の主要な出土遺物を概観して見れば、坏H身、坏G蓋、坏G身などが出土しており、飛鳥Ⅰ～Ⅲ型式に属する古い様相の遺物もみられるが、遺構中からは奈良時代の瓦が出土していることや奈良時代の溝を削平して本溝がつくられていることから奈良時代と考えられる。

掘立柱建物

本調査地区内においては5棟の掘立柱建物が検出されており建物それぞれに建替えも見られず、検出された建物どうしが重複して検出されていない。このことから一時期に使用されており存続期間が限られていたことがわかる。時期は出土遺物から奈良時代に位置付けられ、建物周辺からは多数の炭、灰あるいは鉄滓が含まれる土坑が検出されており、集落の一部と考えるより、工房に伴う建物と考えられる。
〔掘立柱建物跡 s〕 (図7.16、写真7.1～2)

本遺構は I11f5、I11g5地区で検出された掘立柱建物である。東西2間(340cm)×南北3間(510cm)の建物で、長軸は南北方向である。柱間は約160cmでほぼ一定で、柱穴の直径は40～50cm程度で深さ13～37cmである。出土遺物は柱穴から土師器片、須恵器片が出土している。土師器片の中には奈良時代ものと考えられる皿あるいは坏の破片も含まれており、建物の時期は奈良時代に位置付けられる。
〔掘立柱建物跡 t〕 (図7.17)

本遺構は I11h5地区で検出された掘立柱建物である。南北方向に長い建物であり東西400cm、南北約440cmで、柱間120cm～140cm、柱穴の規模は直径が40cm～70cm程度で四隅に位置する柱穴が40cm～60cmとやや深くなっている。建物の構造としては西側に廂がつく2間×3間の建物と見ることができ、西側の柱穴(1109～1112)は、40cm～60cmと建物を構成する他の柱穴より深い。西側2列の柱穴部分は床はりの構造となり、東側が土間となる構造の建物が想定できる。柱穴からの出土遺物としては飛鳥時代から奈良時代にかけての遺物が多い。須恵器、土師器片が中心で、須恵器壺、甕の体部片、土師器甕、円筒埴輪片が出土している。また、柱穴1111(約12.5g)、柱穴1112(約140g)、柱穴1117(約50g)からは、鉄滓が出土しており、建物周辺に炭灰、鉄滓が含まれる土坑との関係が注目される。本建

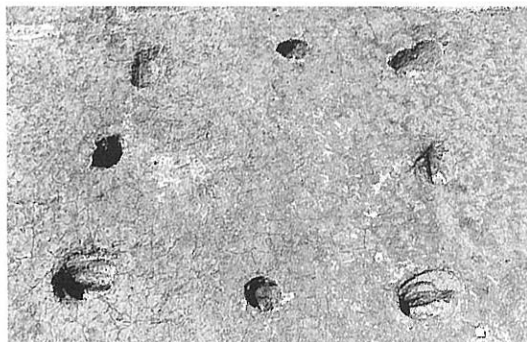


写真7.3 掘立柱建物跡 u

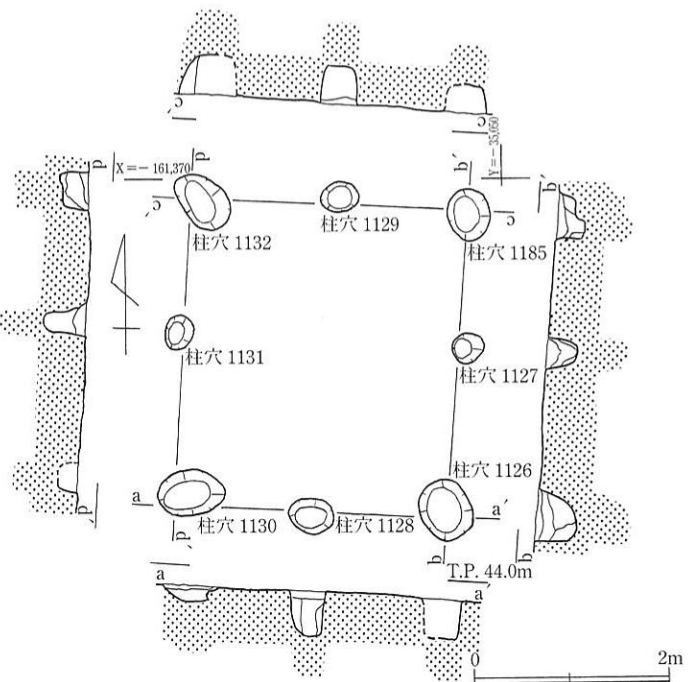


図7.18 掘立柱建物跡 u 平・断面図 (s=1/80)

物の時期は出土遺物や周辺の建物との関係から奈良時代に位置付けたい。

〔掘立柱建物跡 u〕(図7.18、写真7.1、7.3)

本遺構は I11h6地区で検出された掘立柱建物である。建物の軸線はほぼ南北方向で、東西300cm、南北310cmの規模でほぼ正方形の建物である。隅柱の直径は約60cmで他の柱穴は直径約30cmである。周辺で検出された4棟の建物の軸線は、南北方向であるのに対して、本掘立柱建物は若干東側に軸線が振ることから、所属時期にずれがあるとも考えられる。柱穴出土の遺物は、須恵器、土師器の細片で奈良時代のものである。本掘立柱建物の時期は、出土遺物から奈良時代と考えられる。

〔掘立柱建物跡 v〕(図7.19、図7.32)

本遺構は I11g5地区で検出された掘立柱建物である。南北方向に長い2間×3間の建物で、規模は東西310cm、南北490cmで、柱間は150cm～160cmである。柱穴は直径40cm～80cmで柱根の痕跡の検出できなかったものもある。また、南側の柱穴が比較的規模が大きい傾向にある。後世の削平によってこの差が生じていることも考えられる。遺物は須恵器、土師器の細片が出土しており、本掘立柱建物の時期は、奈良時代に位置付けられる。

本建物の重要な点として建物内南部分より、土坑1193が検出されていることがあげられる。土坑内からは鉄滓、鍛造剥片が出土しており、鍛冶炉の可能性が高く、本調査地区内で検出されている土坑と同様に鍛冶炉の下部構造と考えられる。周辺部との状況から本掘立柱建物の周囲には落込み1239、落込み1240、溝1221、溝1242が取り囲むように検出されており、溝内からは鉄滓が集中して出土している地点も見られることから、鍛冶炉を伴う工房的な建物であると考えられる。鍛冶炉操作に際して、湿気を極力避けることが知られるが、建物内構造上、壁のない構造物であった可能性が考えられる。なお、土

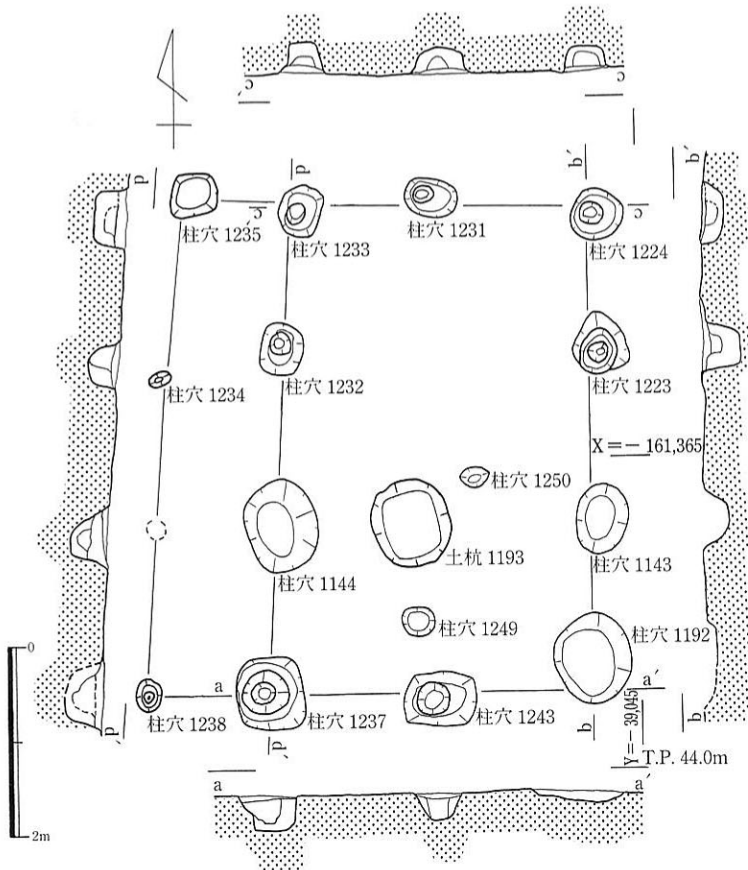


図7.19 掘立柱建物跡 v 平・断面図 (s=1/80)

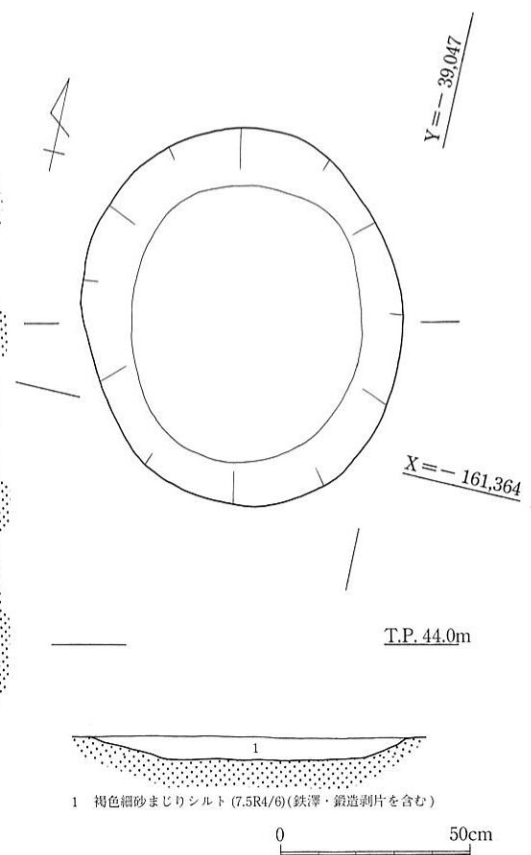


図7.20 土坑1193平・断面図 (s=1/20)

坑1193他の遺構については後述することとする。

〔掘立柱建物跡 w〕 (図7.21)

本遺構は I11f5、I11g5地区で検出された掘立柱建物である。やや東西方向に長い2間×2間の建物である。規模は東西400cm、南北300cmで、柱間は東西200cm、南北150cmである。柱穴は直径30cm～60cmで、遺物は須恵器、土師器の細片が出土している。本建物の時期は、出土遺物から奈良時代に位置付けられる。周辺遺構の状況から、前述の溝1147が、本建物東側で南側に曲折している。このことから建物周囲に区画溝あるいは排水溝が存在していた可能性が考えられる。

土坑

〔土坑1193〕 (図7.20)

本遺構は I11g5地区で検出された土坑である。南北方向に長い円形で、規模は長軸95cm、短軸80cm、深さ6cmである。掘立柱建物跡 v 内に位置しており、土坑内から鉄滓(約155g)、鍛造剥片が出土していることから、鍛冶炉と考えられる。炭灰層、粘土層の構造は見られず、上部構造が後世の削平によって最下層の構造が残るのみとなったと考えられる。本土坑の時期はその構造から奈良時代と考えられる。

〔土坑1141〕 (図7.22)

本遺構は I11g4～g5地区で検出された土坑である。長軸が南南西―北北東方向の不整形で、長軸110cm、短軸66cm、深さ14cmである。下層は炭灰を多く含む層が薄く入り、上層は灰黄褐色細砂まじりシルトであり、本土坑も鍛冶炉の下部構造と考えられる。遺物は須恵器、土師器片が出土しており、下層からは坏 B (平城宮 II～III) の高台部分が出土している。出土遺物と土坑の構造から、本土坑の時期は奈良時代に位置付けられる。

〔土坑1108〕 (図7.23、写真7.4～5)

本遺構は I11h4地区で検出された土坑である。南北方向に長い隅丸の方形で長軸101cm、短軸69cm、深さ14cmである。4層に分層され、1層では土器片、焼土、炭灰とともに約122.5gの鉄滓が出土している。2層、4層は炭灰が全面に入る状況であり、3層はベース土である黄灰色極粒砂まじりシルトをはって

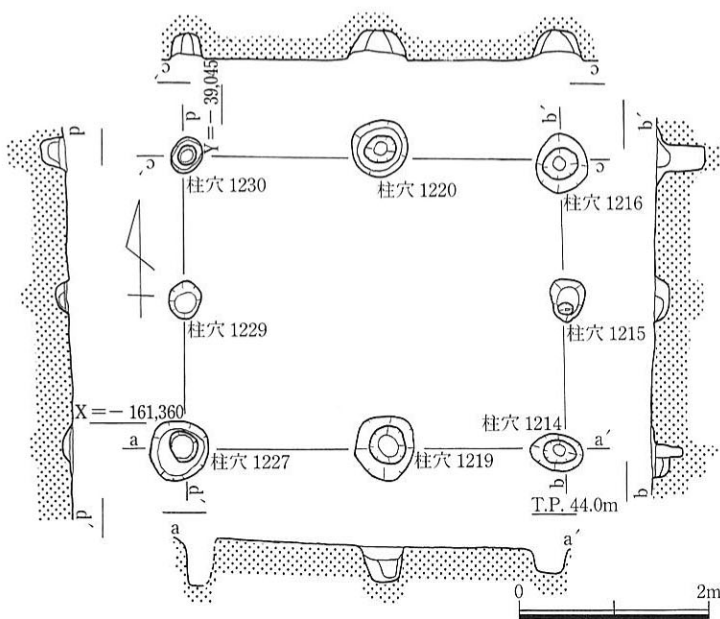


図7.21 掘立柱建物跡 w 平・断面図 (s=1/80)

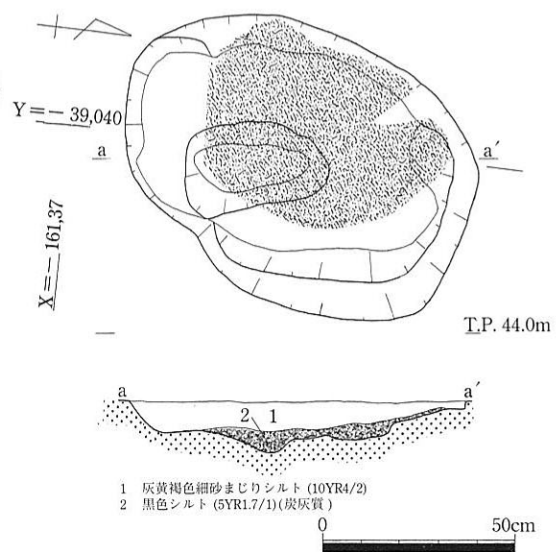


図7.22 土坑1141平・断面図 (s=1/20)

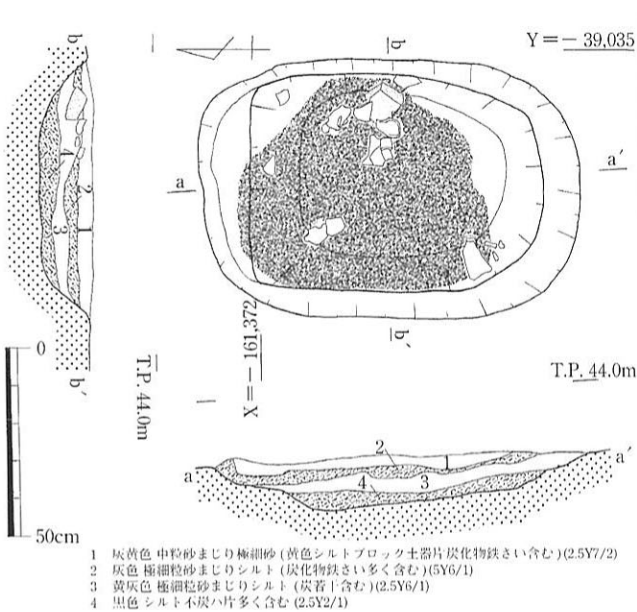


図7.23 土坑1108平・断面図 (s=1/20)



写真7.4 土坑1108 4層上面



写真7.5 土坑1108 2層上面

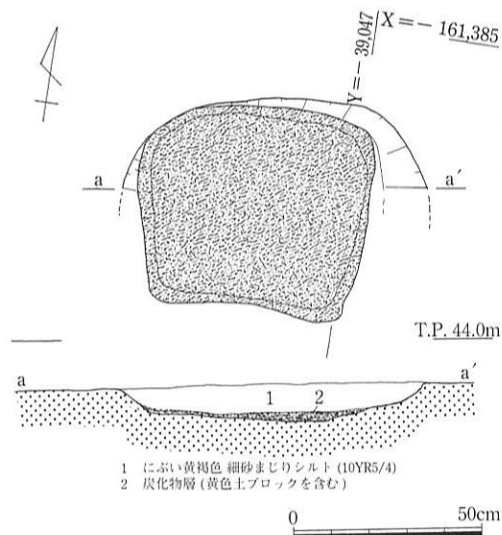


図7.24 土坑1136平・断面図 (s=1/20)

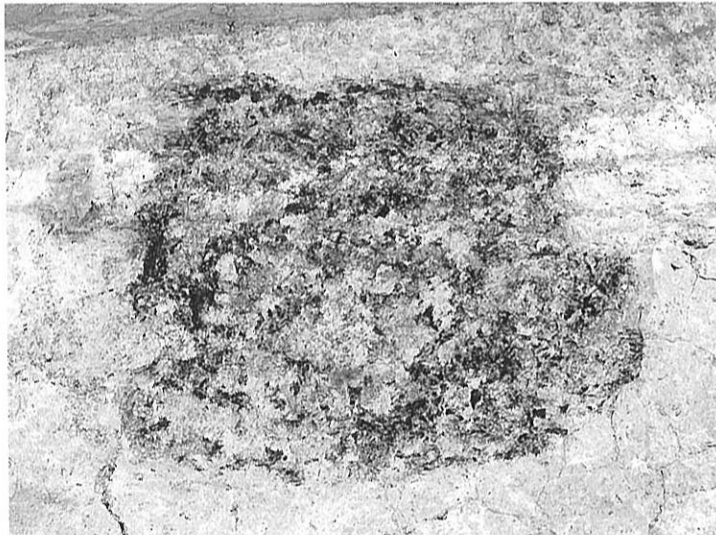


写真7.6 土坑1136 (北から)

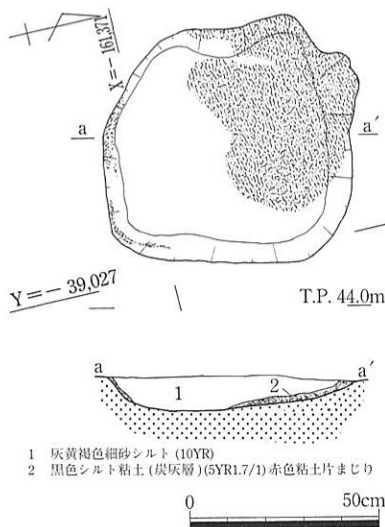


図7.25 土坑1169平・断面図 (s=1/20)

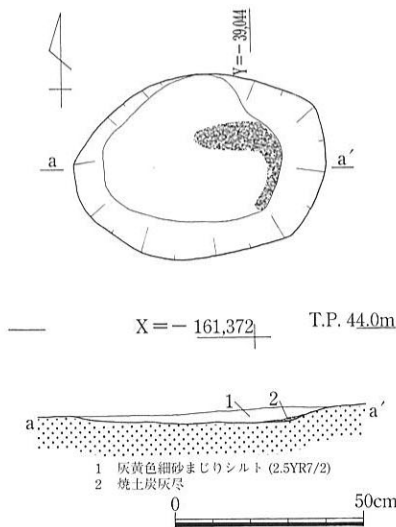


図7.26 土坑1246平・断面図 (s=1/20)

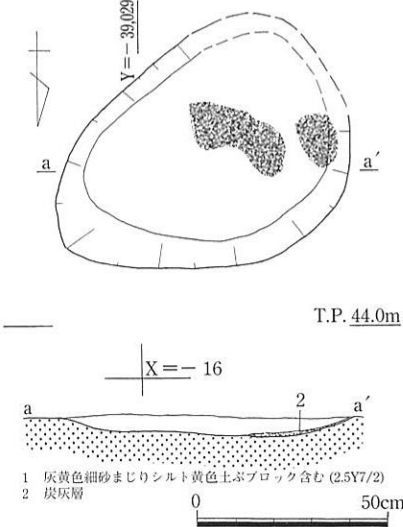


図7.27 土坑1247平・断面図 (s=1/20)

いる。4層の上には、新たに同一構造の土坑を築いている。土坑の規模も南北方向に15cm 拡張されている。鍛冶関係の遺物としては、1層から3層にかけて鍛造剥片、火を受けた石、焼土が出土している。本土坑は、出土遺物とその構造から鍛冶炉であると考えられる。2層、4層で炉内の乾燥をはかり、1層、3層で炉の操業が行われたことが考えられ、1度操業した炉の上部に炉を造り直している。後世の削平により上部構造も破壊されており、下部構造のみが残存する検出状況と考えられる。遺物は細片で図示できるものがなかったが、土師器を中心として須恵器、鉄滓、加工された礫が出土している。出土遺物から本土坑は奈良時代に位置付けられる。

〔土坑1136〕(図7.24、写真7.6)

本遺構はI11i5地区で検出された土坑である。南側半分を側溝によって破壊されている。東西方向にやや長い隅丸の方形で、規模は長軸80cm、短軸は復元長で約70cm、深さ10cmである。2層に分層が可能で、1層はベース土(にぶい黄褐色細砂まじりシルト)と同質の粘土で土坑上面を被覆する状態であり、2層部分ではベース土ブロックを含む状態で炭灰、焼土が多く入る。本土坑は前述の土坑同様に鍛冶炉の下部構造が残存している状況と考えられ、検出遺構面自身はかなり削平を受けていることがわかる。遺構の時期であるが、遺物が出土しておらず時期決定は難しいが、上層にベース土を利用した粘土層、下層に炭灰層という構造が、前述の土坑と一致することから、奈良時代と考えたい。

〔土坑1169〕(図7.25)

本遺構はI11g3地区で検出された土坑である。やや北側に広がりを持つ隅丸方形であり、長軸66cm、短軸60cm、深さ9cmである。2層に分層が可能で、下層に焼土まじりの炭灰層、上層に炭、灰が含まれる灰褐色細砂まじりシルトという状況が確認できた。土坑の規模、埋土の状況から鍛冶炉の下部構造と考えられる。本土坑は鍛冶炉と考えられる土坑の中で一番良好に焼土が検出されている。遺物は土師器片、須恵器細片が出土しているが、遺物から時期を決定することは難しい。しかし、本土坑の構造が周辺土坑と同一であることから奈良時代と考えたい。

〔土坑1246〕(図7.26)

本遺構はI11h5地区で検出された土坑である。東西方向に長い楕円形で長軸52cm、短軸46cm、深さ3cmである。本土坑底部焼土、炭灰層が部分的に分布し、上層は炭灰を含む灰黄色細砂まじりシルトでベース土と考えられる黄色土ブロック、焼土を含む。土坑内の土壌サンプルには鍛造剥片が含まれており、これらの状況から鍛冶炉の下部構造と考えられる。遺物は、土師器、須恵器の細片が出土している。実測可能な遺物はない状況であるが、土師器の長胴羽釜と考えられる口縁部片が出土しており、生駒西麓産胎土でつくられ8世紀に位置付けられる。本土坑の時期は出土遺物と遺構の構造から奈良時代と考えられる。

〔土坑1247〕(図7.27)

本遺構はI11f3地区で検出された土坑である。本土坑は北東-南西方向に長い楕円形で、規模は長軸66cm、短軸49cm、深さ6cmで底部分に炭灰が入る部分がある。上層は灰黄色細砂まじりシルトでベース土と考えられる黄色土ブロック、焼土を含む。遺物は出土していないが、これらの状況から本土坑も鍛冶炉の下部構造と考えられ、本土坑の時期も奈良時代に位置付けたい。

〔土坑1142〕(図7.28)

本遺構はI11g5地区で検出された土坑である。北東-南西方向に長い楕円形で、規模は長軸92cm、短軸76cm、深さ22cmである。埋土は若干の炭、灰とともに、ベース土ブロックを含む暗灰黄色極細砂ま

じりシルトで単層である。周辺部で検出されている土坑とは、埋土の状況が異なる。このことは、上部構造が削平によって下部構造のみとなった鍛冶炉と考えられる。埋土状況の差は、鍛冶の工程差によって炉の構造に違いが見られるということも考えられる。また、本土坑に近接する土坑1141に付属した鍛冶炉の補助的な土坑と考えることもできる。遺物は鉄滓、土師器、須恵器細片が少量出土するのみで時期決定は難しいが、周辺の土坑と同時期の奈良時代と考えたい。

〔土坑1148・土坑1149〕(図7.29)

本遺構はともにI11g4地区で検出された土坑である。両土坑ともに長軸はほぼ南北方向で、土坑1148は、やや南北方向に長い隅丸方形で、南側の一部が土坑1149に掘削されており、長軸長が確認できない。土坑1148の規模は、検出長軸62cm、短軸36cm、深さ8cmである。土坑1149の規模は長軸85cm、短軸54cm、深さ9cmである。両土坑の埋土の状況は同様に、下層に炭灰を多く含む層、上層ににぶい褐色粒砂まじりシルトで炭まじりである。下層に炭層、上層にベース土に類似した粘土を埋土とする状況は周辺で検出された土坑同様に鍛冶炉の下部構造と考えられる。

土坑1148の出土遺物は土師器、須恵器細片、鉄滓が出土している。土坑1149の出土遺物は、土師器、

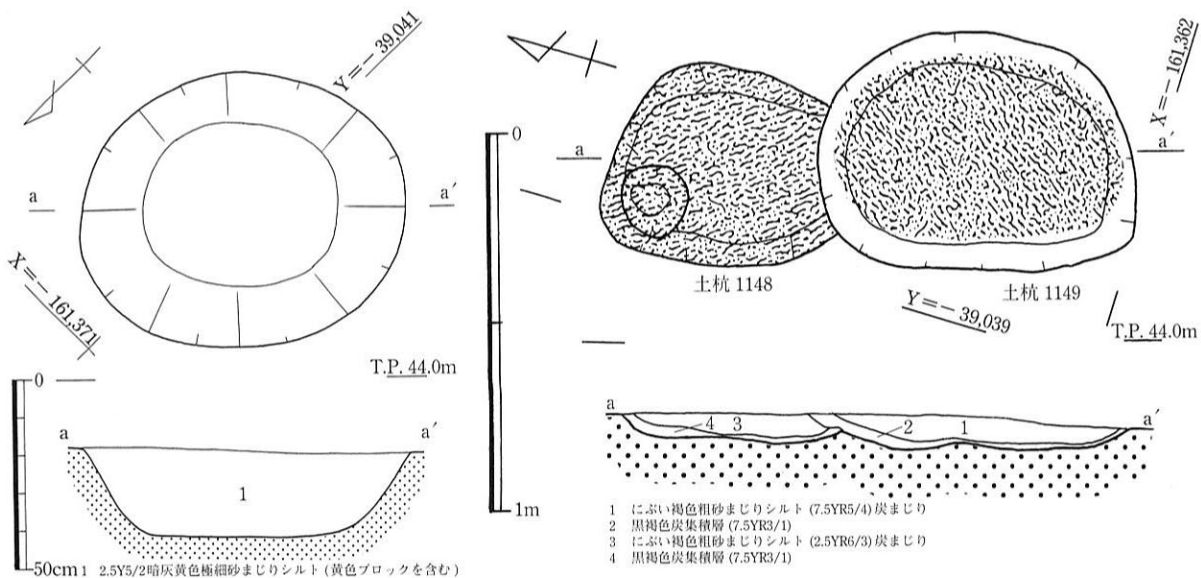


図7.28 土坑1142平・断面図 (s=1/20)

図7.29 土坑1148・土坑1149平・断面図 (s=1/20)

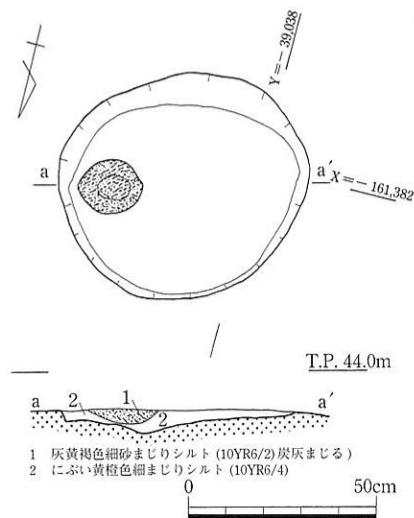


図7.30 土坑1138平・断面図 (s=1/20)



写真7.7 溝1139土器出土状況

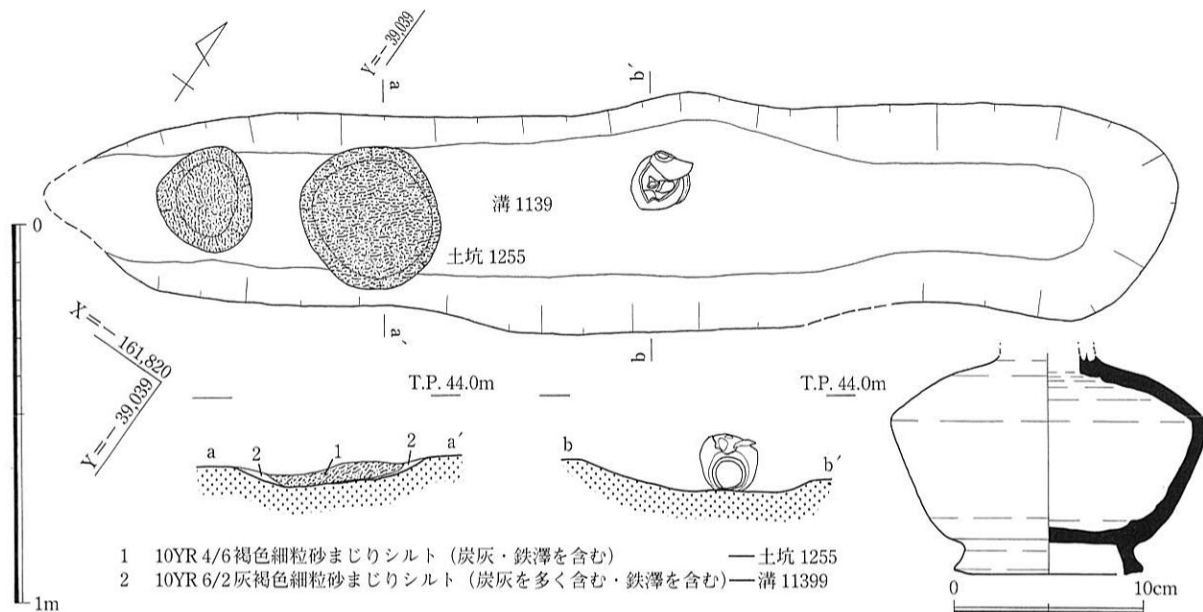


図7.31 土坑1255、溝1139平・断面図、溝1139出土土器

須恵器が出土している。また、土坑1148・土坑1149ともに土壌サンプルから鍛造剥片が出土しており、遺構の構造とともに、出土遺物からも鍛冶炉であることが証明された。両土坑の時期は土坑1148が土坑1149に掘削される状況から、土坑1148が若干古いと考えられるが、埋土の状況、規模がほとんど同じであることから、ともに周辺検出の土坑同様に奈良時代に位置付けたい。

〔土坑1138〕(図7.30)

本遺構はI11g6地区で検出された土坑である。やや東西方向に長い円形で長軸66cm、短軸48cm、深さ6cmである。本土坑の東より部分に、直径15cm、深さ4cmの部分で炭灰が含まれる状況を確認している。遺物は出土していないが、周辺で検出の土坑同様に鍛冶炉の下部構造と考えられる。本土坑の時期は周辺の土坑と同様に奈良時代と考えたい。

〔溝1139〕(図7.31、写真7.7)

本遺構はI11i4地区で検出された溝である。削平により遺構の広がり確認できなかった。検出長300cm、幅64cm、深さ5cmである。本溝内を土坑1255が掘削しており、炭灰とともに鉄滓が集中している。本溝内からは、炭灰、鉄滓が集中する部分が土坑1255以外にも存在している。本溝からの出土遺物は鉄滓(約112.5g)、土師器、須恵器が出土している。実測可能な遺物として長頸壺(壺K)があり、平城宮II型式に属する。本溝の時期は奈良時代前半に位置付けられる。

〔土坑1255〕(図7.31)

本遺構はI11i4地区で検出された土坑である。本土坑は溝1139を掘削しており、円形で最大径39cm、深さ3cmで炭灰とともに鉄滓が出土している。また、土壌サンプルからは鍛造剥片が出土している。この状況から本土坑は鍛冶炉の下部構造と考えられる。土器は土師器、須恵器細片が出土している。本土坑の時期は出土遺物から決定は難しいが、溝1139を掘り込んで土坑をつくっていることや出土遺物の中に平安時代以降の遺物がないことから奈良時代と考えられる。

掘立柱建物vの周辺遺構(図7.32)

〔落込み1239〕(図7.32)

本遺構は I11g5から跡 I11h5地区にかけて検出された落込みである。長軸543cm、最大幅194cm、深さ15cmの不整形で、西側が北西方向に曲がり、落込み1240とつながると考えられる。遺物は土師器、須恵器細片、鉄滓が出土している。本落込みの時期は、土器から奈良時代に位置付けられる。遺構の配置関係から掘立柱建物跡Ⅴを取り囲む遺構の1つと考えられる。

〔落込み1240〕(図7.32)

本遺構は I11g5～g6、I11f5～f6地区にかけて検出された落込みである。規模は、最大幅518cmで掘立柱建物跡Ⅴの周囲を囲む形でL字状に屈曲する。深さは5cm～10cm程度と浅いが掘立柱建物跡Ⅴに近接する部分で鉄滓(約1245g)が集中して出土しており、建物側から鉄滓を廃棄している状況が明らかとなった。鍛冶工房と考えられる掘立柱建物跡Ⅴの周辺に、溝(溝1221、溝1242)および溝状の落込み(落込み1239、落込み1240)を掘削することによって、防湿対策を施している。また、本調査地区におけるベース土の状況は、乾燥時には良好な乾燥状態を示すが、降雨時には泥化して乾燥までの時間もかかる状況であり、そのためにこのような掘削が行われたと考えられる。出土遺物は、7.32-1、7.32-2はともに須恵器坏Bであり、平城宮Ⅰ～Ⅱ型式に属する。本落込みの時期は出土遺物から奈良時代前半に位置付けられる。

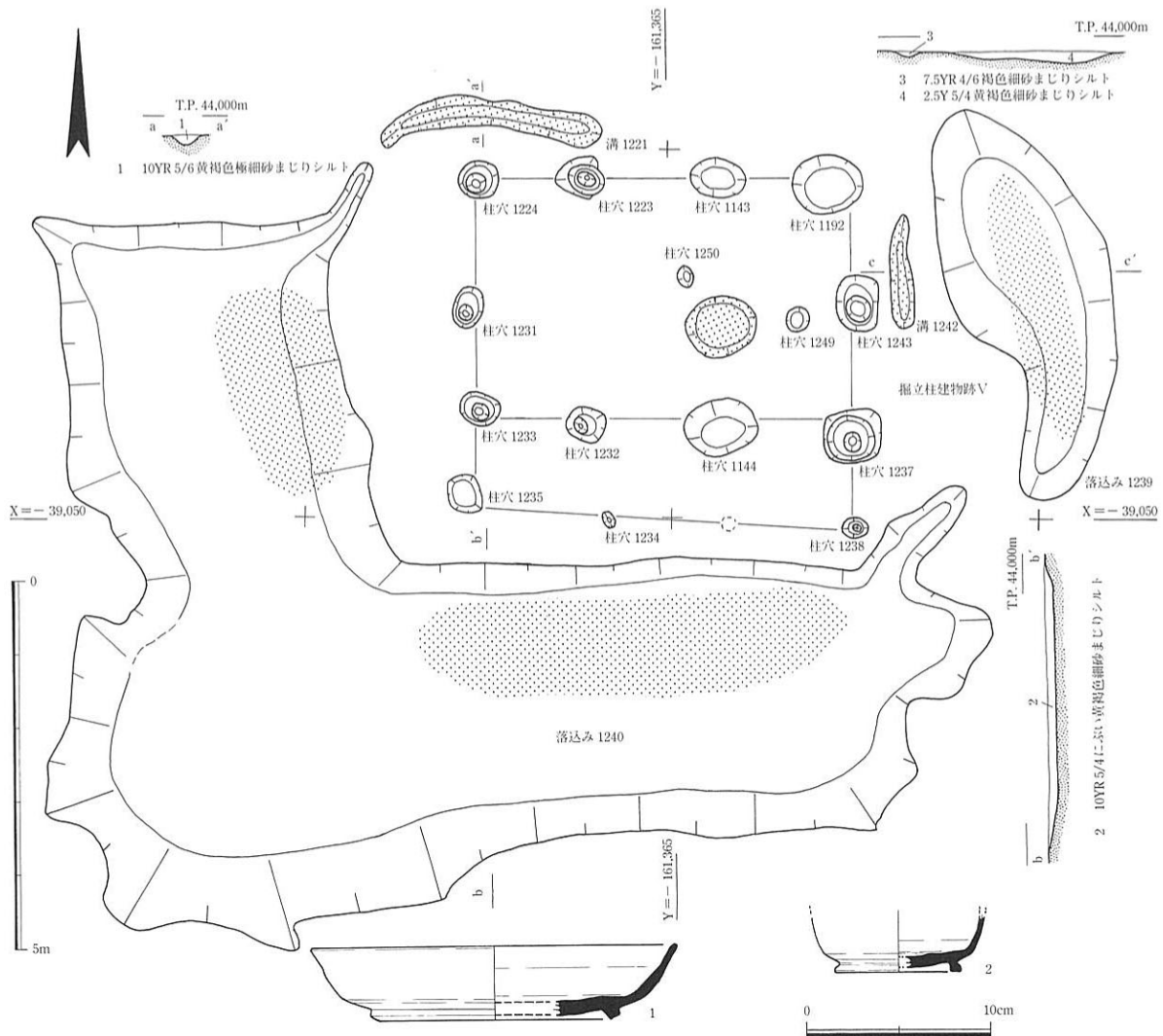


図7.32 掘立柱建物跡Ⅴ周辺鉄滓出土分布図、落込み1240出土土器
(トーン部は、鉄滓が集中して出土した範囲)

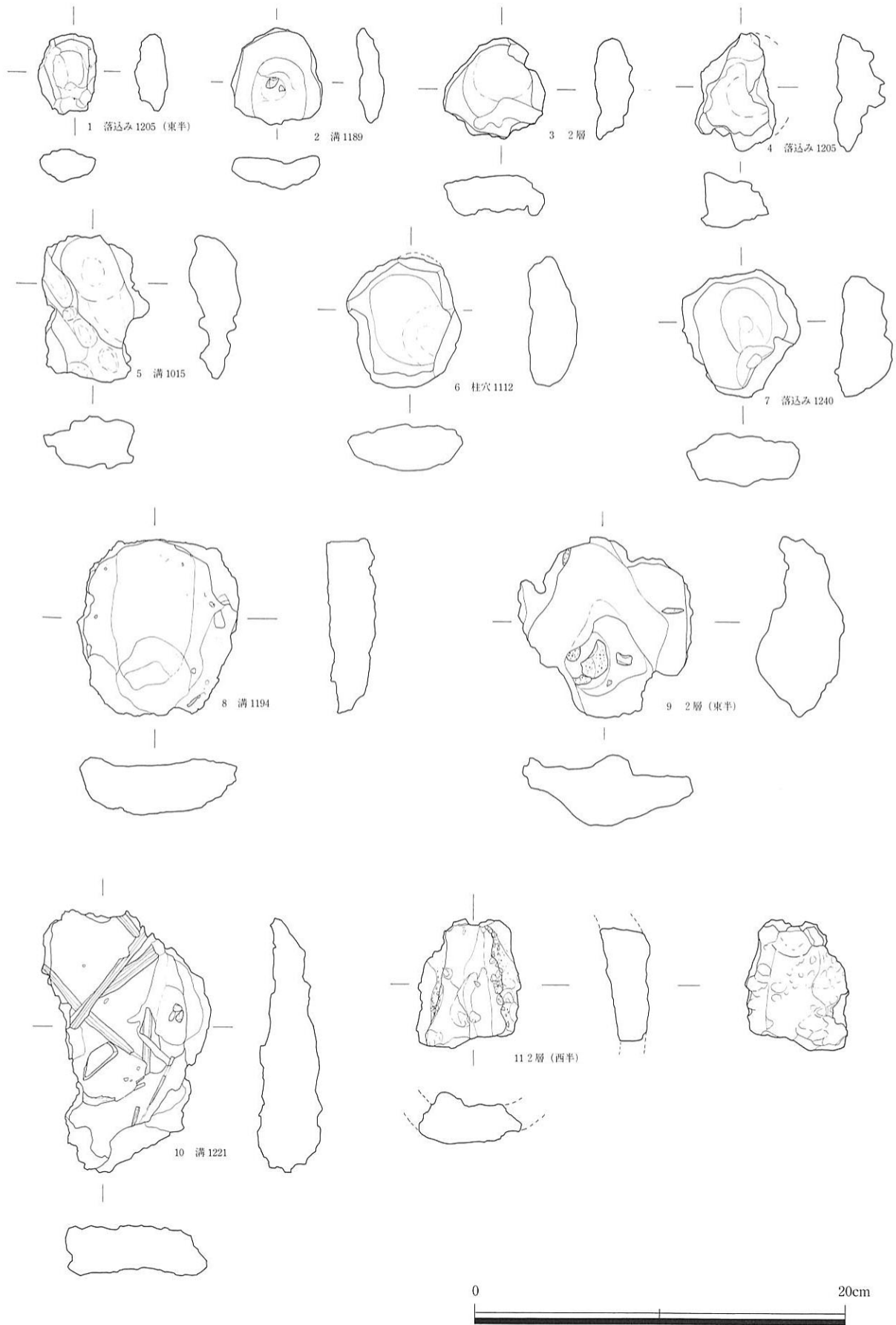


図7.33 鍛冶関連遺物 (s=1/3)

保存 1F

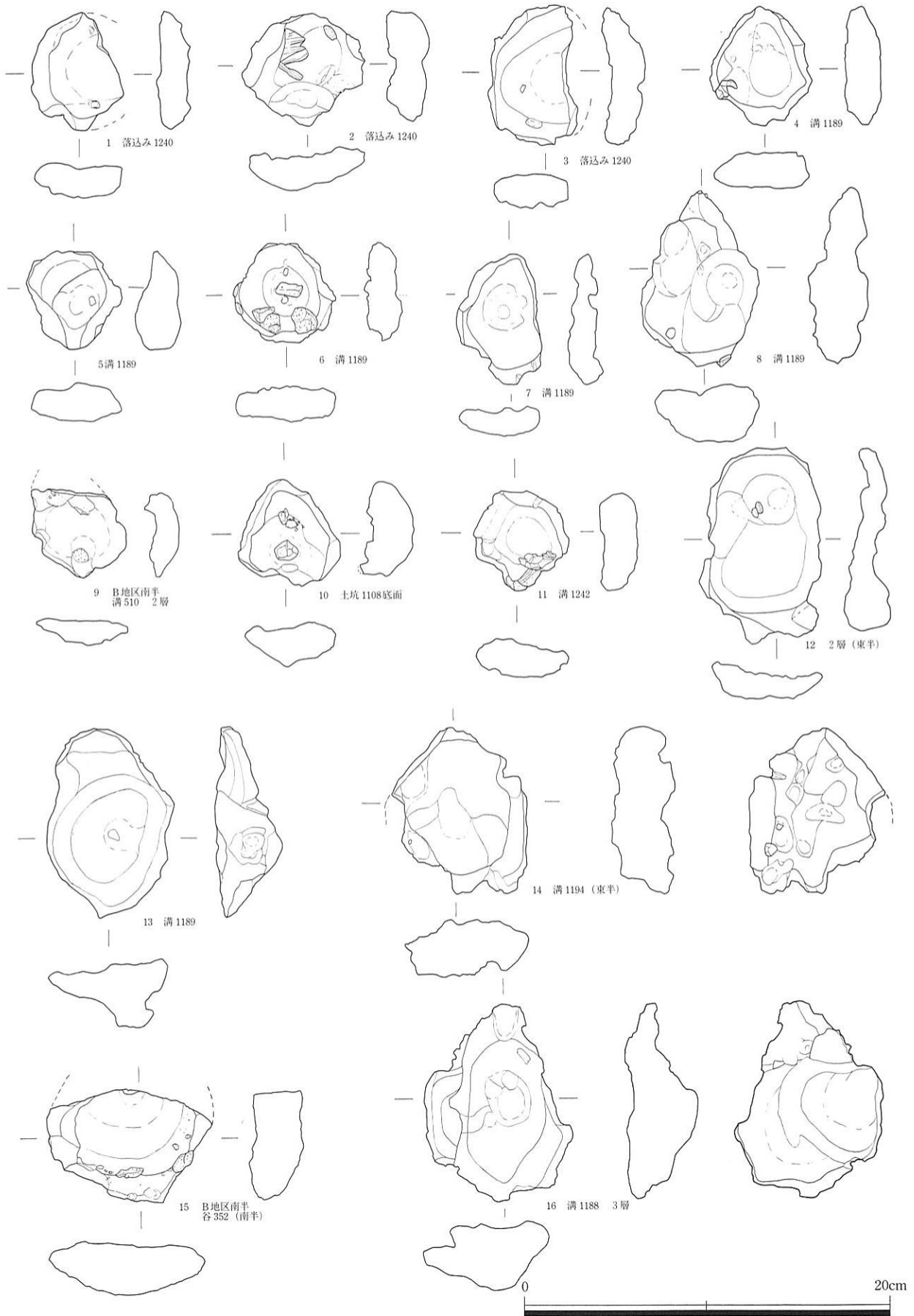


図7.34 鍛冶関連遺物 (s=1/3)

〔溝1221〕（図7.32）

本遺構は I11g5地区で検出された溝である。規模は、検出長300cm、幅44cm、深さ10cm で、埋土は黄褐色細砂まじりシルトである。掘立柱建物跡 v 周囲の溝である。遺物は鉄滓 1 点（約297.5g）出土している。

〔溝1242〕（図7.32）

本遺構は I11g5地区で検出された溝である。規模は、検出長160cm、幅30cm、深さ8.2cm で、埋土は褐色細砂まじりシルトである。遺物は全部で約258g の鉄滓が出土している。掘立柱建物 v の周囲をめぐる溝の 1 つである。

〔溝1189〕（図7.35）

本遺構は I11i4～i5、I11h4～h5にかけて検出された溝である。遺構の規模は、検出長1220cm、幅144cm、深さ21cm である。本溝は、ほぼ東西方向で東側部分が北に曲折する。部分的に検出された遺構の広がりから、推測することは難しいが、周辺で検出されている掘立柱建物と方向が一致しており、建物および敷地を区画する溝であった可能性がある。遺物は鉄滓が、椀形滓を中心として10点以上、総重量で約2550g が出土している。また、土壌サンプルには鍛造剝片が含まれ、本溝に近い鍛冶炉で出た鉄滓や炭灰とともに廃棄されたと考えられる。本溝の時期も周辺の鍛冶遺構と同じ奈良時代と考えたい。

鉄滓

鉄滓は、B 地区から C 地区南半にかけて出土している。鉄滓の出土総重量は約10820g である。そのうち全体の約95%以上の10430g が C 地区南半から出土している。実測は、残存率の高いもの及び特殊なものについて行った。なお、実測を行わなかった鉄滓については別表を参照されたい。

C 地区南半の鉄滓出土の状況は、鍛冶炉と考えられる土坑、工房と考えられる掘立柱建物の周辺から出土している。出土点数は細片も含めると50点以上で、鉄滓の形状からほとんどが椀形滓である。鉄滓表面の中央部には鞆による送風時にできたと考えられる凹部が見られるものが多い。炭が付着するもの、表面に鞆の羽口が溶融したと考えられるもの、小礫が付着しているものや炉底壁の付着しているものも見られる。図7.35は、C 地区南半調査区の鍛冶炉と考えられる土坑、鉄滓、鍛造剝片鞆羽口の出土地点の状況である。鍛冶炉及び鍛冶工房と考えられる掘立柱建物の周囲の落込み、溝に廃棄されたものが中心で、鍛冶炉と考えられる土坑内から出土したものはごく少量である。

7.33- 1～10は化学分析を行った鉄滓である。7.33-11は炉底が高温によって溶融したものと考えられるもので鞆羽口とともに化学分析を行った。7.34- 1～7.34-16は、遺構及び遺物包含層から出土した鉄滓である。

鉄滓は大きさ、重量について 3 分類することができる。

1. 長軸5.5～7.5cm、重量が150g までのもの
2. 長軸10cm 前後、重量150～250g
3. 長軸10cm をこえるもので、重量が250～400g

である。この数値は、実測した鉄滓の中でも形状がある程度復元可能なものについて観察した分類である。

Y = -39,010



X = -161,350

X = -161,360

Y = -161,370

X = -161,380

Y = -39,020

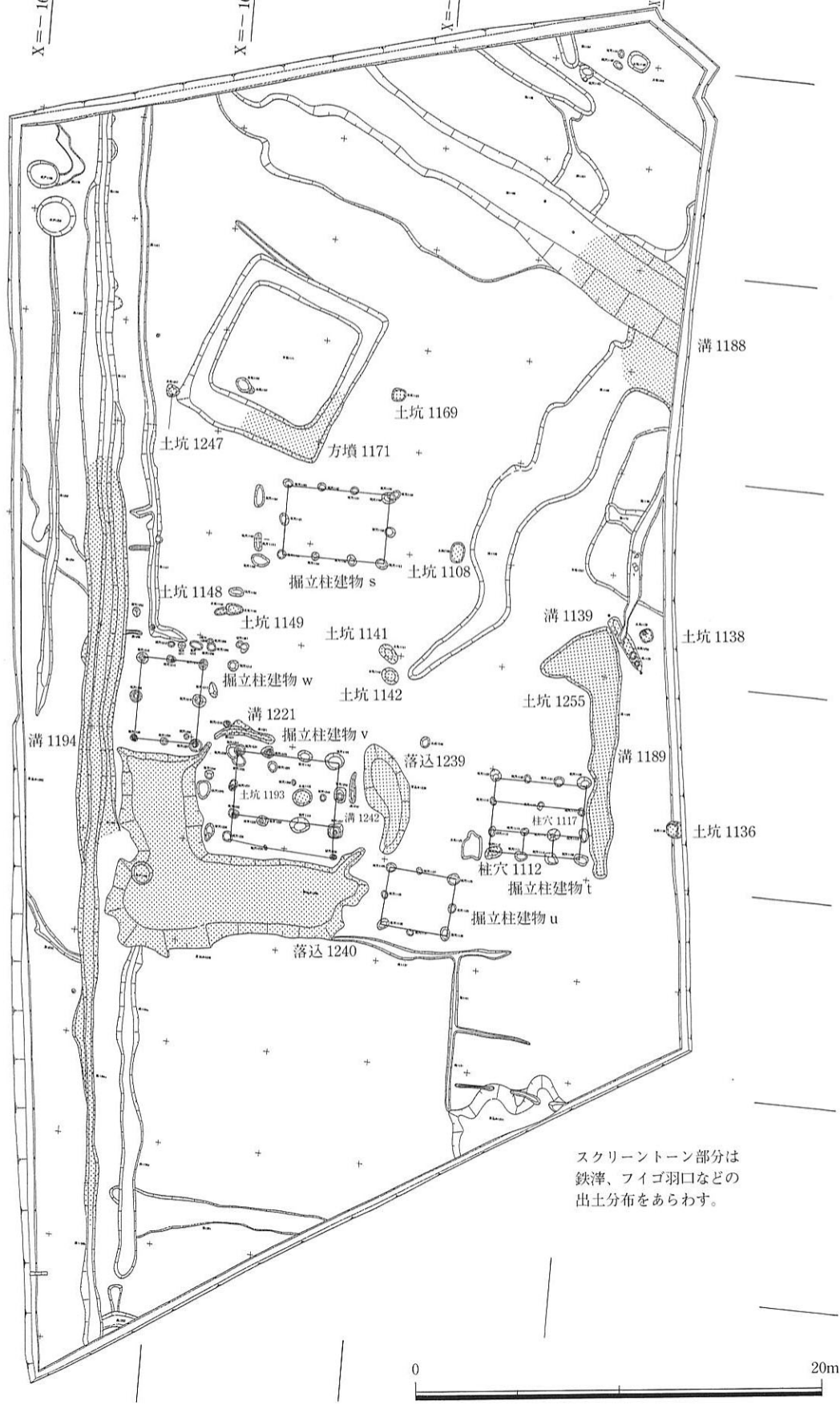
Y = -39,030

Y = -39,040

Y = -39,050

Y = -39,060

Y = -39,070



スクリーントーン部分は鉄滓、フイゴ羽口などの出土分布をあらわす。

図7.35 鉄滓出土分布図 (s=1/300)

C 地区包含層出土遺物 (図7.3,36)

遺物包含層はC地区全域で確認している。耕作土下を2層に分けて上層から1層、2層としている。主要な出土遺物は以下のとおりである。

7.36-1は須恵器坏蓋Gである。宝珠つまみで、内面に返りが見られることから飛鳥II～III型式に属し、飛鳥時代に位置付けられる。

7.36-2は須恵器壺Kである。頸部のみの破片で、内面に漆が付着している。破断面にも漆が付着している状況が観察される。壺Kは漆の運搬用容器として使用されることが多く、この遺物も運搬容器であると考えられる。壺Kのように長頸のものは、頸部付近で漆が固まることが多く、そのため頸部から体部付近で割って取り出していたようである。漆の用途は、鍛冶工房で製作された製品を接着する接着材として使用されたり、製品をさらに加工するために使用されたことが考えられるほか、鍛冶工房に隣接して木工加工の工房が存在していた可能性もある。

7.36-3、7.36-4は三重弧文軒平瓦である。7.36-3はC地区南端地点からの出土で、軒瓦の左側縁辺部分の破片である。重弧文の施文は押し引きによる。凹面は摩滅により、布目痕が確認できない状況である。7.36-4はC地区の北半部(1～4cトレンチ)から出土しており、瓦当部は左側縁辺部から2分の1以上が残る。瓦当部の施文は押し引きで、平瓦部凹面には布目、紐の痕跡が残る。7.36-3、4はともに7世紀後半に位置付けられる。三重弧文軒平瓦は河原城遺跡全体で3点出土している。それ以外の軒平、軒丸瓦は丹比廃寺出土の瓦と同範であり、三重弧文軒平瓦は出土していない。周辺寺院で出土しているのは黒山廃寺からである。しかし、丹比廃寺は発掘調査例が1例のみで、表採された瓦の点数は少なく、丹比廃寺で三重弧文軒平瓦が使用されていた可能性は否定できない。

また、溝1171からはサヌカイト製の石鏃が1点(図7.37)出土している。先端と基部は欠損しているが長さ4.5cmにはなると思われ、縦長で大型の有茎石鏃と考えられる。両面の中央部を調整剝離後に研磨しているのが特徴である。おそらく、調製剝離後に残った隆起部を着装のために研磨して平坦に仕上げたものと思われる。形態・大きさ・表面の研磨などの特徴から弥生時代中期～後期の石鏃と考えられる。

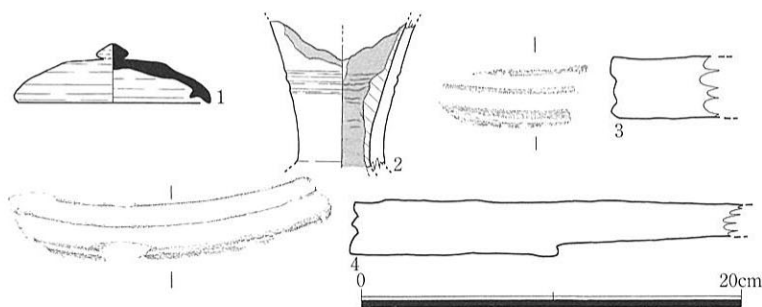


図7.36 C地区包含層出土遺物

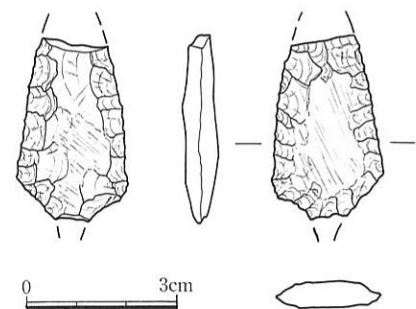


図7.37 C地区出土石器 (s=2/3)

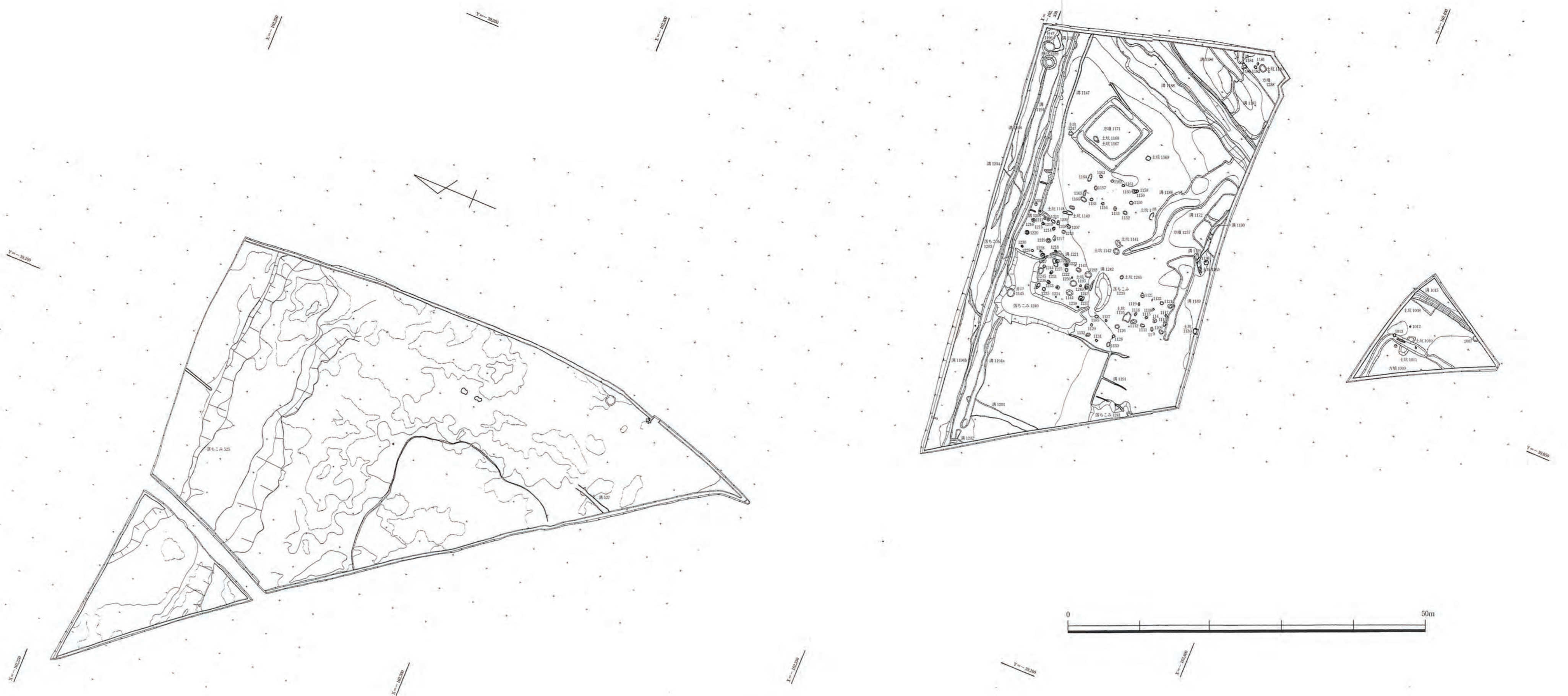


图7.38 C地区遗构配置图 (s=1/400)

第8章 基礎分析・考察

第1節 河原城遺跡の集落変遷と古代地域社会

若林邦彦

1. はじめに

今回の発掘調査では、古墳時代後期末～飛鳥・奈良時代の集落跡が検出された。その竪穴住居跡・掘立柱建物跡については、出土土器あるいは遺構の切りあい関係などから配置の変遷を復元することが可能である。また、今回の調査では、遺跡南半部を南北に縦断する状態で調査区域が設定されたことになり、集落の南北方向の規模を確認することもできた。つまり、本調査例は、完全とは言えないまでも、一定程度集落構造の変遷が概観できる事例と考えられる。そこで、本稿では、今回の調査区域における河原城遺跡の集落変遷を示すとともに、それを丹南地域（美原町・羽曳野市西部・松原市南部）の古代遺跡の動態と関連で説明する作業を行いたい。

2. 集落遺構群の概略

2.1. 検出された建物数・位置

今回の調査では、竪穴住居跡と掘立柱建物跡の2種類の建物によって構成される集落跡を発見した。検出された建物は竪穴住居跡10棟、多数確認された柱穴群のうち掘立柱建物としてまとまりが確認できたものが24棟であった。竪穴住居跡はすべて（竪穴住居204,205,206,219,260,264,284,346,349,403）が中位段丘上面のB地区北半で検出されている。掘立柱建物については、中位段丘上面のうち西側緩斜面に位置するC地区からは5棟（掘立柱建物s,t,u,v,w）が、段丘尾根～東側斜面上部にあたるB地区北半からは15棟（掘立柱建物a,b,c,d,e,f,g,h,j,k,l,m,n,o,x）が検出されている。また、段丘東側斜面中腹にあたるB地区南半からは4棟（掘立柱建物p,q,r,i）の掘立柱建物跡が検出されている。

このように、遺跡の中でも中位段丘の上面とその東側斜面上部を中心に建物群が形成され、東除川に近い段丘裾部には居住遺構はみられない。特にT.P.45m以上の尾根上に住居・建物は集中している。

竪穴住居跡の中には痕跡だけのもの（竪穴住居跡219）や、東半分が削り取られたもの（竪穴住居跡264・284・205・206・346・403・349）がある。住居の形態はすべて方形で、1辺4.5mのものから1辺6mの規模のものまでである。いずれも、長辺を同一方向（北北東―南南西方向）にそろえて建てられている。遺存状態の良い竪穴住居（竪穴住居260・264）では、煙道をもつカマドが住居の北辺・西辺などで検出された。これらの中には建物の一部が重複しながら建替えられているもの（竪穴住居跡204・205・284と竪穴住居跡346・349・403）がある。

また、掘立柱建物は、平面形態が長方形となるものでは、2×3間のもの（掘立柱建物b・c・d・e・f・g・k・m・n・o・p・s・v）が13棟と最も多い。その他に、平面形態が正方形に近い形態の掘立柱建物j・h・q・r・u・w・xのように2×2間の形態もみられる。それ以外には、調査区南部の掘立柱建物跡a・1のように2×4間といったものや3×3間の掘立柱建物跡tなどもみられる。

全体に削平が著しく、遺構の埋土中からの出土土器片も少数かつ断片的で、年代決定が容易な建物は少数である。ただし、B地区の包含層中から出土した土器では、TK43型式～飛鳥IV式の須恵器が主体を占め、少数の平城宮I～III式段階の須恵器が混じるといった状況であった。このため、B地区で検出された住居・建物のうち大半が古墳時代後期～飛鳥時代の遺構で、若干奈良時代の遺構が存在する程度と

類推できる。

また、C地区の包含層については、古墳時代後期～飛鳥時代の土器群や平城宮Ⅰ～Ⅲ式の土器群や平城宮式系の軒丸瓦などの奈良時代の遺物も多数出土している。後述するように、鉄滓や鍛冶炉の一部など鍛冶関連の遺物・遺構もみられるため、C地区の掘立柱建物の主体的時期は奈良時代と考えるのが自然であろう。

このように、当遺跡の集落存続時期は古墳時代後期末～奈良時代であり、地区別の出土遺物を概観しただけでも、一定の居住域の変化が想定できる。つまりは、古代前半における小集団の変化の図式を読み取る上で格好の例とも言えよう。次に、竪穴住居跡・掘立柱建物跡のそれぞれについて、出土土器の時期と切りあい関係からさらに細かい時期差を抽出して建物群の変遷復元へと進みたい。

2.2. 各建物の所属時期-根拠となる土器と建物形態変化の方向性

【竪穴住居跡と掘立柱建物跡の先後関係】

まず、考えてみたいのは、検出された竪穴住居と掘立柱建物に時期差がみられるかどうかである。一般的に、古墳時代までは竪穴住居で構成される集落は珍しくないが、古代以降となると近畿地方においては掘立柱建物が主流になると考えられる。しかし、実際には古墳時代においてもすでに掘立柱建物のみで構成される集落も報告されていることから、そのような状況証拠だけで、当遺跡での建物施設の変遷を想定することはできない。

この点に関しては、今回の調査で確認できた遺構の切りあい関係に関する所見は重要である。第6章第2節にも述べたが、今回検出された竪穴住居跡のうち、床面整地土層が明確に確認できたのは竪穴住居跡204, 206, 260の3遺構であった。このうちすべての竪穴住居跡において、掘立柱建物柱穴群はこれらの床面整地土の上面から掘り込まれる状態が観察された。また、その他の住居跡の多くでも、壁溝と掘立柱建物柱穴が重複する地点では、必ず埋土の上面から柱穴が掘り込まれている状況が確認された。つまり、今回検出された掘立柱建物柱穴はすべて竪穴住居跡から後出する可能性が高い。

また、出土土器からみても、竪穴住居跡で確認されたB地区北半においては、包含層中の土器が古墳時代後期後半～飛鳥時代を中心とするのに対して、竪穴住居跡から出土した須恵器はすべてTK43～TK209型式の範疇つまり古墳時代末～飛鳥時代初頭に属するものであった。これは、この調査区域での遺構形成期間の初期のころだけに竪穴住居跡が形成されていたことを示している。

以上の二点から、当遺跡においては竪穴住居跡主体集落から掘立柱建物のみで占められる集落へと変化したことが想定できる。すべての掘立柱建物の柱穴が竪穴住居跡の床面整地土の上面から掘り込まれていることから、おそらく二種類の建物の共存期間は短く、ある段階で竪穴住居から掘立柱建物へと急速に建替えられ建物構造が変化したものと思われる。

【各掘立柱建物の新旧関係】

では、竪穴住居跡から掘立柱建物への建替え時期はいつ頃だったのか。ここで注目したいのは、竪穴住居跡260と掘立柱建物fの関係である。掘立柱建物fの長軸は竪穴住居跡260の南辺と完全に一致して、重複した状態にある。先述のように竪穴住居跡260の床面整地土や壁溝埋土は掘立柱建物f柱穴によって壊されており、前者から後者への先後関係は明白である。つまり、竪穴住居跡260のプランを踏襲する形で掘立柱建物fは建てられたことになる。また、掘立柱建物fの柱穴40からはTK209型式に属する須恵器坏身が出土し、6世紀末～7世紀初頭の建物と推定できる。この時期は竪穴住居群の推定存続時期の再末期とも一致している。このことから、竪穴住居跡260から掘立柱建物fへと建替えが行われたと考え

ることができる。

これを、竪穴住居跡～掘立柱建物への移行時期をしめすと考えれば、二種類の建物の入れ替わる時期は7世紀初頭ごろに求めることができよう。

それでは、各掘立柱建物の時期はどのように類推することができるのだろうか。まずは、建物の形態特に柱穴規模に注目すると、検出された建物群を二群に大別することが可能である。一つは、柱穴底面規模が径55cm以上に及ぶもので15軒（掘立柱建物跡 a,b,c,d,f,g,h,i,j,k,l,m,n,o,r）、もう一つは柱穴底面規模が50cm以下のものだけで構成されるもので9軒（掘立柱建物跡 e,p,q,s,t,u,v,w,x）が該当する。

さらに、7世紀初頭に存在していたことが確実な掘立柱建物跡 f は柱穴底面径が約80cmにも及ぶ。一方、柱穴から奈良時代の瓦が出土し、確実に8世紀に位置付けられる掘立柱建物 p や奈良時代の鍛冶炉に伴うことが確実な掘立柱建物 s,t,u,v,w などでは柱穴底面径が50cm以内にとどまるものが大半である。このことから、柱穴平面規模の大きな建物を7世紀つまり飛鳥時代に、小さな建物を8世紀つまり奈良時代にあてることができるのではないだろうか。

3. 古墳時代後期～飛鳥時代の集落変遷

3.1. 住居・建物の変遷

この変化の方向をもとにして、建物配置の変遷を考えてみたい。まず、竪穴住居跡の変遷を考えてみたい。竪穴住居跡は、2箇所において重複して検出されている。1箇所では竪穴住居跡205→204→284、もう1箇所では竪穴住居跡346→403→349という3つの竪穴住居跡の重複が確認された。つまり、いずれの重複においても2回の立て替えが行われたことがわかる。また、これまで確認されている竪穴住居跡からの出土土器はTK43型式～TK209型式である。これにより、竪穴住居跡による集落形成は6世紀後葉～7世紀初頭という短い期間と想定できよう。土器型式差と遺構の重複関係からは、竪穴住居跡主体の時期の配置変遷を3時期にわけて考えることが、細分の限界と考えられる。

また、掘立柱建物跡については、先述のように柱穴の規模から飛鳥時代と奈良時代のものに二分することが可能だが、それでは飛鳥時代の掘立柱建物数が15軒と非常に多くなる。実際、極めて近接して存在していることから、15棟の同時存在は考えられない。この15棟がどのような建物変遷によって形成されたかについて仮説を設定することが必要となる。

まず、注目できるのは、各掘立柱建物の主軸方向である。B地区で検出した飛鳥時代の掘立柱建物の主軸方向はおおむね二種類ある。一つは長軸もしくは短軸が北北東-南南西方向もしくは北東-南西方向といった南北軸から逸脱するもので、10軒（掘立柱建物跡 a,b,c,d,f,g,h,j,i,r）が挙げられる。一方、主軸が南北もしくは東西方向に沿う掘立柱建物は5軒（掘立柱建物跡 k,l,m,n,o）が挙げられる。前者は、先行する竪穴住居跡の主軸方向と一致していること、実際に掘立柱建物跡 f が先述のように竪穴住居跡からの建替えによるものであることなどから、古い段階に位置付けられよう。つまり、掘立柱建物跡 a,b,c,d,f,g,h,j,i,r →掘立柱建物跡 k,l,m,n,o という変化の方向が想定できる。

さらに、長軸・短軸が南北軸から逸脱するもののうち、極度に近接していて同時存在がありえないものみられることから、この一群はさらに2時期に細分して配置を想定することが必要である。厳密にみると、最古相であることが確実な掘立柱建物 f により近い長・短軸方向をとる一群（掘立柱建物跡 f, g,a,h,d）とそれ以外（掘立柱建物 j,b,c,r,i）にわけ、前者から後者への変遷を考えるのが妥当であろう。

う。

このような仮定にもとづき、過度に近接した竪穴住居跡や掘立柱建物跡が共存しがたいことなどを考慮にいれて、6～8世紀における住居・建物の配置の変遷を想定したのが図1～6である。この変遷は、竪穴住居から掘立柱建物への変化を上述の5期変遷にあてはめて、機械的に各遺構の同時存在を想定したものでその他の選択肢が存在しうることは言うまでもない。

この変遷図をみると、B地区北半においては、主体となる建物群の位置がより北側へと移動していき、C地区における奈良時代の建物群の位置に近づいていることがわかる。また、今回確認された竪穴住居跡・掘立柱建物の総数は、同時存在では4～9棟程度であったことがわかる。未調査の地区において新たな建物が確認されたとしても、当遺跡の規模はあまり大きくなく、数棟の住居によって形成される建物群が二群程度集合する構造であったと類推できる。

3.2. 竪穴住居・掘立柱建物群周辺の状況

検出された住居・建物の周囲には、同時期におけるその他の種類の遺構も検出されている。まず、古墳時代後期末～飛鳥時代の遺構について確認したい。

B地区北半では、須恵器甕がTK10型式の須恵器杯と土師器高坏で蓋をされた状態で完形で検出された。甕内部土壤の脂肪酸分析を行った結果、ヒトに類似する脂肪酸が含まれていることがわかり、土器棺(土器棺384)であることが確実となった。これにより、集落に隣接して墓がつくられたことが想定できる。ただし、その大きさから小児棺の可能性が高い。成人墓の存在としては、C地区において主体部は確認できないものの方墳とおぼしきものが4基(方墳1171, 1009, 1257, 1258)が検出されている。方墳として確実なものは方墳1171, 1009の二基で、その他は方墳状の高まりの一部を確認したに過ぎない。これらは、溝1181-1058という一続きの大溝と主軸方向に沿った状態で作られている。溝1181の最下層にはTK10型式の須恵器群が堆積していることから、掘削時期は6世紀後半と考えられる。このため、方墳1171, 1009も同時期に存在した可能性が高い。実際に、後世の遺物が混入しているものの、方墳1009, 1171の周溝最下層からは6世紀後葉の遺物が出土している。このように、居住域の内部には小児棺が、北側には大溝に沿って成人を葬った方墳が営まれたことがわかる。しかも、これらの墓域の形成は6世紀後葉を中心としている。墓域と集落の同時存在は集落形成の初期を中心としている可能性が高い。

また、B地区南半の傾斜地では、幅約13m・深さ2.5mの規模の谷(谷352)が検出された。その斜面の湧水地点にはTK43型式前後の完形の土器群が検出されている。竪穴住居跡・掘立柱建物跡群の時期と重複することから、この谷では水汲みなどの作業が行われていたと想定できよう。この谷352は段丘の裾で小さな川(河川4)につながり、その周囲に水路状の施設(溝5・6・7)が複数確認されている。いずれの遺構からも、6～7世紀と思われる須恵器片が出土しており、集落との同時存在が想定できる。これらが水田に伴う水路であれば、段丘下の低地で水田が営まれていたことも推定できる。

また、それら水路の南側にも河川堆積の最終段階の小流路を加工して溝510・515・517がつくられている。この溝の埋没(TK43～TK209型式期)直後には、その上面から小型の井戸がくり貫かれ、円筒埴輪が井戸枠(井戸515)として据えられていた。この井戸内からは7世紀中～後葉(飛鳥II～III期)の須恵器が出土しており、6世紀後半から7世紀の集落住人による活動が段丘裾部の低地にまで及んでいたことは確実である。このように、今回の調査では、古墳時代後期後葉～飛鳥時代にかけての居住域だけでなく、生活・生産に密着した様々な施設が複合的に検出されている。

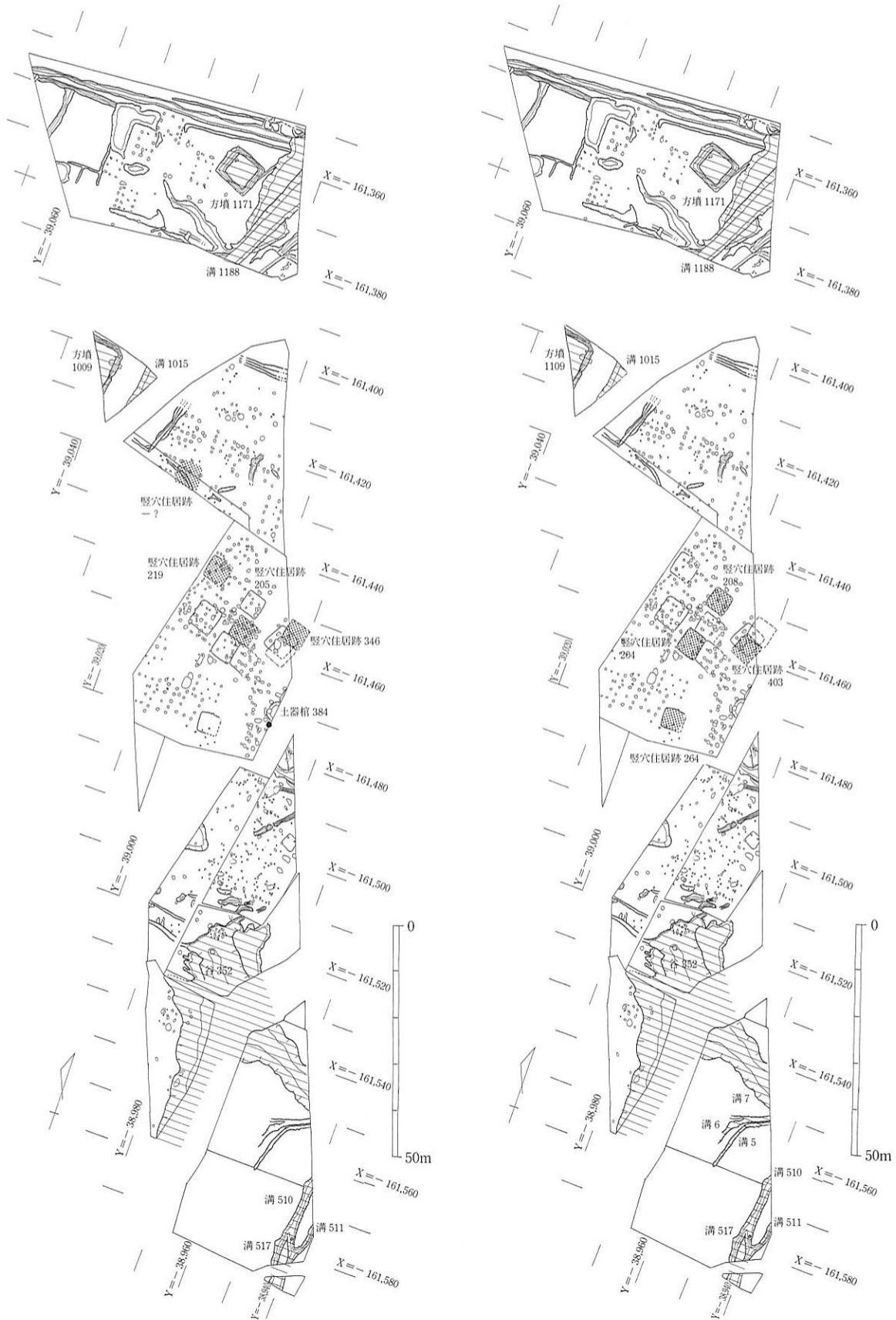


図1 集落の変遷図1 (6世紀後葉) (s=1/1250) 図2 集落の変遷図2 (6世紀末) (s=1/1250)

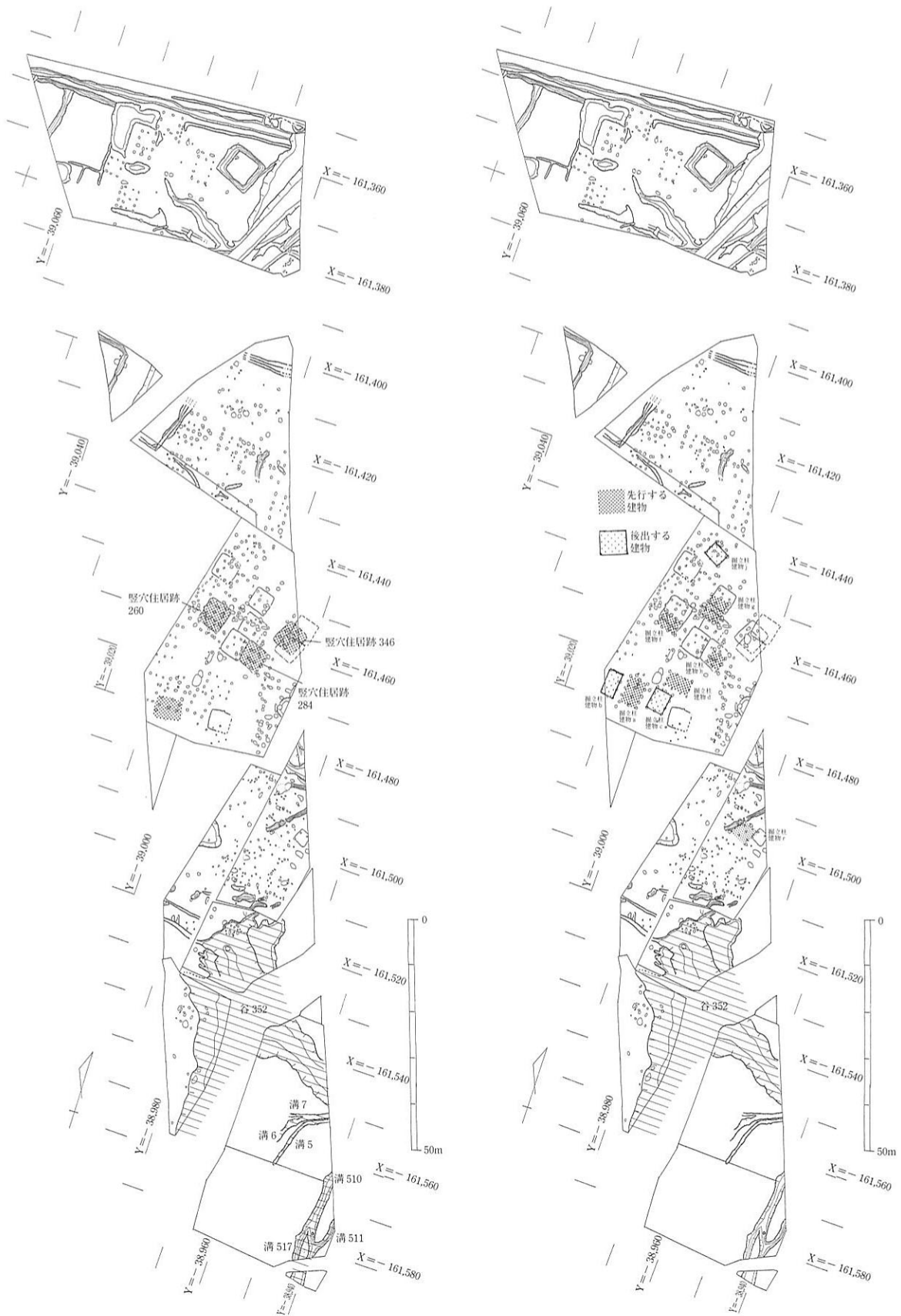


図3 集落の変遷図3 (7世紀初頭) (s=1/1250) 図4 集落の変遷図4 (7世紀前半) (s=1/1250)

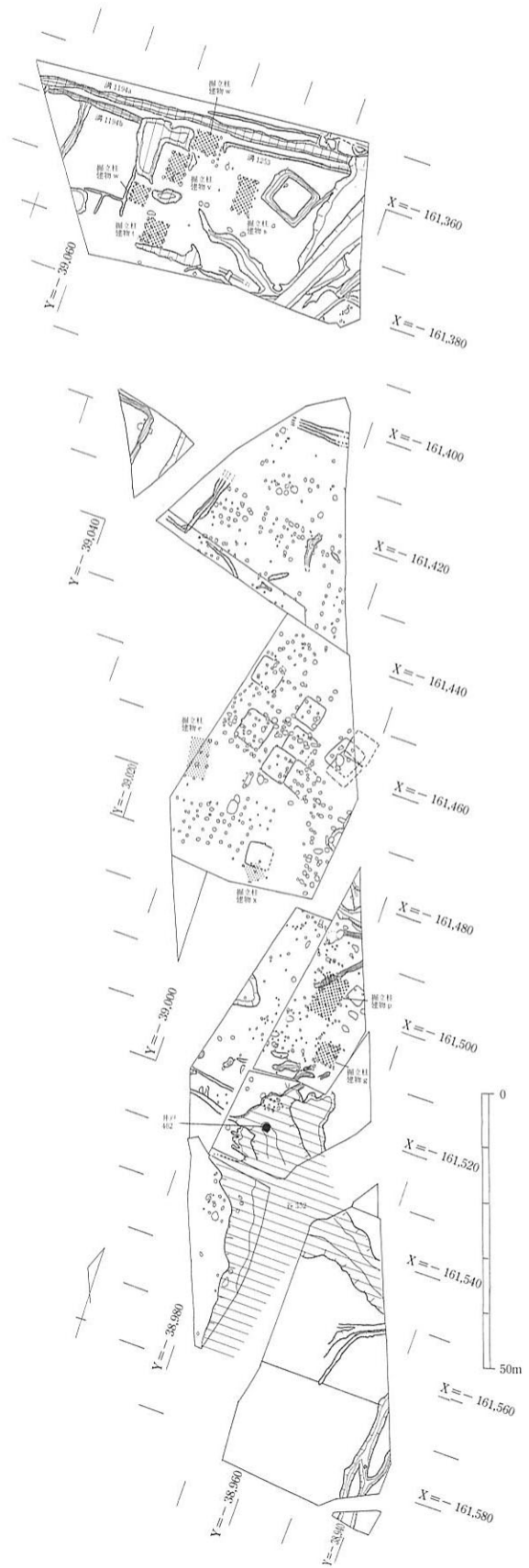
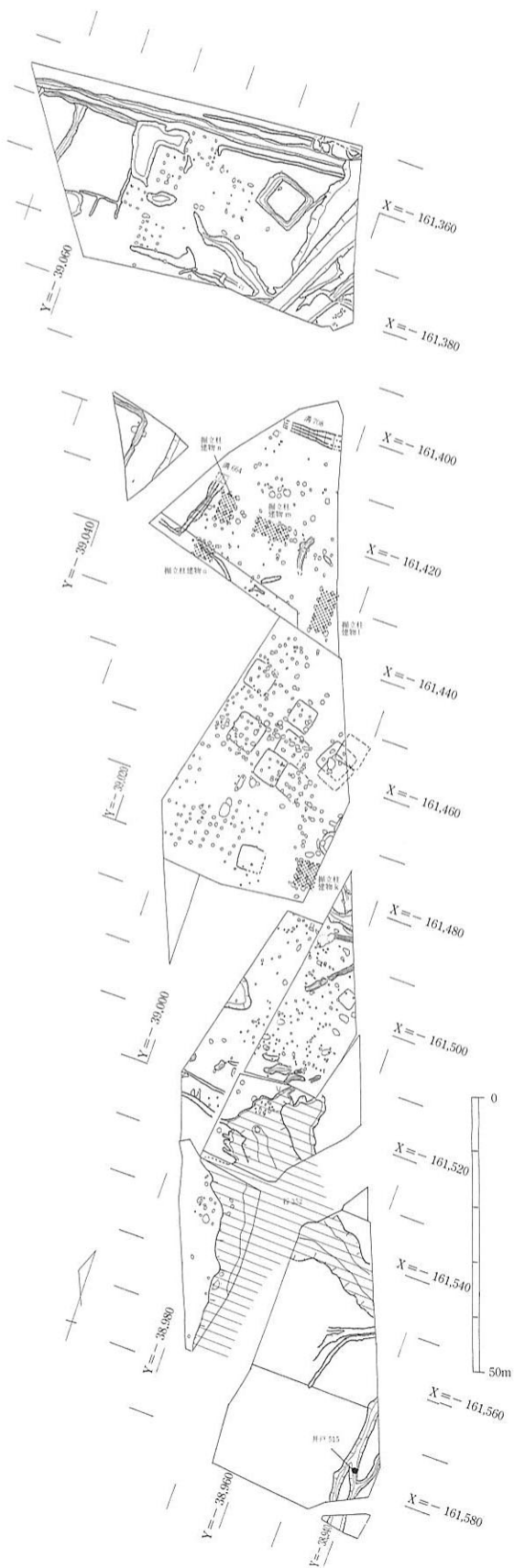


図5 集落の変遷図5（7世紀後半）(s=1/1250) 図6 集落の変遷図6（8世紀）(s=1/1250)

4. 奈良時代の集落構造

4.1. 建物群の配置と機能

今回の調査では、B地区とC地区において奈良時代の掘立柱建物が検出されている。B地区においては、掘立柱建物e,p,q,xの4棟が検出されている。谷352近くの傾斜地には2×3間に庇のついた掘立柱建物pと2×2間の小型掘立柱建物qが、段丘上面では2×3間の掘立柱建物eと2×2間の小型掘立柱建物xがそれぞれ近接して検出されている。

C地区においては、掘立柱建物s,t,u,v,wの5棟が検出されている。これらは、すべて段丘上面から西側へ家や傾斜した地点で確認されている。このうち、掘立柱建物s,t,vは2×3間で、掘立柱建物tだけが庇付きである。このうち掘立柱建物vの西側には2×2間の掘立柱建物wが、掘立柱建物tの西側には2×2間の掘立柱建物uがそれぞれ建てられている。すべての建物において、長軸もしくは短軸が南北方向に沿っている。

両地区で検出された奈良時代の建物群は、重複関係や極端な近接関係がみられないことから同時存在、もしくは比較的短期間に形成・廃絶したものと想定できる。この仮定に基づくと、検出された建物のうち掘立柱建物s以外はすべて2×3間建物と2×2間建物が対を成して近接している。これは、主要建物と小屋状建物のセットが、この時期の当遺跡における建物構成の基本であったことを示している。

また、C地区の建物群の周囲には、鍛冶炉の下部構造と思われる土坑や鉄滓・木炭片・フイゴ羽口などが堆積した溝・落込みなどが多数検出されている。さらに、こういった溝の埋土中からも奈良時代遺物が出土しており、建物群と鍛冶関連遺物の同時存在は確実である。このことから、C地区における掘立柱建物群は鍛冶関連の作業工房と想定できる。

一方、B地区におけるこの時期の建物では、確実な鍛冶関連遺構は確認されていない。しかし、B地区包含層からも、少数ではあるが鉄滓が出土している。鍛冶作業の直接的証拠は得られていないものの、C地区での活動に関連した何らかの作業を行う場として建物が置かれていたのではないだろうか。特に、掘立柱建物p,qに関しては、後述するように谷部に設けられた井戸462に近接する位置にあり、鍛冶作業に伴う水を確保するための施設としての機能も考えられよう。

4.2. 建物群の周囲の状況

今回の調査では、B地区南半の段丘斜面～裾部で奈良時代の建物以外の遺構・遺物も検出されている。谷352の中層堆積中からは、6世紀後半～7世紀前葉の土器とともに、それを上回る量の8世紀の土器・瓦が出土している。先述のように、この谷352は古墳時代後期～飛鳥時代に水汲み場として利用されていた。奈良時代においてもこの谷は開口しており、そこへ土器の廃棄などが行われていたことがわかる。そして、この谷352の底には木製の方形井戸枠の据えられた井戸（井戸462）が検出され、最下層から奈良時代の壺1点が完形で出土している。

これは、古墳時代後期以来水汲み場として利用されていた地点が、奈良時代には谷の埋没の進行に伴って取水が困難になり、再度井戸を掘削することによって水汲み場としての機能を整備したものと考えられる。また、上述の鍛冶関連作業に伴って一定量の水を安定的に確保する必要性から、自然の湧水ではなく人工的な井戸の掘削が行われた可能性もあろう。

5. 河原城遺跡と古代丹比郡地域

5.1. 河原城遺跡における集落変化の性質

河原城遺跡集落の古代丹南地域における位置付けに先だって、遺跡自身の集落変遷の構図をまとめておく必要がある。当遺跡における集落変遷の最大の特徴は、6世紀後葉～7世紀と8世紀の間で集落構造が大きく変化することである。

前者の時期には、段丘東側斜面から伸びる開析谷を水場として用い、そこから形成される小さな沖積地で水田を営む小集落であった。出土遺物の中にも特定の生業を示すようなものはみられず、集落自体の特殊性も感じられない。周囲に小規模な墓域ももっていて、まさに小規模完結の世界を形成しているように思われる。ただ、その中でも変化は見られ、7世紀にはいると建物構造が竪穴住居から掘立柱建物へと変化してしまう。そして7世紀後半には徐々にではあるが建物群の軸方向が南北方向を志向するようになる。

さらに、8世紀になると、建物配置は完全に南北方向に沿った規画性をもつ。また、建物分布の中心は小開析谷や東除川に向けての斜面から離れた段丘の西側へと変化する。建物の周囲では鍛冶作業が盛んに行われ鉄製品が仕上げられていく。おそらく集落外部からの要請にこたえるものであつただろう。

つまり、飛鳥時代から奈良時代への変化とともに、当遺跡の集落は小規模沖積地における水田経営を核とする自律的小集団から外部集団の要請にこたえる特殊技術をもった專業集団へと変化していくのである。この変化と周囲の遺跡群の変化、また歴史的背景はどのように関係しているのだろうか。

5.2. 周囲の諸遺跡との関係

河原城遺跡で竪穴住居中心の集落が営まれていた時期6世紀後葉～7世紀初頭の周辺遺跡の状態はどのようなものだろうか。実際、当遺跡の周囲数kmの範囲でこの時期の集落遺跡の調査成果は全く報告されていない。唯一確認できる考古学的調査例は、東除川東岸の丘陵上に所在する河原城六つ塚古墳である。この古墳は、工事の最中に家形石棺が出土して確認されたものだが、その型式から6世紀後半～7世紀初頭の築造の可能性が高いという。まさに、終末期古墳と呼ぶべきものだが、河原城遺跡集落もこのような地域首長の傘下にある小集団であつたと想定できる。

7世紀の初頭には、南南西約1kmの地点に平尾遺跡が成立する。平尾遺跡では7世紀から8世紀前半にかけての大規模な建物群が検出され、丹比郡の郡衙もしくは有力豪族の居宅跡とも考えられている。おそらく、7～8世紀に丹比郡を根拠地に都でも活躍した丹比連氏に関係する拠点と考えられる遺跡である。この時期には、河原城遺跡では、集落構造は大きく変化しないものの、建物構造が竪穴住居から掘立柱建物へと変化している。

この変化は、平尾遺跡の成立と無縁ではあるまい。有力豪族による大規模な地域支配の拠点が近隣に形成された影響によって、河原城遺跡集落に建物構造の変化という事態が生じたのではないだろうか。想像を逞しくすれば、河原城遺跡の集団も平尾遺跡の大規模施設を建造するために徴用を受け、その結果、自身の建物にも変化が及んだのかもしれない。また、支配拠点の成立によって、建築部材などの流通ルートなどにも変化が生じ、新たな建築体系へと組み込まれていったとも想像できよう。いずれにせよ、飛鳥時代の到来による地域システムの変化が、河原城遺跡の集団に及ぼした影響は小さくなかったのではないか。ただし、繰り返すように、この段階での河原城遺跡集落の内部構造そのものには大きな変化はない。集団間関係に変化は大きいものの、集団内部の構造には変化はなかったと考えたい。

また、7世紀末～8世紀初頭になると、河原城遺跡から南に約400mの地点に丹比廃寺が建立される。

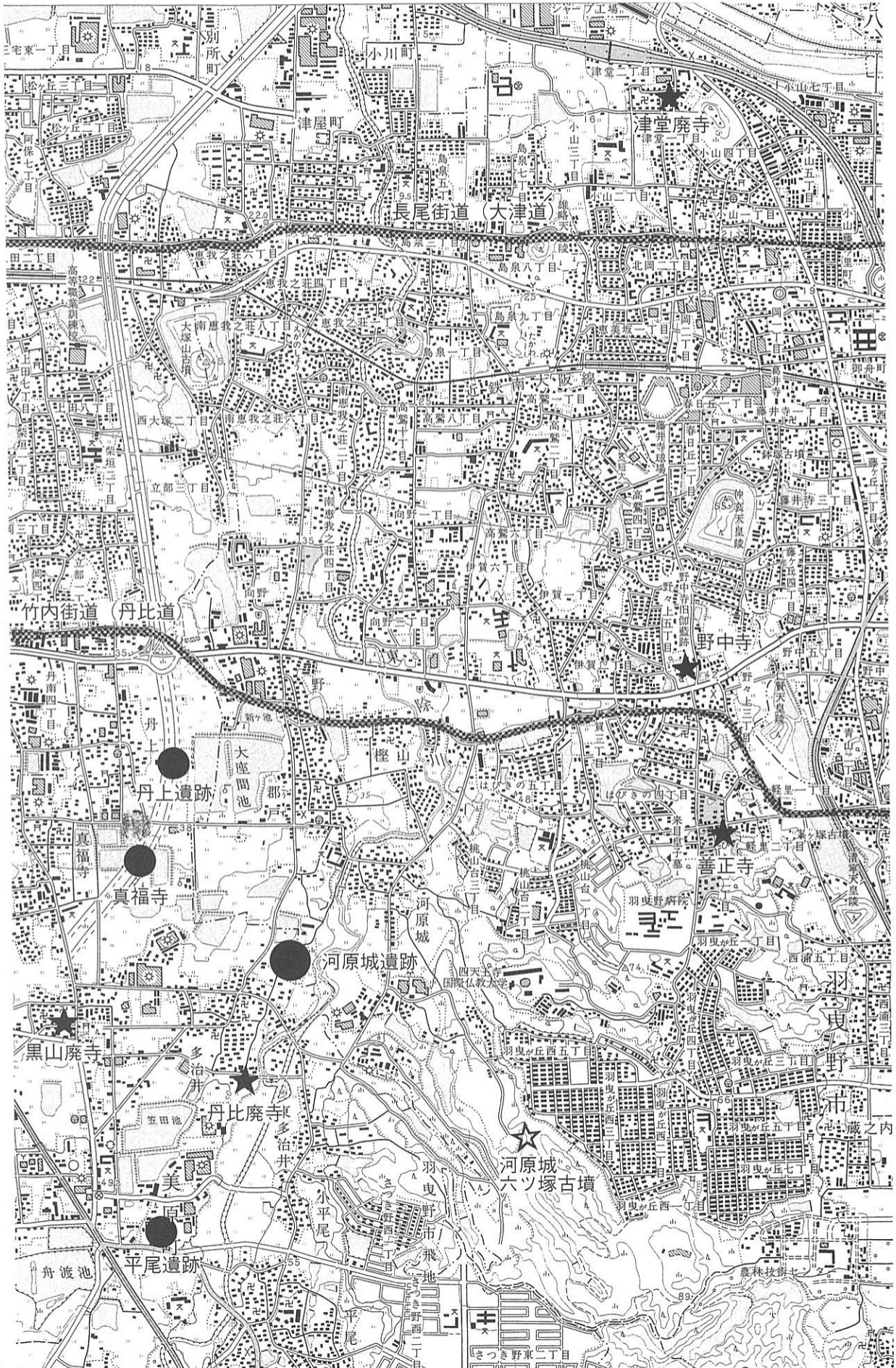


図7 古代における河原城遺跡の周辺 (s=1/25,000)

大阪府教育委員会による発掘調査では8世紀前半の塔の基壇が検出されている(佐久間1980)。この8世紀前半を中心とする古代寺院の存在が、河原城遺跡の性格の決定的に変えたと考えられる。丹比廃寺の存在している8世紀になると、河原城遺跡では建物群が完全に南北方向に軸を合わせる。これは、寺院の伽藍配置による規制を受けたと考えられよう。さらに、建物群は一般集落ではなく、鍛冶作業によって鉄製品を製作する工房へと変化してしまうのである。おそらく、製品の供給先は丹比廃寺であろう。遺跡自身が寺院との結び付きを強めた証拠として、中空円面硯や蹄脚円面硯などが遺跡内部から出土するようになる。さらに、丹比廃寺と同範の軒丸瓦も出土している。つまりは、当遺跡の建物群は丹比廃寺の寺域外縁の一部を構成する工房域へと変貌してしまうのである。

5.3. 変化の背景

こういった近隣遺跡と河原城集落の連動現象の背景には何が考えられるのだろうか。一つには古代丹比郡地域の特殊性があろう。この地域は、大津道・丹比道・茅渟道という古代の三大官道が通る交通の要衝地である。難波宮や摂津・河内国から藤原京・大和国に向かうのであれば避けて通れない地域ともいえよう。また、それに呼応するように、周辺の羽曳野・藤井寺市域は、古代寺院が多数みられる特殊な地域でもある。実際に、遺跡に隣接する丹比廃寺の約700m西方には黒山廃寺があり、その寺院分布の濃密さは特筆に値しよう。

この地の有力氏族である丹比連氏が中央において都守衛の職掌を持つ氏族であった理由は、要害の地ゆえであろうという直木孝次郎氏の見解(直木1976)もある。先述の平尾遺跡のあり方もこういった地域の特殊性と無縁ではない。このような要衝地としての丹比郡の状況は、官道が整備される7世紀を中心に形成され、8世紀には完成していたものと思われる。こういった丹比郡地域の重要度・特殊性の確立過程に連動して、単なる自律的小集団であった河原城遺跡集落が、寺院施設の一部となってしまうのではないか。場合によっては、丹比廃寺建立・運営の実際上の主体として河原城遺跡集団が機能していた可能性もあろう。その背景には、中央集権的国家整備の方向性と結び付いて行われた有力氏族を中心とする地域社会の再編がみてとれる。このように、河原城遺跡の調査成果から伺える集落性質の変化には、古代社会の確立過程における地域的小集団の動態の1モデルをみいだすことができるのではないだろうか。

6. まとめ

以上、集落変遷をもとに、とりとめもなく論を進めてきた。本遺跡の調査成果そのものは、大規模遺跡でもなく、特殊遺物の出土もなく、考古学的には「地味」な部類に属する。しかし、小規模ながらも集落構造の類推が可能な調査例であったことは貴重と考える。しかも、遺跡における画期のありようを考えることのできる地域にも立地しており、一つのモデルを考える上で嚆矢の資料でもある。筆者としては、近畿地方ではあまり盛んではない古代集落をめぐる研究の一例として利用できるよう、微力ながら考察を重ねてきたつもりである。この拙い調査成果・考察が、今後の古代社会・集落研究に活かされるのであれば幸いである。

参考文献

- 井西貴子他 『河原城遺跡発掘調査概要』1993年 大阪府教育委員会
- 河内一浩 「河原城遺跡」『羽曳野市史第三巻 史料編1』1994年 羽曳野市
- 佐久間貴士 「南河内郡美原町丹比廃寺発掘調査報告(1)」『節・香・仙』第29号 1980年 大阪府教育委員会
- 直木孝次郎 「丹比連について」『美原の歴史』第2号 1976年 美原町教育委員会
- 羽曳野市教育委員会 「河原城遺跡」『古市遺跡群Ⅷ』1996年

第2節 河原城遺跡出土蹄脚円面硯をめぐって

三浦 基

1. はじめに

古代において行政文書や写経といった必要性から、筆・墨、硯・紙が使用され『文房四宝』と呼ばれるほど重要なものであった。「硯」は現在多く使用されている石製の硯とは違い、材質は須恵器を中心とする焼き物で、「陶硯」とよばれる。筆や紙、木簡などは残存する可能性が低い。墨書道具の中では「硯」は残存の可能性がかなり高く、出土遺物として墨書が行われたことが確実にわかるものである。全国的にも北は青森から南は鹿児島まで出土例も多く、着目されてきた遺物で、「硯」を見ることによって、古代における「文字」の広がり的一端を明らかにできるのではないかと考える。

河原城遺跡では2点の陶硯が出土している。「中空円面硯」と「蹄脚円面硯」（以下、蹄脚硯と呼称する）とで両者ともに特異な硯であるといえる。本項ではこの2点の円面硯中でも、「蹄脚硯」について本遺跡の位置付けと分析とを行うものである。

2. 蹄脚円面硯とは？

古代の硯である陶硯は円面硯を中心としており、転用硯、風字硯といったものに移行する。その後、石製の硯の出現によって陶硯は次第に姿を消すことになる。陶硯及び石製硯は筆、墨とともに中国で開発され、文字文化とともに伝来する。本遺跡において出土した蹄脚円面硯は源流が中国六朝代に見られる青磁百足硯に求められる。唐三彩や唐代の白磁円面硯に多く見られ、唐で完成した獸脚円面硯を模したものであり、獸脚の代わりに、三角柱状の脚柱を付け、この脚が蹄に似ることから命名されたものである。製作技法から2種類に分類される。

蹄脚硯 A 蹄脚硯硯部、脚部、脚台部を別々に作って合体させる唐様式そのままのもの。

蹄脚硯 B 圈足の円面硯の脚台部に蹄脚部と脚台部を貼り付けた後、逆三角形の透し孔を切り取るもの。

製作技法は A から B へと変化する。時期は奈良時代から平安時代初めと考えられる。

転用硯などでは使用後に洗浄していないものもあつたためか、硯面に墨が残っていることがある。しかし、蹄脚硯は、硯面および陸、海部についても墨が付着することはほとんどなく使用後に洗浄を行っていると考えられる。蹄脚硯は非常に丁寧に扱われていたのである。また、平城宮・京で出土するものは比較的大きな破片で出土することが多い。硯部まで残存しているものは大変少なくそれほど重要なも

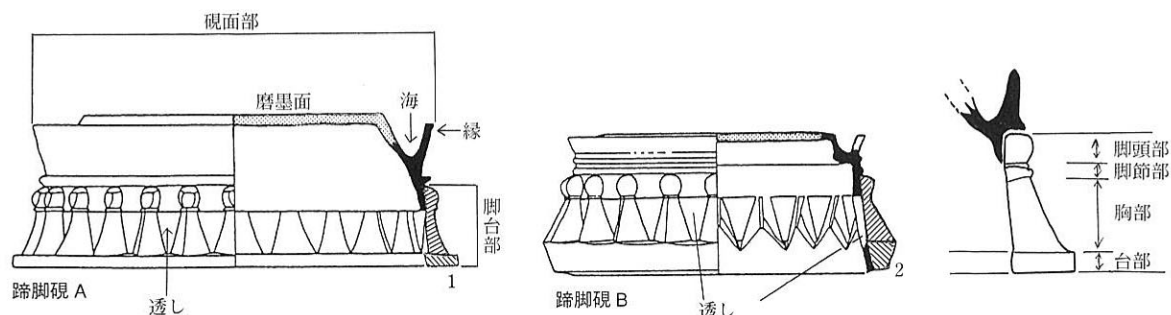


図1 蹄脚硯の種類と各部の名称（1、2とも平城宮出土）

のであるがゆえに、破損した場合には他で使用される事のないように破壊してから投棄したことも考えられる。また、写経や大量の文書処理を行う時には、適当な大きさの硯を多く使用すれば実用的かつ機能的であるといえよう。つまり、文書作成や写経を行う場合、圈足硯や転用硯で十分なのである。圈足硯は各地の地方窯においても焼成されて地方官衙、寺院などで使用されている。それに対し、蹄脚硯は主に猿投窯と陶邑窯であり、官窯で焼成されている特殊な硯といえる。檜崎彰一氏の論考『日本古代の陶硯』では、「蹄脚硯」の説明で「いずれも奈良時代の宮殿・官衙址と考えられる遺跡のみから出土していることから、他の円面硯と性格を異にした特別の意味を持った陶硯と考えられている。」としてその特殊性を指摘している。

3. 蹄脚円面硯の分布

奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターの「陶硯関係文献目録」(1983年)によると陶硯は青森から鹿児島まで分布し、778遺跡からの出土が確認されている。円面硯は502点の出土しており、そのうち蹄脚円面硯は56点で円面硯全体の約11%の比率を占める。分布は生産窯では大阪府陶邑窯、猿投窯、愛知県春日井市高蔵寺2号窯、消費地では長野県県町遺跡、南は大宰府町水城跡までの地域にわたって56箇所の遺跡が判明、奈良時代の宮殿・官衙址と考えられる遺跡からのみ出土していることがわかる。

大阪府内においての状況は、陶硯出土遺跡が105遺跡(伝世品を除く)から223点の出土が確認されている。蹄脚円面硯はそのうち23点で約10%である。そのうち、生産窯である陶邑窯出土のものが8点と約3分の1を占める。(松田留美「大阪府内出土陶硯集成」による)

3.1. 窯跡の状況

生産窯では、泉北丘陵上に多く営まれた陶邑窯があげられる。陶邑窯出土の蹄脚硯は8点が知られている。

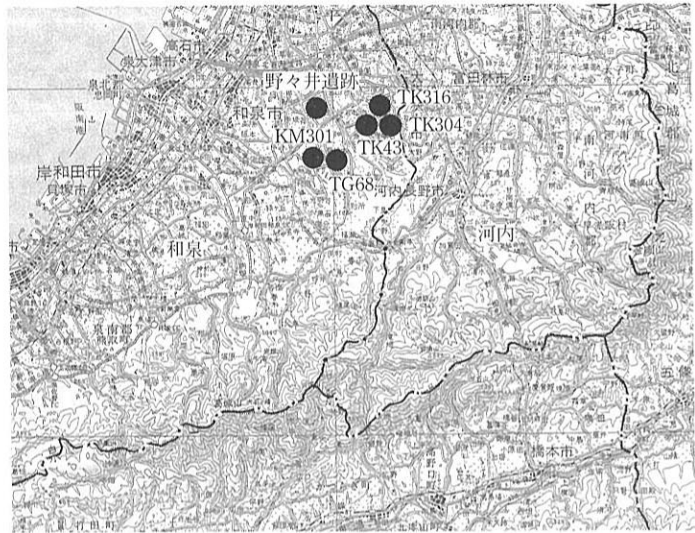
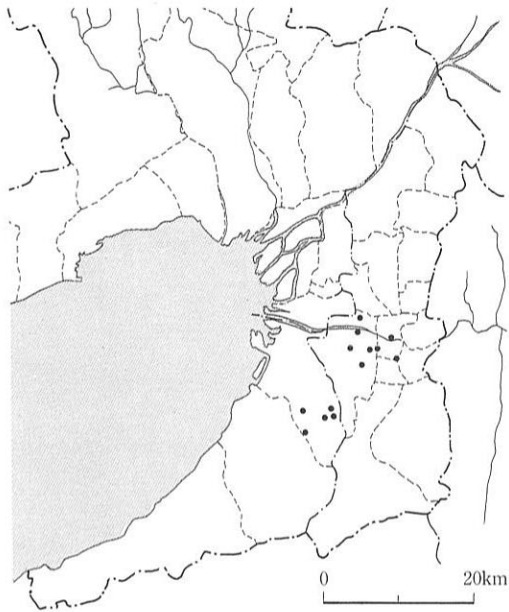
陶邑・TK316号窯 堺市

出土遺物は整理箱331箱、出土遺物破片にすると窯体内34点、灰原出土例は8962点を数える。器種は蓋杯、高杯、皿、盤、鉢、平瓶、壺、甕、円面硯である。円面硯は6点出土している。窯の時期は飛鳥～奈良時代(7世紀末)と考えられる。

蹄脚円面硯は3点の破片が出土している。硯部、脚部の欠損した脚部のみの破片である。形態は、球を下方に引き伸ばしたような形の脚頭(欠損する)と三角柱の脚柱からなり、両者の間に水平な半円形の脚節があり、その三角柱底には扁平な脚台がつく。調整は台部外面、三角柱にヘラ削り調整が施され、他はナデ調整が施されている。実測図の掲載がなく大きさ等は不明である。

陶邑・TK43-1号窯 堺市

報告書によると、出土遺物は整理箱211箱、出土遺物破片数にすると窯体内126点、灰原出土例は3865点を数える。器種は蓋杯、高杯、椀、鉢、平瓶、壺、器台、甕、円面硯、たこ壺から構成される。窯の時期は6世紀後半と考えられる。円面硯については、時期的には新しいものであるため本窯で焼かれたものでなく、窯体内周辺で採集されたものとしている。3点の破片が採集されており2点は圈足硯、1点が蹄脚硯である。蹄脚硯は硯部が欠損している。脚部は球を下方に引き伸ばしたような形の脚頭と三角柱の脚柱からなり、両者間には水平な半円形の脚節が付く。三角柱底には脚台が付く。製作技法から蹄脚硯Aと考えられる。また先述のTK316号窯出土のものと同形態であり、平城宮跡での出土例があげられている。復元脚台径約31.6cmである。しかし、最近の論考により窯の時期が再考されている。



陶邑寨附近の蹄脚硯出土分布

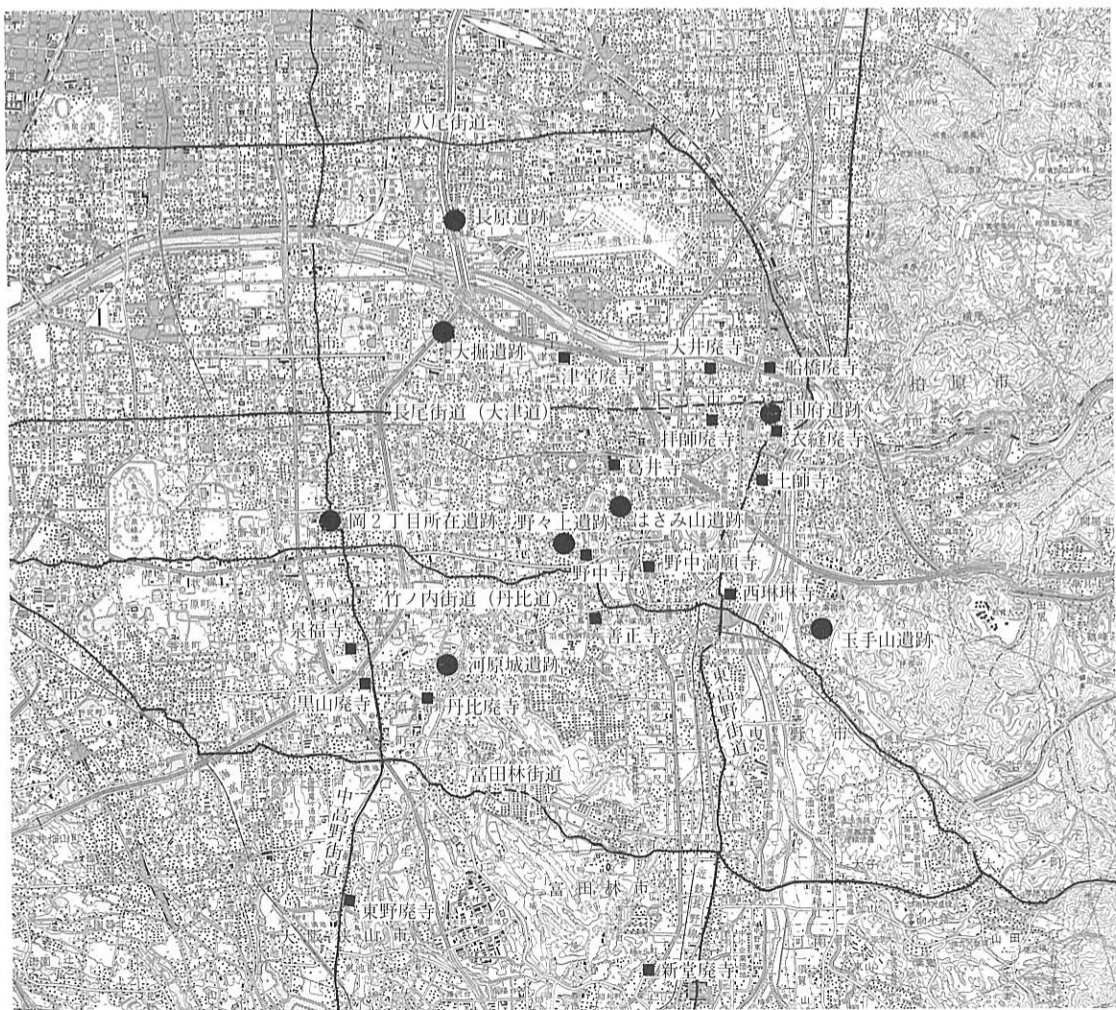


図2 大阪府内蹄脚硯出土分布図

畑中英二氏の論考によると本窯から3点出土している円面硯に対して、混入の可能性が低いとした上で本窯の製品と位置付け、特に蹄脚硯に注目し、硯の源流である中国大陸の同形態の硯に着目して伝来から本窯で焼かれる時期を考察している。その結果、本窯は7世紀第1四半期頃を上限とするのが相当としてしている。いずれにしても、TK316と並んで国内で古く位置付けられる製品を焼成する窯である。(畑中1999)

陶邑・TK304号窯 堺市

丘陵西斜面に構築されていたが、窯体のかなりの部分が削平によって失われている。窯体長は8m以上であったことが判明している。遺物は整理箱50箱分出土しており蓋杯、高杯、甕、壺などの器種を中心としている。窯の時期は奈良時代(8世紀)に位置付けられる。

出土の蹄脚硯は硯脚部のみの残存で脚は16本と推定される。脚外面に凸線の鋸歯文、ならびに三角形の浮文の文様がみられ、底部には周縁が巡っている。獸脚の要素が多く残るものと言えよう。調整は回転ナデが施されており、全体に黒緑色の自然釉がかかっている。復元脚台径26cm

陶邑・KM301号窯 堺市

遺物は蓋杯、杯身、高杯、碌、鉢、横瓶、平瓶、盤、皿、小皿、壺、甕、円面硯、土師器が整理箱340箱出土している。窯の時期は飛鳥～奈良時代(7～8世紀)と考えられる。

円面硯は4点が出土している。すべて2層から出土しており、圈足硯が2点で蹄脚硯と考えられるものが2点である。蹄脚硯は2点ともに脚台部から脚柱部までの破片である。復元脚台部径は約18.8cm、約25.6cmで大型のものは脚節部まで残る状態であり、その状況から蹄脚硯Aの可能性が高い。

陶邑・TG68号窯 6～7世紀

遺物は蓋杯、高杯、碌、短頸壺、長頸壺、平瓶、提瓶、タコ壺、椀、盤、皿、鉢、陶棺、皿、器台、硯などが整理箱398箱出土している。蹄脚硯は底部径22.4cm、残存高7.3cmである。

陶邑・不明 堺市

「大阪府下陶硯出土遺跡地名表」に記載詳細は不明であるが、圈足硯・蹄脚硯の出土が確認されている。蹄脚硯は五島美術館『日本の陶硯』、橋崎彰一氏の論考等において写真が登場するが詳しい出土地点は確認できなかった。

3.2消費地遺跡の状況

長原遺跡 大阪市、官衙、荘園 平安時代前期、平安時代

9点中4点が蹄脚硯で包含層出土である。

多数個体の円面硯が出土している。そのうちの1点に直径25cmの蹄脚硯がある。陸部が高く、他の硯と共に陸部はなめらかになっており、使用痕と考えられる。平安時代前期に位置付けられている。

以下、平安時代に位置付けられている。

包含層 陸部から脚頭部部までの破片、陸部に使用痕あり。復元径は28cmである。

第4層 小型のものは、陸部が高く、かつ陸部外縁は丸く体部外面に沈線2条をめぐらせる。脚頭は円形浮文状の貼り付けであり、脚部は欠失している。脚頭部に退化傾向が認められ、復元径は約16.8cmである。

大型のものは、陸部外縁には鋭い稜がみられる。体部外面に突帯を2条めぐらせる。復元径約24cm

玉手山遺跡 柏原市 集落

「大阪府下陶硯出土遺跡地名表」(『国府遺跡発掘調査概要III』1973年)に記載があるが詳細は不明であ

る。圈足硯・蹄脚硯の出土が確認されている。

大堀遺跡 松原市 溝 A-4 奈良～平安時代初頭

奈良～平安時代初頭に位置付けられる集落跡を確認、白鳳期の瓦のほか、埴、帯金具、墨書土器、土馬、製塩土器、灰釉陶器などの出土があり、古代氏族の集落および周辺に古代寺院の存在が想定されている。蹄脚硯は、脚部のみ残存で復元脚部径22.3cm、残存高3.6cmである。厚さ約1cm、幅約2cmの脚台の上にやや内傾して脚柱がある。脚柱断面は三角形で出土部分は全面的に自然釉が付着する。

岡2丁目所在遺跡 松原市 奈良時代末期

奈良時代末期の遺物と共に出土している。掘立柱建物5棟を検出しており、妻柱掘り方に「和同開珎」を埋納した建物も検出されている。陸海の区別が明瞭で外堤は薄く、ほぼ直立し端部を欠損する。外堤下端に沈線が巡る。沈線に接して脚頭部が取りつく。脚柱部は折損するが接合痕から脚節は当初からなかったものと推定できる。復元径約18cmである。

国府遺跡 藤井寺市 国府、郡衙

7世紀中葉から8世紀前半 S-361地区では河内国府関連とみられる掘立柱建物群が検出されている。S-376地区の溝第II群付近の溝I、溝Hの境近くから蹄脚硯脚部片が出土している。包含層内の出土遺物と位置付けられ7世紀後半～8世紀初頭と考えられる。復元脚台径25.4cmである。

はさみ山遺跡 藤井寺市 集落、国府

包含層 蹄脚硯A 脚台部と蹄脚部の破片で硯部欠損している。復元脚台径18.4cmである。

包含層 蹄脚硯か 長方形透かし16箇所、半球状の脚頭部には貼り付けの痕跡がある。

HM93-10の調査で西トレンチ地山直上の遺物包含層から4点出土した硯のうち1点が蹄脚硯であり、復元径約26cmで剥離痕から脚は24復元できる。7～8世紀代を中心とした掘立柱建物群と関連する遺物と考えられている。

野々上遺跡 羽曳野市 集落 8世紀初頭

陶硯は4点出土しており圈足硯2点と蹄脚硯1、鳥形硯1点が出土している。蹄脚硯は硯部と台部基底とを別々につくり、両者を多数の脚で結合した蹄脚硯Aである。陸部には使用痕があり、硯面が磨り減っており、使用痕が認められる。復元径約30cmである。出土遺物は土師器、須恵器が多く、硯も含めて矢倉古墳周濠に投棄されたもので飛鳥IV～平城宮II型式の幅を持つが平城宮I型式を中心とする8世紀初頭に集中して投棄されたものとしている。特異なものとして新羅土器や鳥形硯があげられる。

野々井遺跡 堺市 包含層 蹄脚硯か？ 脚部小片、三角形の脚柱

脚柱から脚台部にかけての破片である。三角形の脚柱下に脚台部がつく。脚台の断面形態は方形である。復元脚台部径約13cmである。脚部は4本であり、蹄脚硯であるかどうかの判断が難しいところである。

以上のように大阪府内における生産窯及び消費地出土の蹄脚硯の概要について説明した。全国的な状況について概観すれば1983年当時の全国出土点数が、56点の出土に対して奈良県内（主に平城京内）出土点数が26点を数え、出土点数の50%にせまる状況であったが、それ以降、発掘調査の進展とともに奈良県内の出土点数は50点以上と考えられる。

大阪府内においても出土例は増加しているが、主に生産窯である陶邑と消費地と大きく2つに分けることができる。図2は大阪府内の蹄脚硯の分布を示した図である。

陶邑に近い野々井遺跡以外はすべて河内に集中することが分かる。大阪府内の南河内を中心とする狭いこの分布は何を意味するのであろうか。

4. 蹄脚硯の編年観

陶硯は、出土遺物として「硯」と認識できたとしても出土地点、出土状況は、ほとんどの場合、包含層や溝などに廃棄された状態であり、時期幅をもつ遺物と共に出土したものであるため正確な位置付けが困難なことが多い。そのため、その分類に多くの力が注がれてきた。そのような中でも、横田賢次郎氏の『福岡県内出土の硯について—分類と編年に関する一試案—』、石井則孝氏が考古学ライブラリー『陶硯』において「陶硯の編年」、また、一瀬和夫氏は各硯それぞれの出土地点の時期をもとにして「中空円面硯の変遷」、「大阪・陶邑窯跡群出土 蹄脚、圈足円面硯の変遷」、「奈良・平城宮跡 蹄脚、圈足円面硯及び風字硯の変遷」を提示して、さらに他の多種多様な硯と窯跡出土の硯についても簡略にまとめている。

蹄脚硯については横田氏の編年表では7世紀後半～8世紀後半、石井氏のものでは8世紀前半に位置付けられている。また、一瀬氏の変遷図においては陶邑窯跡群出土のもの、奈良・平城宮出土の二種があり、陶邑窯においては6世紀後半から8世紀前半、奈良・平城宮跡出土のものについては7世紀末葉から9世紀中葉頃とそれぞれ代表的なものを並べている。本項では蹄脚硯の編年観としているが、本遺跡出土の蹄脚硯の位置付けに必要なものとしてできうる範囲で並べることによって変遷を概観できるようにした。しかし、大阪府内出土蹄脚硯のほとんどにおいて、全国的な状況と同じく時期の決定は難しく、報告書に記載されている時期をもとにしている。破片資料がほとんどであること、また、脚台部や脚部のみ破片も多く報告書によって、その復元もまちまちである。硯の大きさは30cm前後の大型のもの、20cm前後のもの2種類に大別できる。特に生産窯においては大型品や残存状態の良好なものではなく須恵器の製品でも特殊なものに位置付けられる。蹄脚硯は主に平城京のある奈良及びその周辺域で使用する目的で生産された特殊な硯と位置付けることができるのではないだろうか。また、時期についてであるが大阪府内における蹄脚硯は7世紀初めから9世紀前半までの時期幅を持っている。

5. 大阪府内出土蹄脚硯から見た河原城遺跡の位置付け

5.1. 大阪府内出土蹄脚硯の状況

大阪府内の状況について考えてみる。蹄脚硯の出土地点は大阪府内でも限られた地域でのみ出土することが分布図から明らかとなった。檜崎氏の『奈良時代の宮殿・官衙址と考えられる遺跡』という観点からすれば、まず河内国府があげられる。また、その他の遺跡出土のものについても、遺跡の位置付けが官衙、郡衙、寺院と考えられるものにほぼ該当し、さらに集落遺跡の中には「有力氏族の邸宅」も含まれていると考えられる。平城京内では「有力氏族の邸宅」からも多くの陶硯が出土しており、その中に蹄脚硯も含まれる。

さらに、蹄脚硯の分布図から状況を分析すれば、北から現在の八尾街道、長尾街道(大津道)、竹ノ内街道(丹比道)が通り、石川、大和川の水運に恵まれた交通の要衝であることがわかれると思う。また、渡来系氏族が多く住居していた地域であり、古代寺院も多く造営されている。大阪府内の出土例から考えれば官窯である陶邑焼成品を除けば国府、郡衙推定地あるいは古代寺院に近接する遺跡からの出土に限られ、律令体制下において地理的、政治的に重要な場所に位置し、中央とのパイプをもつ有力氏族の居住する非常に重要な地域といえる。そのために蹄脚硯が配備されたと考えられ、蹄脚硯出土の分布域はそれが反映された結果といえるのではないだろうか。

ここで他の地域の状況を見てみることにしよう。九州の豊前・大宰府地域についての事例について佐藤浩司氏の論考を参考にしたい。佐藤氏は九州豊前・大宰府地域における墨書土器、へら書き土器と硯

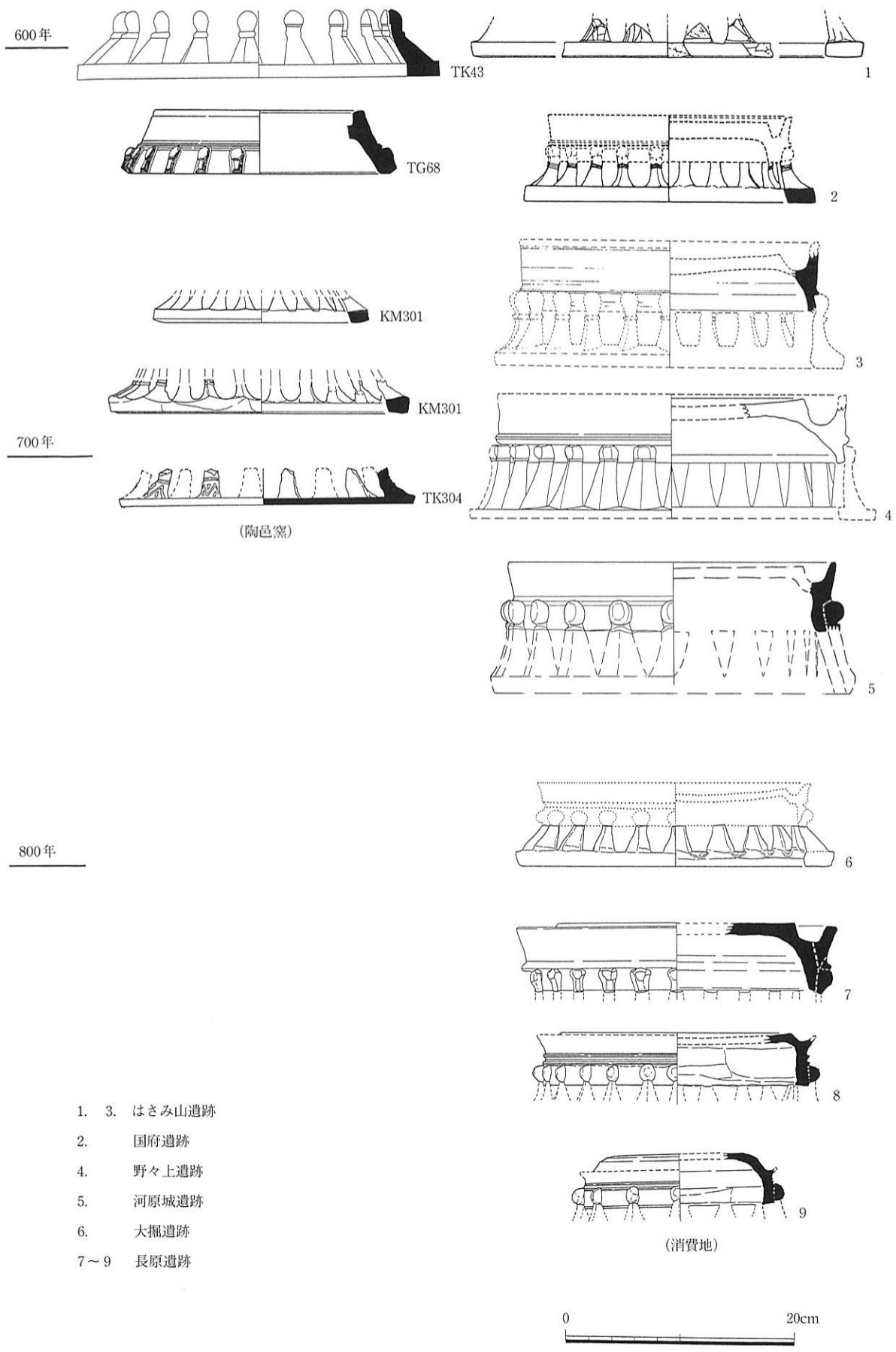


図3 大阪府内出土蹄脚硯変遷図 (s=1/5)

について集成分析を行っている。豊前地域における硯の初現が7世紀前半代に求められ、主に圈足硯が使用されること、8世紀中葉から後半にかけて転用硯が盛行すると分析している。大宰府での初現は獸足硯、蹄脚硯であり、7世紀後半代に圈足硯が出現し、8世紀に入って大量に使用されている状況がみられる。豊前地域の転用硯使用が8世紀中葉であるのに対して太宰府の転用硯は圈足硯とほぼ同様の7世紀中葉から使用がはじまっており、中央出先機関である大宰府と状況の差があるとしている。このような状況をふまえ、「文書作成業務は律令支配統治体制では宮都・中央官衙－地方官衙－地方出先官衙－一般農民と重層的に押し進められるもので上位下達的手段として重要職務であった。」と位置付け、硯については「蹄脚硯や蹄脚硯などの初期定型硯と特殊硯－圈足硯－転用硯－墨入れと希少性のランクを有しながら、それぞれが各機関に配備、支給、調達されたものと思われる。また、律令体制下の重層的支配構造の一側面が文書作成業務に必要な硯の配備に反映する。」としており、転用硯の占める割合が高いなどの地域差があるが、大阪府内の状況と同様であり、蹄脚硯が出土する地点は地理的、政治的に重要地域と言え、結果としてその地域に官衙、郡衙、寺院、有力氏族の邸宅が営まれているといえる。

5.2. 河原城遺跡出土の蹄脚硯と周辺の状況

河原城遺跡出土の蹄脚硯はどのように位置付けられるのであろうか？本遺跡出土の蹄脚硯は、蹄脚硯Bで直径が30cm近い大型品である。本文中でふれた通り、古墳時代後期から平安時代にかけての土器が投棄された谷352から出土している。谷内には奈良時代後期の井戸462があり、谷周辺には掘立柱建物i、pが存在している。本遺跡出土の蹄脚硯のように大型の製品は平城宮・京の出土例では珍しくないが、それ以外の地方ではあまり多くない。今回の調査で出土した遺物には蹄脚硯と同様に特殊な硯である中空円面硯、丹比廃寺同範と考えられる軒平瓦、平城宮系の軒丸瓦や三重弧文瓦などの丹比廃寺に関係の深いと考えられる遺物も出土し、集落の北端部と考えられる地点からは鍛冶工房が営まれた状況が確認されている。交通においては北に官道である現竹ノ内街道(丹比道)、南方向からは現在の富田林街道や中高野街道にあたる道が存在していたと推定され、それらの道が結接する交通の重要な地域であって、南には官衙的要素の強い平尾遺跡、丹比廃寺、黒山廃寺、丹比神社があり丹比氏の拠点地域といえる。本遺跡が瓦の同範関係から丹比廃寺に関係している可能性が高いといえるが、いずれにしても河原城遺跡とその周辺域で蹄脚硯が使用されるに十分な地理的、政治的な条件を満たしていると言え、丹比郡内でも重要な地域に位置付けられる。

6. まとめ

わずか1片に過ぎない『蹄脚硯』から、地理的、政治的に重要な地域で蹄脚硯使用されたことが明らかとなり、河原城遺跡とその周辺域の重要性も確認することができた。他の遺物である平城宮系の瓦などの要素を加味すれば、さらに河内地域に多く存在する古代寺院との関係や中央政府との関係なども明らかになるのではと考えられるが、硯からのアプローチではおのずと限界がある。

結果的には『蹄脚硯』を出土する遺跡は官衙、郡衙、古代寺院などであるという従来から言われてきたことを検証することとなった。河原城遺跡及びその周辺の重要性を確認できたことにより、河原城遺跡周辺に蹄脚硯を使用していた建物、建物群が存在すると考えられる。

その候補としては官衙的要素の強いと言われる平尾遺跡、また古代寺院としては先あげた丹比廃寺などが存在するが、さらに重要な施設をようした建物群が河原城遺跡周辺で発見される可能性を指摘して本考察を終えることにする。

追記

本考察においての資料収集、大阪府内蹄脚硯の分布図の作成にあたっては、松田留美(本センター在)氏作成の「大阪府内出土陶硯集成」(未発表)を参考にさせていただいた。また資料収集にあたっても援助いただき、本考察は松田氏の業績によるところが大きい、記して感謝します。

引用・参考文献

- 長原遺跡 長原遺跡調査会『長原遺跡』1978年
- 長原遺跡 (財)大阪市文化財協会『長原遺跡発掘調査報告II』1982年
- 長原遺跡 (財)大阪市文化財協会『長原遺跡発掘調査報告III』1983年
- 玉手山遺跡 大阪府教育委員会『大園遺跡発掘調査概要・VIII』1988年
- 大堀遺跡 大阪府教育委員会, (財)大阪文化財センター『大堀遺跡』1984年
- 岡2丁目所在遺跡 大阪府教育委員会『岡2丁目所在遺跡発掘調査概要報告書』1983年
- 国府遺跡 大阪府教育委員会『国府遺跡発掘調査概要III』1973年
- 道明寺天満宮
- 東大阪市教育委員会『河内寺跡II』1974年, 五島美術館『日本の陶硯』1978年
- はさみ(はざみ)山遺跡 大阪府教育委員会『はさみ山遺跡発掘調査概要』1984年
- はさみ(はざみ)山遺跡 藤井寺市教育委員会『石川流域遺跡群発掘調査報告V』1990年
- はさみ(はざみ)山遺跡 藤井寺市教育委員会『石川流域遺跡群発掘調査報告IX』1994年
- 野々上遺跡 羽曳野市教育委員会「野々上遺跡」『古市遺跡群IX』1988年
- 野々井遺跡 大阪府教育委員会『陶邑VI』1987年
- 陶邑・TK316号窯
- (財)大阪文化財センター『陶邑』(大阪府文化財調査抄報 第1輯)1971年
- 陶邑・TK316号窯 (財)大阪文化財センター『陶邑V』1982年
- 陶邑・TK304号窯 (財)大阪文化財センター『陶邑IV』1979年
- 陶邑・TK43-I号窯 (財)大阪文化財センター『陶邑V』1982年
- 陶邑・KM301号窯 大阪府教育委員会『泉州における遺跡の調査I 陶邑VIII』1995年
- 陶邑・不明 大阪府教育委員会『大園遺跡発掘調査概要・VIII』1988年
- 内藤政恒 『本邦古硯考』養徳社1944年
- 石井則孝 「日本古代文房具史の一面-陶硯について-」『古代探叢』滝口弘先生古稀記念考古学論集早稲田大学出版部1980年
- 樽崎彰一 「日本古代の陶硯-とくに分類について-」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集 平凡社1982年
- 李知宴 「日本出土の緑釉蹄脚硯」『奈良・平安の中国陶磁』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館1984年
- 吉田恵二 「日本古代陶硯の特質と系譜」『國學院大學考古学資料館紀要』第1輯
1985年
- 樽崎彰一 「古代陶硯に関する一考察-有孔把手付円面硯と宝珠硯-」『名古屋大学総合研究資料館報告』一
1985年
- 石井則孝 『陶硯』考古学ライブラリー42ニュー・サイエンス社1985年

杉本宏 「飛鳥時代初期の陶硯—宇治隼上り瓦窯跡出土陶硯を中心として—」『考古学雑誌』第73巻第2号日本考古学学会1987年

杉本源造『滋賀考古』第8号滋賀考古学研究会1992年

佐藤浩司「墨書土器、ヘラ書き土器と硯に関する一考察—律令時代の豊前地域と太宰府を中心として—」『古文化談叢』第30集（下）1993年

一瀬和夫「二、墨書のひろがり」『古代人名録—戸籍と計帳の世界』大阪府近つ飛鳥博物館図録 1995年

畑中英二「陶邑 TK43号窯跡の年代観に関する再検討—出土陶硯からのアプローチ」『瓦衣千年—森郁夫先生還暦記念論文集—』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会 1999年

第3節 河原城遺跡出土須恵器甕内に堆積した土壌の残存脂肪酸分析

帯広畜産大学生物資源科学科 中野益男

(株)ズコーシャ総合科学研究所 中野寛子・門 利恵・星山賢一

動植物を構成している主要な生体成分に、タンパク質・核酸・糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に棲んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと⁽¹⁾、古代遺跡から出土した約2千年前のトウモロコシ種子⁽²⁾、約5千年前のハーゼルナッツ種子⁽³⁾に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した⁽⁴⁾。

脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス（種）が脂肪酸であり、その種類、含量ともに脂質中では最も多い。脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに延びた飽和型と鎖の途中に二重結合をもつ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物は種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のはコレステロール、植物性のはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現生動植物のそれとを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能となる。

このような出土遺構・遺物に残存する脂肪を分析する方法を「残存脂肪分析法」という。この「残存脂肪分析法」を用いて、河原城遺跡から出土した須恵器甕の性格を解明しようとした。

1. 土壌試料

大阪府羽曳野市河原城から南河内郡美原町にかけて所在する河原城遺跡から出土した、6世紀後半のものと推定されている須恵器甕内の土壌試料を分析した。遺跡内での須恵器甕の配置状況および須恵器甕内での試料採取地点を図1-1~1-!に示す。試料はいずれも須恵器甕内のもので、No. 1を胴部上位、No. 2を胴部中位、No. 3を胴部下位から採取した。

2. 残存脂肪の抽出

土壌試料184~890gに3倍量のクロロホルム-メタノール(2:1)混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルム-メタノール混液を加え、再び30分間超音波処理をする。この操作をさらに2回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に1%塩化バリウムを全抽出溶媒の4分の1容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を表1に示す。抽出率は0.0004~0.0028%、平均0.0019%であった。この値は全国各地の遺跡から出土した土壌、石器、土器などの試料の平均抽出率0.0010~0.0100%の範囲内ではあるが低めであった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質で構成されていた。このうち遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリアシルグリセロール（トリグリセリド）、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

3. 残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪の遊離脂肪酸とトリアシルグリセロールに5%メタノール性塩酸を加え、125°C封管中で2時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルを含む画分をクロロホルムで分離し、さらにジアゾメタンで遊離脂肪酸を完全にメチルエステル化してから、ヘキサノール-エチルエーテル-酢酸(80:30:1)またはヘキサノール-エーテル(85:15)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した⁽⁵⁾。

残存脂肪の脂肪酸組成を図2に示す。残存脂肪から10種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸(C16:0)、ステアリン酸(C18:0)、オレイン酸(C18:1)、リノール酸(C18:2)、アラキジン酸(C20:0)、エイコサモノエン酸(C20:1)、ベヘン酸(C22:0)、リグノセリン酸(C24:0)の8種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー-質量分析により同定した。

試料中の脂肪酸組成パターンを見ると、試料 No. 1 と No. 2 はほぼ同一で、No. 3 は他の2試料と若干異なっていた。このうち炭素数18までの中級脂肪酸は、試料 No. 1 と No. 2 では主要な脂肪酸がパルミチン酸で次いでオレイン酸、ステアリン酸の順に多く、No. 3 では主要な脂肪酸がパルミチン酸とオレイン酸でほぼ同程度分布していた。一般に考古遺物にはパルミチン酸が多く含まれている。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が分解し、パルミチン酸を生成するため、主として植物遺体の土壌化に伴う腐植物から来していると推定される。オレイン酸の分布割合の高いものとしては、動物性脂肪と植物性脂肪の両方が考えられ、植物性脂肪は特に根、茎、種子に多く分布するが、動物性脂肪の方が分布割合は高い。オレイン酸はまた、ヒトの骨のみを埋葬した再葬墓試料などにも多く含まれる。ステアリン酸は動物体脂肪や植物の根に比較的多く分布している。リノール酸は主として植物種子・葉に多く分布する。

一方高等動物、特に高等動物の臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられる炭素数20以上のアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸などの高級飽和脂肪酸はそれら3つの合計含有率が試料 No. 1 と No. 3 で約12~14%、No. 2 で約8%であった。通常の遺跡出土土壌中でのアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸の高級飽和脂肪酸3つの合計含有率は約4~10%であるので、試料 No. 2 のそれは通常の遺跡出土土壌並みで、他の2試料中でのそれはわずかに高かった。しかし、あまり多くはない高級飽和脂肪酸含有量ではあるが、その中では試料 No. 3 のリグノセリン酸含有量は他の試料中でよりも多かった。リグノセリン酸は臓器の中でも特に脳、神経組織に多く、動物遺体の存在を知る重要な指標脂肪酸である。高級脂肪酸含有量が多い場合としては、試料中に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器などの特殊な部分が含まれている場合と、植物の種子・葉などの植物体の表面を覆うワックスの構成成分が含まれている場合とがある。高級脂肪酸が動物、植物のどちらに由来するかは、コレステロールの分布割合によって決めることができる。概して、動物に由来する場合はコレステロール含有量が多く、植

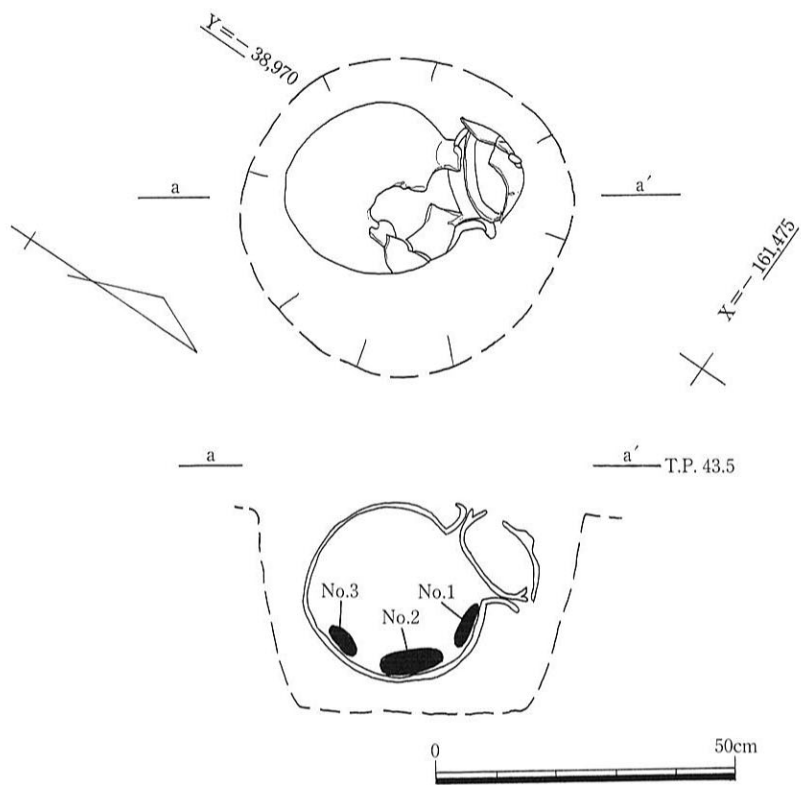


図1 土器棺384土壌サンプル採取点

表1 土壌試料の残存脂肪抽出量

試料No.	採取地点	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
1	土器棺384胴部上位	184.4	5.1	0.0028
2	“ 中位	890.1	3.5	0.0004
3	“ 下位	479.5	11.7	0.0024

表2 試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試料No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/シトステロール
1	7.35	27.58	0.27
2	7.57	32.07	0.24
3	2.85	31.83	0.09

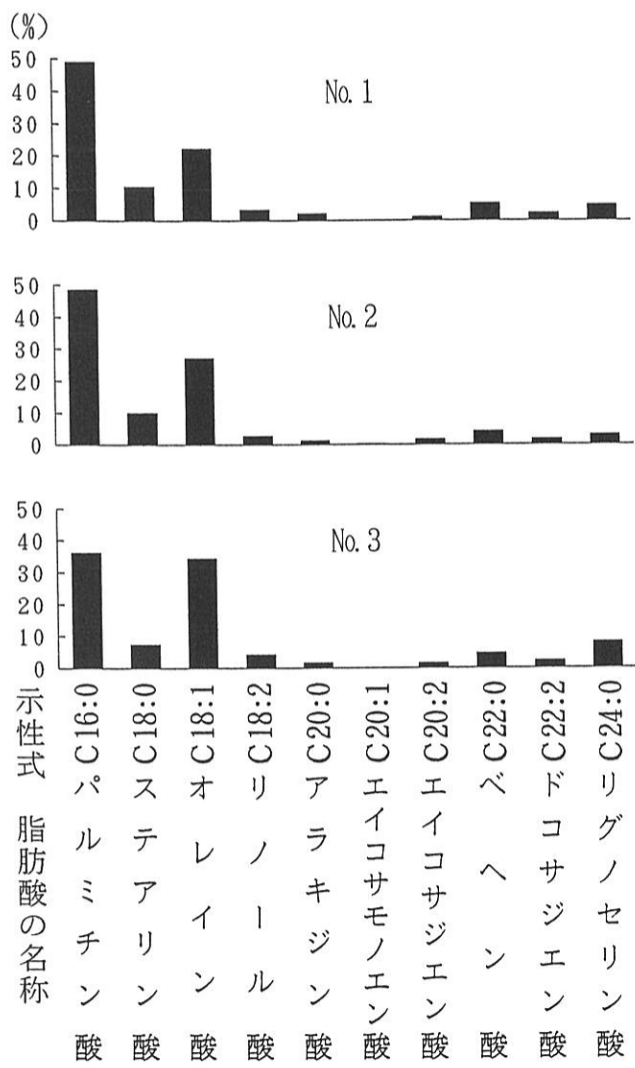


図2 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

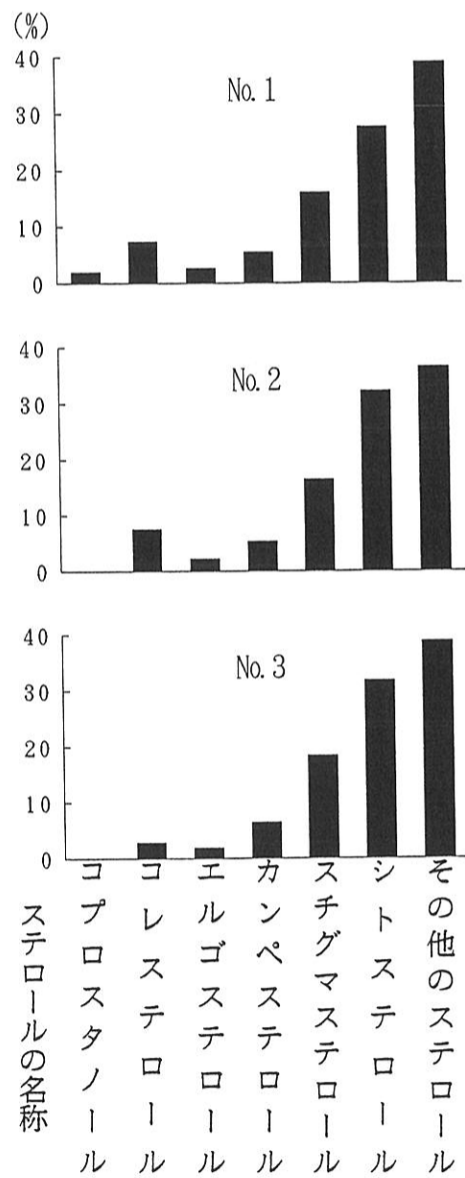


図3 試料中に残存する脂肪のステロール組成

物に由来する場合はコレステロール含有量が少ない。

以上、河原城遺跡の試料 No. 1 と No. 2 では主要な脂肪酸がパルミチン酸で全脂肪酸の約半分を占め、No. 3 では主要な脂肪酸がパルミチン酸とオレイン酸で全脂肪酸の約 3 分の 2 を占めることがわかった。高級飽和脂肪酸は試料 No. 1 と No. 3 に通常の遺跡出土土壌の植物腐植土中でよりもわずかに多い程度であった。しかし、その中では試料 No. 3 にリグノセリン酸が多めであった。

4. 残存脂肪のステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサノール-エチルエーテル-酢酸(80:30:1)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジン-無水酢酸(1:1)を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にする。得られた誘導体をもう一度同じ展開溶媒で精製してから、ガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を図 3 に示す。残存脂肪から15~23種類のステロールを検出した。このうちコプロスタノール、コレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなど 8 種類のステロールをガスクロマトグラフィー-質量分析により同定した。

各試料中のステロール組成をみると、動物由来のコレステロールは試料 No. 1 と No. 2 に約 7 ~ 8 %、No. 3 に約 3 % 分布していた。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールは 2 ~ 6 % 分布している。従って、コレステロール含有量は試料 No. 1 と No. 2 ではわずかに多く、No. 3 では通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みであった。

植物由来のシトステロールはすべての試料中に約 28 ~ 32 % 分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはシトステロールは 30 ~ 40 % もしくはそれ以上に分布している。従って、シトステロール含有量はすべての試料中でほぼ通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みであった。クリ、クルミなどの堅果植物由来のカンペステロール、スチグマステロールは、すべての試料中にカンペステロールが約 5 ~ 6 %、スチグマステロールが約 16 ~ 18 % 分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはカンペステロール、スチグマステロールは 1 ~ 10 % 分布している。従って、試料中のカンペステロール含有量は通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みで、スチグマステロール含有量はかなり多めであった。

微生物由来のエルゴステロールはすべての試料中に 2 ~ 3 % 分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはエルゴステロールは数 % 分布している。従って、この程度の量は土壌微生物の存在による結果と考えられる。

哺乳動物の腸および糞便中に特異的に分布するコプロスタノールは試料 No. 1 に約 2 %、No. 2 と No. 3 に痕跡程度分布していた。コプロスタノールは一般的な遺跡出土土壌中では分布していても 1 ~ 2 % くらいで、通常は殆ど検出されない。また、コプロスタノールの分布により試料中での哺乳動物の存在を確認することができる他に、通常コプロスタノールが 10 % 以上含まれていると、コプロスタノールとコレステロールの分布比から試料中に残存している脂肪の動物種や性別、また遺体の配置状況などが特定できる場合がある⁽⁶⁾。今回は分布していても 2 % 以下で、通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みであった。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壌で 0.6 以上⁽⁷⁾、土器・石器・石製品で 0.8 ~ 23.5 である⁽⁸⁾⁽⁹⁾。試料中のコレステロールとシトステロールの分布比を表 2 に示す。表からわかるように分布比はすべての試料が約 0.1 ~ 0.3 であった。従って、分布比で見ると限りでは試料中に動物遺体または動物由来の脂肪が残存している可能性は少ないことになる。

以上、河原城遺跡の試料中に含まれている各種ステロール類は、動物由来のコレステロールが試料 No. 1 と No. 2 にわずかに多く、堅果植物由来のシテグマステロールがすべての試料中にかなり多い他は、すべて通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みか少なめであることがわかった。コレステロールとシテグマステロールの分布比はすべての試料が0.3以下で、分布比で見ると試料中に動物遺体または動物由来の脂肪が残存している可能性があまりないことがわかった。

5. 脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料の類似度を調べた。同時に試料中に残存する脂肪の持主を特定するために、同じ大阪府内の遺跡で出土土壌や土器にはヒト遺体を直接埋葬した場合と類似の脂肪が残存していると判定した大庭寺遺跡⁽¹⁰⁾、西大井遺跡⁽¹¹⁾、本町遺跡⁽¹²⁾、蛍池遺跡⁽¹³⁾、宮の前遺跡(その2)⁽¹⁴⁾、服部遺跡⁽¹⁵⁾、向出遺跡⁽¹⁶⁾、溝咋遺跡⁽¹⁷⁾、兵庫県寺田遺跡⁽¹⁸⁾、出土土器を幼児埋葬用甕棺と判定した静岡県原川遺跡⁽¹⁹⁾、ヒトの体脂肪、出土土壌を再葬墓と判定した宮城県摺萩遺跡⁽²⁰⁾、ヒトの骨油試料など、各種遺跡試料や現生試料の脂肪酸との類似度を比較した。予めデータベースの脂肪酸組成とクラスター分析を行い、その中から出土状況を考慮して類似度の高い試料を選び出し、再びクラスター分析によりパターン間距離にして表したのが図4である。

図からわかるように、河原城遺跡のすべての試料はそれらのみで相関行列距離0.1以内でA群を形成し、よく類似していた。他の対照試料はB～F群を形成した。これらの群のうちA群とB群は相関行列距離0.2以内の所にあり、互いに類似していた。このA、B群はC群とも相関行列距離0.25以内の所にあり、類似していた。

以上、河原城遺跡のすべての試料中に残存する脂肪は、ヒトの骨油やヒトの体脂肪と類似していることがわかった。

6. 脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸（炭素数16のパルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸、リノレン酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20のアラキジン酸以上）との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分により第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器などに由来する脂肪、第1象限から第2象限の原点から離れた位置にヒト胎盤、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれぞれ分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第3象限から第4象限にかけての原点から離れた位置に海産動物に由来する脂肪が分布する。

土壌試料の残存脂肪から求めた種特異性相関を図5に示す。図からわかるように、河原城遺跡のすべての試料は第2象限内に分布していた。この分布位置は試料中に残存する脂肪が高等動物の体脂肪や骨油に由来することを示唆している。

以上、河原城遺跡の試料中に残存する脂肪は、高等動物の体脂肪や骨油に由来することがわかった。

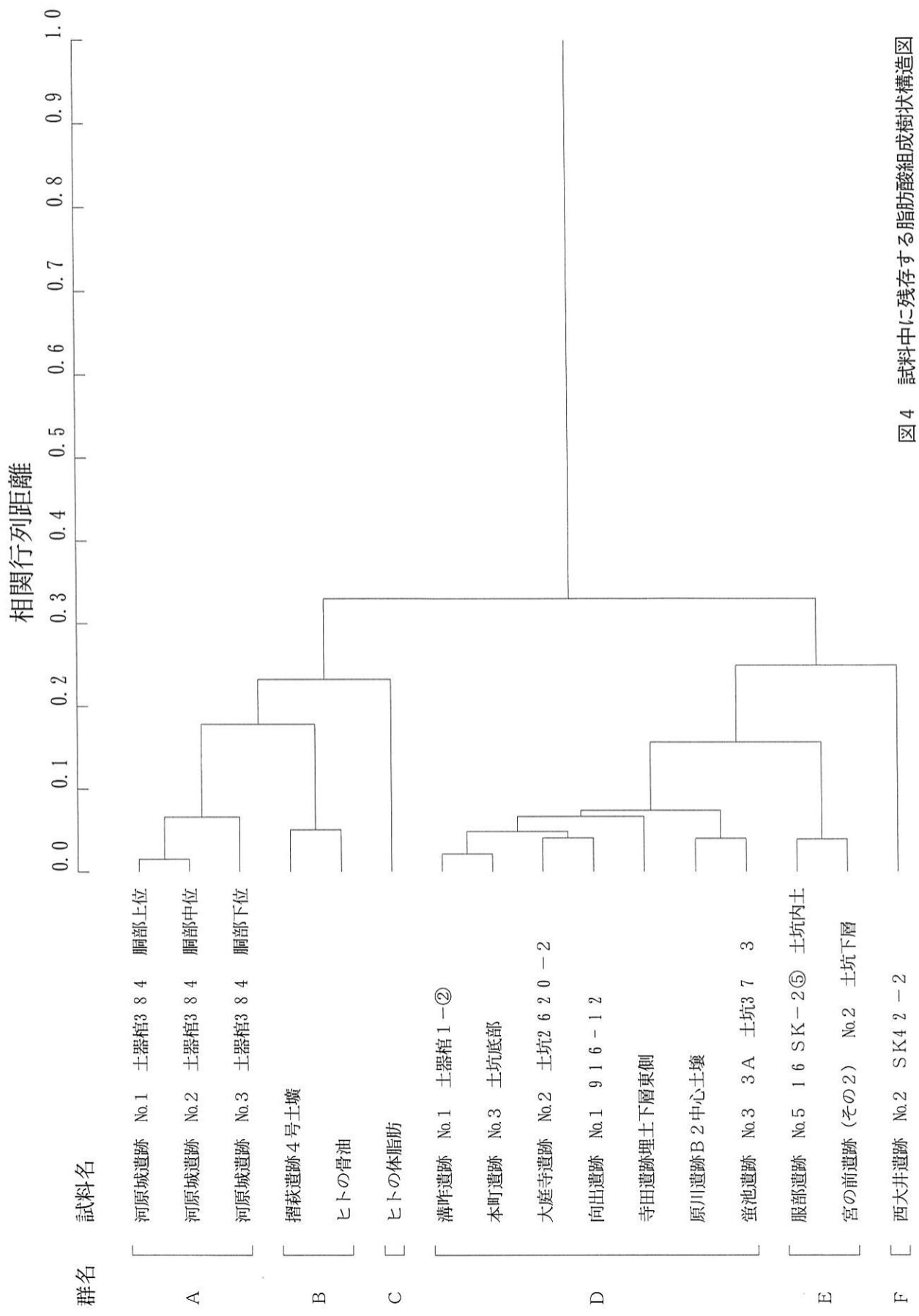


図4 試料中に残存する脂肪酸組成樹状構造図

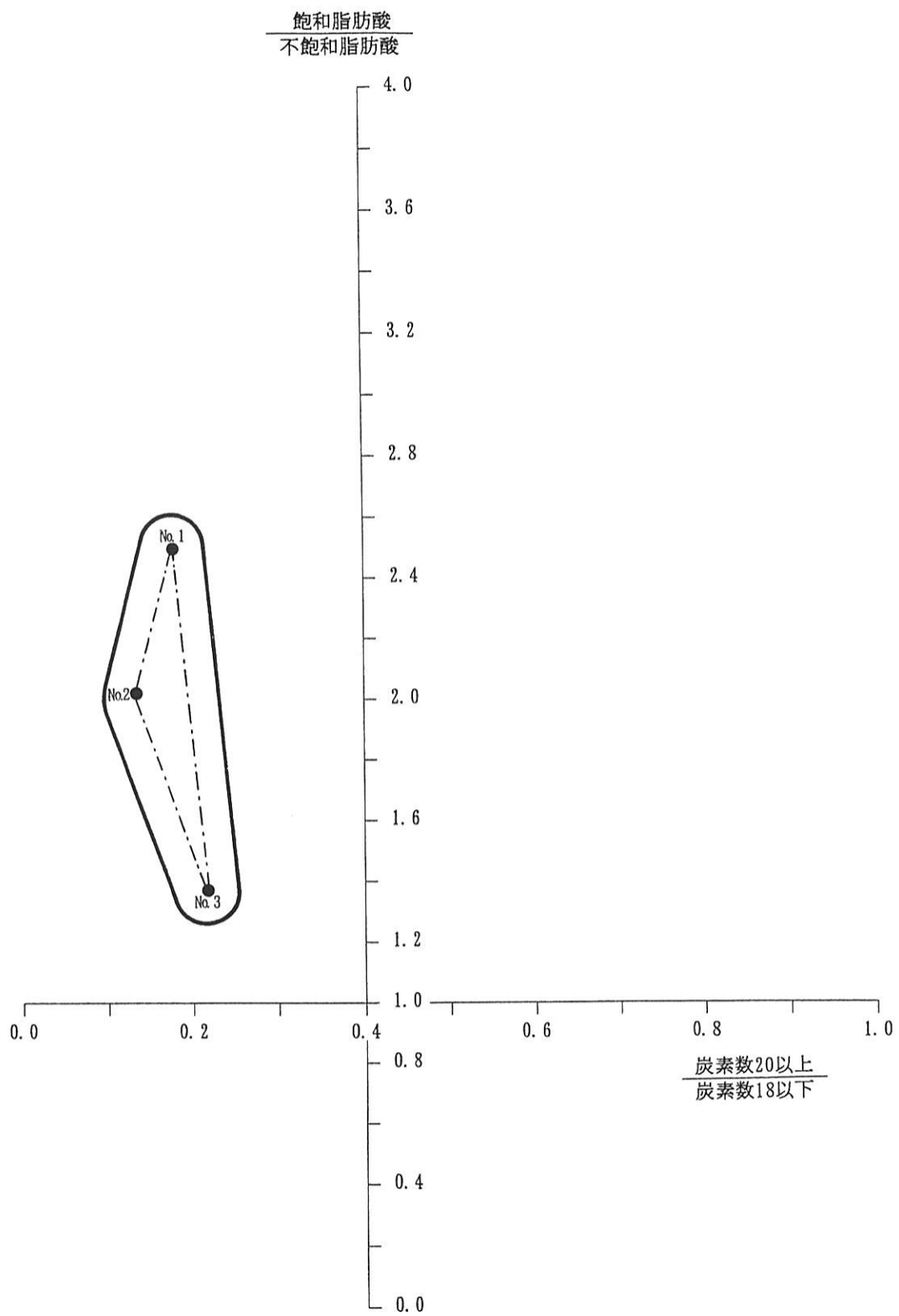


図5 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

7. 総括

河原城遺跡から出土した須恵器甕の性格を判定するために、須恵器甕内の土壌試料の残存脂肪分析を行った。残存する脂肪の脂肪酸分析、ステロール分析、脂肪酸組成の分布に基づく数理解析の結果、動物由来のコレステロール含有量があまり多くはないが、須恵器甕内に残存する脂肪はヒトの骨油やヒトの体脂肪と類似していることがわかった。脂肪酸やステロール含有量のわずかな差からあえてその配置状況を推定すると、リグノセリン酸含有量の多い試料 No. 3 が頭部、コプロスタノール含有量の多い No. 1 が腹部に相当すると考えられる。今回の試料中には堅果植物由来のスチグマステロールがかなり多く含まれていたが、これは後世になって試料を採取した須恵器甕の周辺に堅果植物が繁茂していた可能性が考えられる。また、今回は須恵器甕外の対照試料がないために、須恵器甕内外での試料の傾向を比較することができなかった。より詳細を知るためには遺構、遺物外の対照試料も分析してみることが望ましい。

参考文献

- (1) R.C.A.Rottlander and H.Schlichtherle : *Food identification of samples from archaeological sites*, *Archaeo Physika Vol.10*, 1979, pp260.
- (2) D.A.Priestley, W.C.Galinat and A.C.Leopold : *Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed*, (*Nature*, Vol.292, 1981, pp146).
- (3) R.C.A.Rottlander and H.Schlichtherle : *Analyse fruhgeschichtlicher Gefas-inhalte*, (*Naturwissenschaften*, Vol.70, 1983, pp33.)
- (4) 中野益男 : 「残存脂肪分析の現状」, 『歴史公論』, 第10巻 (6), 1984, pp124.
- (5) M.Nakano and W.Fischer : *The Glycolipids of Lactobacillus casei DSM 20021*, (*Hoppe-Seyler Z. Physiol.Chem.* Vol.358, 1977, pp1439.)
- (6) 中野益男 : 「残留脂肪酸による古代復元」, 『新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』, 田中 琢, 佐原 真編, クバプロ, 1995, pp148.
- (7) 中野益男, 伊賀 啓, 根岸 孝, 安本教傳, 畑 宏明, 矢吹俊男, 佐原 真, 田中 琢 : 「古代遺跡に残存する脂質の分析」, 『脂質生化学研究』, 第26巻, 1984, pp40.
- (8) 中野益男 : 「真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂」, 『真脇遺跡』, 石川県鳳至郡能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団, 1986, pp401.
- (9) 中野益男, 根岸 孝, 長田正宏, 福島道広, 中野寛子 : 「へろカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」, 『へろカルウス遺跡』, 北海道文化財研究所調査報告書第3集, 1987, pp191.
- (10) 中野寛子, 明瀬雅子, 長田正宏, 中野益男 : 「大庭寺遺跡から出土した土坑に残存する脂肪の分析」, 『大庭寺・伏尾遺跡』, (財)大阪府文化財調査研究センター発掘調査報告書第27集, 1998, pp407.
- (11) 中野寛子, 明瀬雅子, 長田正宏, 中野益男 : 「西大井遺跡から出土した土壌に残存する脂肪の分析」, 『西大井遺跡発掘調査概要・1992年度-’92-1区の調査』, 大阪府教育委員会, 1994, pp37.
- (12) 中野益男, 中野寛子, 菅原利佳, 長田正宏 : 「本町遺跡から出土した土坑に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 大阪府豊中市教育委員会.
- (13) 中野益男, 中野寛子, 菅原利佳, 長田正宏 : 「宮の前・蛍池遺跡採集土壌の残存脂肪分析」, 『宮の前遺跡・蛍池東遺跡・蛍池遺跡・蛍池西遺跡』, 1992・1993年度発掘調査報告書, (財)大阪府文化財センター, 1994, pp167.

(14) 中野益男, 中野寛子, 長田正宏: 「宮の前遺跡(その2)から出土した土坑に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, (財)大阪府文化財調査研究センター.

(15) 中野益男, 中野寛子, 長田正宏: 「服部遺跡から出土した遺構・遺物に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 大阪府豊中市教育委員会.

(16) 中野益男, 中野寛子, 長田正宏: 「向出遺跡残存脂肪酸分析委託」, 『未発表』, (財)大阪府文化財調査研究センター.

(17) 中野益男, 中野寛子, 長田正宏: 「溝作遺跡(その2)脂肪酸分析委託」, 『未発表』, (財)大阪府文化財調査研究センター.

(18) 中野益男, 中野寛子, 福島道広, 長田正宏: 「寺田遺跡土壙墓状遺構に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 兵庫県芦屋市教育委員会.

(19) 中野益男, 幅口 剛, 福島道広, 中野寛子, 長田正宏: 「原川遺跡の土器棺に残存する脂肪の分析」, 『原川遺跡 I』, 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第17集 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所, 1988, pp79.

(20) 中野益男, 長田正宏, 福島道広, 中野寛子: 「摺萩遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」, 『摺萩遺跡』, 宮城県文化財調査報告書第132集, 宮城県教育委員会・宮城県土木部水資源開発課, 1990, pp929.

第4節 河原城遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査

大澤正己・鈴木瑞穂

1 いきさつ

河原城遺跡は羽曳野市河原城・美原町多治井地内に所在する。南阪奈道路建設に伴い発掘調査が実施された。古墳時代後期・飛鳥時代・奈良時代における集落跡が確認されたが、このうち8世紀に属する掘立柱建物跡5棟と共に砂鉄や木炭を含む土坑が10基検出され、周囲からも多量の鉄滓・羽口等の鍛冶関連遺物が出土しているため、当地における生産の実態を把握する目的から金属学的調査を実施する運びとなった。

2 調査方法

2-1 供試材

表1に示す。椀形鍛冶滓、再結合滓、鉄片、羽口、炉壁片？鍛造剥片等計15点の調査である。

2-2 調査方法

(1) 肉眼観察

遺物の肉眼観察所見。これらの所見をもとに分析試料採取位置を決定する。場合によっては切断面の所見を加えた。

(2) マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面全体像を、投影機の10倍もしくは20倍で撮影したものを指す。当調査は、顕微鏡検査によるよりも広い範囲にわたって、組織の分布状態、形状、大きさなどの観察ができる利点がある。

(3) 顕微鏡組織

切り出した試料をベークライト樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000と順を追って研磨し、最後は被研磨面をダイヤモンドの3 μ と1 μ で仕上げた後、光学顕微鏡観察を行った。なお、金属鉄のパラライトとフェライト結晶粒はナイトル(5%硝酸アルコール液)で腐食(Etching)している。

(4) ビッカース断面硬度

鉄滓の鉍物組成と、金属鉄の組織同定を目的として、ビッカース断面硬度計(Vickers Hardness Tester)を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除いた商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用した。

(5) CMA (Computer Aided X-Ray Micro Analyzer) 調査

EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) にコンピューターを内蔵させた新鋭分析機器である。旧式装置は別名X線マイクロアナライザーとも呼ばれる。分析の原理は、真空中で試料面(顕微鏡試料併用)に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し、定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。化学分析を行えない微量試料や鉍物組織の微小域の組織同定が可能である。

(6) 化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分 (Total Fe)、金属鉄 (Metallic Fe)、酸化第一鉄 (FeO) : 容量法。

炭素 (C)、硫黄 (S) : 燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化珪素 (SiO_2)、酸化アルミニウム (Al_2O_3)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化カリウム (K_2O)、酸化ナトリウム (Na_2O)、酸化マンガン (MnO)、二酸化チタン (TiO_2)、酸化クロム (Cr_2O_3)、五酸化燐 (P_2O_5)、バナジウム (V)、銅 (Cu) : ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 法 : 誘導結合プラズマ発光分光分析。

(7) 耐火度

耐火度の加熱に耐える温度とは溶融現象が進行の途上で軟化変形を起こす状態の温度で表示することを定め、これを耐火度と呼んでいる。試験には三角コーン、つまりゼーゲルコーンが溶倒する温度と比較する方法を用いている。

3 調査結果

KWR-1 椀形鍛冶滓

① 肉眼観察 : 比較的大型で偏平の椀形鍛冶滓である。側面4面が破面。一部にやや二段気味の段差を有する。上面はほぼ平坦で周縁部に長さ1 cm以下の細かい木炭痕が僅かに認められる。下面には一部灰白色の炉床粘土の付着する。また、長さ1 cm以下の木炭痕と思われる凹部が数箇所認められるが比較的滑らかな曲面を示す。炉底に接して形成されたと思われる。緻密で重量のある質感の滓であるが、表面やや風化気味である。

② 顕微鏡組織 : 写真. 1 ①~⑤に示す。①~③は白色粒状結晶ヴスタイト (Wüstite : FeO)、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト (Fayalite : $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$)、が基地の暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。②③はヴスタイトのやや凝集する個所である。④は木炭繊維に鉄が置換し、錆化鉄 (Geothite : $\alpha\text{-FeO}\cdot\text{OH}$) となったものである。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

③ ビッカース断面硬度 : 写真. 1 ⑤に白色粒状結晶の硬度測定の前痕を示す。硬度値は449Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値450~500Hv^(註1)を僅かに下回るがヴスタイトに同定される。

④ 化学組成分析 : 表. 2に示す。鉄分高く、脈石成分 (TiO_2 、V、MnO、CaO+MgO) の低い成分系である。全鉄分 (Total Fe) 62.99%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.06%、酸化第一鉄 (FeO) 61.01%、酸化第二鉄 (Fe_2O_3) 22.17%の割合であった。ガラス質成分 ($\text{SiO}_2+\text{Al}_2\text{O}_3+\text{CaO}+\text{MgO}+\text{K}_2\text{O}+\text{Na}_2\text{O}$) 12.91%で、このうちに塩基性成分 (CaO+MgO) 0.85%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン (TiO_2) 0.18%、バナジウム (V) 0.012%であった。また、酸化マンガン (MnO) 0.05%、銅 (Cu) 0.009%であった。鍛錬鍛冶滓の成分系であった。

KWR-2 椀形鍛冶滓

① 肉眼観察 : 縁の凹凸が著しい完形の椀形鍛冶滓である。上面端部に1箇所瘤状の盛り上がり認められる。その上端はガラス質滓であり、羽口下の垂下痕と考えられる。また、長さ1 cm程の木炭痕をやや密に残す。下面は木炭痕が少なく比較的表面は滑らかであるが、きれいな椀形を呈さずやや不規則な凹凸を示す。白色の炉床粘土の付着が散見される。全体に黄褐色の酸化土砂の付着が顕著である。

② 顕微鏡組織：写真. 1 ⑥～⑧に示す。⑥⑧鉱物組成は白色粒状結晶ヴスタイト (Wüstite : FeO)、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト (Fayalite : $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) が基地の暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。また、⑦は底面で炉床に接した部分では、ほぼ淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト (Fayalite : $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) のみが晶出している。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

③ ビッカース断面硬度：写真. 1 ⑧に白色粒状結晶の硬度測定の前痕を示す。硬度値は468Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値の範囲内であり、ヴスタイト (Wüstite : FeO) に同定される。

④ 化学組成分析：表. 2 に示す。鉄分高めで、脈石成分の低い成分系である。全鉄分 (Total Fe) 55.37%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.02%、酸化第1鉄 (FeO) 52.09%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 21.25%の割合であった。ガラス質成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) 22.13%で、このうち塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) 2.56%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン (TiO_2) 0.18%、バナジウム (V) 0.008%であった。また、酸化マンガン (MnO) 0.09%、銅 (Cu) 0.010%であった。鍛錬鍛冶滓の成分系に分類される。

KWR-3 椀形鍛冶滓

① 肉眼観察：平面不整六角形をしたやや扁平の椀形鍛冶滓の中核部破片である。側面6面は破面。上面は平坦で細かい木炭痕が薄くみられる。下面は白色の炉床粘土が広範囲に付着している。炉床粘土には長石・砂粒の混和が認められる。また、滓表面には大きなもので2 mm程の細かい気孔がある。黄褐色の酸化土砂の付着が顕著である。

② 顕微鏡組織：写真. 1 ①～⑤に示す。①③では白色粒状結晶ヴスタイト (Wüstite : FeO)、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト (Fayalite : $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) が基地の暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。②は淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト (Fayalite : $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) が大きく成長し、白色粒状結晶ヴスタイト (Wüstite : FeO) が僅かに認められる個所である。④⑤は炉底に付着した鍛冶炉床粘土である。鱗片状の粘土鉱物セリサイト (Cerisite) 及び石英粒等が認められる。⑤では被熱のため粘土鉱物が非晶質化しつつある。また、微小白色粒は胎土中に混入した砂鉄である。

③ ビッカース断面硬度：写真. 3 に白色粒状結晶の硬度測定の前痕を示す。硬度値は394Hvと割れや風化のため異常値であったが、ヴスタイトに同定されよう。

④ 化学組成分析：表. 2 に示す。やはり鉄分高めで、脈石成分の少ない成分系である。全鉄分 (Total Fe) 57.96%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.04%、酸化第1鉄 (FeO) 49.93%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 27.32%の割合であった。ガラス質成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) 16.87%で、このうち塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) 0.95%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン (TiO_2) 0.26%、バナジウム (V) 0.012%であった。また、酸化マンガン (MnO) 0.06%、銅 (Cu) 0.012%であった。鍛錬鍛冶滓の成分系である。

KWR-4 椀形鍛冶滓

① 肉眼観察：やや不定形をした扁平で完形の椀形鍛冶滓である。上・側・下面共に中小の木炭痕を密に残す。(大型のもので2 × 1 cm程)特に下面の木炭痕は木質がかなり残存する。表面はやや風化気味である。凹部に黄褐色の酸化土砂が付着する。

② 顕微鏡組織：写真. 2 ⑥～⑧に示す。鉱物組成は白色粒状結晶ヴスタイト (Wüstite : FeO)、淡灰

色木ずれ状結晶ファイヤライト (Fayalite : $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) が基地の暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

③ 化学組成分析：表. 2 に示す。鉄分高く、脈石成分の少ない成分系である。全鉄分 (Total Fe) 60.68% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.07%、酸化第 1 鉄 (FeO) 55.19%、酸化第 2 鉄 (Fe_2O_3) 25.32% の割合であった。ガラス質成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) 15.52% で、このうち塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) 1.44% を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン (TiO_2) 0.29%、バナジウム (V) 0.24% であった。また、酸化マンガン (MnO) 0.07%、銅 (Cu) 0.008% であった。鍛錬鍛冶滓の成分系といえる。

KWR-5 梔形鍛冶滓

やや厚手・中型の梔形鍛冶滓。黄褐色の酸化土砂の付着が顕著で地の観察が難しいが、上面は平坦気味で細かい木炭痕が密に認められる。側面・下面にも細かい木炭痕を密に残す。粉炭中に乗った状態で生成したものと思われる。表面は部分的にやや風化気味である。

② 顕微鏡組織：写真. 3 ①～③ に示す。鉱物組成は白色粒状結晶ヴスタイト (Wüstite : FeO)、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト (Fayalite : $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) が基地の暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

③ ビッカース断面硬度：写真. 3 ① に白色粒状結晶の硬度測定の前痕を示す。硬度値は 430 Hv であった。割れや風化のため軟化気味であったが、ヴスタイトに同定される。

④ 化学組成分析：表. 2 に示す。全鉄分 (Total Fe) 56.00% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.06%、酸化第 1 鉄 (FeO) 43.75%、酸化第 2 鉄 (Fe_2O_3) 31.36% の割合であった。ガラス質成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) 17.05% で、このうち塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) 1.97% を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン (TiO_2) 0.34%、バナジウム (V) 0.012% であった。また、酸化マンガン (MnO) 0.09%、銅 (Cu) 0.008% であった。鍛錬鍛冶滓の成分系である。

KWR-6 梔形鍛冶滓

① 肉眼観察：約 1/3 程を欠損した梔形鍛冶滓。側面 1 面が破面。上面は平坦で細かい木炭痕がかなり密に認められる。下面も細かい木炭痕を一面に残す。粉炭中に乗った状態で生成したものと思われる。破面は緻密で気孔はほとんど見られない。

② 顕微鏡組織：写真. 3 ④～⑧ に示す。④ は滓部と含鉄部である。滓部は白色粒状結晶ヴスタイト (Wüstite : FeO) が認められる。風化が顕著である。また、含鉄部は既に錆化して金属鉄は残存せず錆化鉄 (Geothite : $\alpha\text{-FeO}\cdot\text{OH}$) となっている。⑤⑥ も錆化鉄でパーライト (Pearlite) 痕跡を留めている。パーライトの面積率でこれらの部分の炭素含有量を推定すると^(註2)、0.1% C 前後の極軟鋼である。⑦⑧ は滓部で白色粒状結晶ヴスタイト (Wüstite : FeO)、灰色木ずれ状結晶ファイヤライト (Fayalite : $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) が基地の暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。やや風化気味の鉱物相である。

③ ビッカース断面硬度：写真. 3 ⑦⑧ に白色粒状結晶の硬度測定の前痕を示す。硬度値は⑦が 281 Hv、⑧が 449 Hv と風化のため個所により大きな差が認められたが、ヴスタイトに同定される。⑦の 281 Hv は異常値として無視すべきであろう。

④ 化学組成分析：表. 2 に示す。全鉄分 (Total Fe) 59.07% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.05%、

酸化第1鉄 (FeO) 29.50%、銹化鉄含みのため酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 51.60%の割合であった。ガラス質成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) 17.05%で、このうち塩基性成分 (CaO+MgO) 0.59%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン (TiO₂) 0.11%、バナジウム (V) 0.008%であった。また、酸化マンガン (MnO) 0.08%、銅 (Cu) 0.014%であった。前述同様梔形鍛冶滓の成分系である。

KWR-7 梔形鍛冶滓

① 肉眼観察：小型・完形の梔形鍛冶滓である。上面は平坦で細かい木炭痕が散見される。下面は細かい木炭痕が顕著である。粉炭中に乗った状態で生成したものと思われる。金属探知器 H (○) で一部反応があった。外観からは銹化等の鉄部の明確な痕跡は認められない。

② マクロ組織：写真.15に示す。中心部に大きな銹化鉄 (Geothite：α-FeO・OH) が存在する。全体的に針状セメントイトが認められ、過共析鋼組織の鉄塊であった。鍛冶作業中に梔形滓中に落下したものと考えられる。周囲の滓部はヴスタイトが凝集気味に晶出する。

③ 顕微鏡組織：写真.4①～⑤に示す。①～③は滓部の鉱物相である。①③では白色粒状結晶ヴスタイト (Wüstite：FeO) が凝集気味に晶出し、その粒間を淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト (Fayalite：2FeO・SiO₂) と基地の暗黒色ガラス質スラグが埋める。風化が顕著である。②は白色粒状結晶ヴスタイト (Wüstite：FeO)、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト (Fayalite：2FeO・SiO₂) が基地の暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。④⑤は銹化鉄部分で、パーライト (Pearlite) 痕跡を留めている。パーライトの面積率でこれらの部分の炭素含有量を推定すると、0.1%C 前後の極軟鋼である。

④ ビッカース断面硬度：写真.4③に白色粒状結晶の硬度測定の際の圧痕を示す。硬度値は356Hvであった。風化のため低値であったがヴスタイトに同定される。

⑤ 化学組成分析：表.2に示す。鉄分高く脈石成分の少ない成分系である。全鉄分 (Total Fe) 67.39%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.04%、酸化第1鉄 (FeO) 54.68%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 35.53%の割合であった。ガラス質成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) 4.67%で、このうち塩基性成分 (CaO+MgO) 0.38%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン (TiO₂) 0.15%、バナジウム (V) 0.012%であった。酸化マンガン (MnO) 0.02%、銅 (Cu) が0.050%と比較的高値であった。鍛錬鍛冶滓の成分系である。

KWR-8 梔形鍛冶滓

① 肉眼観察：小型・偏平・完形の梔形鍛冶滓である。上面は中央がやや窪んだ形状を呈する。中央部に小型の木炭痕が2箇所ほど認められる。下面は細かな木炭痕を一面に残す。表面はやや風化気味である。

② 顕微鏡組織：写真.4⑥～⑧に示す。⑥⑦白色粒状結晶ヴスタイト (Wüstite：FeO)、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト (Fayalite：2FeO・SiO₂) が暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。⑥はヴスタイトがやや凝集気味に晶出し、⑦は特に風化が顕著である。⑧は底面に付着した鍛冶炉床粘土部分である。石粒等の混和は少ない。粘土鉱物セリサイト (Cerisite) は被熱のため非晶質化しつつある。

④ 化学組成分析：表.2に示す。鉄分高く脈石成分の少ない成分系である。全鉄分 (Total Fe) 62.36%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.01%、酸化第1鉄 (FeO) 45.47%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 38.61%の割合であった。ガラス質成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) 9.70%で、このうち

塩基性成分 (CaO+MgO) 0.43%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン (TiO₂) 0.19%、バナジウム (V) 0.008%であった。また酸化マンガン (MnO) 0.03%、銅 (Cu) 0.008%であった。鍛錬鍛冶滓の成分系である。

KWR-9 再結合滓

① 肉眼観察：平面不整五角形を呈する。側面5面は破面。上下面とも平坦で、有機物の圧痕が複数認められる。また、破面は黒色・暗茶褐色の細かい層状を呈する部分があり、再結合滓である。表面には粉炭・砂粒の付着が顕著である。数個所で金属探知器 H (○) の反応があるがいずれも弱く安定しない。切断面で観察すると酸化土砂主体の試料であった。(再結合滓とは製鉄や鍛冶で派生した滓や鉄片、木炭、鍛造剥片、粒状滓などの雑多な遺物が凹部に堆積して固着し、塊状を呈する試料である。)

② 顕微鏡組織：写真. 5 ①～⑤に再結合滓中に混入した鍛造剥片を示す。①～③鍛造剥片は本来外層ヘマタイト (Hematite : Fe₂O₃)、中間層マグネタイト (Magnetite : Fe₃O₄)、内層ヴスタイト (Wüstite : FeO) の3層の酸化膜からなるが、鍛打作業で飛散した鍛造剥片が鍛冶炉中に入り込んで再加熱を受けたものか、この試料では外層ヘマタイト (Hematite : Fe₂O₃)、中間層マグネタイト (Magnetite : Fe₃O₄) が両側に認められる。また、内層ヴスタイトが非晶質であり、鍛打工程の後半段階の派生物である。④⑤は3層分離型の鍛造剥片で、内層ヴスタイト (Wüstite : FeO) は粒状結晶を留める。鍛打工程の前半段階の派生物である。また、再結合滓中に多くの粉炭が認められた。まとまった滓はほとんど無く酸化土砂主体の再結合滓である。

KWR-10 鉄片 (刃部破片)

① 肉眼観察：表面が分厚い酸化土砂に覆われている鉄製品の破片である。層状に錆化・剝離を起こし鍛造品と判別がつく。また側面を観察すると長軸の両端では明らかに厚みが異なっており、鉄斧などの刃部破片の可能性も考えられる。長軸方向に試料を切断し、断面をみると皮金は錆化し層状に剝離しかかっているが、芯金は金属鉄部分が残存していた。

② マクロ組織：写真. 16に示す。芯部は金属鉄が残存する。金属組織の相違に伴って腐食 (Etching) の濃淡変化が生じており、その境界部に非金属介在物の列が観察されたことから、炭素量の異なる異材を合せ鍛えしたと考えられる。

③ 顕微鏡組織：写真. 5 ⑥～⑧及び写真. 6・7に示す。写真. 5 ⑥～⑧は鉄中の非金属介在物である。⑥は非晶質珪酸塩系の介在物で、⑦⑧はヴスタイト (Wüstite : FeO) とファイヤライト (Fayalite : 2 FeO · SiO₂) が認められる。写真. 6・7はナイトル (5%硝酸アルコール液) で腐食 (Etching) した金属組織である。写真. 6 ①～③は芯部基部側の組織で、粒界に網目状に初析セメンタイトが認められる過共析組織である。④～⑧はほぼ全面パーライト組織の共析組織である。パーライト中の板状セメンタイトが崩れ、一部球状化していることから650～700℃に焼戻されたものと推定される。写真. 7 芯部金属鉄先端部の組織である。フェライト、上部ベイナイト組織がみられる亜共析鋼である。

④ ビッカース断面硬度：写真. 7 ⑥～⑨に異なる金属組織の硬度測定の影響を示す。⑥は芯部基部側の過共析鋼部分で、硬度値は277Hvである。組織から予想される硬度より若干低値であった。また、⑦は全面パーライト組織の共析鋼部分で、硬度値は248Hvであった。やはり組織から予想される硬度より若干低めの値を示した。焼戻しをうけたと考えられる。⑦⑧は芯部残存金属鉄の先端部分で、⑧は172Hv、

⑨は148Hvを示した。

以上から鉄片全体が1100°C以上の温度で炭素量の異なる異材が鍛接され、空冷された後に焼戻しをうけたものと考えられる。

⑤ CMA 調査：写真.17の COMP (反射電子像) に示した鉄中非金属介在物の高速定性分析結果を図3に示す。A-Rank で検出された元素は鉄 (Fe)、ガラス質成分 (Si+Al+Na)、酸素 (O)、B-Rank でガラス質成分 (Ca+K) が検出された。この高速定性分析結果を視覚化した面分析の特性 X 線像と定量分析値が写真.17である。COMP に 2 の番号つけた白色粒状結晶は鉄 (Fe)、酸素 (O) に白色輝点が集中し、定量分析値は99.0%FeOであった。また、淡灰色木ずれ状結晶には鉄 (Fe)、珪素 (Si) に白色輝点が集中し、ファイヤライト (Fayalite: 2FeO・SiO₂) に同定される。さらにその粒間ではガラス質成分 (Si+Al+Ca+K+Na)、酸素 (O) に白色輝点がみられ、暗黒色ガラス質スラグに同定される。

また、写真.17の COMP (反射電子像) に示した鉄中非金属介在物の高速定性分析結果を図4に示す。A-Rank で検出された元素はチタン (Ti)、ガラス質成分 (Si+Al+Ca+Mg+K+Na)、燐 (P)、酸素 (O)、B-Rank で鉄 (Fe) が検出された。

高速定性分析結果を視覚化した面分析の特性 X 線像と定量分析値が写真.17である。COMP に 1 番号をつけた個所では、ガラス質成分 (Si+Al+Ca+Mg+K+Na)、酸素 (O) に白色輝点が集中し、60.4% SiO₂-11.2%Al₂O₃-11.5%CaO-3.5%MgO-4.2%K₂O-1.1%Na₂O 定量分析値が得られた。非晶質硅酸塩系の非金属介在物に同定される。鉄素材の始発原料は鉍石系であろう。

KWR-11 羽口

① 肉眼観察：内径約 3 cm とやや大型の鍛冶羽口先端部付近の破片である。先端側表面は表面黒色ガラス質化しており、基部側に向かって赤色～灰色と被熱による色調変化が認められる。色調変化帯の角度からかなりの急角度での鍛冶炉への装着が考えられる。胎土の地の色調は橙色であり粒の細かい緻密な粘土質で細かい長石粒・砂粒などを混和している。

② 顕微鏡組織：写真. 8 ①～③に示す。①は羽口胎土表層部である。角張った形状の石粒が多数混和されている。粘土鉍物セリサイト (Cerisite) は被熱のため非晶質化しており、微小析出物が僅かに認められる。②③も被熱胎土である。微小白色粒は胎土中に混入した砂鉄粒子である。

③ 化学組成分析：表. 2 に示す。胎土中の強熱減量 (Ig loss) は2.38%と熱影響を受けて結晶構造水が脱水されたところでの分析値である。軟化性を劣化させる鉄分 (Fe₂O₃) は3.57%で、塩基性成分 (CaO+MgO) は1.02%と少なく、酸化アルミニウム (Al₂O₃) は19.42%と高めで耐火性には有利となる成分系である。また、胎土中には砂鉄の混入が認められたが、二酸化チタン (TiO₂) 0.69%、バナジウム (V) 0.012%が検出された。

④ 耐火度：羽口胎土をゼーゲルコーンという三角錐の試験片に作り、1分間当り10°Cの速度で温度上昇させ、変化が起ると4°Cに昇温速度をおとし、試験片が荷重なしに自重だけで軟化し崩れる温度が1460°Cであった。古代の鍛冶羽口としては十分な性状であろう。

KWR-12 炉壁片？

① 肉眼観察：平面不整四角形を呈する。側面4面は破面。内面被熱により表面は黒色ガラス質化している。また、破面では内面側に向かって気孔が顕著に認められる。鍛冶炉炉壁としては内面の被熱が

強すぎると思われる。溶解炉など鑄造関連の遺物とすれば、内面のガラス質滓の色調は鉄関連の可能性が高く、より新しい時代の混入品である可能性も考えられよう。胎土部分は外面も被熱のためか灰白色を呈する。ごく短く切ったスサを混入しているのか外面長さ1 cm程の条痕が顕著で石英・長石・砂粒等が混和される。

② 顕微鏡組織：写真. 8④～⑧に示す。④⑤は内面表層の被熱溶融ガラス質スラグ部分とそこに晶出する微小金属鉄粒である。⑥～⑧は胎土部分で粘土鉱物セリサイト (Cerisite) は被熱のため非晶質化している。また、⑥の微小白色粒は胎土中に混入した砂鉄粒子である。

⑤ CMA 調査：写真. 19のCOMP (反射電子像) のガラス質スラグ中に晶出する金属鉄粒の高速定性分析結果を図5に示す。A-Rank で検出された元素は鉄 (Fe)、ガラス質成分 (Si+Al+Ca+Mg+K)、燐 (P)、硫黄 (S)、酸素 (O) である。

この高速定性分析結果を視覚化した面分析の特性 X 線像と定量分析値が写真. 19である。COMP に4の番号をつけた微小析出物は鉄 (Fe) に白色輝点が集中し、定量分析値は135.5%FeO-2.9%P₂O₅であった。酸化物定量での測定値のため、100%を越える値となっているが、100%の金属鉄 (Metallic Fe) である。また、鉄粒の周囲では燐 (P) に白色輝点が集中する。COMP に5の番号をつけた素地部分はガラス質成分 (Si+Al+Ca+Mg+K) に白色輝点が集中し、57.1%SiO₂-13.3%Al₂O₃-11.6%CaO-3.3%MgO-1.8%K₂O-5.3%FeOであった。暗黒色ガラス質スラグに同定される。

KWR-13~15 鍛造剝片

各サンプル中より6枚ずつを抜き出して供試材とする。また、サンプルは銹化鉄片の混入が多く認められた。特に大型のものは大部分が銹化鉄片と思われる。

鍛造剝片は磁石を多用して選び出したのか、全てのものが強い帯磁性を持つ。サンプル選び出しが磁着の強いものに偏っている可能性がある。

また、供試材とした試料は平坦・表面滑らかで気孔がほとんど認められないという特徴を持っている。鍛打の後半段階の試料が多いのだろうか。厚手のものは銹化鉄片が混入している可能性もある。

鍛造剝片とは鉄素材を大気中で加熱、鍛打すると、表面酸化膜が剝離、飛散したものを指す。俗に鉄肌 (金肌) やスケールとも呼ばれる。鍛冶工程の進行により表面荒れ肌の厚手から平坦薄手へ、色調は黒褐色から青味を帯びた銀色 (光沢を発する) へと変化する。粒状滓の後続派生物で、鍛打作業の実証と、鍛冶の段階を押える上で重要な遺物となる^(#3)。

この鍛造剝片や粒状滓は極めて微細な鍛冶派生物であり、発掘調査中に土中から肉眼で識別するのは難しい。通常は鍛冶趾の床面の土砂を水洗することにより検出される。鍛冶工房の調査に当たっては、鍛冶炉を中心にメッシュを切って土砂を取り上げ、水洗選別、秤量により分布状態を把握できれば、工房内の作業空間配置の手がかりとなりうる重要な遺物である^(#4)。

鍛造剝片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト (Hematite : Fe₂O₃)、中間層マグネタイト (Magnetite : Fe₃O₄)、大部分は内層ヴスタイト (Wüstite : FeO) の3層から構成される。このうちのヘマタイト相は1450°Cを越えると存在しなく、ヴスタイト相は570°C以上で生成されるのは Fe-O 系平衡状態図 (図2) から説明される^(#5)。

鍛造剝片を王水 (塩酸3 : 硝酸1) で腐食すると、外層ヘマタイト (Hematite : Fe₂O₃) は腐食しても侵されず、中間層マグネタイト (Magnetite : Fe₃O₄) は黄変する。内層のヴスタイト (Wüstite : FeO)

は黒変する。

鍛打作業前半段階では内層ヴスタイト (Wüstite : FeO) が粒状化を呈し、鍛打仕上げ時になると非晶質化する。鍛打作業工程のどの段階が行われていたか推定する手がかりともなる。

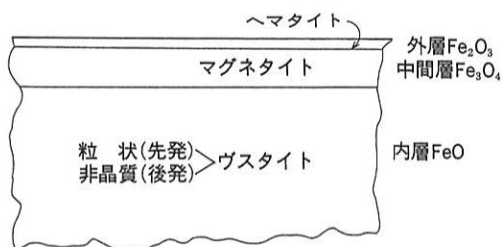


図1 鍛造剝片 3層分離型模式図

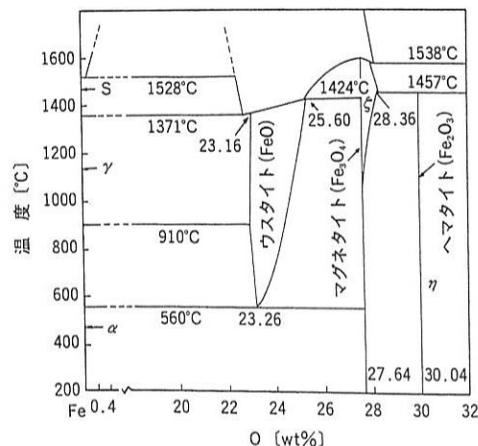


図2 Fe-O系平衡状態図

KWR-13-① 鍛造剝片 5 × 3 × 3.5mm 磁着強

① 肉眼観察：色調は黒灰色で光沢はない。厚手で上下面ともに滑らかで平坦である。表面・破面共に気孔は見られない。裏面には酸化土砂が付着する。

② マクロ組織：写真. 9 ①に示す。断面は僅かに彎曲する。表裏面に沿って気孔が認められる。やや風化傾向にある。

③ 顕微鏡組織：写真. 9 ②～④に示す。酸化膜は3層に分離しており、内層ヴスタイト (Wüstite : FeO) は非晶質であった。鍛打作業の後半段階の派生物である。

KWR-13-② 鍛造剝片 3.5 × 1.5 × 0.4mm 磁着強

① 肉眼観察：KWR-13-①と同様の試料。色調は黒灰色で光沢はない。厚手で上下面ともに滑らかで平坦である。表裏面には酸化土砂の付着が認められる。

② マクロ組織：写真. 9 ⑤に示す。断面は僅かに彎曲し、裏面側には多くの気孔が認められる。やや風化傾向にある。

③ 顕微鏡組織：写真. 9 ⑥～⑧に示す。酸化膜は3層に分離しており、内層ヴスタイト (Wüstite : FeO) は上層部が非晶質であるが、下層部は凝集して粒界を留める。

KWR-13-③ 鍛造剝片 3.5 × 2 × 0.2mm 磁着強

① 肉眼観察：①②と比較すると薄手だが同質の試料である。黒灰色で光沢はない。上下面ともに滑らかで平坦で、裏面には酸化土砂が付着する。

② マクロ組織：写真. 9 ③に示す。断面はほぼ平坦で、風化による空隙が僅かに認められる。

③ 顕微鏡組織：写真. に示す。外層ヘマタイト (Hematite : Fe₂O₃) は不明瞭だが、中間層マグネタイト (Magnetite : Fe₃O₄) と内層ヴスタイト (Wüstite : FeO) が確認される。内層ヴスタイトは非晶質である。鍛打作業の後半段階の派生物であろう。

KWR-13-④ 鍛造剝片 2 × 2 × 0.1mm 磁着強

① 肉眼観察：色調は、表面は青灰色で光沢がある。裏面は黒灰色で光沢はない。平坦で滑らかな試

料である。表面・に気孔は見られない。一部酸化土砂が付着する。

② マクロ組織：写真.10①に示す。表裏面ともやや凹凸がみられ、風化による空隙が顕著に認められる。

③ 顕微鏡組織：写真.10②～④に示す。酸化膜は3層に分離しており、内層ヴスタイト (Wüstite : FeO) は非晶質であった。鍛打作業の後半段階の派生物である。

KWR-13-⑤ 鍛造剥片 2.5×1×0.1mm 磁着強

① 肉眼観察：色調黒灰色で光沢はない。平坦で滑らかな試料である。表面・破面共に気孔は見られない。一部酸化土砂が付着する。

② マクロ組織：写真.10⑤に示す。断面は僅かに彎曲する。裏面側は風化傾向が顕著である。

③ 顕微鏡組織：写真.10⑥～⑧に示す。酸化膜の3層分離が明確に認められる。内層ヴスタイト (Wüstite : FeO) は非晶質であった。鍛打作業の後半段階の派生物である。

KWR-13-⑥ 鍛造剥片 1.5×1.5×0.1mm 磁着強

① 肉眼観察：色調は、表面は銀灰色で光沢があり、裏面は黒灰色で光沢はない。平坦で滑らかな試料である。表面・破面共に気孔は見られない。一部酸化土砂が付着する。

② マクロ組織：写真.10⑨に示す。断面は僅かに彎曲する。裏面側は風化傾向が顕著である。

③ 顕微鏡組織：写真.10⑩に示す。酸化膜は3層に分離しており、内層ヴスタイト (Wüstite : FeO) は非晶質であった。鍛打作業の後半段階の派生物である。

KWR-14-① 鍛造剥片 3.5×3.5×0.3mm 磁着強

① 肉眼観察：色調は黒灰色。光沢はない。厚手で上下面ともに滑らかで平坦。表面・破面共に気孔は見られない。表裏面に一部酸化土砂が付着する。

② マクロ組織：写真.11①に示す。断面はほぼ平坦な鍛造剥片である。風化による空隙が認められる。

③ 顕微鏡組織：写真.11②～④に示す。外層ヘマタイト (Hematite : Fe₂O₃) は不明瞭だが、中間層マグネタイト (Magnetite : Fe₃O₄) と内層ヴスタイト (Wüstite : FeO) が確認される。また、王水で腐食 (Etching) されて、内層は僅かにヴスタイト粒界が認められる。

④ ビッカース断面硬度：写真.11②に内層部分の硬度測定 of 圧痕を示す。硬度値は439Hvであった。風化のためヴスタイトの文献硬度値450～500Hvを僅かに下回る値であったが、ヴスタイト (Wüstite : FeO) に同定される。

KWR-14-② 鍛造剥片 3.5×2×0.2mm 磁着強

① 肉眼観察：色調は黒灰色。無光沢。厚手で上下面ともに滑らかで平坦である。表面・破面共に気孔は見られない。表裏面に一部酸化土砂が付着する。

② マクロ組織：写真.11⑤に示す。断面はほぼ平坦な鍛造剥片である。

③ 顕微鏡組織：写真.11⑥に示す。外層ヘマタイト (Hematite : Fe₂O₃) は不明瞭だが、中間層マグネタイト (Magnetite : Fe₃O₄) と内層ヴスタイト (Wüstite : FeO) が確認される。内層ヴスタイトは非晶質で、鍛打作業の後半段階の派生物である。

KWR-14-③ 鍛造剥片 2×2×0.3mm 磁着強

① 肉眼観察：色調は黒灰色。表面には僅かに光沢質で、やや凹凸のある試料である。表面・破面共に気孔は見られない。裏面に一部酸化土砂が付着する。

② マクロ組織：写真.11⑦に示す。表面側はほぼ平坦であるが、裏面側は緩やかな凹凸が認められる。

風化による間隙が顕著である。

③ 顕微鏡組織：写真.11⑧～⑩に示す。酸化膜は3層に分離しており、内層ヴスタイト (Wüstite : FeO) は凝集個所と非晶質化が進んだ個所とが認められた。

KWR-14-④ 鍛造剥片 3×2×0.2mm 磁着強

① 肉眼観察：色調は表面は銀灰色で光沢を持ち、裏面は黒灰色で光沢はない。上下面ともに滑らかで平坦。表面・破面共に気孔は見られない。表裏面に一部酸化土砂が付着する。

② マクロ組織：写真.12①に示す。断面はほぼ平坦な鍛造剥片で風化傾向が顕著である。

③ 顕微鏡組織：写真.12②に示す。酸化膜は3層に分離しており、内層ヴスタイト (Wüstite : FeO) は非晶質であった。鍛打作業の後半段階の派生物である。

KWR-14-⑤ 鍛造剥片 2×1.5×0.25mm 磁着強

① 肉眼観察：色調は表面が黒灰色、裏面は赤褐色で無光沢。彎曲した試料である。表面・破面共に気孔は見られない。

② マクロ組織：写真.12③に示す。断面はやや彎曲する。風化による空隙が顕著に認められる。

③ 顕微鏡組織：写真.12④～⑥に示す。外層ヘマタイト (Hematite : Fe₂O₃) は不明瞭だが、中間層マグネタイト (Magnetite : Fe₃O₄) と内層ヴスタイト (Wüstite : FeO) が確認される。内層ヴスタイトは凝集する。鍛打作業の中間段階の派生物である。

KWR-14-⑥ 鍛造剥片 2×1.5×0.15mm 磁着強

① 肉眼観察：色調は黒灰色で表面はやや光沢があり、裏面は無光沢である。やや凹凸があり、表面・破面共に気孔は見られない。

② マクロ組織：写真.12⑦に示す。断面僅かに彎曲する。風化による空隙が認められる。

③ 顕微鏡組織：写真.12⑧～⑩に示す。酸化膜は3層に分離しており、内層ヴスタイト (Wüstite : FeO) は王水による腐食 (Etching) で粒界が現れた。僅かに凝集傾向を留めている。

KWR-15-① 錆化鉄片 4×3.5×0.5mm 磁着強

① 肉眼観察：色調は黒灰色。光沢は無い。表面層状の剝離痕があり、厚みが一定でなく錆化鉄片の可能性はある。

② マクロ組織：写真.13①に示す。層状に亀裂が走っており、鍛造鉄器から薄く層状に剝離した錆化鉄片である。

③ 顕微鏡組織：写真.13②に示す。錆化鉄 (Goethite : α-FeO · OH) であった。

KWR-15-② 鍛造剥片 2.5×2.5×0.5mm 磁着強

① 肉眼観察：色調は黒灰色。光沢はない。厚手で上下面ともに滑らかで平坦である。破面には細かい気孔が認められる。

② マクロ組織：写真.13③に示す。表裏面共に緩やかな凹凸あり。風化による空隙が認められる。

③ 顕微鏡組織：写真.13④～⑥に示す。酸化膜は明瞭に3層構造を呈している。中間層マグネタイト (Magnetite : Fe₃O₄) と内層ヴスタイト (Wüstite : FeO) は僅かに粒状の痕跡を留めつつも非晶質化が進行している。

KWR-15-③ 鍛造剥片 2.5×1.5×0.2mm 磁着強

① 肉眼観察：色調は黒灰色。表面はやや光沢があり、裏面はない。上下面ともに滑らかで平坦。表面・破面共に気孔は見られない。裏面には酸化土砂の付着が認められる。

- ② マクロ組織：写真.13⑦に示す。断面はほぼ平坦で、特に裏面側の風化による空隙が顕著である。
- ③ 顕微鏡組織：写真.13⑧～⑩に示す。酸化膜は明瞭に3層構造を呈している。内層ヴスタイト (Wüstite : FeO) は非晶質である。

KWR-15-④ 鍛造剝片 2×1.5×0.3mm 磁着強

- ① 肉眼観察：色調は黒灰色。表面はやや光沢があり、裏面はない。上下面ともに滑らかだが、僅かに凹凸あり。表面・破面共に気孔は見られない。
- ② マクロ組織：写真.14①に示す。断面はやや彎曲する。特に裏面側の風化による空隙が顕著である。
- ③ 顕微鏡組織：写真.14②～④に示す。酸化膜は3層に分離しており、内層ヴスタイト (Wüstite : FeO) は僅かに粒状の痕跡を留めつつも非晶質化が進行している。

KWR-15-⑤ 鍛造剝片 2.5×1.5×0.2mm 磁着強

- ① 肉眼観察：色調は黒灰色。表面はやや光沢があり、裏面はない。上下面ともに滑らかだが、僅かに凹凸がある。表面・破面共に気孔は見られない。
- ② マクロ組織：写真.14⑤に示す。断面はやや彎曲する。特に裏面側の風化による空隙が顕著である。
- ③ 顕微鏡組織：写真.～に示す。外層ヘマタイト (Hematite : Fe₂O₃) は不明瞭だが、中間層マグネタイト (Magnetite : Fe₃O₄) と内層ヴスタイト (Wüstite : FeO) が確認される。内層ヴスタイトは非晶質である。

KWR-15-⑥ 鍛造剝片 2×1.5×0.2mm 磁着強

- ① 肉眼観察：色調は表面は銀灰色で光沢を持ち、裏面は黒灰色で光沢はない。上下面ともに滑らかで平坦で、表面・破面共に気孔は見られない。
- ② マクロ組織：写真.15⑦に示す。断面はやや彎曲する。特に裏面側の風化による空隙が顕著である。
- ③ 顕微鏡組織：写真.15⑧～⑩に示す。酸化膜は3層に分離しており、内層ヴスタイト (Wüstite : FeO) は僅かに凝集痕跡を留める個所と非晶質化が進んだ個所とが認められた。

4 まとめ

河原城遺跡の8世紀に比定される鍛冶関連遺物の調査を行った。出土鉄滓の大半は鍛冶炉の炉底堆積の椀形鍛冶滓である。鉄器製作時の排出物と見なされよう。椀形滓の大きさや形状に係わらず、鉋物組成は白色粒状結晶のヴスタイト (Wüstite : FeO) が多く晶出し、化学組成は鉄分 (Total Fe) 55～67%と多く、ガラス質成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) と脈石成分 (Ti、V、Mn) の少ない成分系である。特に小型椀形滓 (KWR-6・7・8) のガラス質成分が4.67～9.70%と低値であり類例をみない数値であった。いずれにしても各椀形鍛冶滓は、鉄器製作に際して鉄素材の繰り返し折り曲げ鍛接の高温作業での派生物で鍛錬鍛冶滓に分類される。

更に、この鍛冶滓成分から推定して鍛冶原料鉄は、よく精製されて不純物の少ない高品位品であった可能性が高い。また、酸化マンガン (MnO) 0.02～0.09%と低値で、酸化クロム (Cr₂O₃) が0.013～0.047%と比較的高値傾向となる特徴が認められた。今後、分析例の蓄積に伴い、搬入された鉄素材の産地同定の手がかりとなる可能性がある。

一方、鍛打作業を証明する微細遺物の鍛造剝片が出土している。これは赤熱鉄素材の酸化被膜である。被膜構成は外層ヘマタイト、中間層マグネタイト、内層ヴスタイトから構成される。この内層ヴスタイトは凝集が進んだものと非晶質のもので占められるため、鍛冶作業は鍛錬鍛冶の後半段階の派生物と推

定される。鍛造剥片の鋳物相と椀形鍛冶滓の鋳物組成はよく対応する。

次に鉄器(刃部破片)は、皮金が錆化して芯金は金属鉄が残存していた。芯金は亜共析クラス(0.6%C)と過共析クラス(1.0%C)の異材を鍛接し、空冷した後焼戻しの痕跡が読み取れた。鋳石系(磁鉄鋳か)の鉄素材である。

最後に鉄の溶解炉の可能性をもつ炉壁片の出土がある。該品は鍛冶関連遺物に対して、1点のみの検出で異質である。8世紀代のものでなく、より後代の混入品の可能性がある。

(注)

(1) 日刊工業新聞社『焼結鋳組織写真および識別法』 1968 ヴスタイトは450~500Hv、ファイヤライトは600~700Hvの範囲が提示されている。

(2) 山本科学工具研究社『標準顕微鏡組織 第1類炭素鋼・铸铁編』 1960 フェライト(Ferrite):純鉄に微量の炭素を固溶した α 相の鉄をいう。炭素の最大固溶量は常温で0.008%位である。

パーライト(pearlite:フェライトとセメンタイトが交互に重なり合って構成された層状組織)。鉄に炭素が約0.1%以上含まれてくるとパーライトが現われる。パーライトの占める面積は炭素含有量の増加に伴って増し、0.77%で全部パーライトなる。

(3) 大澤正己「房総風土記の丘実験試料と発掘試料」『千葉県立房総風土記の丘 年報15』(平成3年度)千葉県房総風土記の丘 1992

(4) 大澤正己「奈良尾遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『奈良尾遺跡』(今宿バイパス関連埋蔵文化財調査報告書 第13集)福岡県教育委員会 1991

(5) 森岡ら「鉄鋼腐食科学」『鉄鋼工学講座』11 朝倉書店 1975

表1 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物実測図 (第7章)	遺物名称	推定年代	計測 値			材質	メタル度	調査項目							備考
						大きさ(mm)	重量(g)	磁気度			マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回折	EDS	化学分析	耐火度	
KWR-1	河原城	溝1194西半下層	図7.33-8	楕形鍛冶滓(大)	8c	95×85×27	355.0	4	なし	○	○							
KWR-2	河原城	第2層	図7.33-9	楕形鍛冶滓(大)	8c	97×94×45	322.5	4	鉄化(△)	○	○							
KWR-3	河原城	柱穴1112	図7.33-6	楕形鍛冶滓(中)	8c	69×58×26	140.0	4	なし	○	○							
KWR-4	河原城	溝1015	図7.33-5	楕形鍛冶滓(中)	8c	79×55×26	122.5	4	なし	○	○							
KWR-5	河原城	溝込み1240	図7.33-7	楕形鍛冶滓(中)	8c	67×63×27	130.0	4	なし	○	○							
KWR-6	河原城	溝込み1205(西半)	図7.33-4	楕形鍛冶滓(小)	8c	63×44×24	62.5	4	なし	○	○							
KWR-7	河原城	第2層	図7.33-3	楕形鍛冶滓(小)	8c	55×64×21	62.5	6	H(O)	○	○							
KWR-8	河原城	溝1189	図7.33-2	楕形鍛冶滓(小)	8c	51×50×13	50.0	4	なし	○	○							
KWR-9	河原城	溝1221	図7.33-10	再結合滓	8c	128×82×34	297.5	5~6	H(O)	○	○							
KWR-10	河原城	溝込み1205(東半)	図7.33-1	鉄片	8c	46×31×17	35.0	6	L(●)	○	○							
KWR-11	河原城	溝1171(南西部)	図7.10-2	羽口	8c	58×30×13	142.5	—	なし	○	○							
KWR-12	河原城	第2層(西半)	図7.33-11	伊壁片?	8c	68×53×24	61.2	—	なし	○	○							
KWR-13	河原城	土坑1193	—	鍛造割片	8c	—	—	—	なし	○	○							
KWR-14	河原城	土坑1255	—	鍛造割片	8c	—	—	—	なし	○	○							
KWR-15	河原城	溝1189	—	鍛造割片	8c	—	—	—	なし	○	○							

表2 供試材の化学組成

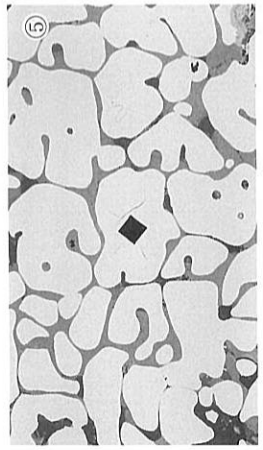
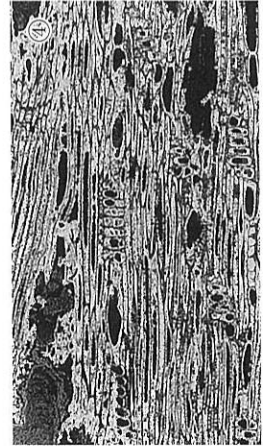
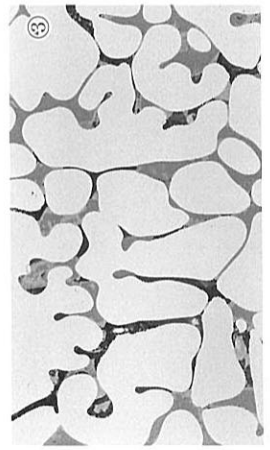
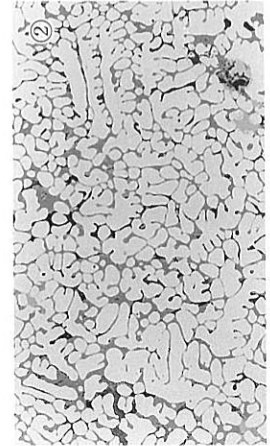
符号	遺跡名	遺物名称	推定年代	全鉄分 Total (Fe)	金属鉄 Metallic (Fe)	酸化 第1鉄 (FeO)	酸化 第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化 ケイ素 (SiO ₂)	酸化アル ミナ (Al ₂ O ₃)	酸化チタ ン (TiO ₂)	酸化マン ガン (MnO)	酸化ナ トリウム (Na ₂ O)	酸化カ リウム (K ₂ O)	#g loss										遺滓成分 Total Fe	T ₀₂ Total Fe
														酸化バ リウム (BaO)	酸化スト ロンチウム (SrO)	酸化亜 鉛 (PbO)	酸化銅 (CuO)	酸化ニ ッケル (NiO)	酸化コ バルム (CoO)	酸化モ リブデン (MoO ₃)	酸化セ レン (SeO ₂)	酸化テ ルルリウム (TeO ₂)	酸化鉛 (PbO)		
KWR-1	河原城	楕形鍛冶滓(大)	8c	62.99	0.05	61.01	22.17	9.67	2.07	0.58	0.29	0.23	0.09	0.05	0.18	0.032	0.02	0.12	0.15	0.012	0.009		12.91	0.205	0.003
KWR-2	河原城	楕形鍛冶滓(大)	8c	55.37	0.02	52.09	21.25	15.92	2.87	1.94	0.62	0.56	0.22	0.09	0.18	0.025	0.01	0.20	0.08	0.008	0.010		22.13	0.400	0.003
KWR-3	河原城	楕形鍛冶滓(中)	8c	57.05	0.04	49.93	27.22	13.45	2.19	0.72	0.23	0.21	0.07	0.06	0.25	0.091	0.01	0.15	0.21	0.012	0.012		16.87	0.291	0.004
KWR-4	河原城	楕形鍛冶滓(中)	8c	60.68	0.07	55.19	25.22	11.27	2.37	1.02	0.42	0.38	0.08	0.07	0.29	0.047	0.02	0.33	0.14	0.024	0.008		15.52	0.258	0.005
KWR-5	河原城	楕形鍛冶滓(中)	8c	56.00	0.05	43.75	31.38	11.56	2.84	1.45	0.52	0.53	0.15	0.09	0.34	0.019	0.02	0.25	0.27	0.012	0.008		17.05	0.304	0.006
KWR-6	河原城	楕形鍛冶滓(小)	8c	59.07	0.05	29.50	51.60	6.57	1.82	0.26	0.33	0.10	0.08	0.03	0.11	0.028	0.02	0.18	0.33	0.008	0.014		9.16	0.155	0.002
KWR-7	河原城	楕形鍛冶滓(小)	8c	67.39	0.04	54.68	35.53	3.18	0.92	0.22	0.16	0.10	0.09	0.02	0.15	0.023	0.01	0.09	0.34	0.012	0.050		4.67	0.068	0.002
KWR-8	河原城	楕形鍛冶滓(小)	8c	62.38	0.01	45.47	38.61	6.50	2.62	0.25	0.18	0.08	0.07	0.03	0.19	0.022	0.01	0.12	0.10	0.008	0.008		6.70	0.158	0.003
KWR-11	河原城	羽口	8c	3.57	0.02	0.50	4.52	66.50	19.42	0.43	0.59	2.28	1.51	0.02	0.63	0.023	0.01	0.06	#2.38	0.012	0.005	1460	90.73	25.415	0.193

表3 出土遺物の調査結果のまとめ

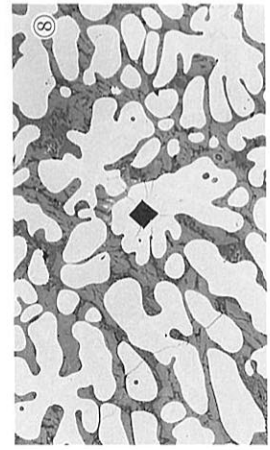
符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	調査項目							所見	
						Total Fe	Fe2O3 成分	塩基性 TiO2 成分	V	MnO	ガラス質 成分	Cu		
KWR-1	河原城	溝1194西半下層	楕形鍛冶滓(大)	8c	ウズクハ+フイヤク、付着木炭	62.99	22.17	0.85	0.18	0.012	0.05	12.91	0.009	鍛冶滓
KWR-2	河原城	第2層	楕形鍛冶滓(大)	8c	ウズクハ+フイヤク	55.37	21.25	2.58	0.18	0.009	0.09	22.13	0.018	鍛冶滓
KWR-3	河原城	柱穴1112	楕形鍛冶滓(中)	8c	ウズクハ+フイヤク、付着伊壁粘土	57.05	27.22	0.55	0.28	0.012	0.08	16.87	0.012	鍛冶滓
KWR-4	河原城	溝1015	楕形鍛冶滓(中)	8c	ウズクハ+フイヤク	60.68	25.22	1.44	0.21	0.024	0.07	15.52	0.008	鍛冶滓
KWR-5	河原城	溝1240	楕形鍛冶滓(中)	8c	ウズクハ+フイヤク	56.00	31.38	1.97	0.34	0.012	0.08	17.05	0.008	鍛冶滓
KWR-6	河原城	溝込み1205(西半)	楕形鍛冶滓(小)	8c	ウズクハ+フイヤク、鉄化鉄(n-9付焼跡)	59.07	51.60	0.55	0.11	0.008	0.08	9.16	0.014	鍛冶滓
KWR-7	河原城	第2層	楕形鍛冶滓(小)	8c	ウズクハ+フイヤク、鉄化鉄(n-9付焼跡)	67.39	35.53	0.38	0.15	0.012	0.02	4.67	0.050	鍛冶滓
KWR-8	河原城	溝1189	楕形鍛冶滓(小)	8c	ウズクハ+フイヤク、付着伊壁粘土	62.38	38.61	0.43	0.18	0.008	0.03	6.70	0.008	鍛冶滓
KWR-9	河原城	溝1221	再結合滓	8c	酸化土砂主体、鍛造割片、粒炭混入	—	—	—	—	—	—	—	—	再結合滓、含有鍛造割片鍛打段階前半～後半段階の派生物
KWR-10	河原城	溝込み1205(東半)	鉄片	8c	黒光研削～湯共研削、介在物、非晶質粒状塊、ウズクハ	—	—	—	—	—	—	—	—	原料調製合せ鍛え、鉄素材の除染原料は磁石洗か
KWR-11	河原城	溝1171(南西部)	羽口	8c	磁熱粘土、粘土結晶非晶質、石粉多量混和	3.57	4.52	1.02	0.63	0.012	0.02	90.73	0.005	耐火度1460℃、古代の鍛冶羽口としては充分な性状
KWR-12	河原城	第2層(西半)	伊壁片?	8c	常盤ガラス質ウズクハ中に金属粒結晶出	—	—	—	—	—	—	—	—	鉄の練造関連の遺物の可能性高い
KWR-13	河原城	土坑1193	鍛造割片	8c	3層分層型、内層ウズクハ非晶質	—	—	—	—	—	—	—	—	鍛打作業の後半段階の派生物
KWR-14	河原城	土坑1255	鍛造割片	8c	3層分層型、内層ウズクハ非晶質	—	—	—	—	—	—	—	—	鍛打作業の中間～後半段階の派生物
KWR-15	河原城	溝1189	鍛造割片	8c	3層分層型、内層ウズクハ非晶質	—	—	—	—	—	—	—	—	鍛打作業の後半段階の派生物



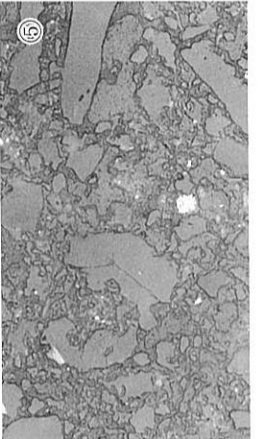
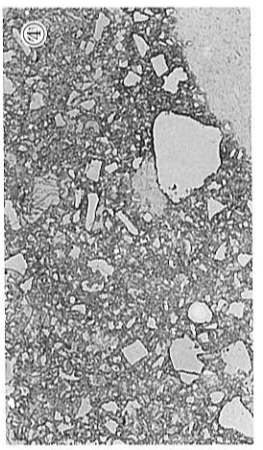
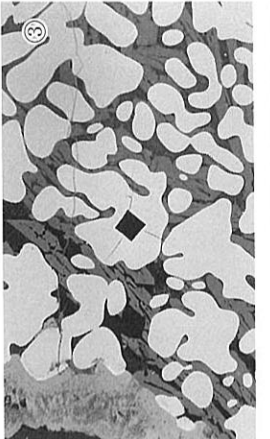
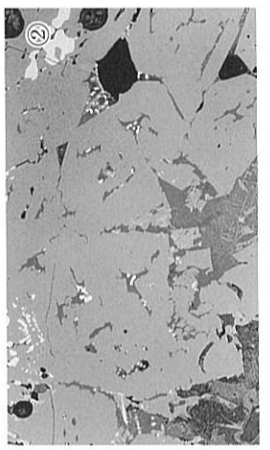
KWR-1
 梲形鍛冶滓
 ①×100 ヴスタイト・ファイヤライト
 ②×100 ③×400 ヴスタイト凝集・
 ファイヤライト
 ④×100 粘着木炭鉄に置換
 ⑤×200 硬度圧痕：449HV
 ヴスタイト



KWR-2
 梲形鍛冶滓
 ⑥×100 ヴスタイト・ファイヤライト
 ⑦×100 底層：ファイヤライト
 ⑧×200 硬度圧痕：468HV
 ヴスタイト



KWR-3
 梲形鍛冶滓
 ①×100 ヴスタイト・ファイヤライト
 ②×100 ヴスタイト・ファイヤライト
 ③×200 硬度圧痕：394HV
 ヴスタイト
 ④×100 ⑤×400 底面付着
 鍛冶炉床粘土
 粘土鉱物、石英
 白色粒混入砂鉄



KWR-4
 梲形鍛冶滓
 ⑥×100 ヴスタイト・ファイヤライト
 ⑦×100 ⑧×400 同上

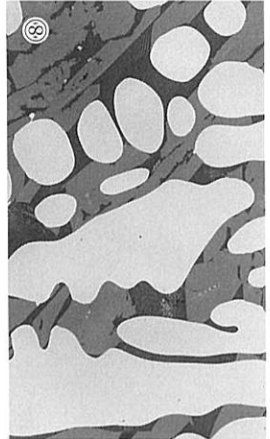
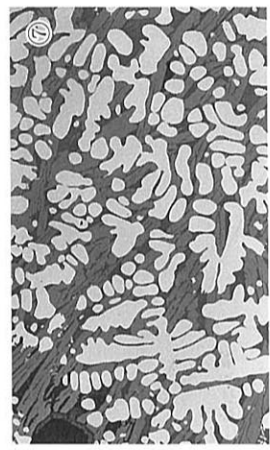
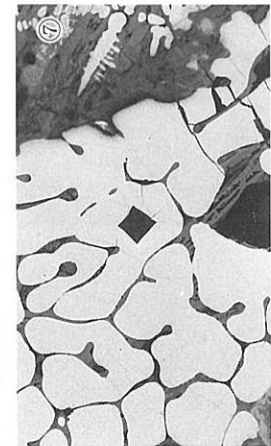
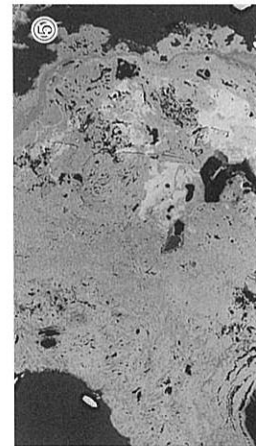
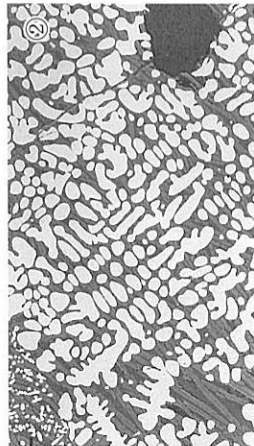
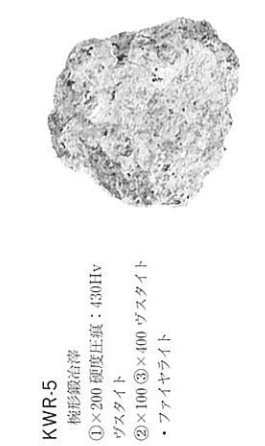
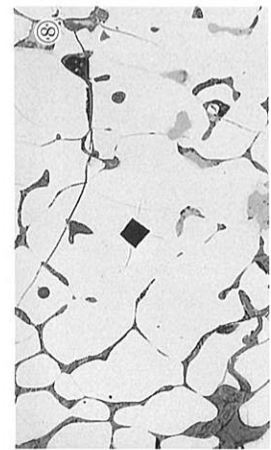
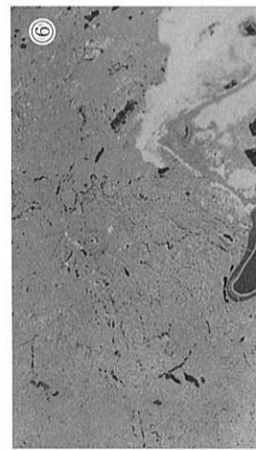
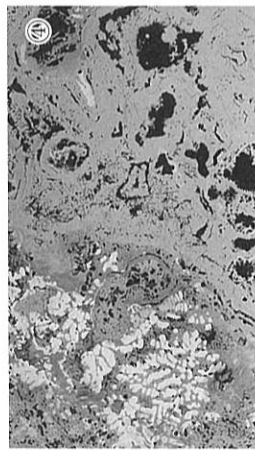
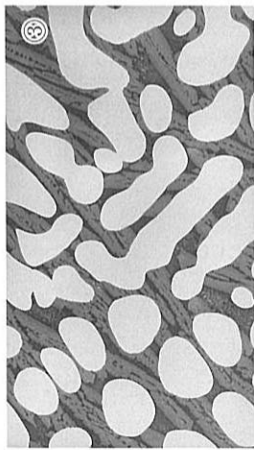
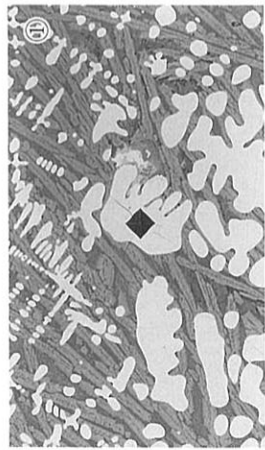


写真1 梲形鍛冶滓の顕微鏡組織 (原写真を70%に縮小)

写真2 梲形鍛冶滓の顕微鏡組織 (原写真を70%に縮小)

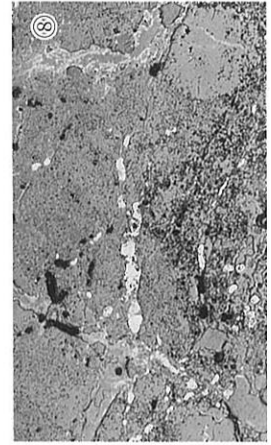
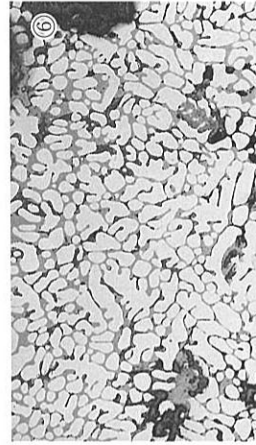
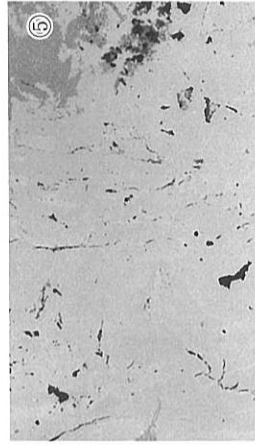
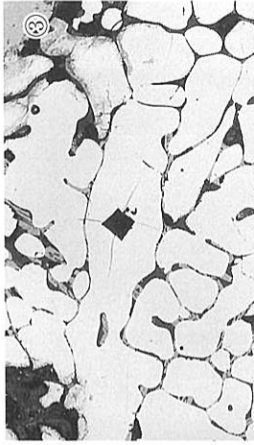


KWR-5

梲形鍛冶滓
①×200 硬度圧痕：430HV
ワスタイト
②×100 ③×400 ワスタイト
・ファイヤライト

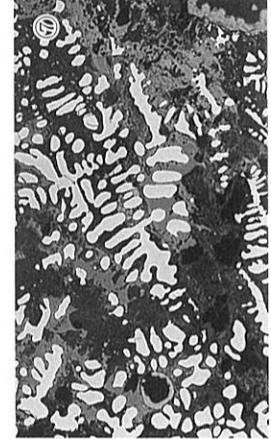
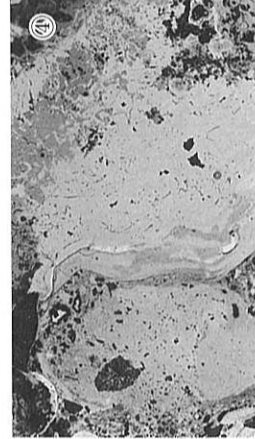
KWR-6

梲形鍛冶滓
④×100 銹化鉄 (Geothite)
ヒワスタイト
⑤×400 ⑥×400 銹化鉄、
パーライト痕跡：極軟調
⑦⑧×200 硬度圧痕：
⑦281HV、ワスタイト (風化)
⑧449HV、ワスタイト



KWR-7

梲形鍛冶滓
①×100 ワスタイト凝集
②×100 ワスタイト・ファイヤライト
③×200 硬度圧痕：356HV
ワスタイト
④×100 ⑤×400 銹化鉄
(Geothite) パーライト痕跡
：極軟調



KWR-8

梲形鍛冶滓
⑥×100 ワスタイト凝集
ファイヤライト
⑦×100 ワスタイト・ファイヤライト
(風化)
⑧×100 鍛冶押戻粘土

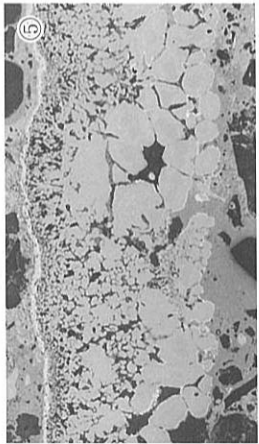
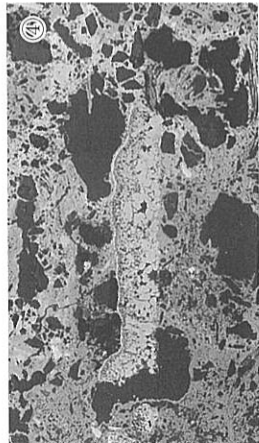
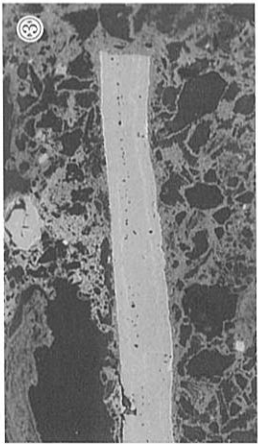
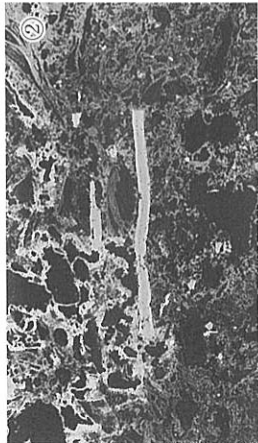
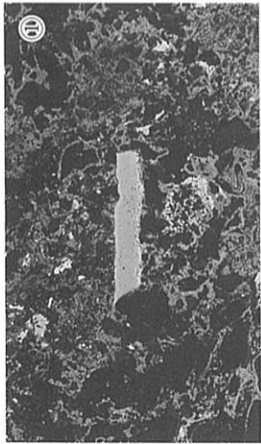
写真3 梲形鍛冶滓の顕微鏡組織 (原写真を70%に縮小)

写真4 梲形鍛冶滓の顕微鏡組織 (原写真を70%に縮小)

KWR-9

再結合滓

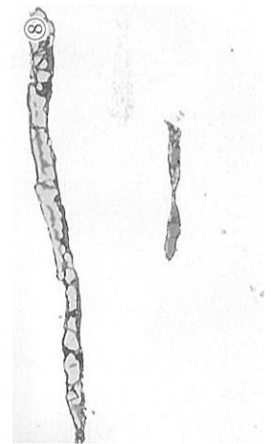
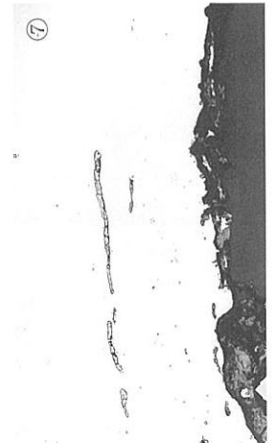
- ①×100 鍛造剣片、内層ウスタイト非結晶
- ②×100 ③×400 同上
- ④×100 ⑤×400 鍛造剣片内層ウスタイト粒状



KWR-10 (1)

鉄片 (刃部破片)

- ⑥×100 鉄中非金属介在物
- ⑦：柱状晶系
- ⑦×100 ⑧×400 鉄中非金属介在物：ウスタイト



KWR-10 (2)

鉄片 (刃部破片)

- ①×50 ②×100 ③×400 芯部金属鉄 (基部側)
- 初折セメントナイト、ハーフライト
- ④×50 芯部金属鉄 (中央寄り)
- 断面ハーフライト：共析鋼
- ⑤×100 ⑥×400 ④左側拡大
- ⑦×100 ⑧×400 ④右側拡大

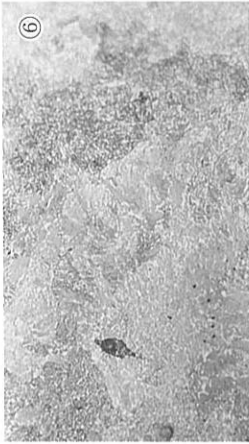
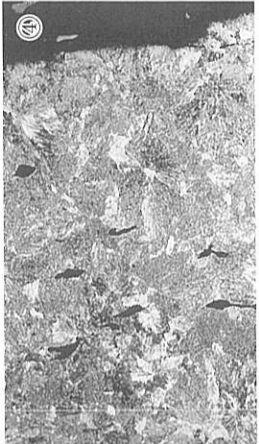
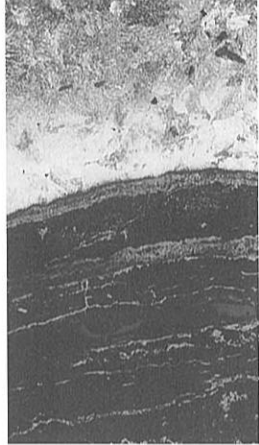


写真5 再結合滓 (刃部破片) の顕微鏡写真 (原写真を70%に縮小)

写真6 鉄片 (刃部破片) の顕微鏡組織 (原写真を70%に縮小)

KWR-10 (3)

鉄片 (刃部破片)

- ①×50 芯部金属鉄 (先端側)
- ②初所フェライト・パーライト
- ③×100 ③×400 ④の拡大
- ④×100 ⑤×400 表層腐蝕化鉄
- ⑥~⑨×200 277HV: 過共析鋼
- パーライト組織⑦48HV: 全面
- ⑧148HV パーライト・フェライト:
- 亜共析鋼

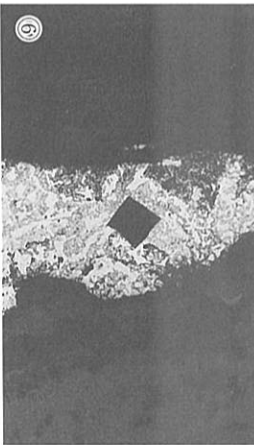
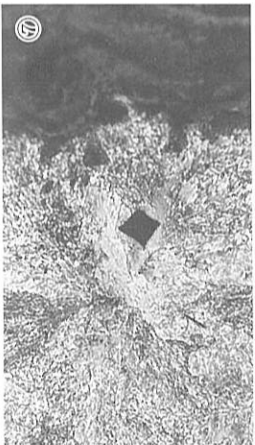
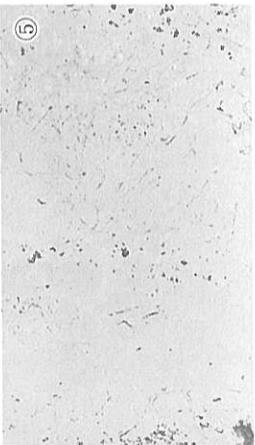
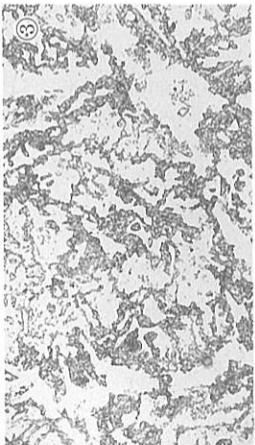
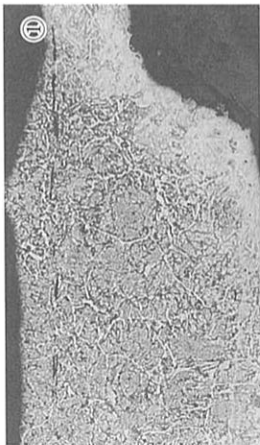
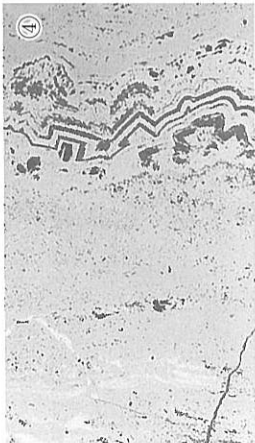
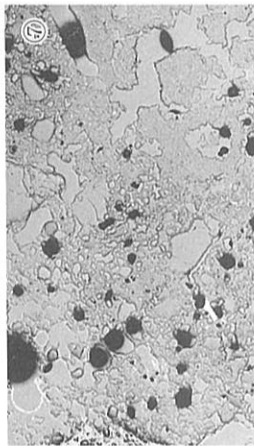
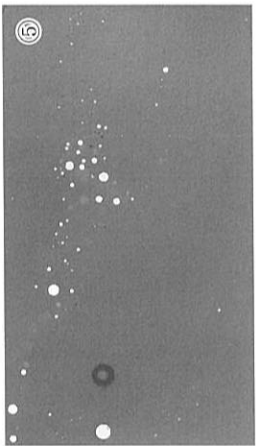
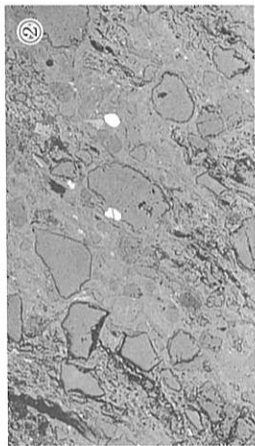


写真7 鉄片 (刃部破片) の顕微鏡組織 (原写真を70%に縮小)

KWR-11

羽口

- ①×100 被熱粘土: 粘土
- ②粘土ガラス質化
- 微小析出物あり
- ③×100 ④×400 被熱粘土:
- 粘土鉱物ガラス質化
- 白色粒は粘土中混入
- 砂鉄粒子



KWR-12

炉壁片

- ④×100 ⑤×400 内面表層
- 暗黒色ガラス質スラフと微小
- 金属鉄粒
- ⑥×100 被熱粘土: 粘土
- ⑦粘土鉱物ガラス質化、白色粒は
- 混入砂鉄粒子
- ⑧×100 ⑨×400 被熱粘土:
- 粘土鉱物ガラス質化

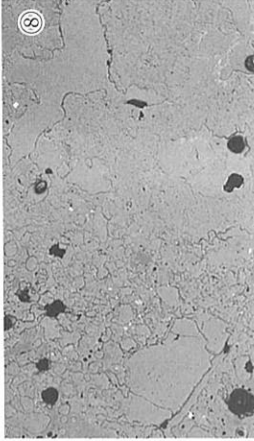
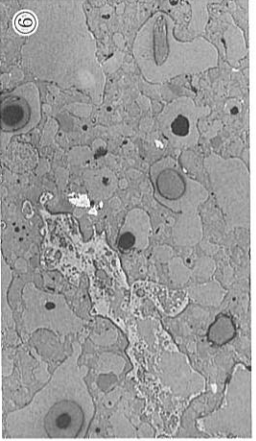
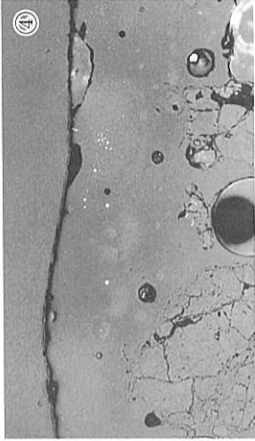
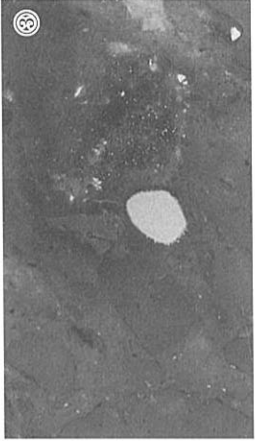
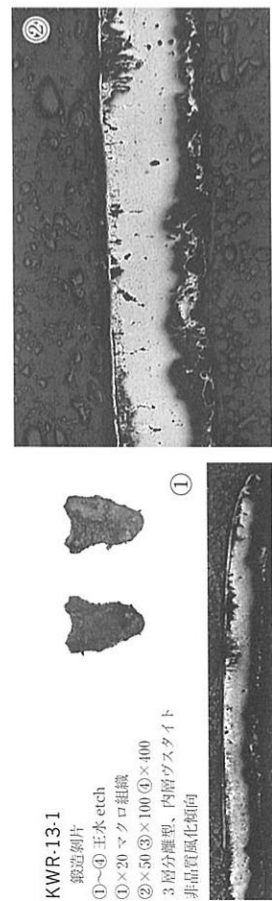


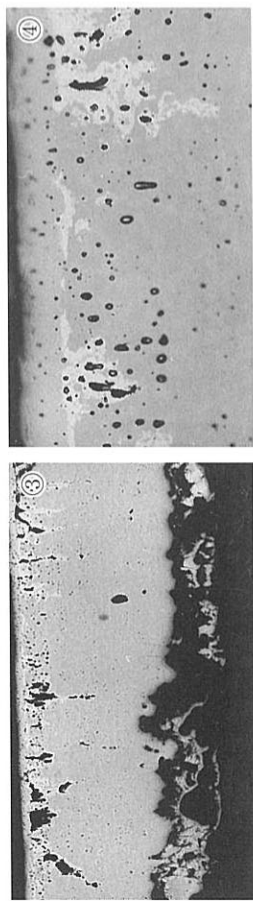
写真8 羽口・炉壁片? の顕微鏡組織 (原写真を70%に縮小)



KWR-13-1

鍛造剣片

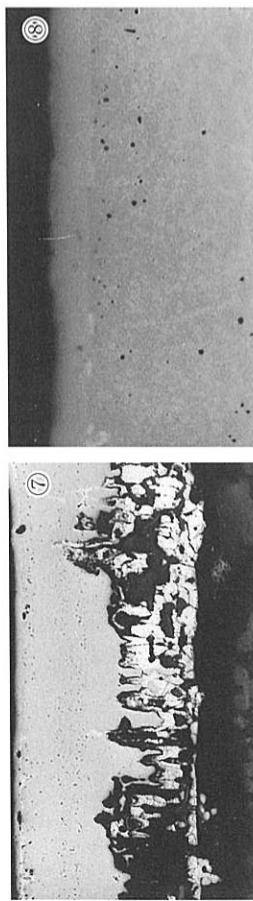
- ①~④ 王水 etch
- ①×20 マクロ組織
- ②×30 ③×100 ④×100
- 3層分離型、内層グスタイト
- 非晶質風化傾向



KWR-13-2

鍛造剣片

- ⑤~⑧ 王水 etch
- ⑤×20 マクロ組織
- ⑥×30 ⑦×100 ⑧×100
- 3層分離型、内層グスタイト
- 非晶質風化傾向



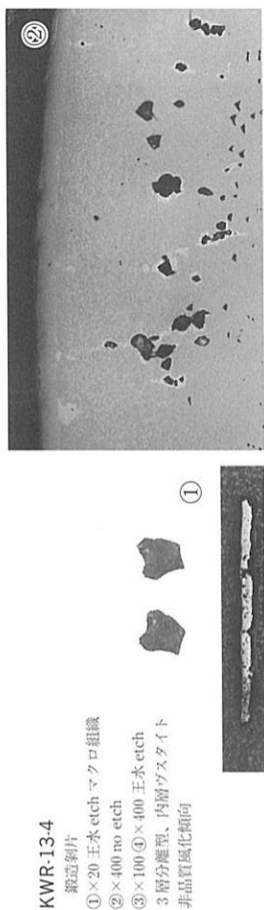
KWR-13-3

鍛造剣片

- ⑨⑩ 王水 etch
- ⑨×20 マクロ組織
- ⑩×400 3層分離型、内層
- グスタイト非晶質



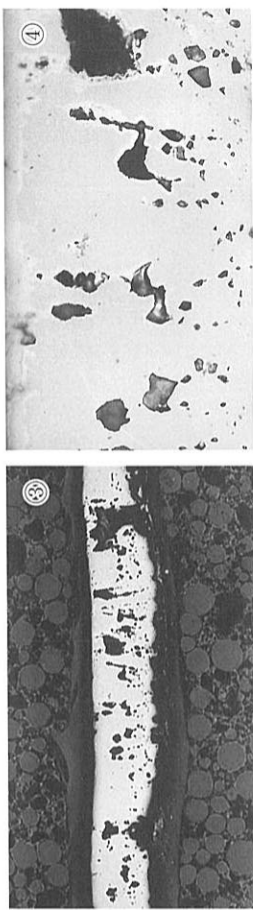
写真9 鍛造剣片の顕微鏡組織 (原写真を70%に縮小)



KWR-13-4

鍛造剣片

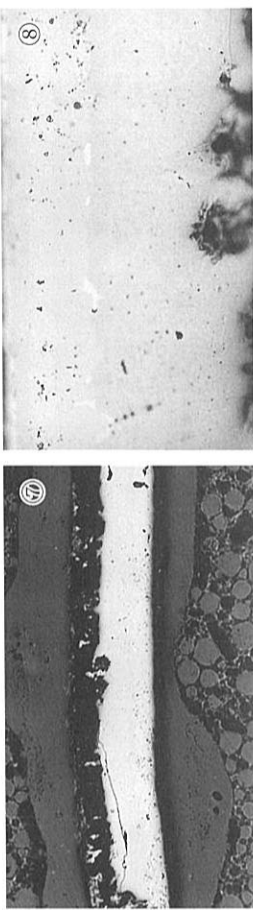
- ①×20 王水 etch マクロ組織
- ②×400 no etch
- ③×100 ④×400 王水 etch
- 3層分離型、内層グスタイト
- 非晶質風化傾向



KWR-13-5

鍛造剣片

- ⑤×20 王水 etch マクロ組織
- ⑥×100 no etch
- ⑦×100 ⑧×400 王水 etch
- 3層分離型、内層グスタイト
- 非晶質風化傾向



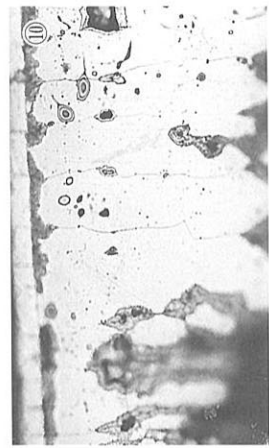
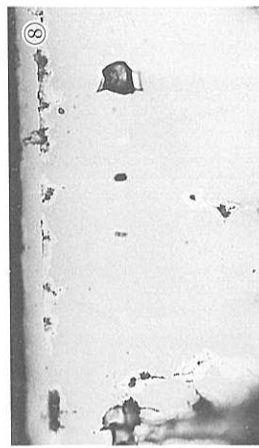
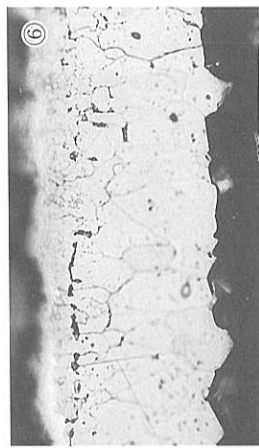
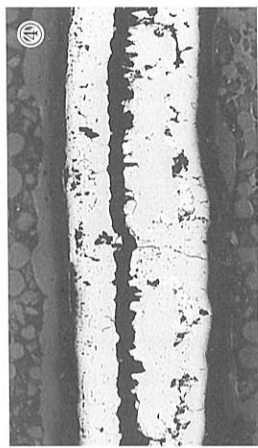
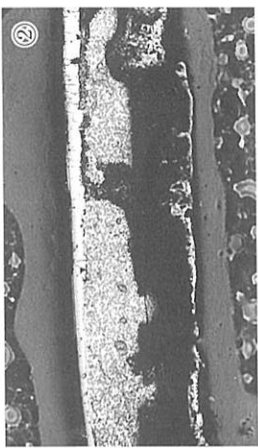
KWR-13-6

鍛造剣片

- ⑨⑩ 王水 etch
- ⑨×20 マクロ組織
- ⑩×400 3層分離型
- 内層グスタイト非晶質
- 風化傾向

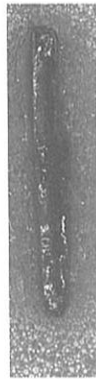


写真10 鍛造剣片の顕微鏡組織 (原写真を70%に縮小)



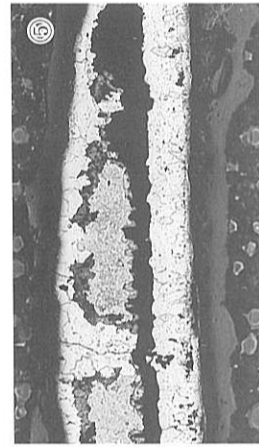
KWR-14-4

鍛造剥片
 ①②王水 etch
 ①×20 マクロ組織
 ②×100 3層分離型、内層ウスタイト
 非晶質風化傾向



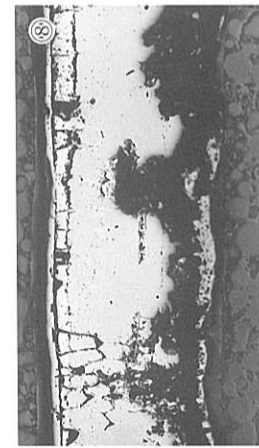
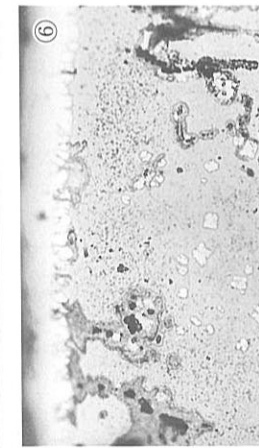
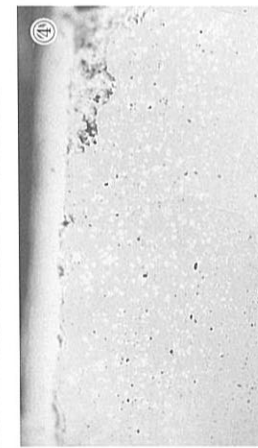
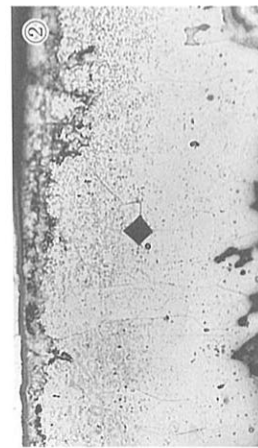
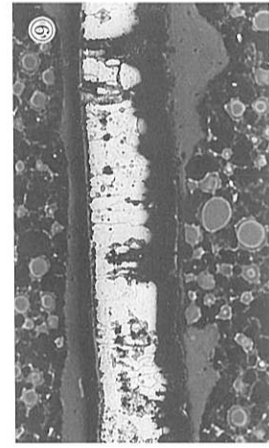
KWR-14-5

鍛造剥片
 ③×20 王水 etch マクロ組織
 ④×100 no etch
 ⑤×100 ⑥×400 王水 etch
 3層分離型、内層ウスタイト
 凝集風化傾向



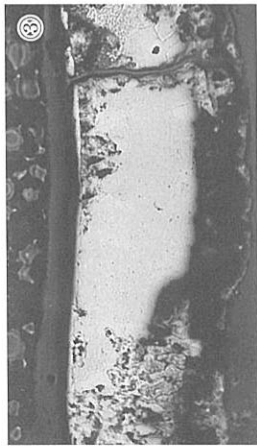
KWR-14-6

鍛造剥片
 ⑦×20 王水 etch マクロ組織
 ⑧×400 no etch
 ⑨×100 ⑩×400 王水 etch
 内層ウスタイト凝集
 風化傾向



KWR-14-1

鍛造剥片
 ①~④王水 etch
 ①×20 マクロ組織
 ②×200 硬度圧痕跡：430HV
 内層ウスタイト凝集
 ③×100 ④×400 3層分離型
 風化傾向



KWR-14-2

鍛造剥片
 ⑤⑥王水 etch
 ⑤×20 マクロ組織
 ⑥×400 3層分離型
 内層ウスタイト非晶質
 風化傾向



KWR-14-3

鍛造剥片
 ⑦×20 王水 etch マクロ組織
 ⑧×100 no etch
 ⑨×100 ⑩×400 王水 etch
 3層分離型、内層ウスタイト
 凝集風化傾向

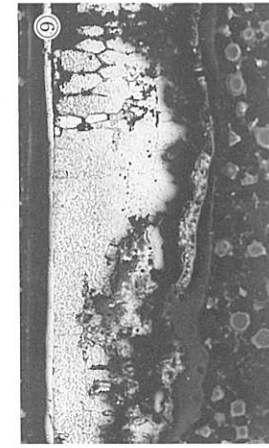


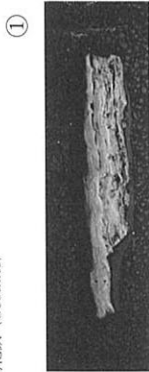
写真11 鍛造剥片の顕微鏡組織 (原写真を70%に縮小)

写真12 鍛造剥片の顕微鏡組織 (原写真を70%に縮小)



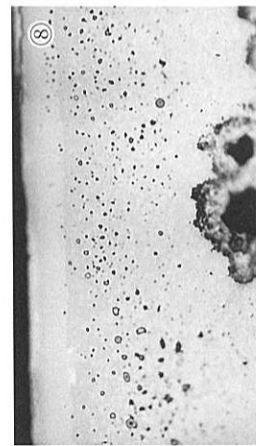
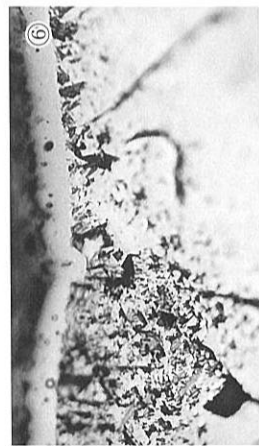
KWR-15-1

銹化鉄片
①×20 マクロ組織
②×400 銹化鉄 (Geothite)



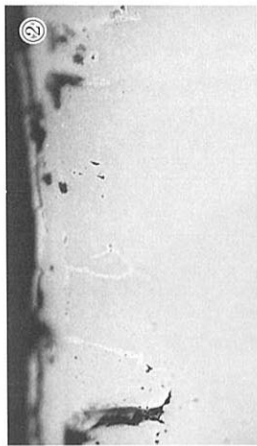
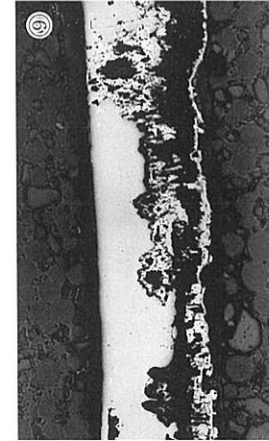
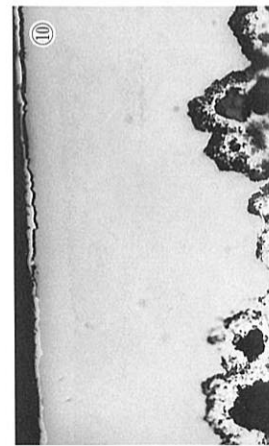
KWR-15-2

鍛造剝片
③×20 王水 etch マクロ組織
④×50 no etch
⑤×100 ⑥×400 3層分離型
内層グスタイト非晶質
風化傾向



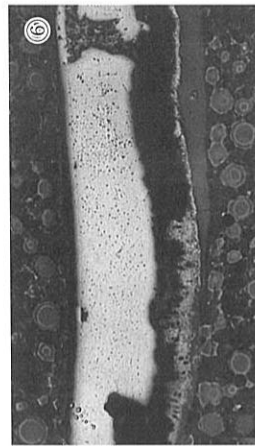
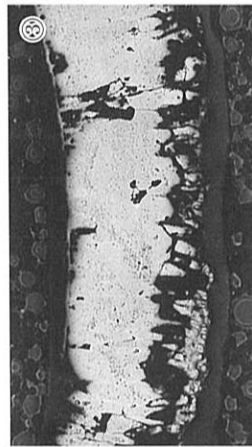
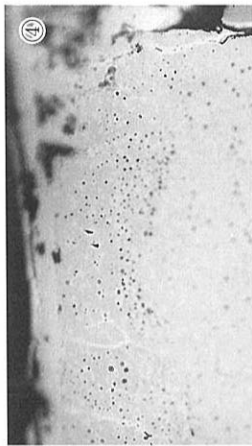
KWR-15-3

鍛造剝片
⑦王水 etch
⑦×20 マクロ組織
⑧×400
⑨×100 ⑩×400 no etch
3層分離型、内層グスタイト
非晶質風化傾向



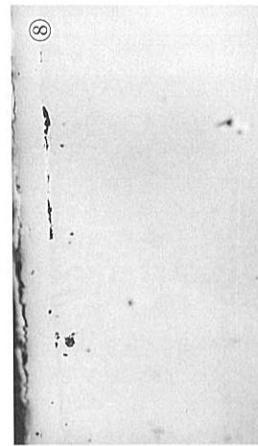
KWR-15-4

鍛造剝片
①×20 王水 etch マクロ組織
②×400 no etch
③×100 ④×400 王水 etch
3層分離型、内層グスタイト
非晶質風化傾向



KWR-15-5

鍛造剝片
⑤王水 etch
⑤×20 マクロ組織
⑥×100 内層グスタイト非晶質
風化傾向



KWR-15-6

鍛造剝片
⑦×20 王水 etch マクロ組織
⑧×400 no etch
⑨×100 ⑩×400 王水 etch
3層分離型、内層グスタイト
非晶質風化傾向

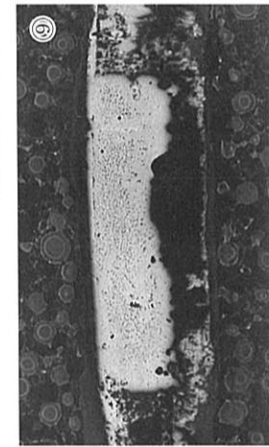
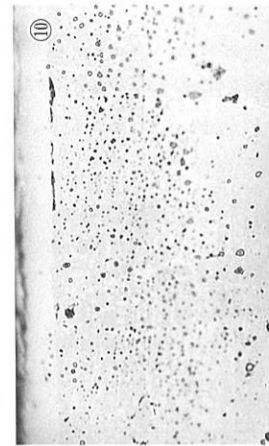


写真13 鍛造剝片の顕微鏡組織 (原写真を70%に縮小)

写真14 鍛造剝片の顕微鏡組織 (原写真を70%に縮小)

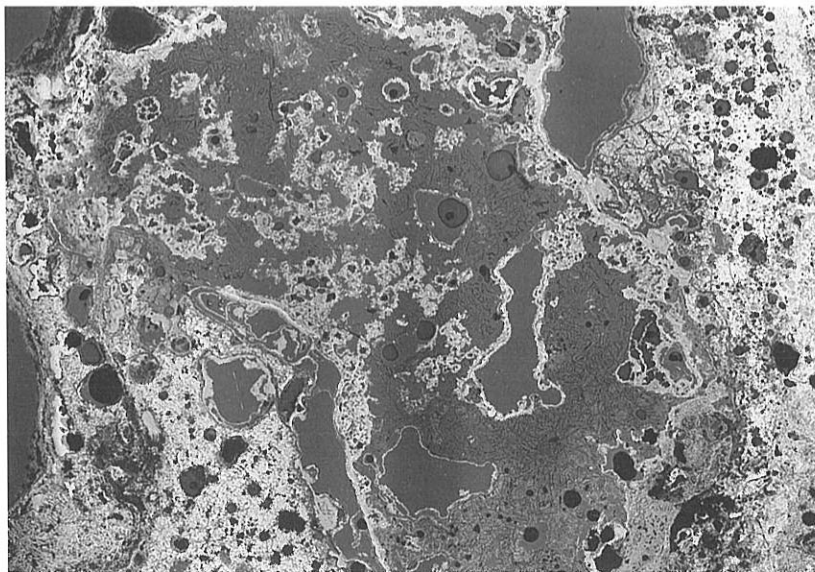


写真15 梔形鍛冶滓 (KWR-7) のマクロ組織 (×10)
(原写真を70%に縮小)

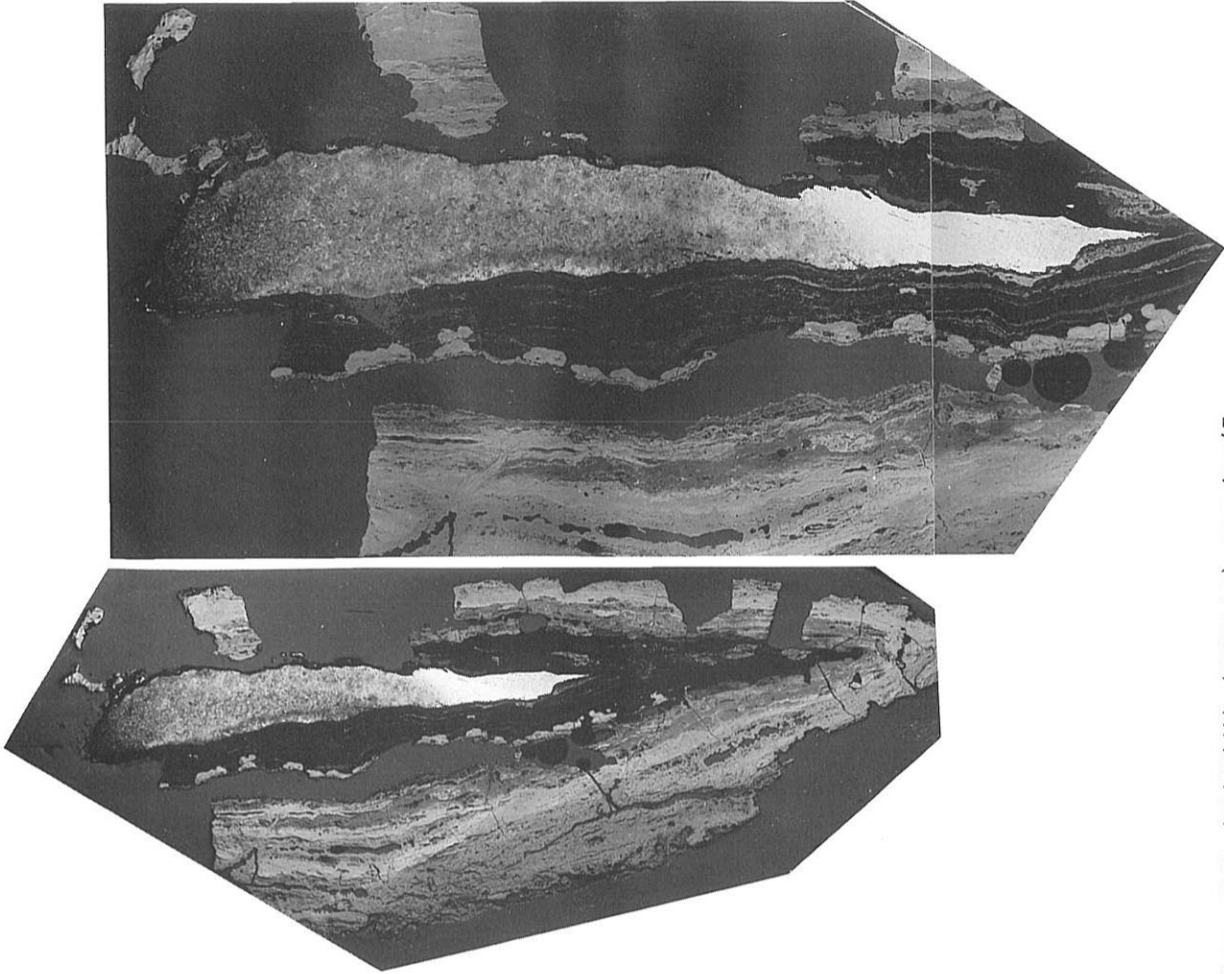


写真16 鉄器 (刃部破片) (KWR-10) のマクロ組
織：左側 (×5)；右側 (×10) (原写真を70%に縮小)

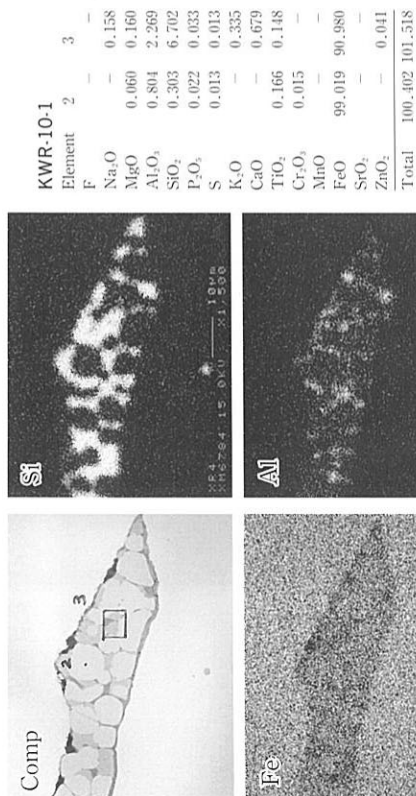


写真17 鉄器（刃部破片）（KWR-10-1）鉄中非金属介在物の
特性X線像と定量分析値（原写真を70%に縮小）

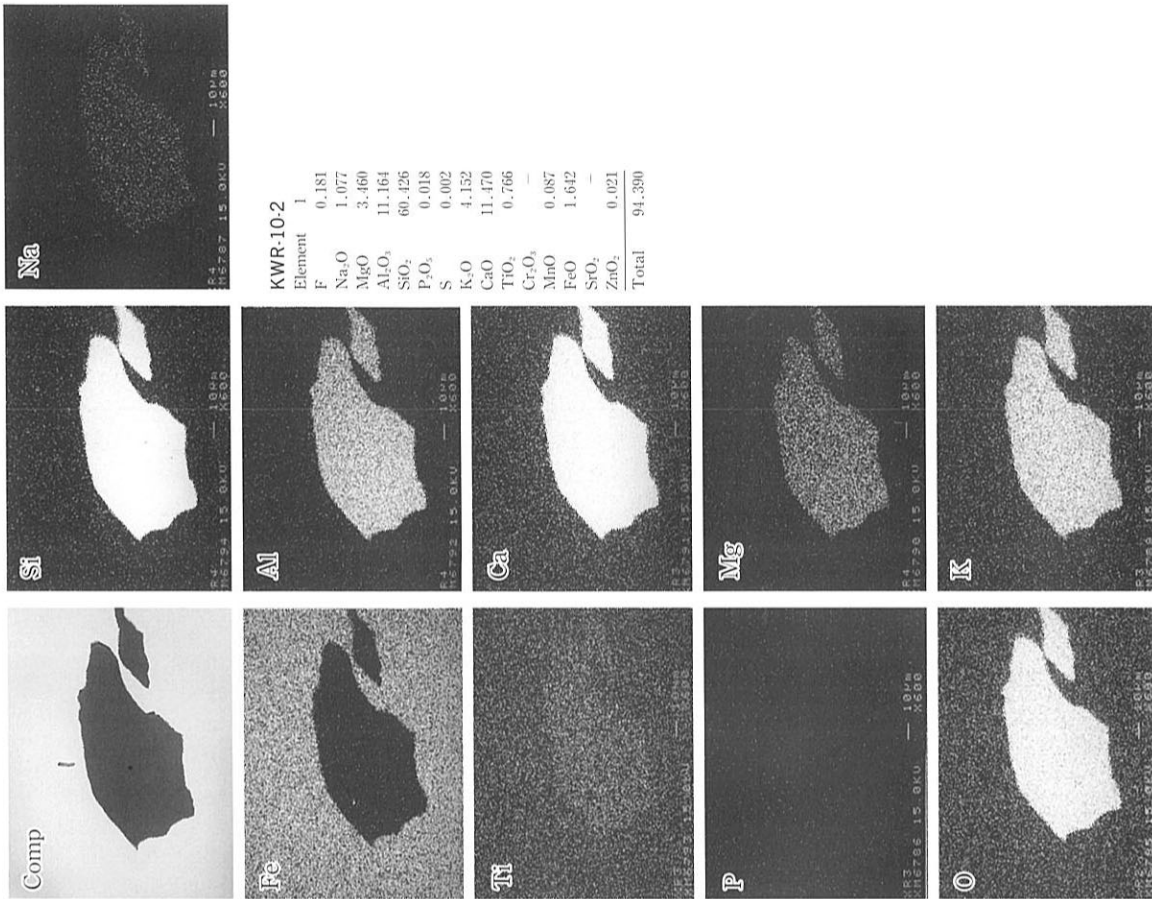


写真18 鉄器（刃部破片）（KWR-10-2）鉄中非金属介在物の
特性X線像と定量分析値（原写真を70%に縮小）

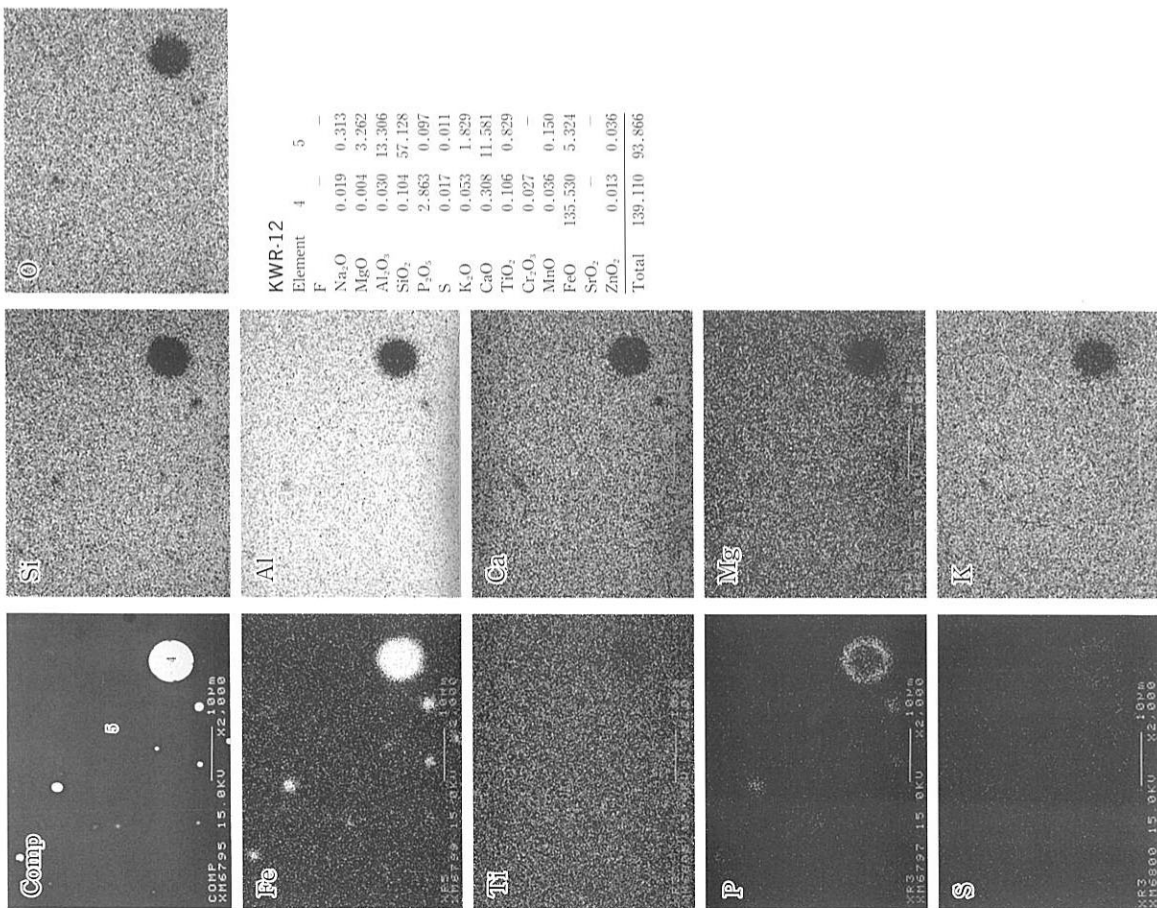


写真19 炉壁片？（KWR-12）内面溶融ガラス質スラグ中の鉄粒の
 特性 X 線像と定量分析値（原写真を70%に縮小）

図3 鉄器（刃部破片）（KWR-10-1）鉄中非金属介在物のコンピュータプログラムによる高速定性分析結果（写真17に対応）

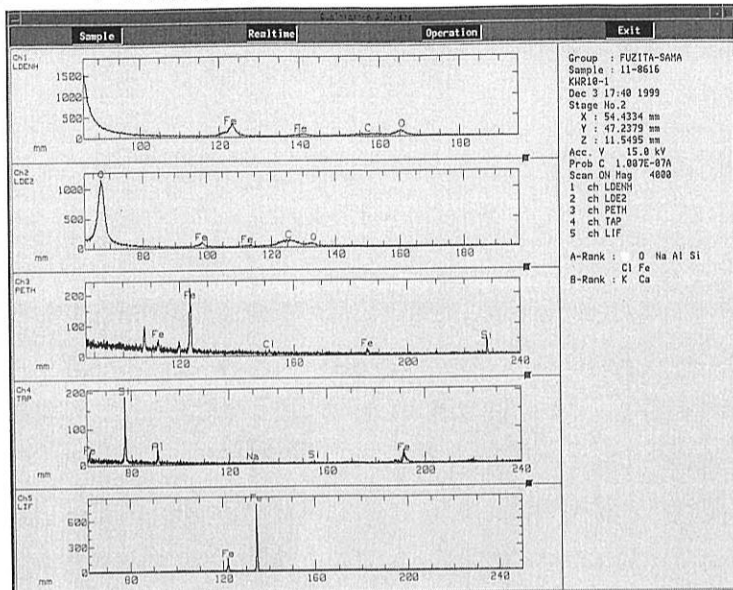


図4 鉄器（刃部破片）（KWR-10-2）鉄中非金属介在物のコンピュータプログラムによる高速定性分析結果（写真18に対応）

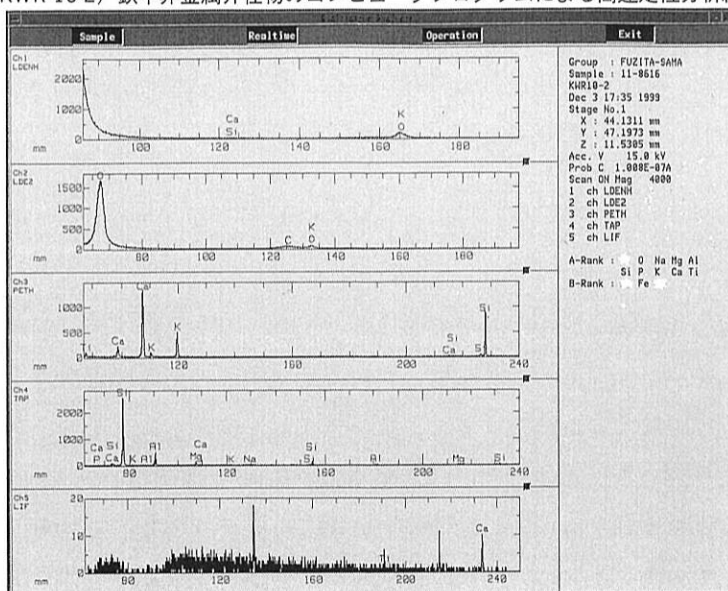
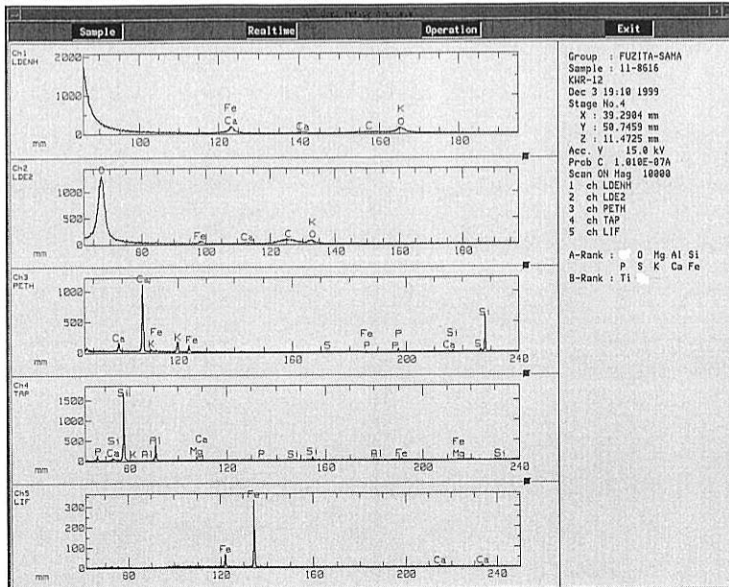


図5 炉壁片？（KWR-12）内面溶融ガラス質スラグ中の鉄粒のコンピュータプログラムによる高速定性分析結果（写真19に対応）



第9章 調査成果のまとめ

最後に、事実報告だけでなく基礎分析・考察を経て抽出できた調査成果について、時代順に概括しておきたい。

【古墳時代後期】

今回の調査区域においては、段丘上面から東除川に向かう斜面上部に相当する B 地区を中心に竪穴住居跡が10棟確認された。段丘上面においては、後世の削平が著しく、実際にはもっと多くの竪穴住居が存在していた可能性が高い。これら住居跡は、出土土器から類推して、6世紀後葉を中心とした所属時期を想定することが出来る。この集落の内部には、脂肪酸分析の結果ヒト（乳児？）を葬ったと類推される土器棺（土器棺384）が検出されている。また、集落西側の段丘西側緩斜面には、方墳が複数確認されている。つまり、小児墓は集落に接して、一定以上階層の成人墓は集落西側にと、分離した状態で墓域が形成されていることがわかった。また、段丘東側斜面に形成された開析谷（谷352）の湧水地点からは、この時期の完形須恵器が複数廃棄されており、この谷を主要な水汲み場として集落が形成された可能性が高い。さらに、段丘裾の小規模な沖積地においては、古墳時代後期～飛鳥時代の水路が設けられ、水田経営が行われたと想定できる。

【飛鳥時代】

飛鳥時代においても B 地区を中心として小規模な集落が継続している。ただし、古墳時代とは異なり、建物の構造はすべて掘立柱建物へと変化してしまう。この際、2×3間の掘立柱建物が基調となり、調査区域においては建物5～7棟程度が共存する小規模な集落であったと類推できる。その初期の頃は、古墳時代以来の建物配置を基本的に踏襲するが、徐々に主軸を南北方向にそろえる傾向を見せるなど、集落構造に規格性を見せ始める。この時期には、墓域の存在は明確ではない。また、段丘裾の小規模沖積地には、埋没河道の上から掘りぬいて円筒埴輪を転用した井戸を設営している。古墳時代後期と変わらぬ土地利用のあり方を示すとともに、前代に形成されていた古墳などを破壊して開発範囲を広げていた様子もうかがわれる。

このように、飛鳥時代の河原城遺跡集落は、古墳時代以来の規模を保ちながらも建物構造や集落外部の利用状況に変化を見せ始める。このことは、遺跡の南方約1 km に形成された、丹比郡衙とも言われる大遺跡である平尾遺跡の成立と無縁ではない。律令国家体制の成立とともにこの地域で進行する、丹比連氏を中心とした古代地域社会システムへの確立過程で、河原城遺跡集落内外の集団関係にも変化が生じつつあったといえよう。遺跡から出土する重弧文平瓦の存在もそういった時代背景を示すものではないだろうか。

【奈良時代】

8世紀に入ると、集落の様相は一変する。掘立柱建物群の中心は C 地区南半部へと移動する。また、主軸を南北方向に揃えた規格性の高い配置へと変化し、2×3間以上の建物と2×2間の建物が一對となる配置も一般化する。同時に、建物群の周囲には鍛冶炉の下部構造と思われる土坑が検出され、遺物としてはフイゴ羽口・鉄滓などが多数確認された。さらに、出土した鉄滓・鍛造剥片などの理化学的分

析の結果、一定程度精製された鉄塊を持ち込んで、それを鍛冶作業によって刀子などの道具へと加工していたことが明確となった。つまり、掘立柱建物の内部・周囲では鍛冶作業などの金属加工が行われていたと考えられる。

このように、河原城遺跡集落は、古墳時代以来の開析谷とそれが形成する小規模な沖積地を生産基盤とする小集団から、奈良時代に入って金属加工を主な生業とする専門集団へと変化したと考えられる。この変化の背景には、7世紀後葉～8世紀に遺跡の約400m南に丹比廃寺が建立されたことが挙げられよう。建物群の配置は南北方向に主軸を合わせた規格性を持ち始めることは、丹比廃寺の伽藍配置の規制を受けている可能性が高い。実際、丹比廃寺出土瓦同範の軒丸瓦も、本遺跡から出土している。河原城遺跡集落は、もはや単なる一集落ではなく、金属工房としての寺院関連施設の一部へと変化したと考えられよう。出土遺物の中に、中空円面硯や蹄脚円面硯などの特殊な形態の硯がみられることも、今回の調査区域が寺域の一部をして機能していたことを示している。さらに、8世紀後半になると丹比廃寺の消滅と機を一にして建物群が消滅していることも、本遺跡の寺域内施設としての性格を首肯する要素と言えよう。

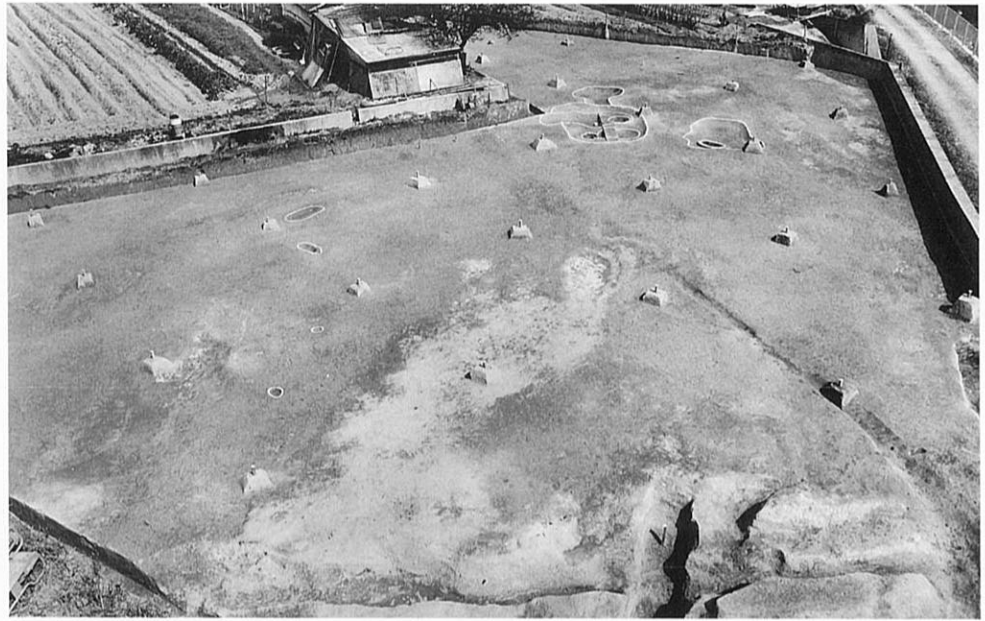
【その他の時代】

その後、平安時代～近世に至るまでの遺構・遺物の検出は、今回の調査区域においては希薄であった。恐らく、段丘上面も近世には耕地化していたと考えられ、農業用と思われる井戸が調査区域内から数基検出されている。また、注目されるのは、B地区南半部の小規模な開析谷から検出された、旧石器時代の石器・剥片・石核である。石器としては、ナイフ形石器がみられるが、その他の剥片・石核も横長剥片を連続的に採取したことを示す資料であり、瀬戸内技法に類似する製作体系をもつ一群と考えられる。今回の調査では確認できなかったが、今後当遺跡の調査においては後期旧石器時代の遺構・遺物にも注意する必要があるだろう。

以上が、今回の調査についての概略である。遺跡の南北方向を貫く形の調査であったため、集落構造・規模について一定程度類推できる調査例となったことが、最大の成果といえよう。小規模ながら、古墳時代後期後半から飛鳥・奈良時代といった古代前半期の小集団の盛衰を知る上で一つのモデルを提示できる調査であったと考える。今回の調査は道路建設に伴うものがあったが、当遺跡内の道路予定地のうち未調査区域は現在調査中である。それらの成果を加味することによって、今回明らかにした集落変遷をより正確で複合的なものに変えていく事が出来ると考える。今回の調査成果や集落復元案はその為の踏台に過ぎないことを確認して結びの語としたい。

版 図

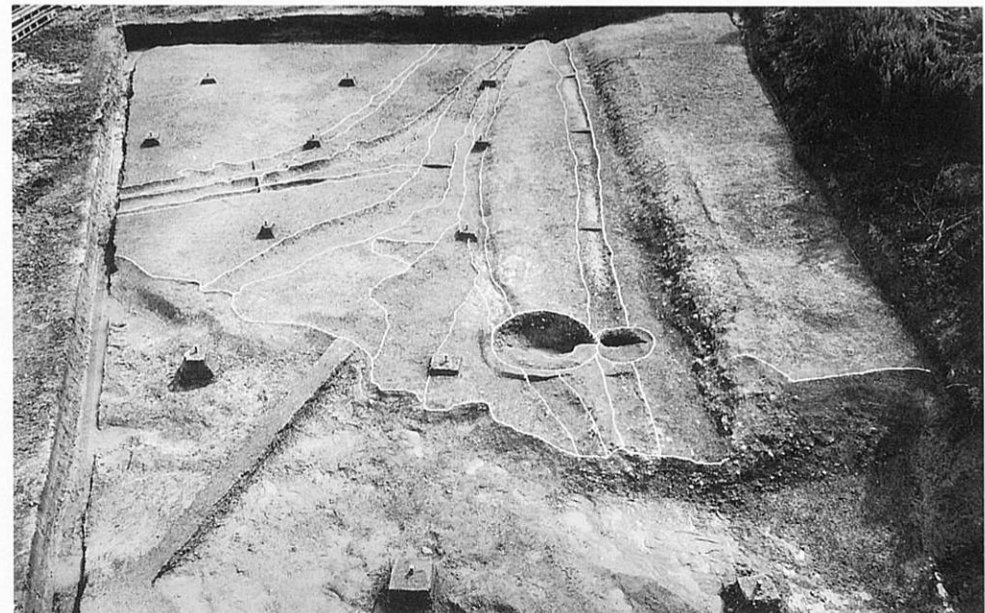
図版1 A地区・B地区南半の遺構



A地区第2面
全景（南西より）



B地区南半
（北から）



B地区南半
（北から）

図版2 B地区南半の遺構

溝510、溝511
溝517、井戸515



井戸515
(遠景)



井戸515
(近景)





谷352



井戸462
最下層土器出土状況



井戸462
井戸枠断面状況

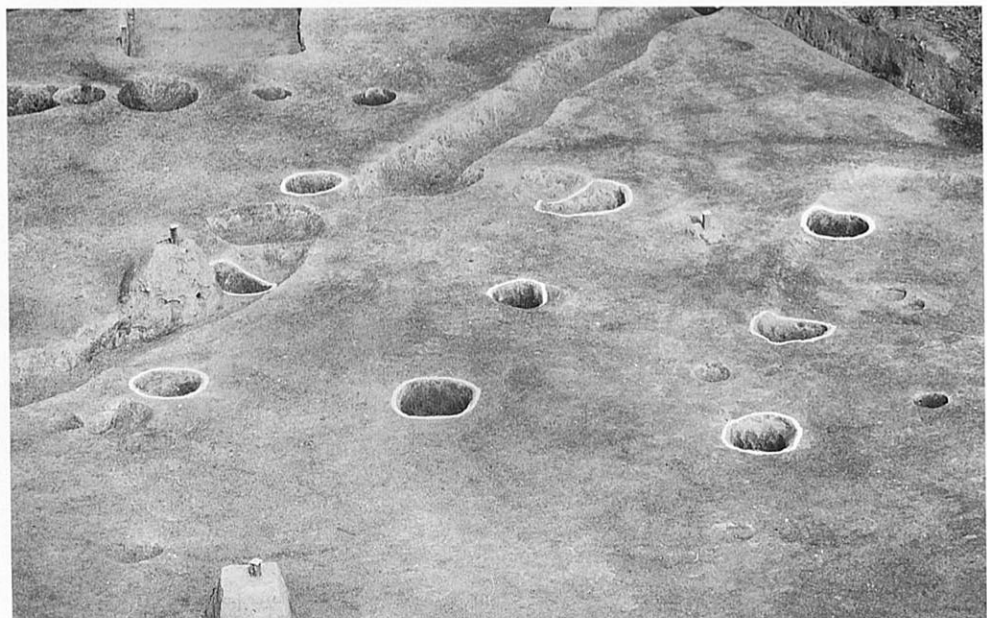
図版4 B地区南半の遺構



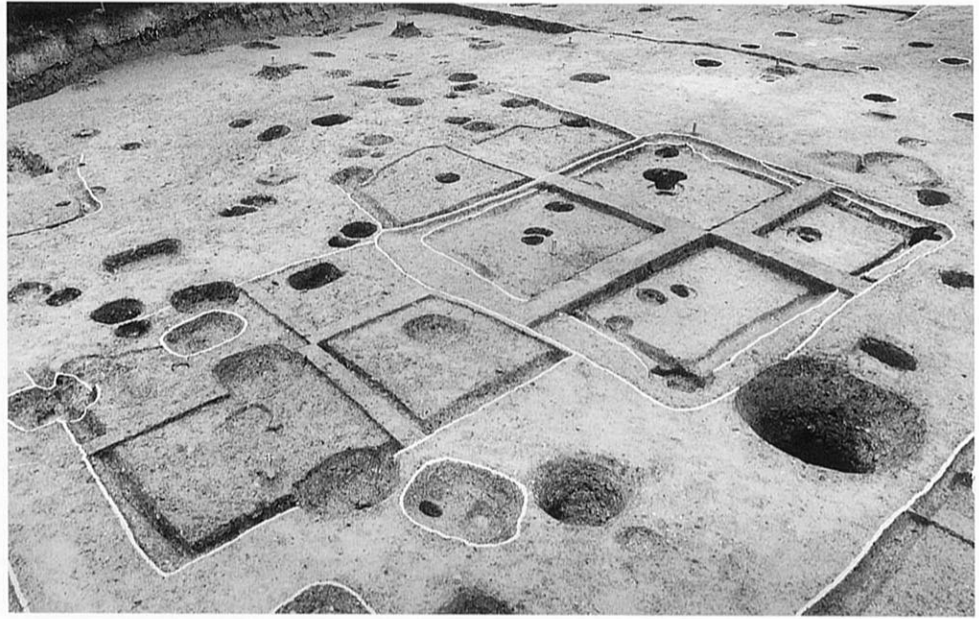
掘立柱建物跡 p、q



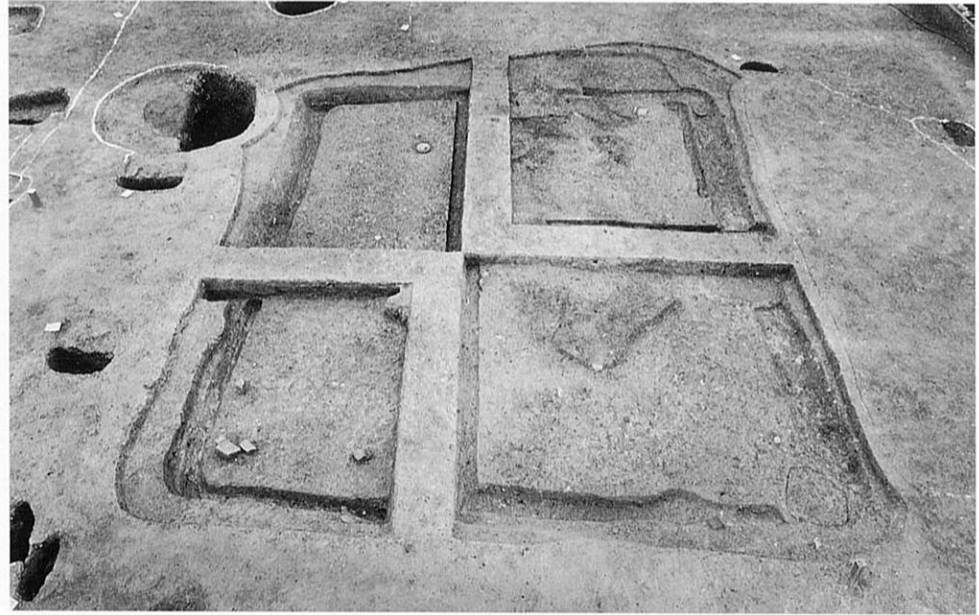
掘立柱建物跡 p



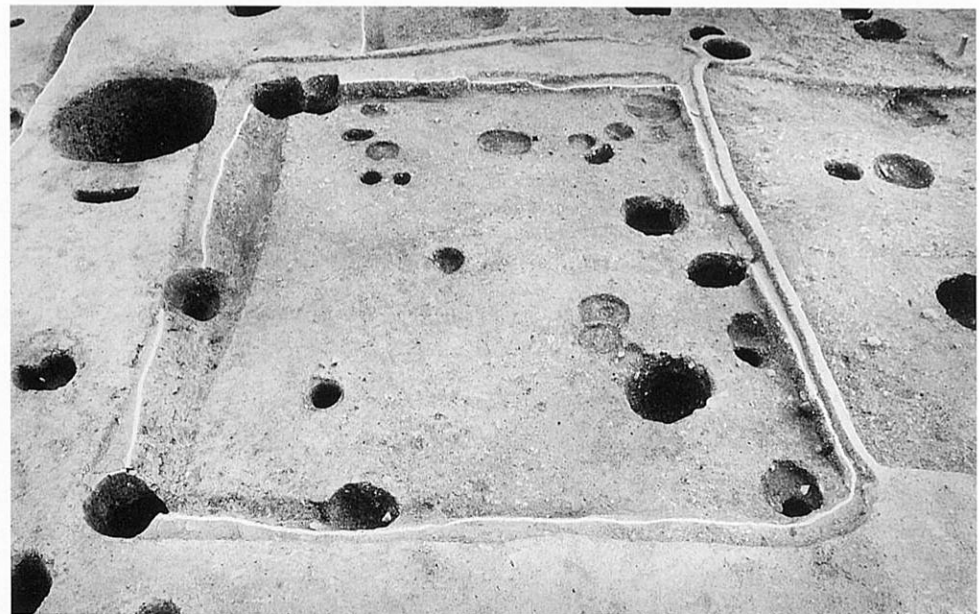
掘立柱建物跡 r



竪穴住居跡
204、205

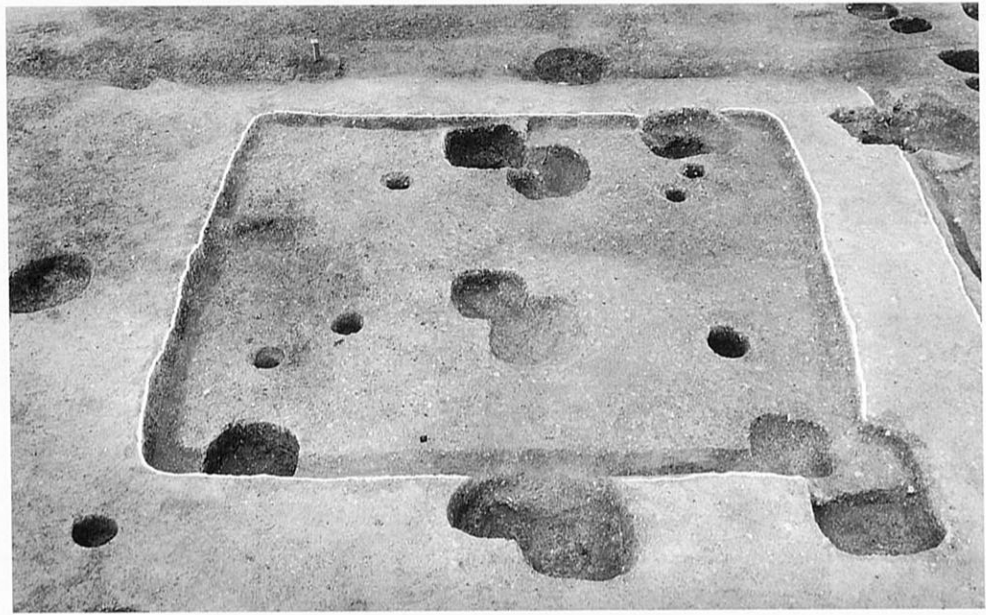


竪穴住居跡
204床面直上層

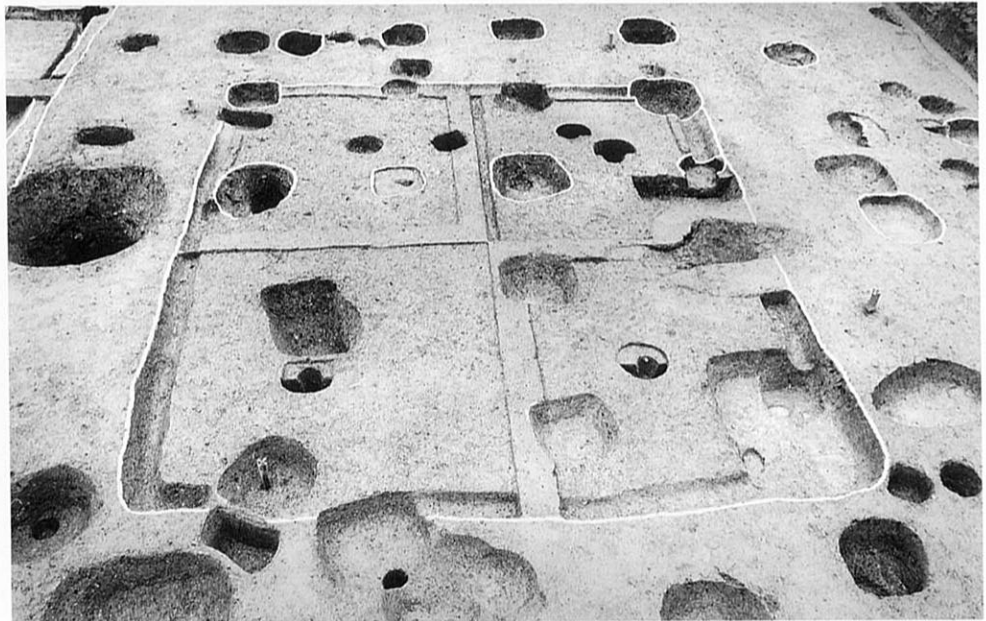


竪穴住居跡
204完掘状況

竪穴住居跡206
完掘状況



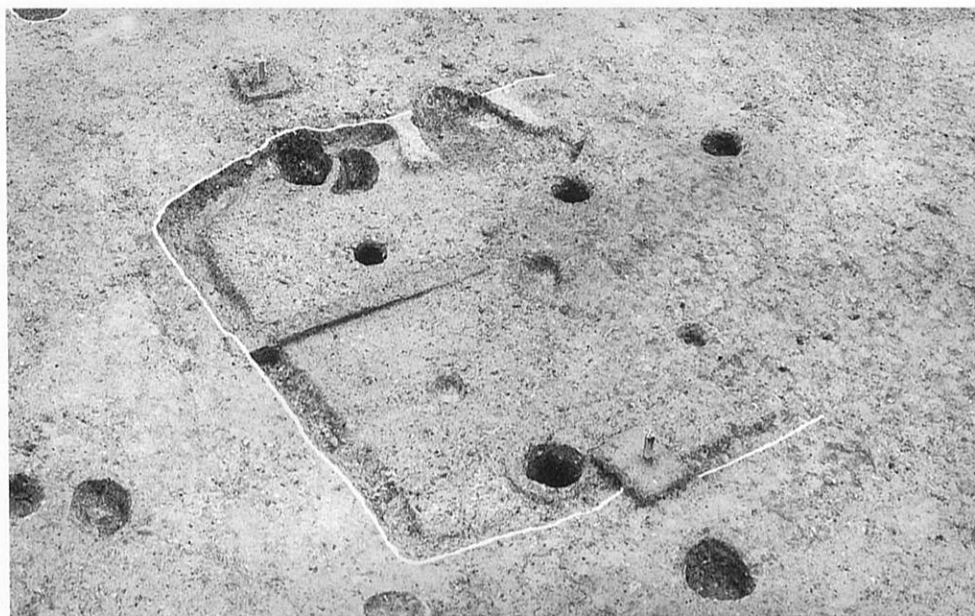
竪穴住居跡260
床面検出状況



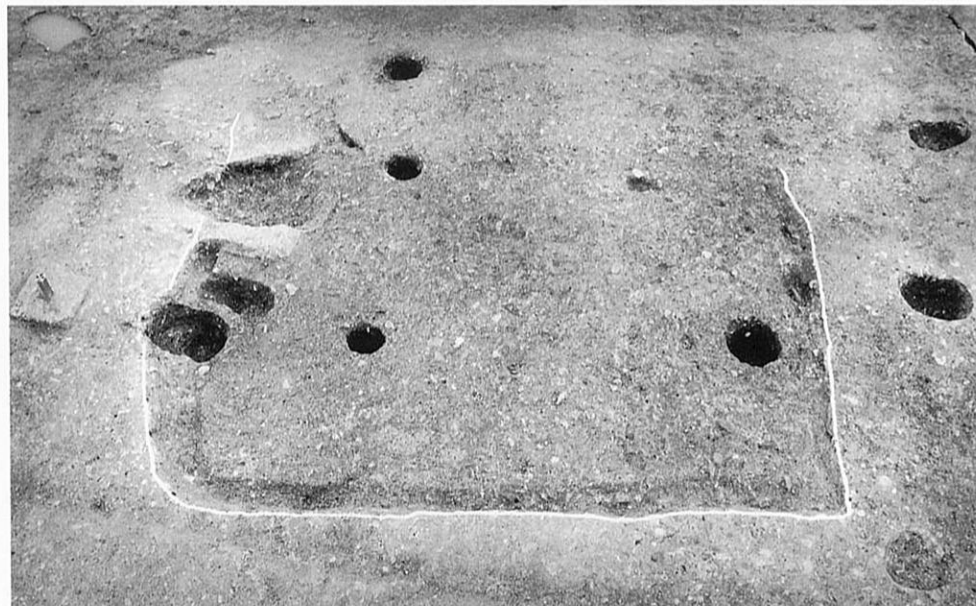
竪穴住居跡260
完掘状況



竪穴住居跡264
床面検出状況

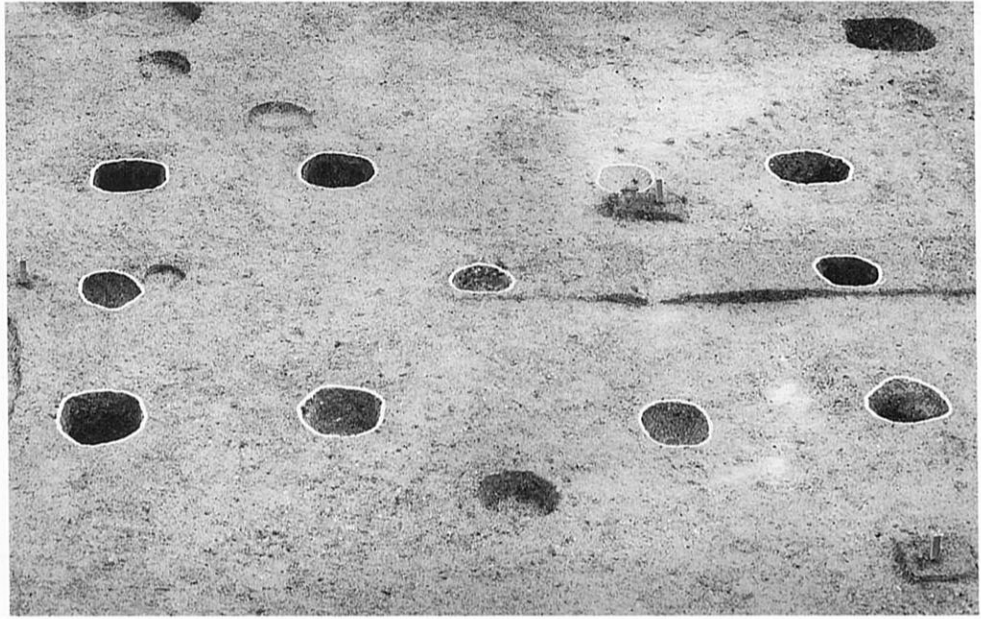


竪穴住居跡264
完掘状況

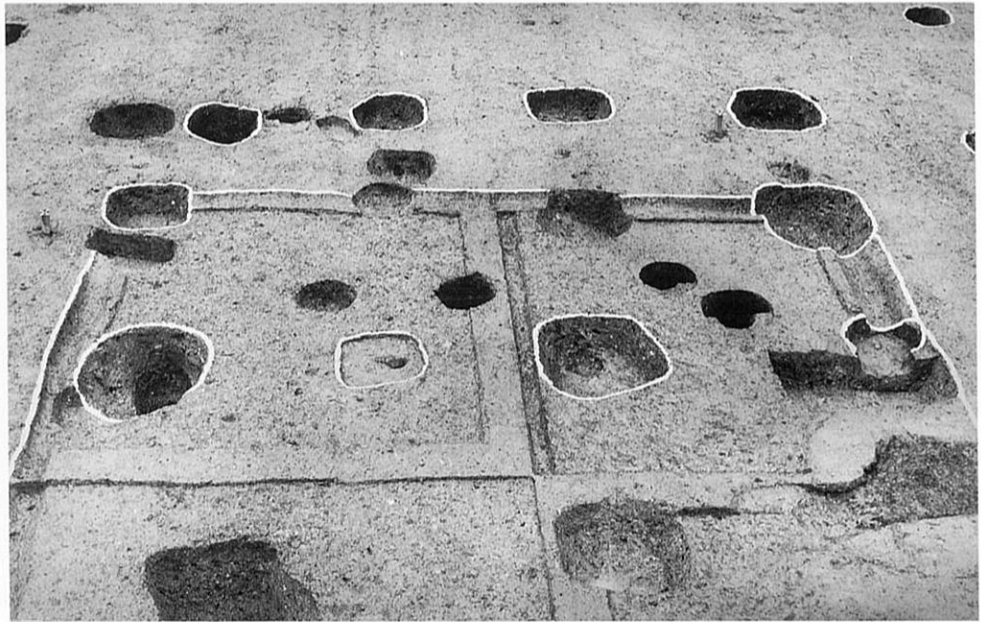


掘立柱建物跡 a

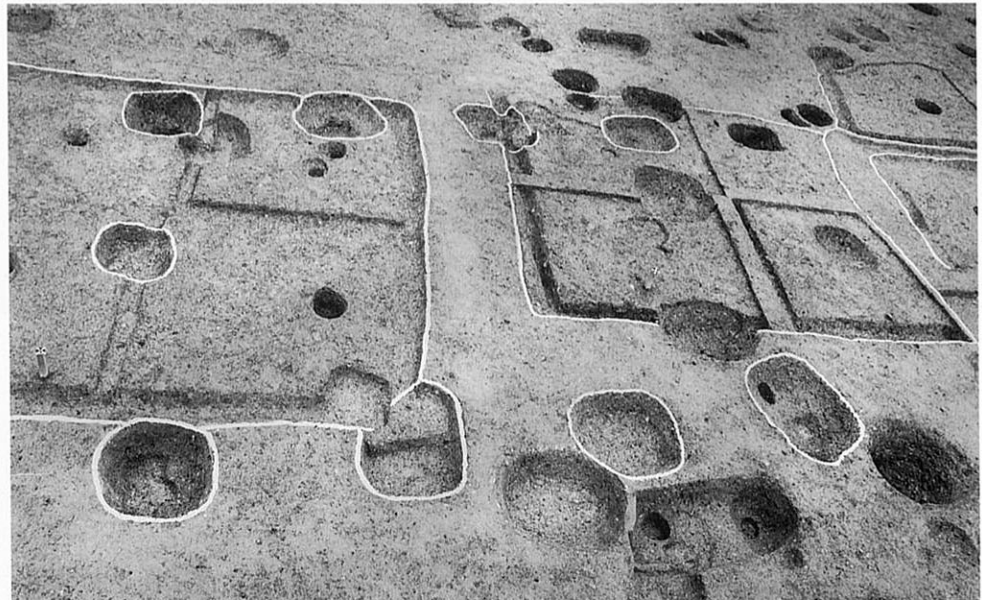




掘立柱建物跡 d



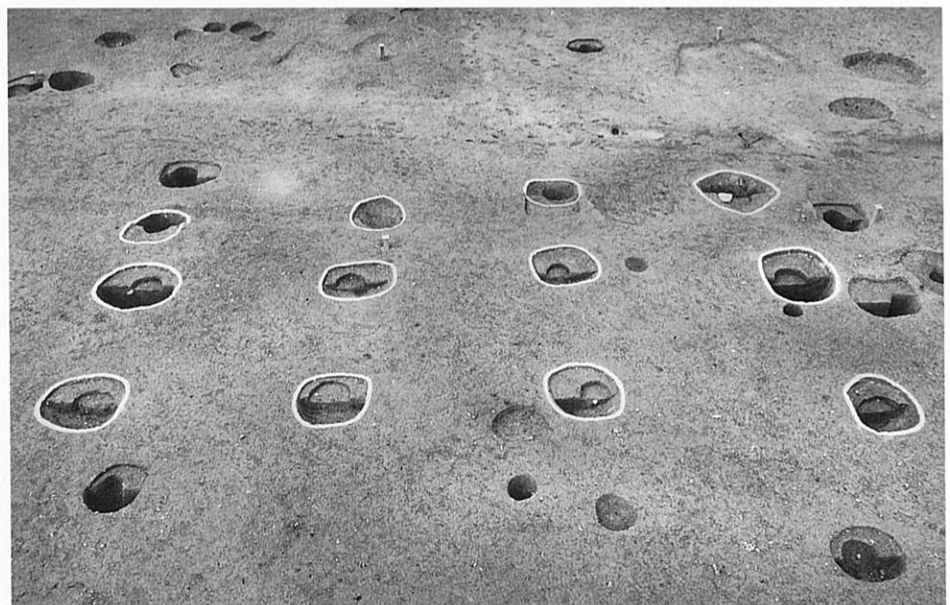
掘立柱建物跡 f



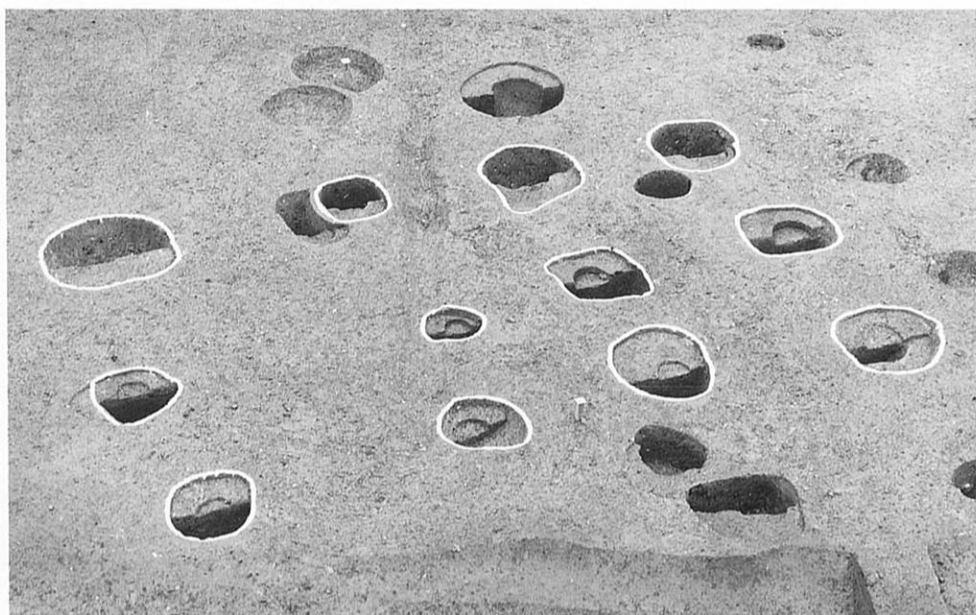
掘立柱建物跡 g



掘立柱建物跡 1



掘立柱建物跡 m



掘立柱建物跡 n



掘立柱建物跡 o



土器棺384

図版 11 C 地区の遺構



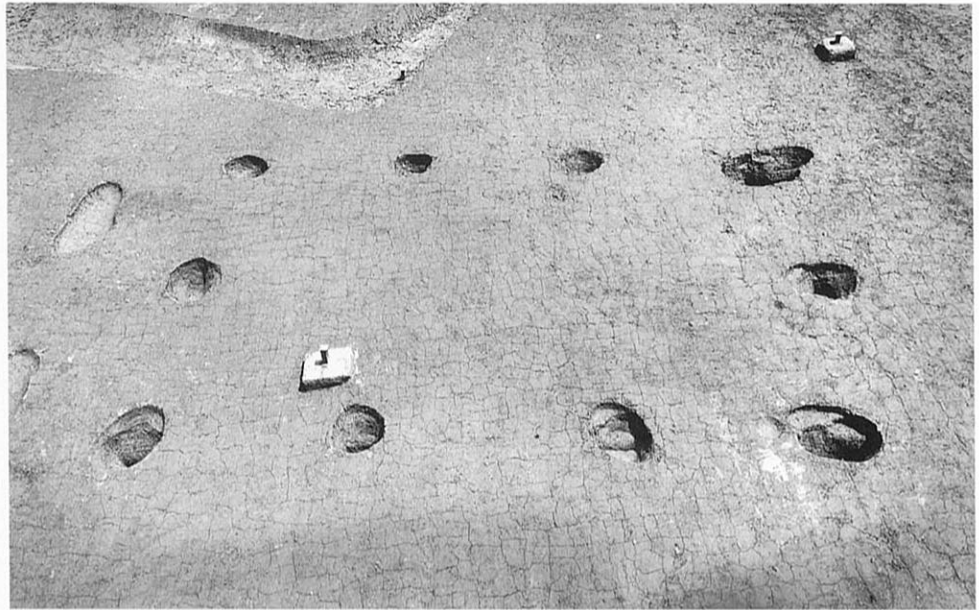
溝1180



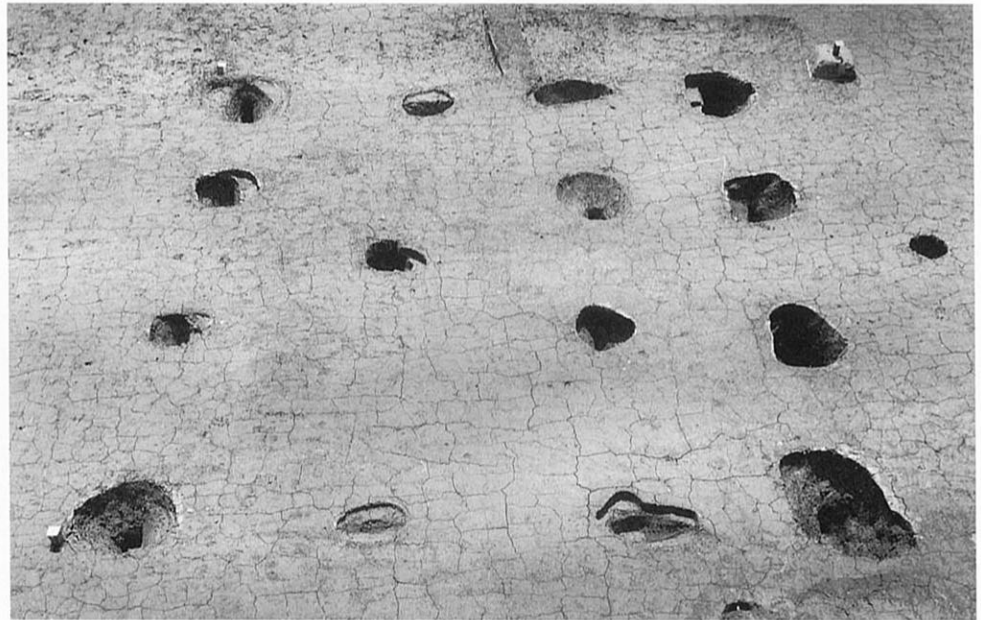
方墳1171



方墳1009



掘立柱建物跡 s



掘立柱建物跡 t



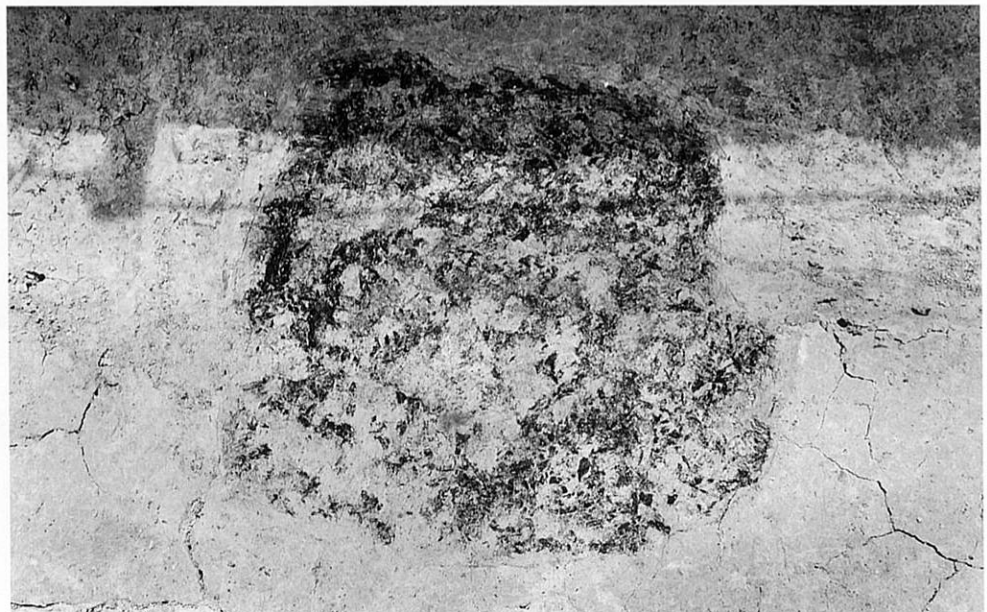
掘立柱建物跡 u



掘立柱建物跡 v

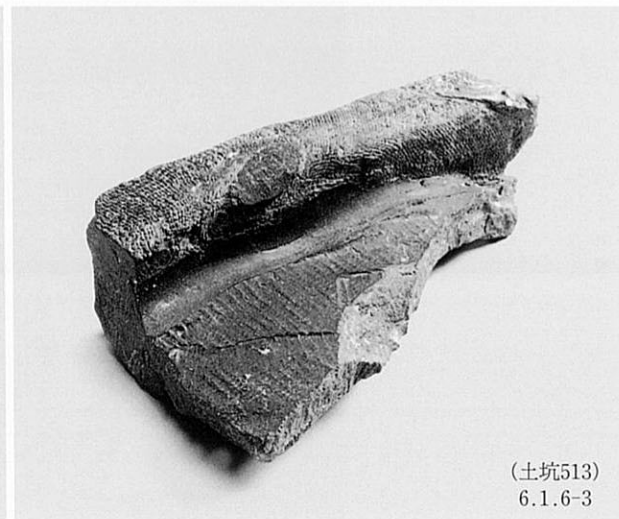


土坑1108

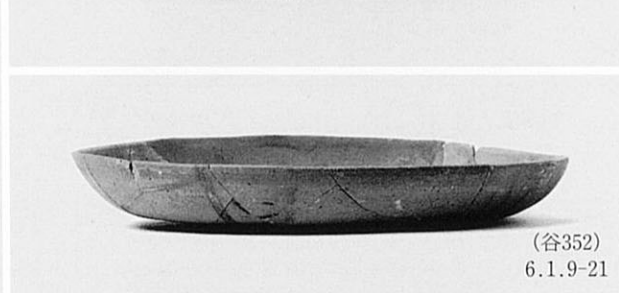
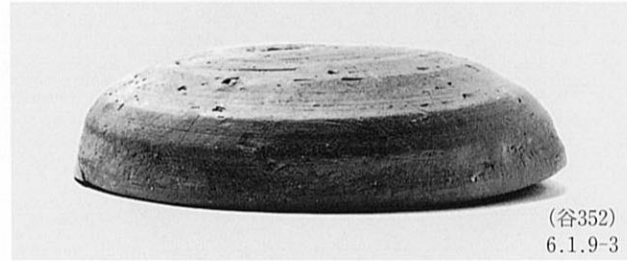


土坑1136

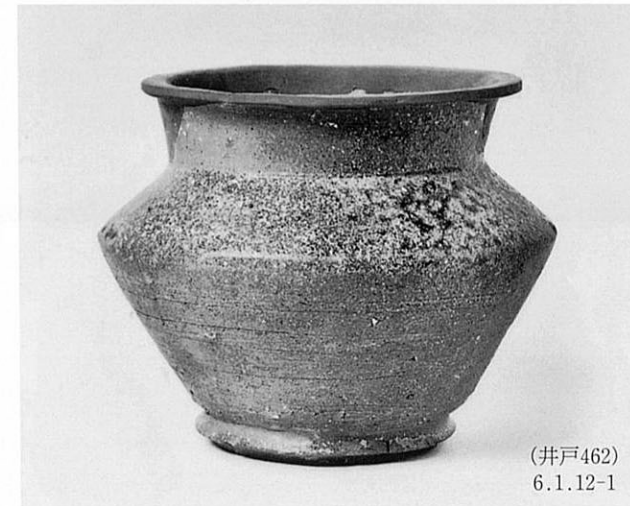
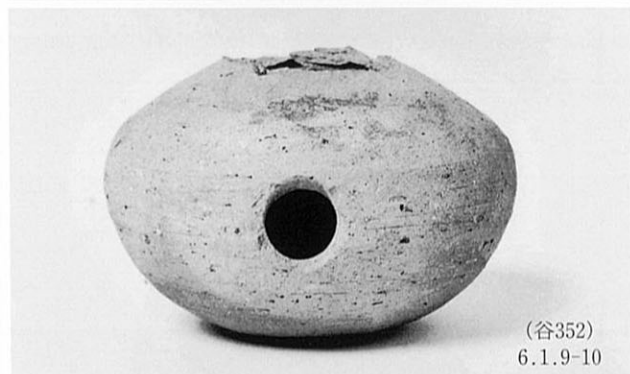
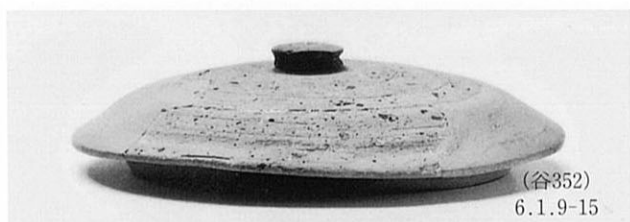
図版 14 B 地区南半出土遺物



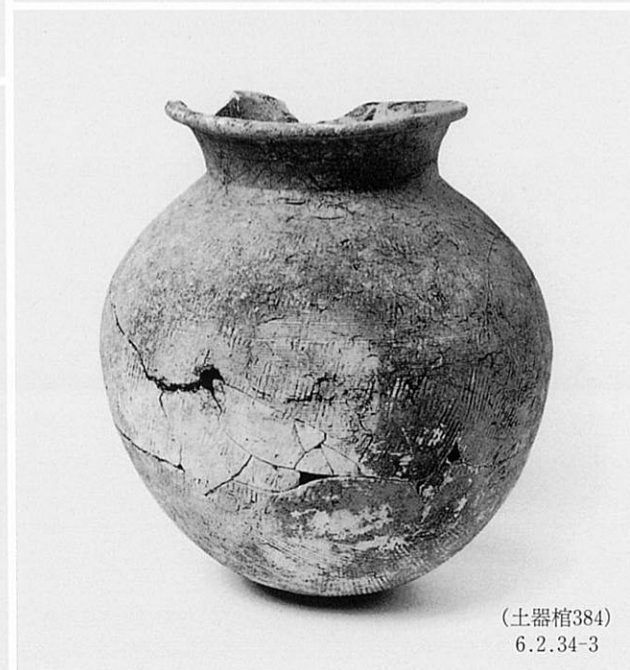
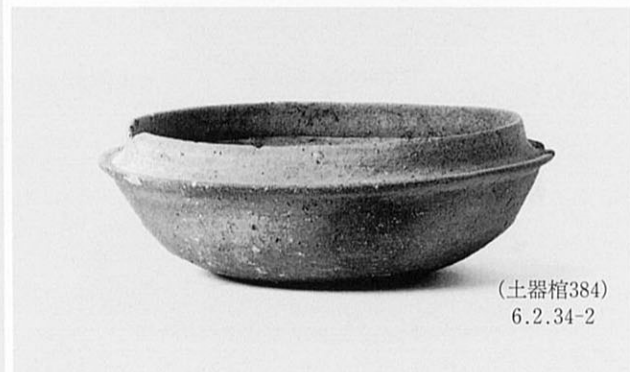
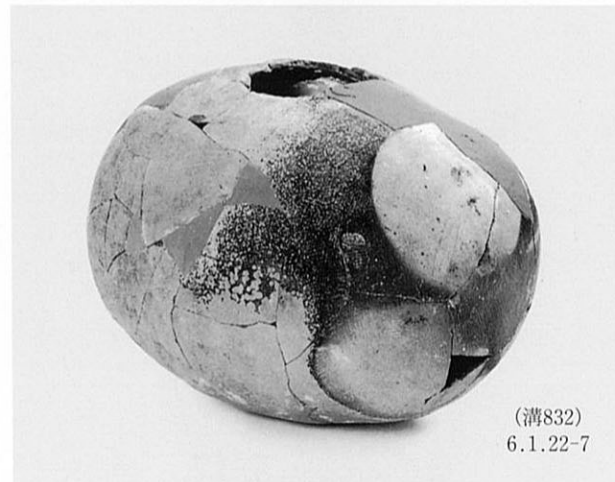
图版 15 B 地区南半出土遺物



图版 16 B 地区南半出土遺物



图版 17 B 地区出土遺物



図版 18 B 地区北半出土遺物



(竪穴住居跡204) 6.2.7-1



(土坑325)
6.2.3-1



(竪穴住居跡204)
6.2.7-2



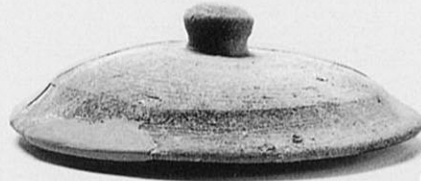
(土坑325)
6.2.3-2



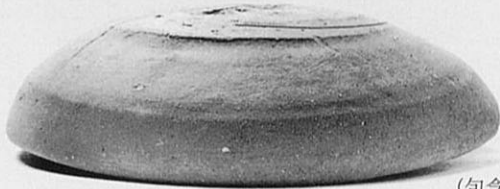
(竪穴住居跡204)
6.2.7-3



(柱穴40)
6.2.22-1



(包含層)
6.2.35-6



(包含層)
6.2.35-4



(包含層)
6.2.15-3

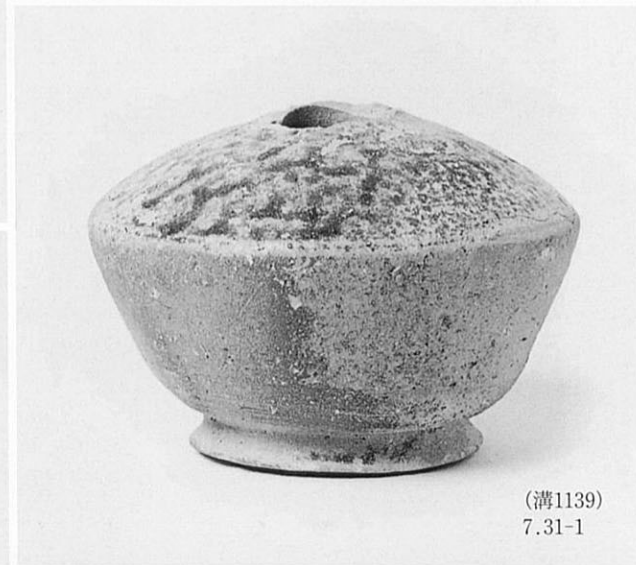
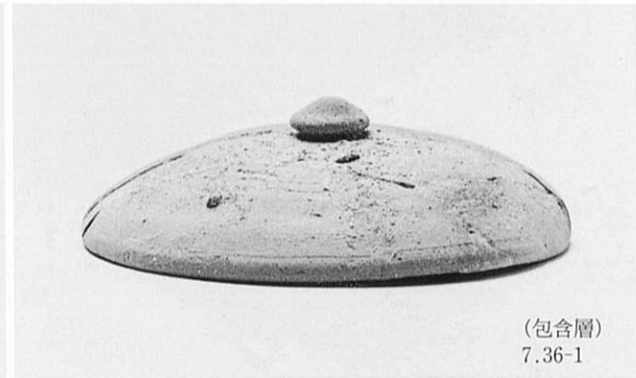
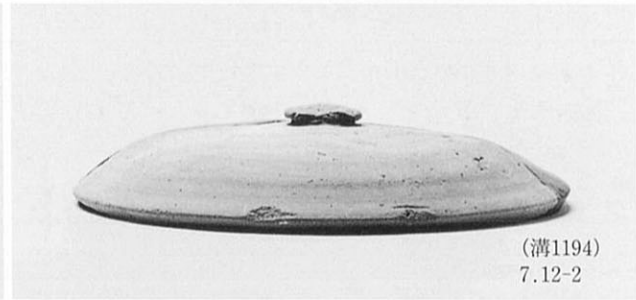
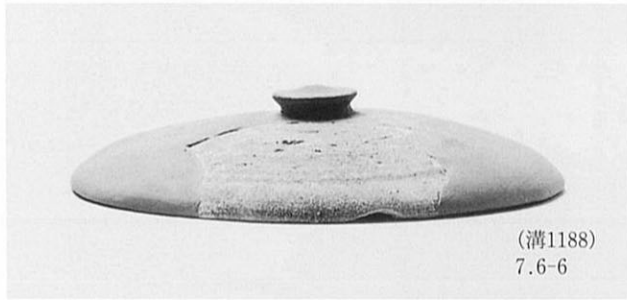


(竪穴住居跡264)
6.2.14-1

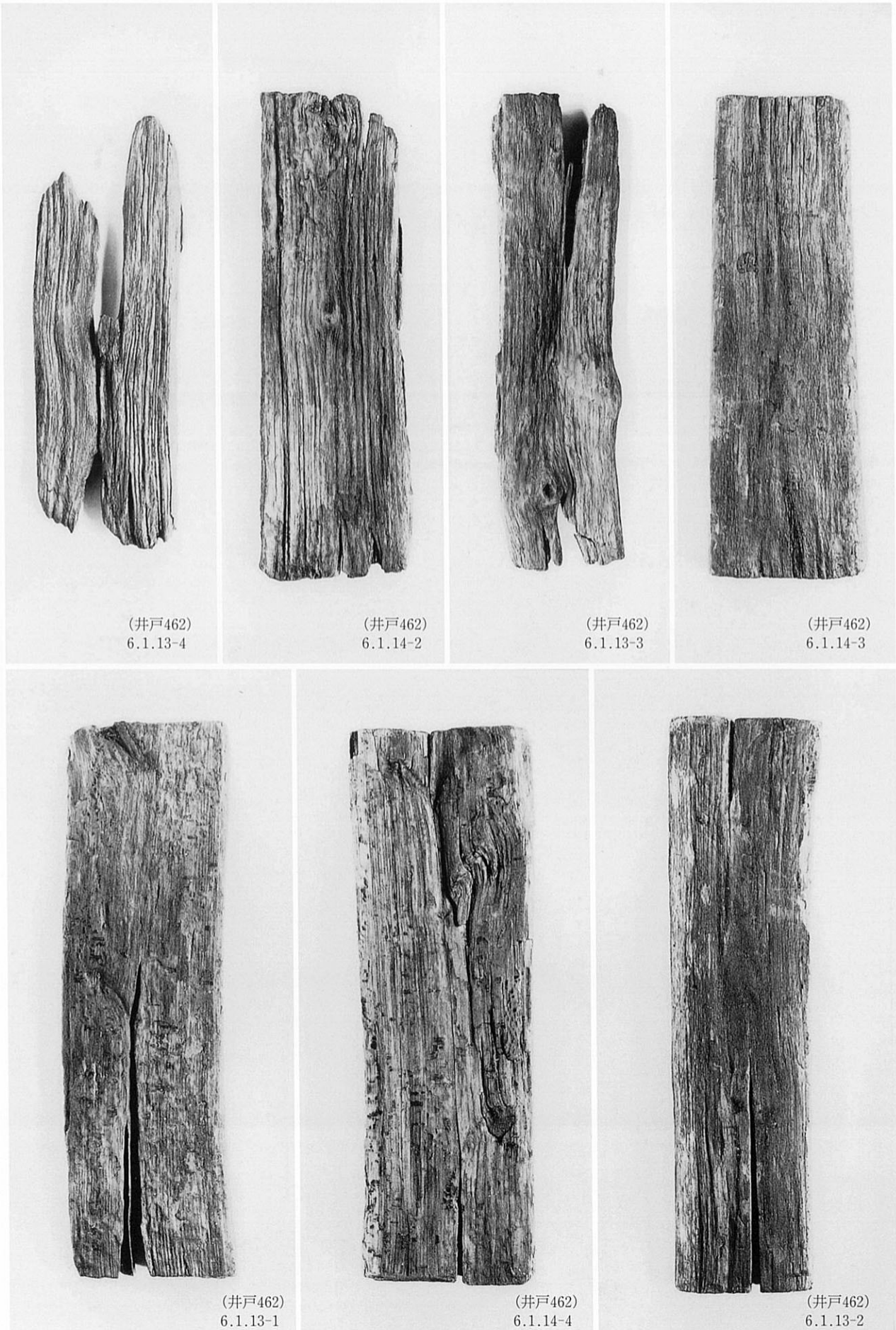


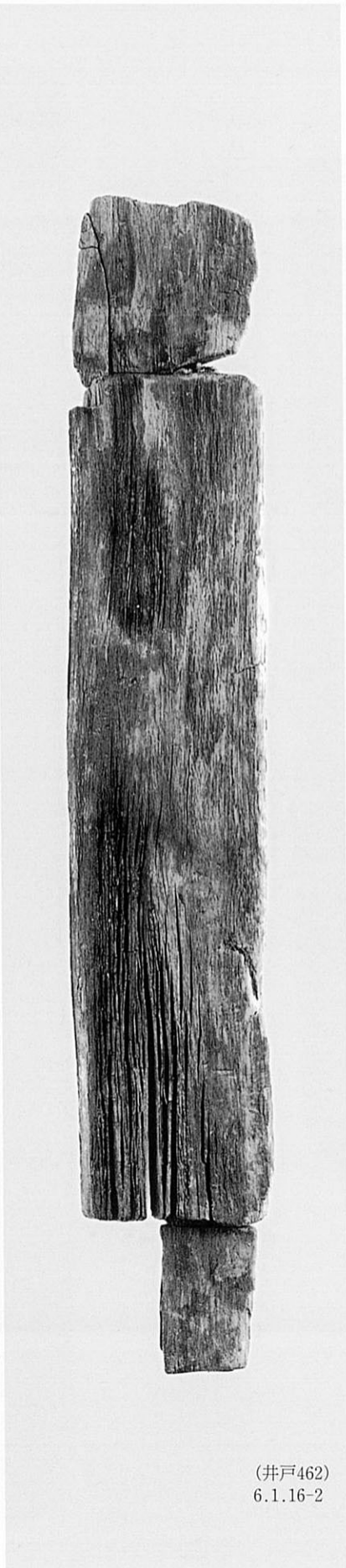
(柱穴988)
6.2.31-1

图版 19 C 地区出土遺物



図版 20 B 地区南半出土遺物







(井戸462)
6.1.15-1



(井戸462)
6.1.15-2

報告書抄録

ふりがな	かわらじょういせきはつくつちょうさほうこくしょ いち							
書名	河原城遺跡発掘調査報告書 I							
副書名	南阪奈道路建設に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	財団法人 大阪府文化財調査研究センター調査報告書							
シリーズ番号	第52集							
編著者名	三浦基・若林邦彦・大澤正巳・鈴木瑞穂・中野益男・中野寛子・門利恵・星山賢一							
編集機関	財団法人 大阪府文化財調査研究センター							
所在地	〒536-0016 大阪市城東区蒲生2丁目11-3 小森ビル4階 TEL06-6934-6651							
発行年月日	2000年4月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かわらじょういせき 河原城遺跡	おおさかふ 大阪府 はびきのしかわらじょう 羽曳野市河原城 みはらちょうたじい 美原町多治井	27222	131	34° 32'44"	135° 34'25"	1998. 6 .25	9980m ²	南阪奈道路 建設に伴う 事前の埋蔵 文化財調査
				34° 32'31"	135° 34'34"			
		27385	29	X	Y	1999. 5 .20		
				-38900	-161250			
				-39160	-161700			
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
河原城遺跡	集落遺跡	古墳時代後期 ～飛鳥・奈良時代		竪穴住居跡・ 掘立柱建物・ 溝・方墳・鍛冶炉		須恵器・土 師器・円筒 埴輪・瓦・ 磚・鉄滓・フ イゴ羽口	古墳時代後期～飛鳥・ 奈良時代に連続する集落 遺跡。飛鳥時代前半に竪 穴住居から掘立柱建物へ と住居構造が変化。 奈良時代には、鍛冶関 連の遺物・遺構がみられ る。	

財団法人大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第52集

河原城遺跡 I

－南阪奈道路建設に伴う発掘調査報告書－

発行年 2000年4月28日

編集・発行 財団法人 大阪府文化財調査研究センター

大阪府大阪市城東区蒲生2丁目11-3 小森ビル4階

印刷・製本 株式会社 じんのう

大阪市淀川区三津屋中3丁目3-5